都市計画道路博多駅築港線関係 埋蔵文化財調査報告(II)



福岡市埋蔵文化財調査報告書第184集

1988

福岡市教育委員会

都市計画道路博多駅築港線関係 埋蔵文化財調査報告(II)



福岡市埋蔵文化財調査報告書第184集



1988

福岡市教育委員会

都市計画道路標多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告(Ⅱ) 博多 正誤表

頁	行	誤	ΙΈ
巻頭図版 1	下櫚	つきあたりは博多湾、能古島	つきあたりは博多湾、志賀島
巻頭図版 2	上段	(鏡背側)	(鏡面側)
33	32	360号土壙出土遺物2	214号土塘出土道物2
117	写真下		182 548号土壙出土遺物2
216	21	(1/8)	(1/80)

巻頭図版1



V面検出遺構全景(南東より、つきあたりは博多湾、能古島)



1.683号土坛出土湖州八稜鏡(鏡背側)



2.541号土址出土黄釉鉄絵盤

序文

博多遺跡群は、古代から大陸貿易の門戸として栄え、現在の福岡市の基礎となった都市遺跡です。現代に至るまで、絶えることなく生活の場となってきました。

都市計画道路博多駅築港線は、博多遺跡群を南北に縦貫する道路で、福岡市の玄関口 JR 博 多駅を結ぶ国際シンボルロードとして、整備がすすめられています。昭和57年から62年まで、 福岡市教育委員会では、道路拡幅部分を対象に埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。博多遺跡群からは、多彩な輸入陶磁器類に代表される中世都市博多の繁栄を物語る夥しい 資料が出土しました。本報告書はその第2次調査の報告書です。

本書が市民の皆さまに文化財に対する御理解を深めていく上で広く活用されるとともに、学 術研究の分野においても貢献できれば幸いです。

発掘調査から資料整理に至るまでの多くの方々の御協力に対し、心から謝意を表すものです。

昭和63年3月31日 福岡市教育委員会 教育長 佐藤善 郎

例 言

- 1. 本書は、都市計画道路博多駅築港線(通称大博通り)の拡幅工事に伴なって福岡市教育委員会が実施した、福岡市博多区上呉服町1番地における第2次発掘調査の報告書である。
- 2. 本書の編集・執筆は、力武卓治、大庭康時が協議して行なった。
- 3. 本書に使用した遺構実測図は、力武・大庭・山口満・池田光男・日野光嗣が、遺物実測図は、吉留秀敏・大庭・山口・池田・崎山伸一・田中克子・小川泰樹・荻村昇二・永淵昭子・松本美保が作成した。また整図には、力武・大庭・常松幹夫・山口・池田・小川・荻村・永淵が分担してあたった。
- 4. 本書に使用した方位は、すべて磁北である。
- 5. 本書に使用した遺構写真は、白石公高・力武が撮影した。また、遺物写真は力武が撮影し、541号土壙出土の墨書土器・683号土壙出土の漆器については、福岡県立九州歴史資料館において撮影していただいた。
- 6. 墨書土器の判読に際しては、 福岡県立九州歴史資料館横田義章氏、 倉住靖彦氏の御協力・御教示をいただいた。
- 7. 第2次調査における遺構番号は,第1次調査からの通し番号とした。ただし,整理作業後の重複をさける為,土壙は201番,柱穴状小土壙は251番,井戸は51番,配石遺構は10番,溝は5番から番号を付けた。
- 8. 本調査地点のすぐ東に、江戸時代の建築にかかる家屋が存在した。第2次調査中、この建物の貴重さに鑑み、九州大学工学部助手山本輝雄氏にその調査を御相談申し上げていたが、第4次調査中、残念ながら都市再開発の流れの中で解体・移築されることになった。解体に際しての調査には、九州大学工学部建築学科第九講座の方々があたり、山本輝雄氏からその成果について、玉稿をいただいた。その後、同地は博多遺跡群第35次調査として発掘調査がなされているが、上の様な経緯で、本報告書の付篇として収録させていただいた。
- 9. 本調査に関する全ての記録類,出土遺物は,福岡市埋蔵文化財センターにおいて,収蔵・管理される予定である。

遺跡調査番号	8331		遺	跡略号	HKT-R2	
調査地地番	博多区上呉	服町1番地	分	布地図番号	天神49	
開発面積	1,380 m²	調査対象面	積	1,380 m²	調査実地面積	564 m²
調査期間	1984年2月	1日~9月18	日			

目 次

邾	一早	r (9	LUWI			•••••			1
	1.	発掘課	査にし	いたるまで		•••••			1
	2.	発掘調	査の約	ll織と構成					1
	3.	調査地	は点の位	位置と環境	(Fig. 1 • 2)	***************************************	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		3
第	二章	主角	と掘調 る	査の概要 …			•••••		4
	1.	発掘調	画査の約	圣過 (Fig.	3)		•••••		4
	2.	I面の	調査	(Fig. 4 •	5)		•••••	•••••	6
	3.	山面の	調査	(Fig. 6 •	7)		•••••		8
	4.	III A III	前の調査	奎(Fig. 8	• 9)			•••••	10
	5.	швп	[の調査	Y (Fig.10	• 11)				12
	6.	IV面の	調査	(Fig.12 •	13)				14
	7.	V面の	調査	(Fig.14 •	15)	•••••			16
	8.	遺構と	遺物					•••••	18
		(1)	整理の	か記録			•••••		18
		(2)	近世	の遺構					19
			①±ţ	廣			•••••		19
				201号土壙	(Fig.16) ··	•••••	•••••		19
				217号土壙	(Fig.17 • 18	3)			19
				221号土壙	(Fig.19) ··		••••••		20
				237号土壙	(Fig.20 • 21)	•••••		21
				240号土壙	(Fig.22~24	.)		•••••	21
				242号土壙	(Fig.25~27	')			23
				243号土壙	(Fig.28) ···				25
				248号土壙	(Fig.29) ···				25
				250号土壙	(Fig.30) ···				25
				254号土壙	(Fig.31) ···	•••••			26
				273号土壙	(Fig.32) ···	•••••			26
				290号土壙	(Fig.33 • 34	1)			27
				283号土壙	(Fig.35 • 36	3)			28

	214号土壙	(360号土壙 • 552号土壙) (Fig.37~41) ······ 30
	②井戸	
	53号井戸	(Fig.42 • 43)
	54号井戸	(Fig.44~47)
	55号井戸	(Fig.48 • 49)
	56号井戸	(Fig.50)
	62号井戸	(Fig.51)
	63号井戸	(Fig.52~54)
	65号井戸	(Fig.55, 56)
	66号井戸	(Fig.57) 42
	68号井戸	(Fig.58~61)
	79号井戸	(Fig.62~65)
	94号井戸	(256号土壙) (Fig.66~70) ······ 48
	③配石遺構 (F	ig.71~73) 50
	12号配石:	遺構 (Fig.74~76) 52
	16号配石	遺構 (Fig.77) 53
	17号配石:	遺構 (Fig.78 • 79) 54
	20号配石:	遺構 (Fig.80 • 81) · · · · · 55
(3)	中世Ⅲ期の遺構	
	①土壙	
	253号土壙	(Fig.82) 56
	264号土壙	(Fig.83 • 84) 57
	292号土壙	(Fig.85 • 86) 58
	305号土壙	(Fig.87) 60
	322号土壙	(Fig.88 • 89) 60
	347号土壙	(Fig.90) 61
	348号土壙	(Fig.91 • 92)
	349号土壙	(Fig.93 • 94)
	350号土壙	(Fig.95 • 96)
	359号土壙	(Fig.97) 63
	362号土壙	(Fig.98) 63
	409号十塘	(Fig.99)

	446号土壙	(Fig.100~103)	64
	461号土壙	(Fig.104~108)	66
	487号土壙	(Fig.109 • 110) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	68
	504号土壙	(Fig.111 • 112) ·····	69
	508号土壙	(Fig.113 • 114) ·····	70
	545号土壙	(Fig.115~117)	71
	②井戸		74
	71号井戸	(Fig.118~120)	74
	③配石遺構		75
	39号配石运	貴構 (Fig.121~124)	75
	40号配石运	貴構 (Fig.125~127)	79
	④柱穴状小土壙		81
	339号ピッ	F (Fig.128)	81
	428号ピッ	F (Fig.129)	81
(4)	中世Ⅱ期の遺構		82
	①土壙		82
	338号土壙	(Fig.130~132)	82
`	411号土壙	(Fig.133~136)	83
	414号土壙	(Fig.137 • 138) ·····	
	441号土壙	(Fig.139)	87
	472号土壙	(Fig.140~142)	89
	480号土壙	(Fig.143~145)	91
	486号土壙	(Fig.146)	91
	490号土壙	(Fig.147~150)	92
	501号土壙	(Fig.151 • 152) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	94
	549号土壙	(Fig.153~155)	96
	568号土壙	(Fig.156)	98
	576号土壙	(Fig.157~159)	99
	586号土壙	(Fig.160)	102
		(Fig.161~163)	
	②井戸	······································	104
	87号井戸	(588号十塘) (Fig 164~166) ···································	104

	95号井戸(565号土壙)(F	Fig.167~170)	***************************************	108
	③柱穴状小土壙				111
	528号ピット	(Fig.171) ···			111
	567号ピット	(Fig.172~17	4)		111
	701号ピット	(Fig.175~17	7)		113
(5)	中世I期の遺構	•••••			114
	①溝状遺構				114
	6 号溝 (F	ig.178 • 179)			114
	②土壙				115
	548号土壙	(Fig.180~183)			115
	620号土壙	(Fig.184 • 185)			118
	635号土壙	(Fig.186~190)			120
	649号土壙	(Fig.191~195)	•••••		124
	683号土壙	(Fig.196~206)			128
	③井戸				136
	70号井戸	(Fig.207~210)			136
	④配石遺構	••••••			140
	44号配石造	構 (Fig.211・	212)		140
(6)	古代Ⅱ期の遺構				141
	①土壙				141
	313号土壙	(Fig.213) ·····			141
	434号土壙	(Fig.214 • 215)			141
	515号土壙	(Fig.216 • 217)	•••••		143
	519号土壙	(Fig.218~222)			144
	523号土壙	(Fig.223 • 224)			148
	537号土壙	(Fig.225) ·····			150
	540号土壙	(Fig.226 • 227))		150
	541号土壙	(Fig.228~234))		152
	542号土壙	(Fig.235 • 236))		158
	543号土壙	(Fig.237) ·····			158
	544号土壙	(Fig.238 • 239))		161
	562号土壙	(Fig.240~243))		162

	566号土壙	(Fig.244~247)		165
	569号土壙	(Fig.248~253)	•••••••••••••••••••••••••••••••••••••••	166
	570号土壙	(Fig.254 • 255)		172
	579号土壙	(Fig.256~258)		172
	582号土壙	(Fig.259~260)		174
	587号土壙	(Fig.261)		175
	600号土壙	(Fig.262~264)		176
	606号土壙	(Flg.265 • 266)		177
	622号土壙	(Fig.267~270)		179
	626号土壙	(Fig.271~275)		182
	637号土壙	(Fig.276) ·······		186
	638号土壙	(Fig.277 • 278)		187
	651号土壙	(Fig.279 • 280)		188
	662号土壙	(Fig.281 • 282)		189
	665号土壙	(Fig.283~288)		190
	②井戸	•••••		195
	74号井戸	(Fig.289~291)		195
	78号井戸	(Fig.292~294)		198
	82号井戸	(Fig.295 • 296)		200
	③溝状遺構			202
	7号溝(Fig.297~300) ···		202
(7)	古代I期の遺構			205
	①井戸	•••••		205
	88号井戸	(Fig.301~304)		205
	89号井戸	(Fig.305~310)		208
	②柱穴状小土壙	•••••		214
	1022号ピット	(Fig.311)		214
	1054号ピット	(Fig.312) ·····		215
	1107号ピット	(Fig.313)		215
(8)	その他の遺構 …	***************************************		216
	①竪穴状礎石建物	刃 (Fig.314・315))	216
	②525号土壙 (F	ig.316)		217

	③E—08区 I 面下出土遺物 (Fig.317~320)	217
	④F─04区ⅢB面下出土遺物 (Fig.321・322) ···································	222
	⑤その他の出土遺物	223
	律令期の遺物 (Fig.323)	223
	緑釉陶器,灰釉陶器 (Fig.324)	225
	越州窯系青磁,高麗青磁 (Fig.325 • 326)	227
	その他の輸入陶磁器 (Fig.331~334)	229
	その他の国産土器,陶器 (Fig.331~334)	231
	その他の遺物 (Fig.335)	234
	墨書土器 (Fig.336~340)	236
	石塔 (Fig.341)	240
	銅銭 (Fig.342 • Tab.1 • 2)	242
第三章	小結	244
付篇	解体移築された旧飯尾家住宅について	
	九州大学工学部 山本 輝雄	247

付 図

- 1. I面遺構実測図(1/100)
- 2. Ⅱ面遺構実測図 (1/100)
- 3. **ⅢA** 面遺構実測図(1/100)
- 4. **Ⅲ**B面遺構実測図(1/100)
- 5. IV面遺構実測図 (1/100)
- 6. V面遺構実測図 (1/100)

第一章 はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

都市計画道路博多駅築港線は別称を大博通りと言い,JR 博多駅から博多湾に向って一直線にのびる道路である。 その起源は古く, 新しく見ても豊臣秀吉による博多復興 (天正15年 = 1587年)を下らない。福岡市土木局街路課では,中世以来のこの博多のメインストリートを,現代都市にふさわしく拡幅・整備する計画を立てた。この拡幅工事は1982年3月に着手されたが,当初は文化財への考慮を欠き,急拠福岡市教育委員会文化課より街路課へ申し入れをして協議を持ち,同11月15日より拡幅用地内の発掘調査にとりかかった。これが第1次調査であり,その後断続しつつ1987年1月まで5次の調査が実施された。第2次調査は,1984年1月30日より第1次調査の北に隣接する564㎡について調査を開始したものである。

2. 発掘調査の組識と構成

調查委託 福岡市土木局道路部街路課

写真撮影

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 西津茂美(前任) 佐藤善郎

調査総括 文化課長 生田征生 (昭和60年4月組織改正)

埋蔵文化財課長 柳田純孝 (元文化課埋蔵文化財第1係長)

埋蔵文化財第1係長 折尾学

調査庶務 埋蔵文化財第1係 古藤国生(前任) 松延好文

調査担当 埋蔵文化財第1係 力武卓治 大庭康時

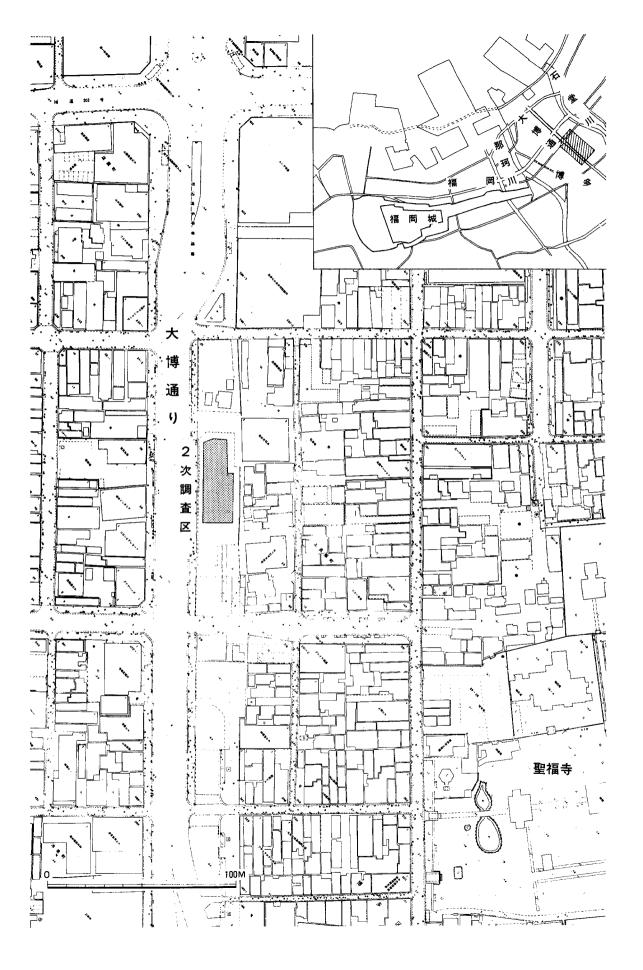
两旦旦旦 在版入记机为IM 万风平记 八处然引

白石公高

調査作業 山口満 池田光男 日野光嗣 諸藤茂樹 井口英雄 大部茂久 山崎光一

権藤利雄 三浦力 高田勘四郎 大神嘉彦 徳永英臣 江越初代 古賀博子 久良木シズェ 中山スェ子 脇坂正子 関加代子 関政子 黒木静子 桑野正子 井手口美代子 曽根崎昭子 安部国恵 池見恭子 安部サエ子 野口ミョ 徳永道子 尾崎文枝 尾崎君枝 川崎道子 西本スミ 村上エミカ村上エミ子 高野晧代 吉原京子 長野康子 酒井もと子 生垣綾子 林朝美小金丸京子 村田喜代美 松田美富 川嶋美佐子 深沢美代子 末永トシ子 寺田祥子 寺田康子 水崎智以 玉木美佳子 稲益貴子 金子幸世 世利裕美北原章子 実渕祥子 井手口千寿子 前田直子 高原祐子 中島智子

中村美穂



3. 調査地点の位置と環境

博多遺跡群は、博多湾に面して形成された砂丘上に立地する遺跡群で、東を石堂川・西を那 珂川によって区切られている。北は博多湾の埋め立てによって大きく変貌しているが本来は 海,南は旧比恵川流路で中世末堀とした穿たれた房州堀で画されている。都市計画道路博多駅 築港線は、この博多遺跡群の中央を東南から西北へ一直線に貫通しており、第2次調査地点は 更にその中央に位置する。第2次調査地点から200m程海寄りにある国道202号線との交差点を 呉服町交差点と呼ぶが、博多遺跡群は国道202号線をはさんで、北の沖ノ濱と南の博多濱にわかれる。沖ノ濱が鎌倉時代以降栄えたのに対し、博多濱は弥生時代以来居住の場となっており、古代末から中世初頭にかけて国内で最も繁栄した港津都市であった。その後、室町時代以降博 多繁栄の核は沖ノ濱に移る様であるが、聖福寺・承天寺などの大禅刹を容した博多濱は衰えることなく、戦国時代の博多焼亡・鎖国へと流れるのである。



2 第2次調査地点遠景(東南より)

◀1 第2次調査地点位置図(1/2,000)

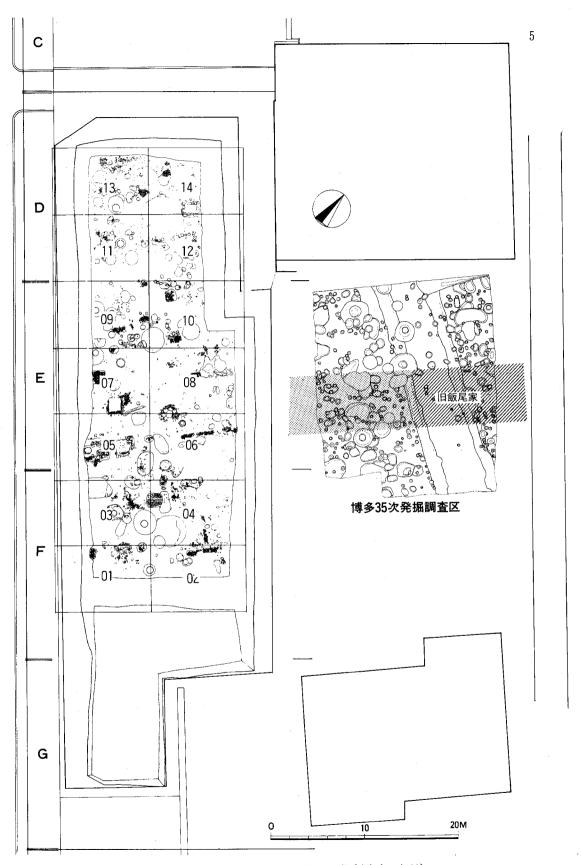
第二章 発掘調査の概要

1. 発掘調査の経過

第2次調査は、1984年1月30日より9月18日まで行なわれた。ただし、これに先立って、重機による近現代の撹乱層の除去が行われている。除去作業は、第1次調査の経験から現道路面下1.5mまでを一率に掘り取った。第1次調査を担当した福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財第1係池崎譲二が立会して行なったが、撹乱層中の近現代遺物にまじって元様式の染付鉢の破片が出土している(塩屋勝利・池崎譲二「博多上呉服町出土の釉裏紅と元青花」『貿易陶磁研究 № 3』日本貿易陶磁研究会 1983)。

博多遺跡群の場合,最下層は砂層上面を遺構検出面とするが,その上に数メートルにわたって継続した生活面が形成されている。この間堆積土壌の変化はほとんどなく,鍵層となりうべき焼土層が検出されても,更に上からの遺構の掘り込みで乱され,面的に拡げて検出しえないのが実状である。その為,同一生活面の検出はほとんど不可能である。発掘調査に際しては,一定の掘り下げ→遺構検出→精査→記録→掘り下げを繰り返すことによって,目的意識的(恣意的)な遺構面を設定して遺構確認と遺物取り上げをなさざるをえない。第2次調査においては,第1次調査における遺構面の標高を目安に5面の遺構検出を行なった。上層から順次Ⅰ面・Ⅱ面と呼ぶ。ただし,Ⅲ面調査において,調査区域内の南端と北端で標高に差がついた為,これを調整すべく,南側半分について掘り下げ,遺構検出を行なった。ⅢA面は,Ⅲ面調査当初に検出した遺構面で,ⅢB面は,南側半分を掘り下げて標高をそろえた際の遺構検出面である。調査経過の概略は以下の通りである。

- 2月3日~3月13日 I 面調査
- 3月15日~5月23日 Ⅱ面調査, ただし4月1日~4月25日まで作業は中断
- 5月24日~6月15日 **Ⅲ**A 面調査
- 6月15日~7月9日 ⅢB面調査
- 7月10日~8月4日 IV面調査
- 8月6日~9月11日 V面調査
- 9月12日~9月14日 西側壁・北側壁について土層断面図実測
- 9月14日~9月18日 西側壁を崩し、木棺墓(683号土壙)調査。周辺の平板実測。調査終了上述した様に、遺構は各々の遺構面で検出しているが、必ずしも遺構の時代観と遺構面の深さとは整合しない。その為、以下の記述においては、遺構面の概略についてふれた後、各遺構を新しいものから順に時代別にふれる。(時代区分については「8. 遺構と遺物」を見よ)



3 第2次調査地点グリッド設定図(1/400)

2. I面の調査

I 面は、近現代の攪乱を取り除いた直下の遺構検出面である。現地表からは、 $1.5\sim1.8$ m下であり、標高 $4.0\sim4.2$ mをはかる。

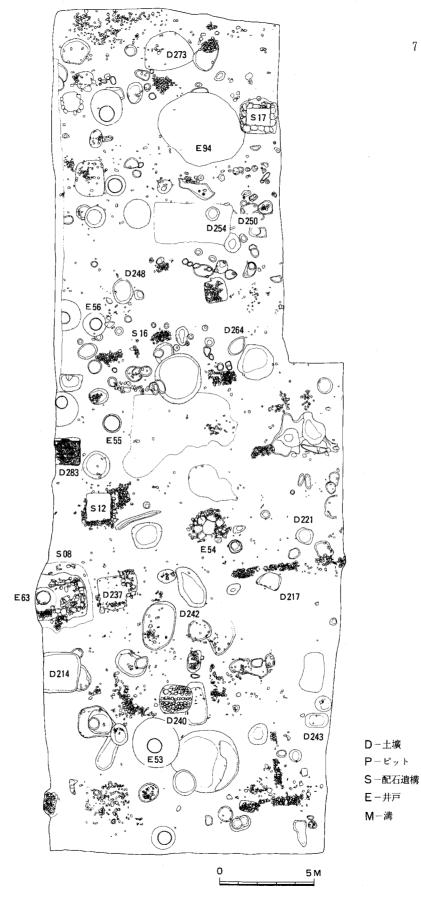
この遺構面の30cm程上には,一面に焼土層がみとめられる。第1次調査他の調査成果から, 戦国時代末島津氏の博多侵略の戦火によるものと考えられている。この推定が正しいとすれば 焼土層は天正14年(1586年)のものであり,1 面はおおむね16世紀後半代にあてられる。

I 面で検出された遺構は、土壙83基、柱穴状小土壙214基、井戸16基、配石遺構10基等である。 これらの大半は、I 面よりも上から掘りこまれたもので、土壙にも江戸時代に下るものは少な くない。井戸は、ほとんどが明治時代以降に廃棄されたものである。

I 面は生活面として考えうると思われる。すなわち,列石遺構が全面に見られ,その配置,形状に時間的な大きな隔りがみとめがたいことによる。列石遺構とは,浅く溝状に掘りこんで,それに礫を集めてつめたもので,建物の基礎部分を形成していたと考えられる。 I 面では少なくとも 3 列が平行してみとめられ, $N-44^{\circ}-E$ をとる。これは,既往の調査で知られた,太閤街割り(天正15年=1587年)に先行する街割り $N-48^{\circ}\sim60^{\circ}-E$ とほぼ一致するものである。なお,列石については,「8. 遺構と遺物(2)近世の遺構 ③配石遺構」でふれる。



4 I 面遺構全景(南東より)



I 面遺構配置図(1 / 200)

3. Ⅱ面の調査

Ⅱ面は、標高3.6m~3.8mで遺構を検出した面である。

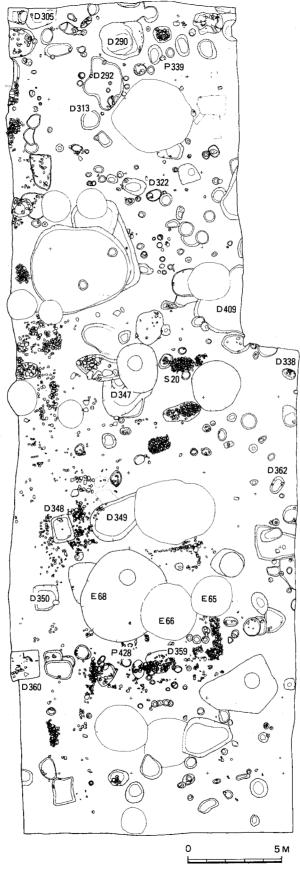
3月15日より、I 面からの掘り下げを開始したが、同日 E—08区より「和同開珎」(P.242、 Fig.342)が出土した。また、E—08区からは明代の青磁が一括して出土した。周辺を精査したが、遺構としては確認できていない。掘り下げは、3 月22日に終了した。

Ⅱ面で検出した遺構は、土壙102基、柱穴状小土壙141基、井戸6基、配石遺構15基である。 列石は、Ⅰ面で検出した列石と同様に建物の基礎と考えられるもので、Ⅱ面も生活面としてと らえて大過なかろう。

Ⅱ面の年代観としては、上述した E-08区 I 面下(I 面からの掘り下げ時に出土した遺物については、 I 面とは分けて I 面下とする。以下各面についても同じ)出土の明代の青磁類から推定できる($P.217\sim221$)。厳密には一括資料とは呼べないが、出土層位は単一で出土状況もまとまって出土しているので準一括資料として考えたい。青磁の器種は、碗・皿・香炉である。碗は、剣頭文化した蓮弁文を沈線で描くタイプと、口縁に雷文帯をめぐらすタイプがある。皿は、稜花の腰折れ皿で内面に片切彫と印花文を持つ。香炉は獣面の鼎足を持つものである。これらが遺構として掘りこまれたものとすれば、I 面はおおむね14世紀代を考えてよかろう。



6 Ⅱ面遺構全景(南東より)



D一土壙 Pーピット S-配石遺構 E-井戸 M-溝

7 Ⅱ面遺構配置図(1/200)

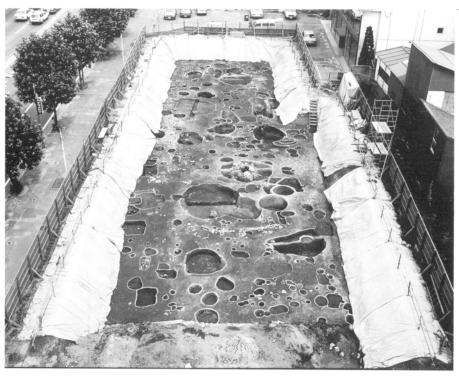
4. **Ⅲ**A 面の調査

5月24日より6月7日まで掘り下げを行ない、ⅢA面の調査にはいった。

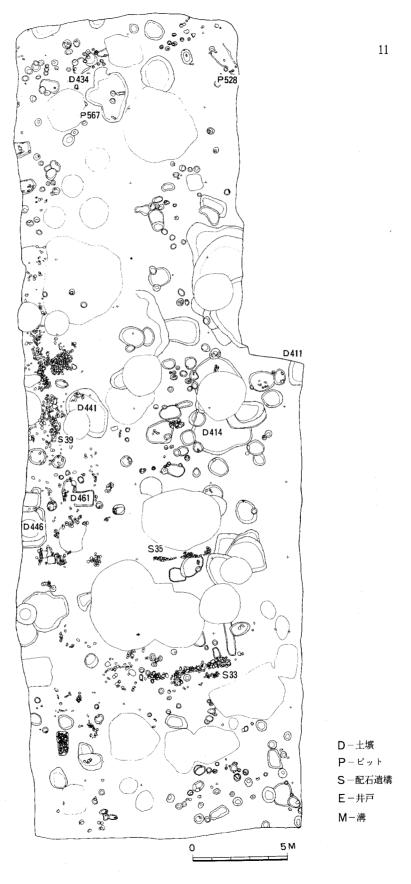
前述した様に、IIIA 面は掘り下げの結果、北側で標高3.3m、南側で標高3.7mと、かなりの標高差がついてしまった。その為、南半部ではIII 面からの遺構の基部が残存し、33号列石、35号列石などは、III 面の列石のほりかたの最下部にあたる。

ⅢA面では、土壌72基、柱穴状小土壌194基、井戸2基、配石遺構8基を検出した。とりわけ留意すべきは、ⅢA面からⅢB面において、五輪塔がかなりみられる点である。五輪塔は原位置を保っているものは、V面の44号配石遺構にみられるだけでほとんどは散乱した形状を示している。五輪塔が供養塔なのか墓石なのか、旧状を示してくれる遺構がないので検討できないが、五輪塔の出土は博多遺跡群の従前の調査でも決して多くはなく、第2次調査地点の特徴のひとつであると言える。(「第三章 小結」参照)

ⅢA面の年代を示す遺構としては、411号土壙があげられる。411号土壙では、土師皿、坏、白磁碗・皿類、青磁碗・香炉、東播系須恵質鉢が出土している(P83~86)。14世紀前半代において差支えないと思われる。 土層の検討によると411号土壙はⅢA面の少し上から掘りこまれており、ⅢA面も14世紀前半代から下ることはないと思われる。



8 ⅢA面遺構全景(南東より)



9 ⅢA面遺構配置図 (1/200)

5. **Ⅲ**B 面の調査

6月15日より、ⅢA面の南側半分について掘り下げにかかった。

遺構を検出した標高は、おおむね3.3mである。

ⅢB面では、土壙52基、柱穴状小土壙120基、配石遺構 1 基を検出した。配石遺構の内、列石はⅢA面(Ⅱ面からのほりこみと思われるものも含む)でみられなくなるが、集石遺構(列石状を呈さないもの)はⅢB面までみられる。40号配石遺構は、ⅢA面で検出しているが、礫の配置状況から本来はⅢB面上に作られたものと思われる。ⅢB面の段階で作られた五輪供養塔の倒壊したものであろう。また、F—04区からは埋壺遺構(472号土壙)が検出された(P.89~90)。地面を掘りくぼめて、褐釉四耳壺を裾えたもので、上半部は内部におちこんで出土した。出土状況からみて、体部の2分の1程を埋めこんでいたと思われる。

IIIB面の年代を示す資料としては、490号土壙 (P.92 ~ 93) があげられる。土師器溜の様相を呈する遺構で、出土した土器は細片が多い。備前焼のすり鉢片が出土しており、年代を推定することができる。それらをみると、**III**B面も III A 面と同様に14世紀前半ごろにおくのが無難であると思われる。



10 ⅢB面遺構調查風景



11 ⅢB 面遺構配置図(1 / 200)

6. Ⅳ面の調査

IV面への掘り下げには、7月10日よりとりかかった。同12日、F─04区ⅢB面下より、白磁小碗・青磁小碗の一括出土をみた。周辺の土を掘り下げずに残して、土層を確認、遺構の検出に努めたが、明瞭な遺構は検出できなかった。土層観察からは、明らかに同一層よりの出土であり、堆積はレンズ状を呈し浅い皿状の凹みが想定できた。

IV面の標高は、3.00m~3.15mである。

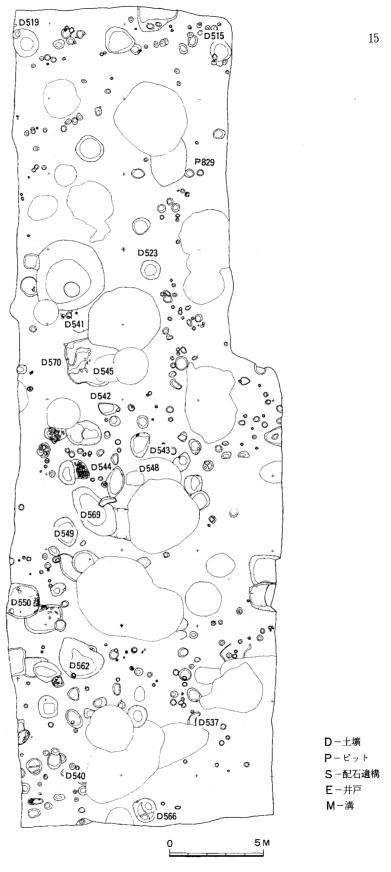
IV面では、土壙61基、柱穴状小土壙219基が検出された。ただし、IV面で土壙として検出された545号土壙、565号土壙などは、ⅢA面より上からの井戸であると考えられる。

IV面から、検出面に砂がまじりはじめ、全体的に砂質土となってくる。

IV面の年代観を示すものとしては、541号土壙と、土器溜である569号土壙があげられる。541号土壙は、大量の土師皿・坏と共に白磁の碗・皿・黄釉鉄絵盤を出土した土壙である(P.152~157)。569号土壙では、土師皿・坏、筑前型及び楠葉型瓦器、白磁碗、皿等が出土した(P.166~171)。541号土壙出土の土師皿・坏には、外底部を回転糸切りするものがまじるが、569号土壙では、全てがヘラ切りである。したがって、IV面の年代はおおむね11~12世紀頃と言うことができる。



12 IV面遺構全景(南東より)



13 IV面遣構配置図 (1/200)

7. V面の調査

8月6日よりV面への掘り下げにとりかかった。8月10日, D-12区V面上より,青銅製帯金具(鉈尾?)が出土した(P.233)。

V面は、最終遺構面であり、地山は砂丘である黄白色の砂となる。全体として、南側へやや深くなる傾向にあり、標高で2.6m~3.1mをはかる。

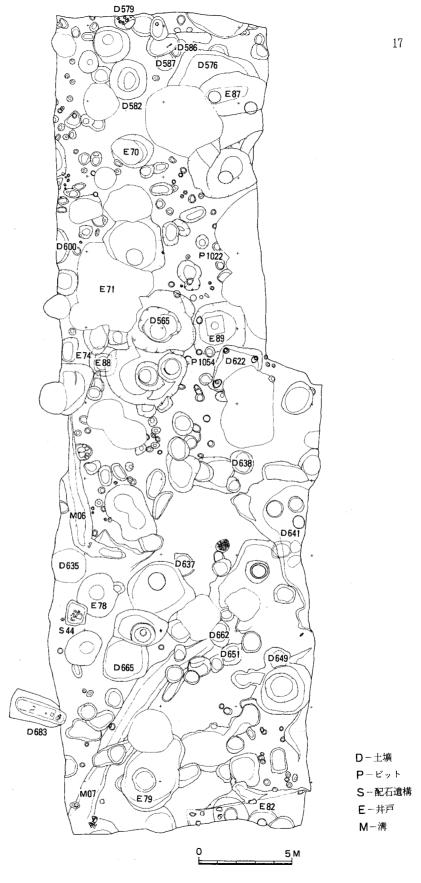
検出された遺構は、土壙116基、柱穴状小土壙120基、井戸17基、配石遺構2基を数える。最終遺構面である為、各時代の遺構が一緒になって検出された。とりわけ井戸においては、IV面以上において、埋土の見極めにくさと相俟って見落していたものが少なくない。

V面において特筆すべきは、622号土壙、683号土壙、89号井戸である。622号土壙は、竪穴式住居とも言えるもので、一辺2.5mの方形の掘りこみの床面に、四隅に柱穴を持つ(P.179~181)。683号土壙は、その大部分が調査区西壁にかくれていたもので、調査最終段階で壁をほり崩して調査した。木棺墓で、棺内には漆塗の化粧箱を副葬していた(P.128~135)。89号井戸は、奈良時代の井戸である。「長官」と墨書された須恵器片が出土している。第2次調査では最も古い遺構である(P.208~214)。

V面は、奈良時代~平安時代の遺構面であり、調査地点における上限を示している。



14 V面遺構全景(南東より)



15 V面遺構配置図 (1/200)

8. 遺構と遺物

(1) 整理の記録

発掘調査は、前述の通り $I \sim V$ 面までの遺構面を基準に実施した。遺構の呼称である遺構番号も、検出した順に付けている。しかし、もとよりそれは個々の遺構の属する年代に対応するものではない。そこで、以下の記述においては検出した遺構面の如何によらず、遺構の年代観にしたがって述べることとする。遺構の年代観は、図化しえた遺物に限らず、全ての出土遺物を通観して、決定した。当然のことであるが、古い時代の遺物が新しい時代の遺構より出土することはままあることであり、遺構の属する年代が新しくなるほど、この種の紛れこみは多くなる。

記述における時期区分は、以上の点及び博多遺跡群における土器編年が未だ確立していない ことから、指標となる遺物を設定し、大まかに括った。

近世 国産磁器(もっぱら古伊万里に代表される肥前系の染付)・唐津焼などを含む遺構、おおむね江戸時代にあたる。

中世Ⅲ期 明代の染付,青磁(沈線で細蓮弁を描くもの,雷文を口縁に巡らすもの)を 出す時期。朝鮮陶磁器では,李朝青磁,三島手などがみられる。備前焼では, 甕の口縁に巾広の玉縁がみられる。室町時代後半を主とする時代である。15 世紀~16世紀。

中世II期 鎬蓮弁文の青磁・ロハゲの白磁碗・皿に代表される時期。備前焼では、すり 鉢の口唇外端部が下方に垂れる。土師皿・坏は、体部が直線的に開き比較的 器高の高いものがみられる様になる。鎌倉時代末~室町時代初め、おおむね 14世紀前半を中心にして、その前後を含む。

中世 I 期 土師皿・坏は、外底部の切り離し技法として回転糸切り技法が確立する。中国磁器では、青磁が一般化する。青磁碗では、見込みに画花文・雲文などを描く。12世紀後半から13世紀代。

古代II 期 白磁に代表される時期である。専ら白磁が輸入されている。土師皿・坏では、底部へラ切りから回転糸切りへの転換期までを含む。瓦器では、摂津国楠葉牧(大阪府高槻市)で生産された楠葉型瓦器が出土する。平安時代後半、11世紀後半から12世紀代。一部、中世 I 期と重複する。

古代 I 期 白磁の出現以前の時期,奈良時代から平安時代中頃までにあたる。8世紀から11世紀中頃。

(2) 近世の遺構

① 土壙

201号土壙

I面 F-01区で検出した土壙である。長径100cm, 短径85cmの 楕円形を呈する。 I面からⅢB面までの間では掘りかたを検

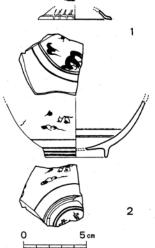
出していないが,位置関係から後述する79号井戸井筒である可能性が高い。

1は、青藍色の釉をかけた 磁器である。合子蓋であろう。

2は、明代の染付碗である。

外底部に「宣徳年造」銘の一





16 201号土壙出土遺物 (1/3)

部がみとめられる。その他、肥前磁器片等が出土している。

217号土壙

I面 E-06区で検出した不整形の土壙である。長軸135cm, 短軸100cm, 深さ44cm前後をはかる。埋土は、しまりのない暗褐色土で、炭の破片を含んでいる。

出土遺物には、近世の瓦片、肥前磁器片が多く含まれていた。 $Fig.17 \cdot 18$ に示したものは、 **肥前磁器**の染付である。 $1 \sim 3$ は碗である。 1 の体部外面には、袖に入れた両腕を胸の前で合わせた唐子の図柄が描かれている。 4 は皿である。

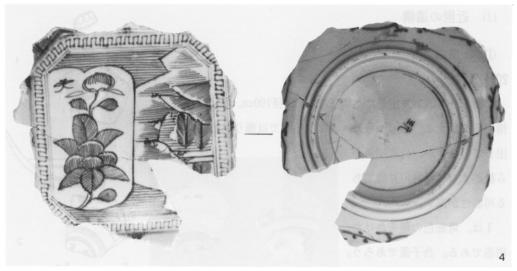
その他、玉縁の白磁碗、龍泉窯の鎬蓮弁文碗など各時代の遺物が含まれている。







17 217号土壙出土遺物 1



18 217号土壙出土遺物 2

221号土壙

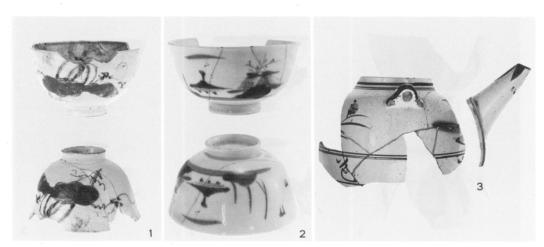
I面 E-06区で検出した,ほぼ円形の平面形を持つ土壙である。径95㎝前後,深さ55~60㎝をはかる。埋土は,炭粒をまじえた暗褐色土である。

出土した遺物は、土師皿・坏、白磁碗・皿、青磁碗・皿、明代染付碗・皿、輸入陶器類、備 前陶器、肥前陶磁器など多岐にわたる。

Fig. 9 に図示したのは、近世国産陶磁器類である。

1・2は染付磁器である。碗で、いずれも肥前磁器であろう。

4 は陶器である。白釉をかけた上に、褐色釉で文様を描く。急須である。221号土壙からはこれと対になると思われる陶器蓋も出土している。



19 221号土壙出土遺物

237号土壙

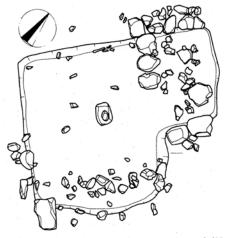
I面 E─05区において検出した遺構である。遺 構は、大きく2つの部分よりなる。すなわち、南 側の方形土壙の部分と, 北側の配石部分である。 土壙部分は、148cm×172cm(石列内側で144cm)深 さ30cm前後をはかる。配石部分は、25cm前後の扁 平な礫をコ字形にならべている。土壙の壁部分は 素掘りのままであるが、二つの部分からなる平面 構成は、土壙壁に礫を貼った12号配石遺構(石組 土壙, P.50・51) と共通する。

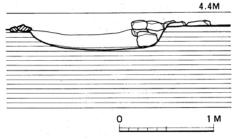
出土遺物は、古代末の 白磁から近世陶磁器まで 多岐にわたる。

図示したのは, 青磁碗 の底部片である。おそら く明代のものであろう。

見込みにスタンプがある。 **20** 237号土壙出土遺物







21 237号土壙遺構実測図(1/40)

240号土壙

I面F-04区検出した土壙である。平面形は隅丸の長方形を呈する長辺。175cm, 短辺150



22 240号土壙(北東より)

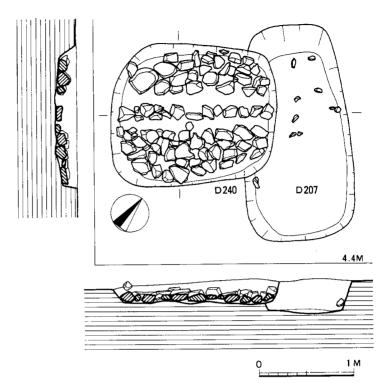
cm, 遺存していた深さは28 cm前後をはかる。

土壙床面には、大振りの 礫をしきつめる。礫は、長 軸方向中央に一列と、それ と15㎝前後の間をおいて両 側にびっしりとおかれる。

埋土は、暗茶褐色土で、 壁土の小槐と赤色粒土、炭 片を含む、いわゆる焼土で ある。

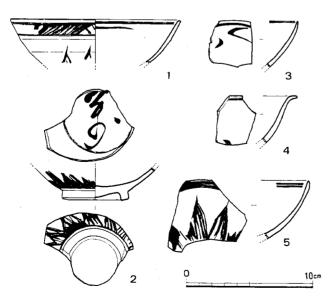
土壙の壁面には、顕著な 焼けた痕跡はみめられない。床面にしかれた礫は、 大部分が焼けた痕跡をとど めていた。

構造的に特異な土壙であ



23 240号土壙遺構実測図(1/40)

るが、その機能・用途は不明である。しかし、礫をしかれていない2条の空間は、おそらく空気(風)を通すためのものであろう。また、しきつめられた礫は、大体その上面のレベルをそ



24 240号土壙出土遺物(1/3)

ろえている。礫は, その上に 何か物をのせるためにならべ られたものと解したい。

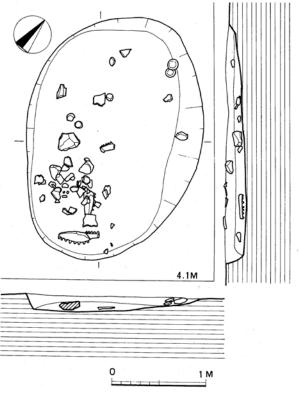
図示したのは、明代の染付 碗である。1・2・5は、体 部外面下半に芭蕉文を描くも ので類品は545号土壙より出 土している(P.72、Fig.116)。 1は口径13.5cmをはかる。 3・4は小片である。体部外 面に文様がみられるが、全体 は窮うべくもない。

242号土壙

I 面の E-05・06区, F-05・06区 にまたがって検出された, 不整形の土 壙である。おおむね楕円形の平面を呈 し, 長径245cm前後, 短径165cm前後, 深さ15~20cmをはかる。

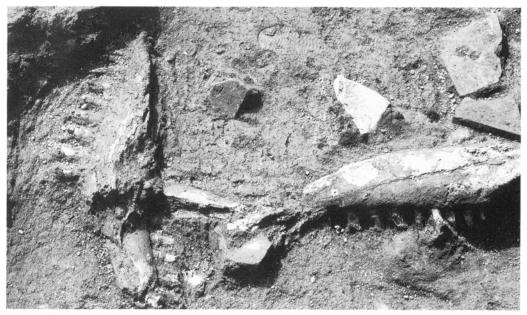
イルカのあごの骨が、3点出土している(Fig.26)。その他にも魚骨等が出土しており、生活廃棄物の廃棄壙であると思われる。

出土遺物は、肥前染付、唐津焼等、 瓦など近世の遺物が多い。Fig.27に示したのは、それら出土遺物の一部である。 $1 \sim 3$ は土師皿である。1の底部は、静止糸切り技法によって切り離されている。 $2 \cdot 3$ は、回転糸切りによる。 $4 \sim 6$ は土師坏である。全て回転



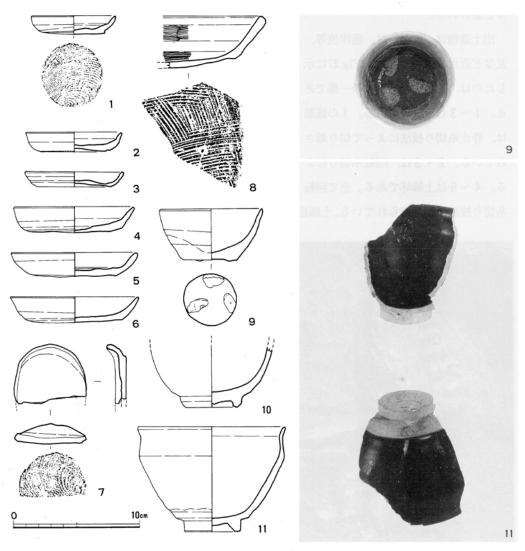
25 242号土壙遺構実測図(1 / 40)

糸切り技法で切り取られている。土師皿・坏の口径は、1が6.7cm、2・3は7.7~7.9cm、4~6



26 242号土壙出土イルカ骨

は9.6~10.05cmをはかる。 7 は,土師器であるが皿・坏類にはならず,両側縁の立ちあがりをケズリおとしている。おそらく½弱を失なっていると思われ,原形を知るべくもないが,耳皿の様な形にでもなるのだろうか。立ち上り部分の口縁部にはススが付いており,燈明皿として使われた可能性もある。土師皿の再加工品か。 8 は,瓦質土器の大皿片である。内外面ともにハケ調整を行なう。 9・10は,いわゆる唐津焼であろう。 9 の外面部には,重ね焼きの三叉トチンの痕跡がついている。 11 は,瀬戸・美濃窯で作られた天目茶碗である。 4 色は黒色で,つけがけによってたっぷりとかけられている。 3 胎部の化粧がけはなされていない。付高台である。江戸時代,登窯期の所産であろう。



27 242号土壙出土遺物 (1/3)

243号土塘

I面 F-04区より検出した遺構である。 長楕円形の土壙で、長軸125cm、短軸78cm、 深さ20~33cmをはかる。

図示したのは、いずれも明代の染付の碗 である。体部外面下半には、 芭蕉文を描く。 2・3の口縁部には、波濤文がめぐってい る。2 で口径11.3cm, 1 で高台径5.7cmをは かる。

10cm

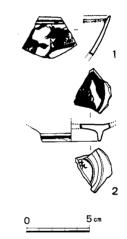
28 243 号十墉出十遺物 (1/3)

248号土壙

I面 E-09区より検出された遺構である。平面は 長軸134cm, 短辺103cmをはかる楕円形の土壙であ る。深さは22~25cm残っている。

埋土は灰茶褐色土で炭粒を含み、埋土中には角礫 が多く含まれている。

図示したのは、明代染付の碗である。1は、体部 外面に動物と思われる文様を描くが祥かではない。 2 は高台付近の小片である。外底部に「永」と思わ れる文字がみられる。「永楽年造」銘の一部であろう か。



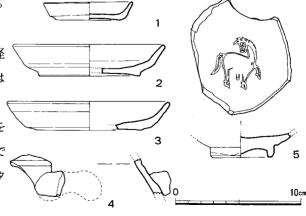
29 248号土壙出土遺物(1/3)

250号土壙

I面 D-12区より検出された小判形の平面を呈する土壙である。長軸約100cm, 短軸約65cm,

深さ約10㎝をはかる。茶褐色土によっ て埋っていた。

1 は土師皿である。口径7.2cm底径 5.1cm器高1.35cmをはかる。2・3は 十師坏である。口径は12.2~13.0cm, 底部8.1~8.4㎝, 器高2.25~2.5㎝を はかる。4は褐釉陶器の耳壺の破片で ある。5は、青磁碗である。馬のスタ ンプ文が、見込みにうたれている。



30 250号土壙出土遺物(1/3)

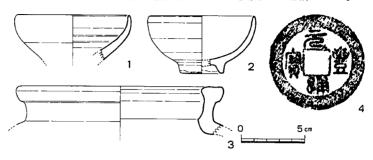
254号土壙

I面 D─12区で、おそらく地下室と思われる大規模な攪乱孔の下から検出した遺構である。

したがって、 I 面の他の遺 構よりも20~25cm低位で検 出している。

図示した遺物は, 1-土 師碗,2一青磁碗,3一白 磁甕, 4─銅銭である。4 は、北宋の元豊元年(1078

年)初鋳の「元豊通寳」である。

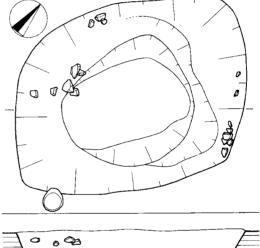


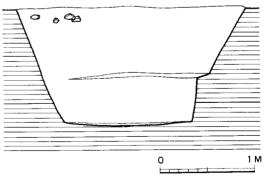
31 254号土壙出土遺物(1/3,4-1/1)

273号土壙 (290号土壙)

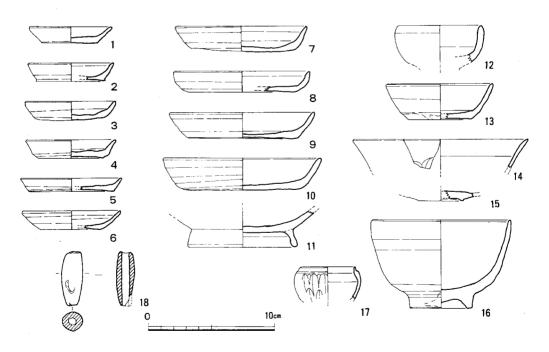
I 面 D-13~14区で検出した,長軸286 cm, 短軸200cm, 深さ128cmをはかる不整形 の土壙である。Ⅱ面の調査時に, 重複して 290号土壙の呼称を与えたが、同一のもの である。ただし、出土遺物の様相は、273号 土壙とした I 面検出のものと、290号土壙 としたものでは、全く異なる。また、埋土 の土質も、273号土壙は砂まじりの茶褐色 土、290号土壙では炭層まじりと若干の違 いを示す。この相違を、上層、下層とする と,上層には肥前染付・唐津陶器など近世 の国産陶磁器が含まれるが、下層には近世 に下る遺物は含まれず中世Ⅲ期のものであ る。ひとつの可能性として、中世Ⅲ期末に 掘られた廃棄物処理の為の土壙(ゴミ穴) が、近世初頭まで用いられたことが考えら れる。

Fig.33・34に図示したのは、下層出土の **32** 273号土壙実測図(1/40) 遺物である。以下にその概要を示す。

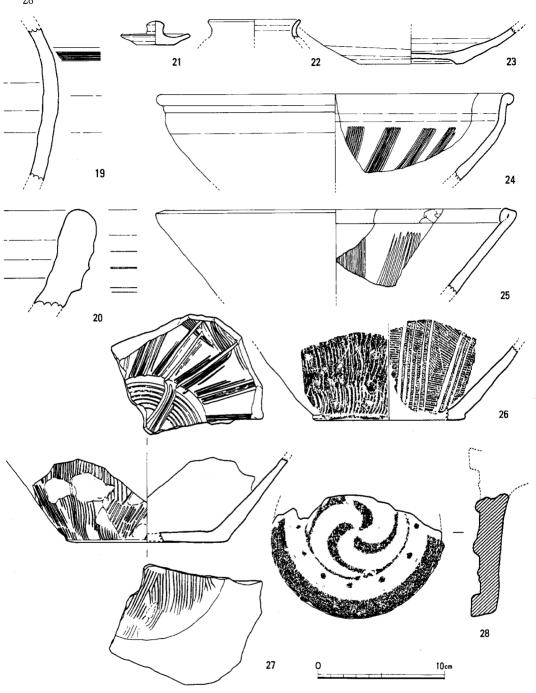




1~11は土師器である。1~6は皿,7~10は坏,11は高台坏埦である。皿は、口径6.6~7.8 cm, 器高1.1~1.5cmをはかる。器形・法量的には、口径6.9~7.2cm, 器高1.5cm前後の2~4が 典型であると言える。坏は、口径10.5~12.6cm、器高1.68~2.55cmをはかる。 8 はやや器高が低い。 7・9・10が典型であろう。12は青磁小碗である。13は、口唇部が露胎となる、いわゆるロハゲの白磁皿である。14~15は、青白磁である。14は碗で、体部外面に片切彫の蓮弁と思われる文様が認められる。器壁はうすくひき出す。15は、平底の皿である。16は、朝鮮青磁の碗である。17は、青白磁の小壺である。体部外面には、スタンプで花弁を陽刻する。口唇部から口縁部内面にかけては、露胎なる。小片である。復原口径で、4.2cmが推定される。18は、土師質の土錘である。筒形で、長さ4.35cm、径1,6cmをはかる。器壁は、平滑になでて仕上げる。19・20は、備前陶器である。19は壺の肩部で、5条の平行沈線が横走する。20は、甕の口縁部である。口縁部の傾き、形状は、文禄三年(1594年)銘の大甕に類似する。21~23は陶器である。21は蓋、22は褐釉の壺、23は壺の低部である。24~27はすり鉢である。24は陶器、25・26は瓦質土器、27は須恵質土器である。いずれも、比較的近接した間隔でスリ目を刻んでいる。25は、口縁部を内側に折りまげて、断面三角形につくる。28は、軒丸瓦の瓦当である。瓦当径13.4cmをはかる。三巴文は左回りで、尾は界線につながる。巴頭は、やや尖り気味である。瓦当面の上半を欠くが、外区の珠文はおそらく12個であると推定される。戦国時代頃にあてられる。



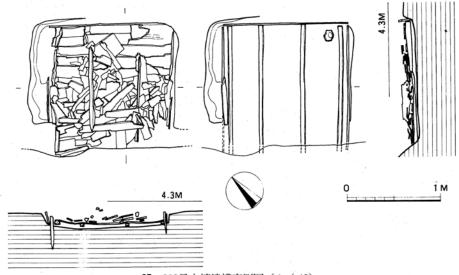
33 273号土壙出土遺物1 (1/3)



34 273号土壙出土遺物 2 (1/3)

283号土壙

I 面 E-07区で検出した方形土壙である。一端は、調査区外に出ているので、1 辺の長さしか確定できないが、150cm $\times 130$ cm以上のほりかたを持つ。



35 283号土壙遺構実測図 (1 / 40)



36 283号土壙(南東より)

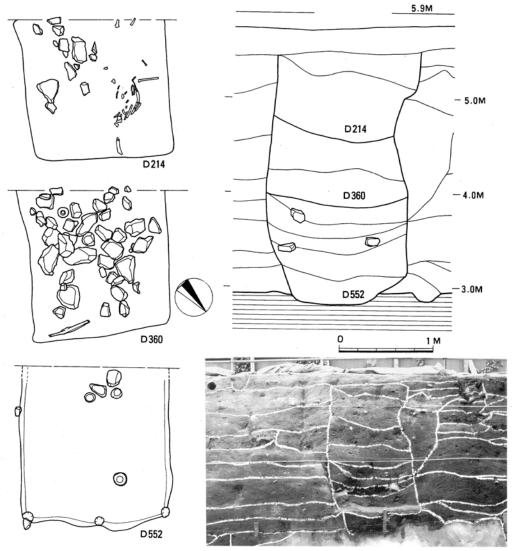
土壙の底には、30~36cm間隔で1寸幅の角棒をおいて棧とし、その上に横に幅12cm(4寸)前後の板をわたして床を作っている。床の周辺には、やはり板を立て、板の内側には杭を打って支える。この側板で囲まれた床部分は、132cm(4尺)×132cm以上になる。床板材の上には、更に板材が散乱しており、それを押えるかの様に、やはり棧木と思われる棒材が、床下の棧と平行する方向で検出されている。土壙の蓋が、下に押ちこんだものであろうか。いずれにしても、地下倉様に地下空間を作っていたことは疑いないと思われる。

214号土壙 (360号土壙, 552号土壙)

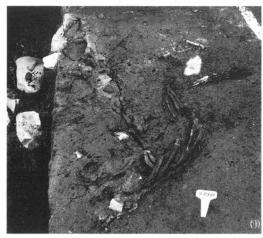
I面F─03区より検出された方形の土壙である。II面で360号土壙,IV面で552号土壙の呼称を与えていたが、最終的に土層図の検討から、I面よりも上からほぼ真直に掘りこまれていた単一の土壙であることが判明した。土層断面上では、2.6 mをはかる深いものだが、他の近世の井戸と比較すれば浅く、またその程度の深さでは湧水レベルに達することは不可能である。したがって214号土壙は井戸ではなく、単なる土壙と考えられる。

Fig.38に示した様に獣骨が出土している。おそらく犬かと思われるが、頭骨・前肢骨を欠いている。

漆器碗が出土しているが、遺存状態が悪く、取り上げられなかった。朱漆塗の木地碗で、土



37 214号土壙実測図 (1/40)





38 獸骨出土状況

39 漆器碗出土状况

圧でひずんでいるが、口径(長径)14cm, 高台径7.3~9.2cm, 高台高1cm, 器高6.5cmをはかる。 出土遺物の一部を Fig.41に示した。

 $1 \sim 3$ は土師皿である。口径 $5.85 \sim 6.75$ cm,器高 $1.32 \sim 1.95$ cmをはかる。 4 は,土師器の坏である。口縁部を欠く。底径は7.2cmである。 5 は,内黒土器(黒色土器 A 類)の破片である。もとより,年代的には11世紀頃までさかのぼりうるものである。内面は密にヘラミガキを施す。

6 は土師器の壺である。把手部が折れたと思われる突起部が 2 ケ所みとめられる。胎土はや や粗く、整形も雑で、焼成はあまい。

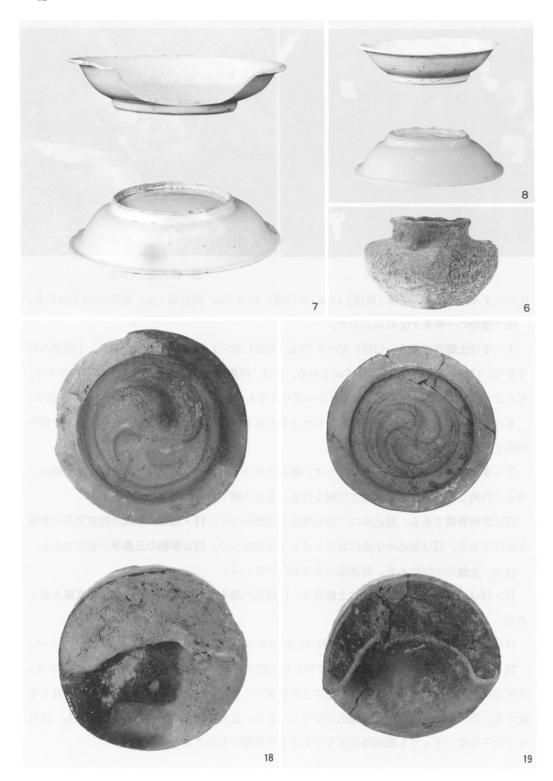
 $7 \sim 9$ は白磁である。 $7 \cdot 8$ は,うすい輪高台のつくもので,体部は丸味を持った腰部からゆるく内湾して,小さく外反して口縁を作る。9 は小碗である。

10は李朝青磁である。見込みに、重ね焼きの目痕がつく。11・12は、中国の龍泉窯系の青磁 大皿片である。12は見込み中央付近にスタンプ文様がつく。13は李朝の三島手の破片である。

14は、土鍋の小片である。外表面にススが付いている。

15・16は、こね鉢である。**15**は土師質で、口唇部内端を上方に引き出す。**16**は、**瓦質土器**である。

17は、緑泥片岩の硯である。短辺で長さ7.05cmをはかる。陸の部分には、墨が付着している。 18・19は、軒丸瓦の瓦当である。いずれも左三巴文をあしらう。18は、瓦当径15cmをはかる。 外区の珠文はみられない。巴文は、巴の上に稜がつくタイプである。19は、外区に14の珠文を配する。巴の頭は丸味が強く、幅広になりつつある。瓦当径12.6cmをはかる。いずれも、近世までは下らず、下っても戦国時代まででおさまる時期のものである。



40 214号土壙出土遺物 1



41 360号土壙出土遺物 2 (1/3)

② 井戸

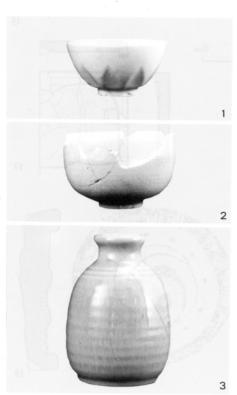
53号井戸

I面 F-03・04区で検出した瓦巻き の井戸である。井筒の直径80cm, 井戸 掘りかたの直径240cmをはかる。

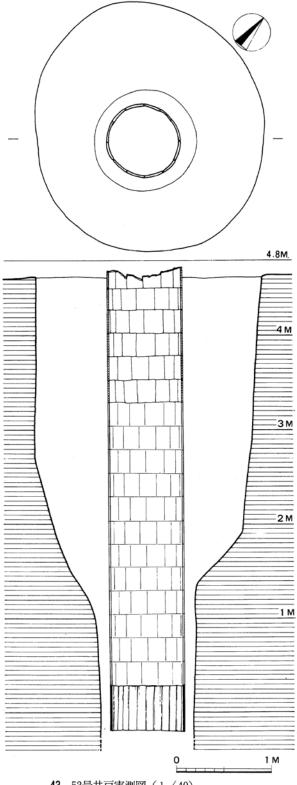
最下部には木桶を一段裾え、その上 に井戸瓦で井筒を組みあげていく。井 筒は I 面以下だけで18段積まれている。

出土遺物は、中世から近世のものま で多岐にわたる。

 $1 \sim 3$ は、肥前磁器である。1 は青 磁碗で、完形品である。体部下半を9 ケ所斜めに面取りする。2は白磁碗で ある。3は白磁の壺である。2・3は黄 味をおびた透明度の高い釉が施される。



42 53号井戸出土遺物



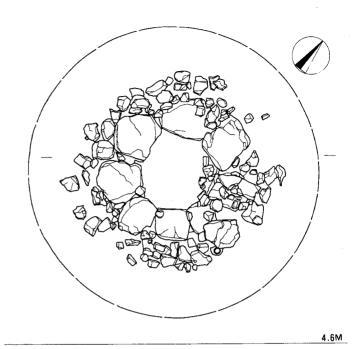
43 53号井戸実測図 (1/40)

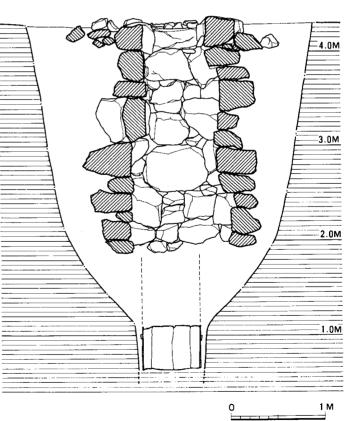
I面 E-08区で検出した井戸である。築港線の5次にわたる調査を通じて唯一の,石組井戸である。

井戸のほりかたは、I面上で直径300cmのほぼ正円形を呈する。I面から225cmほど下までは、直線的に一定の傾斜で細くなり、以下ロート状にすぼまる。ほりかた最下部は、径75cm程度の筒形となり、ここに木枠(底を抜く)が裾えられている。

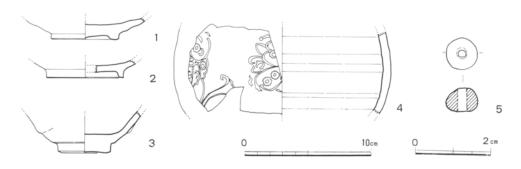
井筒部分の石組は、不整八角形の平面形をとる。一辺27cm~45cmの大きな礫で組み上げるが、上下で八角形の各面はそろっていない。残存していた石組は、I面下240cmに及ぶ。

Fig.45の 1 は李朝青磁の碗である。 2 は緑釉陶器である。灰色の土師質軟胎に,青緑色の釉が全面にかかる。器表はヘラミガキされる。付け高台である。 3 は中国製の天目茶碗である。黒茶色の釉がたっぷりとかかる。 4 は李朝象嵌青磁の壺。 5 はガラス小玉である。





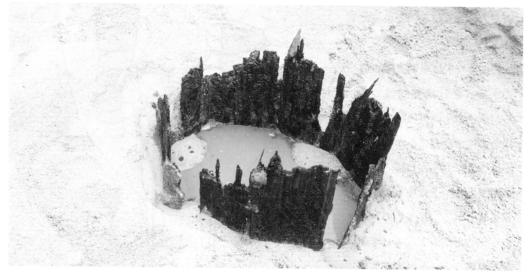
44 54号井戸実測図(1/40)



45 54号井戸出土遺物(1/3, 5-1/1)



46 54号井戸 (北東より)



47 54号井戸 (最下部,木枠)

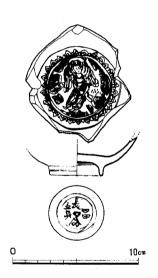
I 面 E-07区で検出した、瓦巻きの井戸である。井筒は直径84cm、ほりかたは直径138cmをはかる。井戸の最下部までは、調査を行なっていない。確認しているのは、I 面下420cmまでで、この範囲内では瓦積みが続いている。

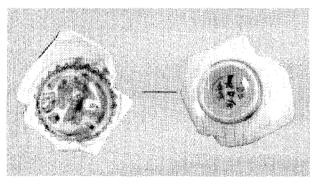
55号井戸の井戸瓦は、縦30cm横25cmをはかるが、小口に刻印を持つものがみとめられた。刻印は「江辻松永菊」の陰刻である。江辻は、福岡市に東に隣接する粕屋郡粕屋町の地名である。

松永菊とは、松永菊次郎のことで、明治期に開窯、昭和31年頃廃業した瓦生産業者(瓦職人ではない)の商標である。 したがって、55号井戸の年代は明治以降、昭和31年以前ということができる。

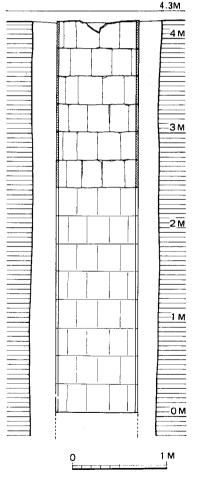
出土した遺物には,近代以前の各時代のものが含まれている。図示したものは**,明代の染付**碗である。見込みに人

物像を描く。高台内には,「長命富貴」銘をもつ。底部は饅頭心をもし,高台は垂直に立つ。 畳付が露胎となる。他は,全面に施釉する。高出土は白色で,きめは極めて光沢がある。15世紀後半~16世紀中頃の所産である。





49 55号井戸出土遺物(1/3)



48 55号井戸実測図(1/40)

I面 E-09区より検出した 瓦巻きの井戸である。井筒は 直径64cm, 掘りかたは直径 124cmのそれぞれ円形を呈する。

井戸掘りかたより、井筒の 上部を固めていたと思われる コンクリート片が出土してお り、56号井戸も近現代の井戸 であると考えられる。

図示したのは、明代染付の 皿である。外底部は、いわゆる碁笥底となる。見込みには 「寿」字が、体部外面には宝相 華文が描かれる。底部は露胎 であるが、施釉後かき取った ものではない。



50 56号井戸出土遺物(1/3)

62号井戸

I面 E-07区で検出した瓦巻きの井戸である。井筒の一部と掘りかたの半分程度は、調査区外に出ている。確認しえた部分で、井筒径60cm、掘り

かた径165cmをはかる。

図示したのは、**李朝の象嵌青磁**である。いわゆる花 三島と呼ばれるもので、内外とも全面に文様を施す。 口径は14.3cmをはかる。



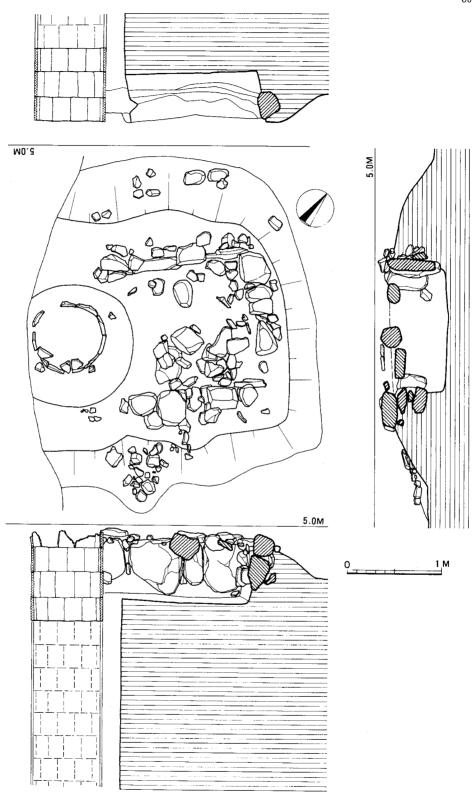
51 62号井戸出土遺物(1/3)

63号井戸、8号配石遺構

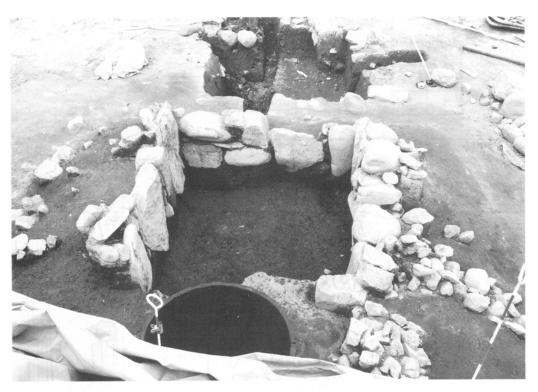
I面 E-05区で検出した。調査にとりかかる前の表土すきとりの際に、瓦井戸と石組を見たので掘り残してあり、周囲のI面の遺構検出面と比べて25cm前後高位で検出している。

63号井戸は瓦巻きの井戸で,井筒径72㎝,掘りかた径130㎝をはかる。土層観察から,63号井戸は明らかに8号配石遺構を切っている。

8号配石遺構は、土壙壁に石を配した配石土壙である。西北壁と東南壁の2辺には板石を立て並べ、東北壁は礫を若干配しているだけである。西北壁で長さ150cm以上、東北壁132cmをはかる。土壙の深さは、74cm前後で、全体として升形を呈する。



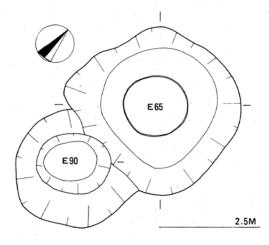
52 63号井戸, 8号配石遺構実測図 (1/40)

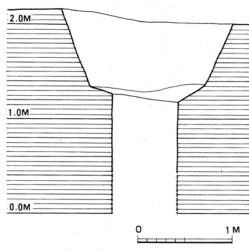


53 63号井戸・8号配石遺構(西南より)



54 8号配石遺構(南より)



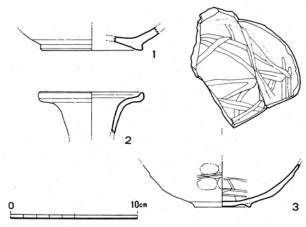


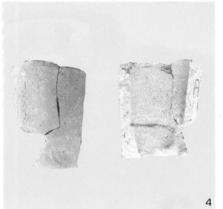
55 65号井戸実測図 (1/40)

Ⅱ面 E-06 区で検出した井戸である。Ⅲ面で検出しているが、Ⅰ面の該当する場所には他の遺構がみとめられず、Ⅰ面以上から掘りこまれていたと思われる。Ⅲ面で66号井戸に切られ、V面で90号井戸を切る。Fig. 55に示したのは、V面での状況である。

井筒は残っていないが、おそらく木桶等であろう。井筒径 $70\,\mathrm{cm}$ 、掘りかた径 $215\,\mathrm{cm}$ 、(II 面上)をはかる。

Fig.56の1は,越州窯青磁の碗である。外底部は露胎となる。胎土は,精良とは言えない。2は白磁壺の口縁である。3は瓦器碗片である。内面はナデの上に、比較的まだらにヘラミガキを施す。外面は、指押えの上にあらくヘラミガキが入る。高台は断面三角形で付け高台。4は「堺湊伊織」スタンプがおされた焼塩壺の破片である。「堺湊伊織」銘の焼塩壺は,江戸時代に流行していたものであり,博多にもその当時もたらされていたのであろう。

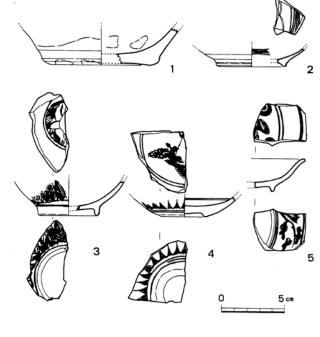




56 65号井戸出土遺物 (1/3)

II面 E-06区で検出した井戸である。前述した様に、65号井戸を切っており、本来は I 面以上から掘りこまれていたものと思われる。また西側では、68号井戸を切る。

1は越州窯系青磁碗である。平底で見込みに目痕がのこる。体部外面の下位から底部は露胎となる。2は瓦器碗の破片である。見込みにはラセン状の暗文の一部がみとめられる。楠葉型と思われる。3~5は明の染付である。3は碗、4・5は皿で、3・4は芭蕉文を施す。



57 66号井戸出土遺物 (1/3)

68号井戸

Ⅱ面 E—05・06区、F—05・06区で検出した遺構である。整理段階で、I面の215号土壙と68号井戸の井筒(調査の都合上、一時的に仮に353号土壙としている)と同一であること、I面の245号土壙が68号井戸のほりかたに含まれること、II面上で68号井戸掘りかたとした遺構の南半分が、V面の調査時に80号井戸として認識され、これが68号井戸を切っている、すなわち80号井戸が68号井戸よりも新しい井戸であることが判明した。これに基いて68号井戸をみると、井筒径110cm(I面上)、掘りかたは最大部で480cmをはかる。

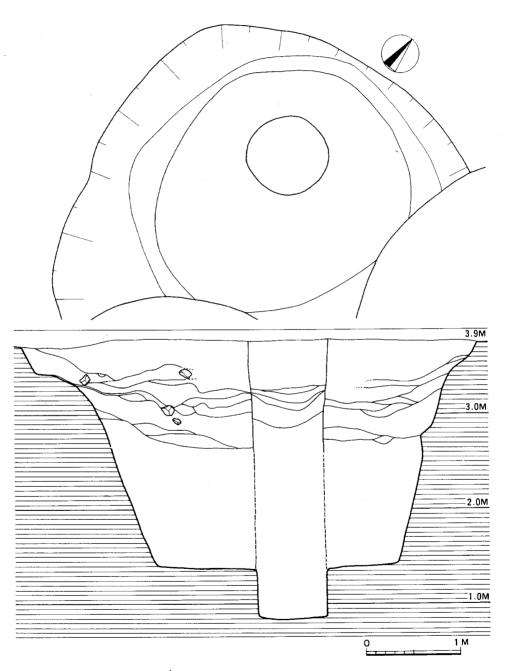


58 68号井戸(南より)

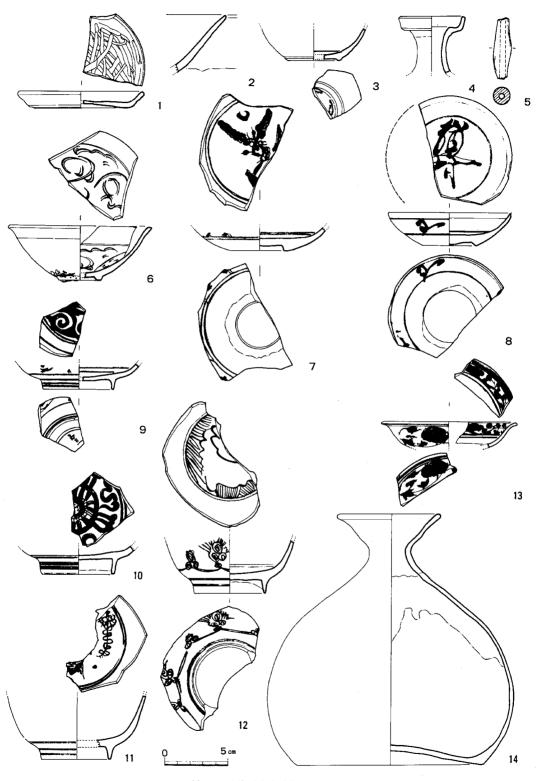
出土遺物には、肥前磁器、染付が含まれ 68号井戸が近世以降に下るものであること を示しているが、井筒が瓦巻きでない点、 掘りかたが大きい点からみて、明治時代以 降に下ることはないと思われる。

図示した遺物は、出土遺物の一部であり 68号井戸の年代を示してはいない。

1は瓦器皿である。内底部は密にヘラミガキを施す。体部はヨコナデ、外底部はヘラおこしである。炭素の吸着状態は良く、 堅緻で銀化している。口径9.8cm底径7.2



59 68 号井戸実測図(1 / 40)



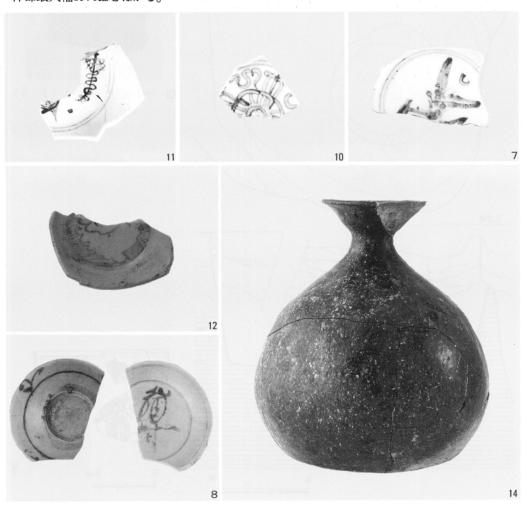
60 68号井戸出土遺物1 (1/3)

cm器高1.35cmをはかる。在地産である。12世紀頃の所産と思われる。2は天目碗の破片である。体部は,やや外反しつつ直線的に開く。中国産である。3は高麗青磁である。削り出しで小さな高台をつくる。内外面ともまんべんなく施釉される。4は白磁の盤口壺の口縁部及び頸部である。頸部内側まで釉がかかっている。5は土錘である。

6 は、潮州窯系の青磁碗である。断面台形の削り出し高台を持つ。高台から外底部にかけて は露胎となる。外体部の高台際と畳付部に砂が付着する。重ね焼きの痕跡か。

 $7 \sim 13$ は、明代の染付である。 $7 \cdot 8 \cdot 13$ は皿で、 $7 \cdot 8$ は碁笥底、13は底部を欠くがおそらく高台がつくものであろう。8 で、口径9.75cm底径4.05cm器高2.6cmをはかる。 $9 \sim 12$ は、碗である。9 の底部には銘の一部がみとめられ、おそらく「宣徳年造」銘と思われる。

14は、**朝鮮の緑褐釉陶器**の舟徳利である。完形品である。口径8.25㎝底形14.7㎝器高19.8㎝ 体部最大幅19.4㎝をはかる。

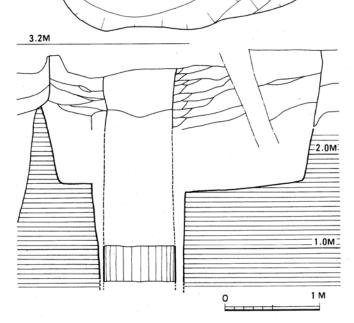


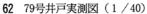
V面 F—01区で検出した井戸である。整理の結果, I面で 検出した201号土壙, II面で検出した375号土壙が79号井戸の 井筒にあたり, IIIB面で検出した484号壙が掘りかたにあた ることが明らかとなった。Fig. 62には, V面で検出した状況 を示している。

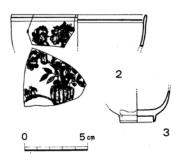
79号井戸からは、近世の国産陶器類が出土しており、江戸 o 時代の井戸であると思われる。



63 79号井戸出土遺物1 (1/3)







64 79号井戸出土遺物 2 (1/3)

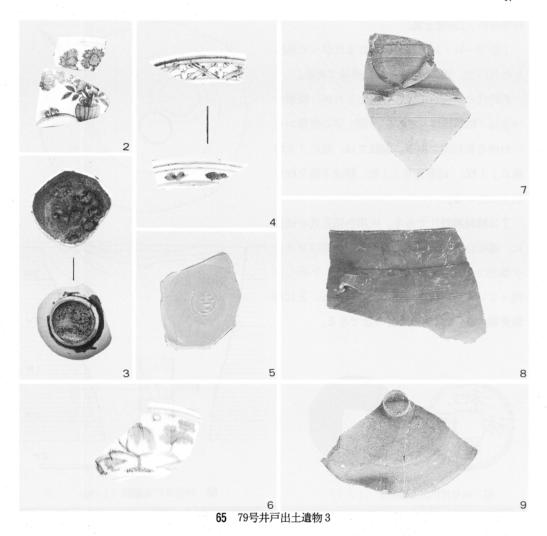


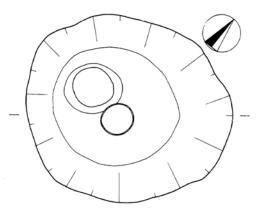
Fig. 63に示したのは、須恵器の風字二面硯である。左側と陸部の半ばを欠く。陸部の中央は磨滅して凹んでおり、使用が頻繁であったことをうかがわせる。現存幅7.95cm、現存長7.2cm、高さ3.1cm、陸部の厚さは1.65cmをはかる。遺物としては、平安時代の前半に属するものであろう。2は明代の染付碗である。鉢植えの花が描かれているが、破片は接合できない。3は、白色の磁胎に青藍色の釉がかかった盃である。外面の釉はほとんど剝離し、内面には灰をかぶってあれた釉がたまる。4・6は染付である。6は肥前染付の碗であろうか。5は青磁碗の底部である。見込みに「吉」字のスタンプをおす。7・8は無釉の焼き締め陶器である。7は粘土紐を貼り付けた大甕の胴部、8は、甕の口縁である。9は須恵器の坏蓋である。端部の形状から、8世紀後半の遺物であると考えられる。

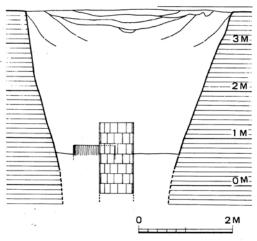
94号井戸 (256号土壙)

I面 D-11・12・13・14区にまたがって検出 した井戸で、256号土壙とした遺構である。

名時代の遺物がまざって出土したが、特筆すべきは「和同開珎」である。「開」字の特徴からいわゆる新和同である。銅銭では、他に「天禧通寳」1枚、解読不能2枚が出土している。

2 は緑釉陶器片である。灰黒色須恵質の硬胎に、濃緑色の釉が厚めにかかる。体部はヨコナデ整形される。小片の為、輪花は1ケ所しか残っていない。復原口径12cmをはかる。3 は李朝青磁の碗、4 は明の染付の皿である。

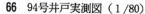






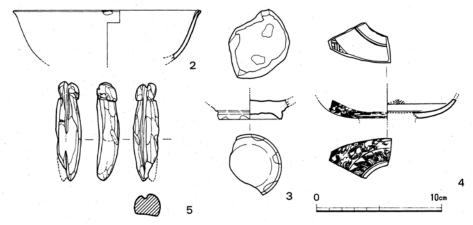


67 94号井戸出土遺物1 (1/1)



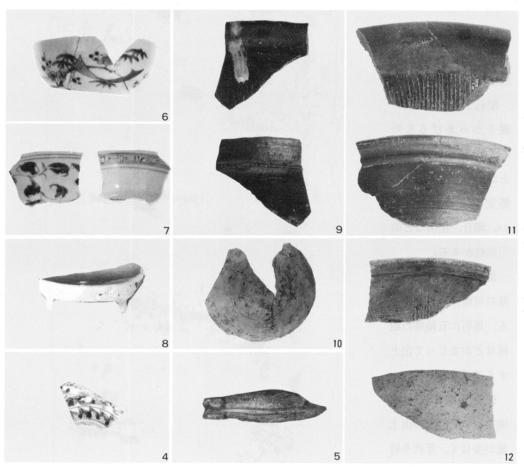


68 94号井戸(北東より)



69 94号井戸出土遺物 2 (1/3)

 $\mathbf{5}$ は、滑石製の**石錘**である。現状が当初の形状をとどめているかわからないが、一端は削りこんで亀頭状につくり、もう一端は丸くおさめている。長さ $\mathbf{7.8cm}$ をはかる。



70 94号井戸出土遺物

③ 配石遺構

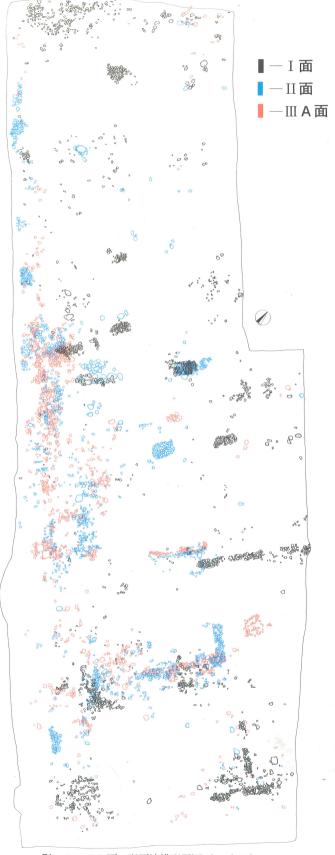
I 面からⅢA 面にかけては、配石遺構が多くみられる。配石遺構には、大別して浅く溝状の土壙を掘り礫をつめて列石状を呈するもの(列石)、土壙の壁および周囲に礫を配したもの(配石土壙)、一定の範囲に礫を集中させたもの(集石)がある。

列石は、その形状から建物の基礎部分を構成するものと思われる。

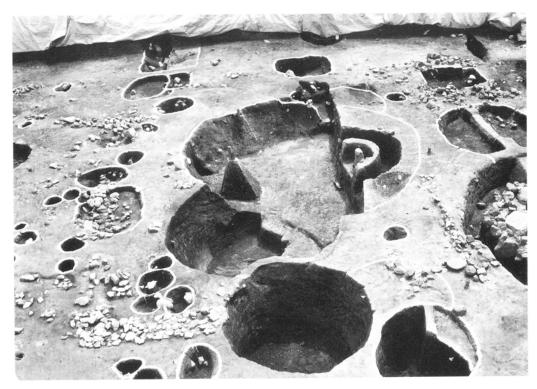
配石土壙には、壁に 礫をつみあげるものと、壙外に並べるものとがあり、その性格を 断定できる資料はない。溜升、便所などの可能性がある。

集石は、道路、敷石、墓の可能性が考えられる。集石に五輪塔の地輪などがまじって出土する遺構もある。

配石遺構は、配石土 壙を除いて遺物の出土 量が少なく、年代を特 定するのが難しい。大



71 I~ⅢA面,配石遺構配置図 (1/200)



72 Ⅱ面 32 号配石遺構(北東より)



73 Ⅲ A 面 35 号配石遺構(北東より)

まかな時代観として,列石は室町時代後半以降おそらく戦国時代から近世初頭,配石土壙は戦 国時代〜近世,集石は室町時代と考えて大過ないと思われる。

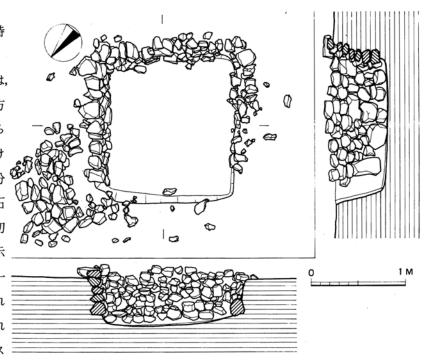
12号配石遺構

I面 F—07区で検出した配石土壙である。土壙壁の三面に石を積み、北隅の土壙外に石敷部分を張り出す。土壙は、132cm×148cm、深さ48~52cmの升形を呈す。石積は北西壁を除いて三

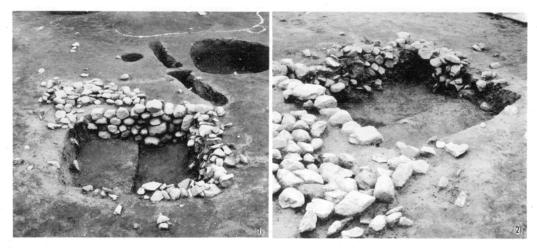
北東壁において特に密である。

面になされるが、

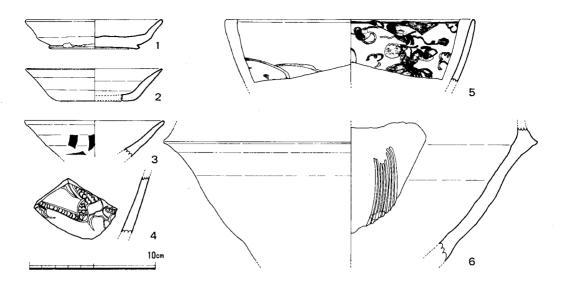
ペースと考えたい。



74 12号配石土壙実測図 (1/40)



75 12号配石遺構((1)-南東より(2)-北より)



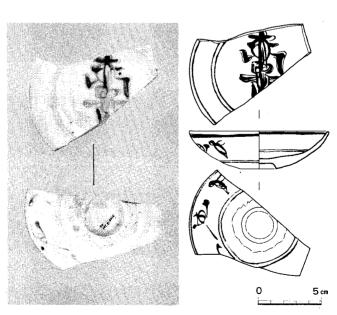
76 12号配石遺構出土遺物 (1/3)

Fig. 76, **1・2**は**土師**皿である。口径10.8cm,器高2.35~2.5cmをはかる。**3**は,**李朝の刷 毛三島**である。体部外面は横方向に白泥を塗るが,一部に白泥をはがした部分をつくる。内面 は,薄く交差して白泥を刷く。口径11.0cmをはかる。**4**は,**李朝の象嵌青磁**である。壺の体部 で,白土で龍を描く。**5**は,**肥前磁器**の染付と思われる。口径は,19.5cmと推定される。**6**は, **備前陶器**のすり鉢片である。口縁部を欠くが,備前焼編年Ⅲ期の特徴を示している。

16号配石遺構

I 面 E—09区で検出した列石 遺構である。N—44° —E を指 すが,延長としては1.2m分し か残っていなかった。

図示したのは、明代染付の皿である。目込みには「寿」字の文様がはいる。底部は基笥底で、全面に施釉した後、体部外面下半から底部端部にかけて釉をふきとっている。復原口径11.2cm、底径2.9cm、器高3.0cmをはかる。



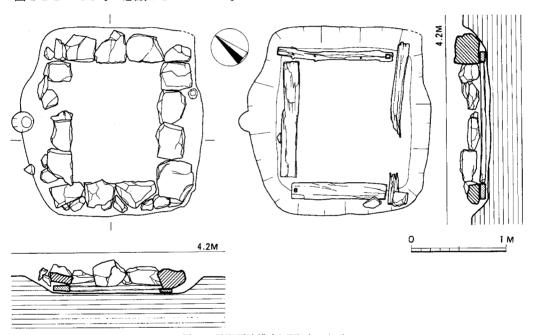
77 16号配石遺構出土遺物 (1/3)

17号配石遺構

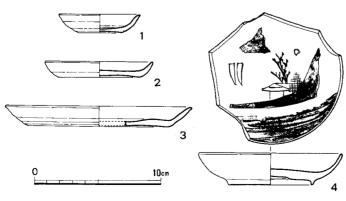
I 面 D—14区より検出した配石土壙である。約140 $cm \times 200 cm$ のほぼ方形のほりかたの底に、 $100cm \times 130 cm$ の内法で長方形に板材をおき、その上に礫をならべる。土壙の深さは、20 cm前後をはかる。

板材は、端部に枘穴を穿つものがあり、建築部材の転用と考えられる。板材の長さは、北東辺で120cm、北西辺で120cm、南西辺100cm、南東辺172cm(折れた部材を2本用いる)をはかる。両端部に枘穴を持つものはなく。建築材の一端を切断して用いたものと思われる。

石は、92cm×128cmに内側の面をそろえて配置されている。石の形状、高さは様々で、特に上面をととのえる等の意識はされていない。



78 17号配石遺構実測図(1/40)



79 17号配石遺構出土遺物(1/3)

1~3は土師皿である。法量は、1は口径6.45㎝底径1.45㎝器高1.5㎝,2は口径8.55㎝底径6.2㎝器高1.2㎝,3は口径14.9㎝底形11.1㎝器高1.6㎝で、小皿、中皿、大皿のセットといえる。

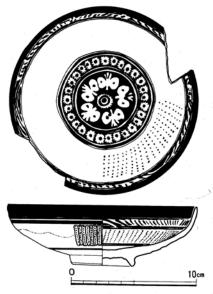
4 は**肥前磁器**の染付皿である。

20号配石遺構

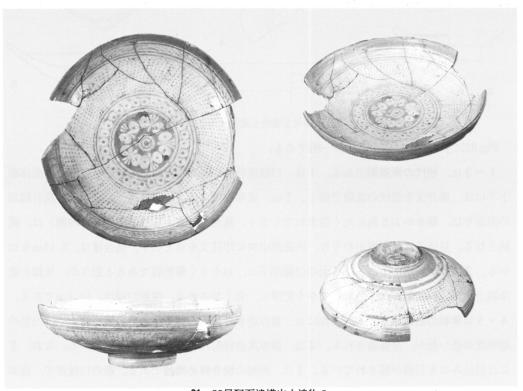
I 面 E—10区で検出した列石遺構である。主軸方位は,N—49°—E をさす。延長としては,

約2m分を検出しているにすぎない。

列石の掘りかたより、李朝の象嵌青磁碗が出土した。いわゆる花三島である。文様は、見込みに蝶を五羽配し、体部の内外面に花文を散りばめている。いずれも型押しによるもので、白色土で象嵌されている。胎土は灰石色を呈し、砂粒をほとんど含まずきめ細かく精良である。釉は、うすく青白色をおびた灰白色の透明釉である。口径14.25cm、高台径4.8cm、器高4.8cmをはかる。



80 20号配石遺構出土遺物1 (1/3)



81 20号配石遺構出土遺物 2

(3) 中世Ⅲ期の遺構

① 土壙

253号土壙

I面 E─10区で検出した土壌である。120cm×130cmのややひずんだ方形を呈する土壌で、底に礫がみとめられる。礫の状況は、疎密を持って壙底一面にひろがるが、敷石を意識した状況とはみられない。可能性としては、壙底に礫をならべたこともありうるが、むしろ廃棄したものと考えたい。土壌の深さは、10cm内外をはかる。

埋土は、焼土まじりの暗褐色土である。炭化物や赤色粒土を多く含む。全くしまっていず、柔かい。

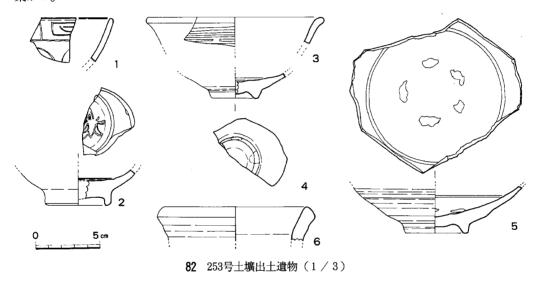


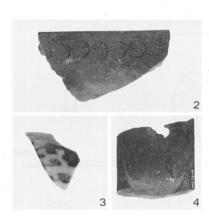
Fig.82に示したのは出土遺物の一部である。

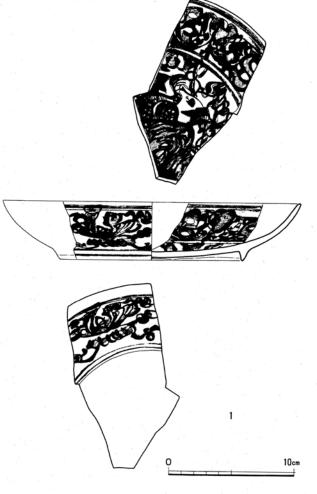
1~3は、明代の青磁碗である。1は、口縁部外面に雷文帯をめぐらせるもので、外面体部下半には、蓮弁文を弧状の沈線で描く。2は、底部片である。高台は高く直立する。高台端部の面取りは、釉をかぶる為に丸く包まれてしまう。高台畳付きから外底部(高台内側)は、露胎となる。見込みには圏線がめぐり、内底部中央に印花文をほどこす。高台径は、5.15cmをはかる。3は、口縁部片である。外面の口縁部下に、おそらく整形痕であると思うが、沈線が数条横走する。口縁端部は、外反してやや肥厚し、丸くおさめる。復原口径は、14.1cmである。4・5は李朝の白磁碗である。高台には、重ね焼きの目痕が残る。きめの粗い胎土に、白色の透明度の低い釉が、全面施される。4は、復原高台径3.75cm、5は4.95cmをはかる。なお、5には見込みにも目痕が残されている。6は、無釉の焼き締め陶器である。壺の口縁部で、復原口径11.1cmをはかる。

264号土壙

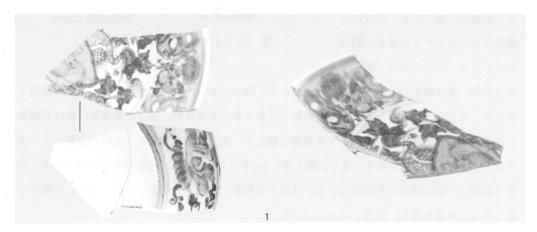
I 面 E-06区で検出した径約70 cm, 深さ約30cmの円形の小土壙で ある。

1は明代染付の中皿である。口径23.7cm,高台径14.6cm,器高4.65cmに復原できる。高台内を除いて,ほぼ全面を草花文で埋める。2は,瓦質の火舎の破片である。口縁外面に菊の印花文をならべる。3は明代染付の皿である。4は石硯である。縁泥片岩製。





83 264号土壙出土遺物 1 (1/3)

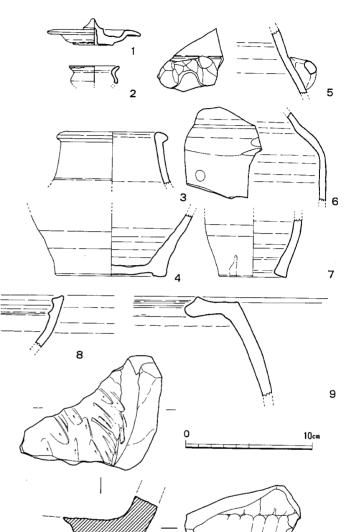


84 264号土壙出土遺物 2

292号土壙

Ⅲ面 D—13区より検出した不整 形の土壙である。差し渡しの最大 の部分で280cm, 深さ65cmをはかる。 遺物量は多く,ごく一部を実測 しえたにとどまった。

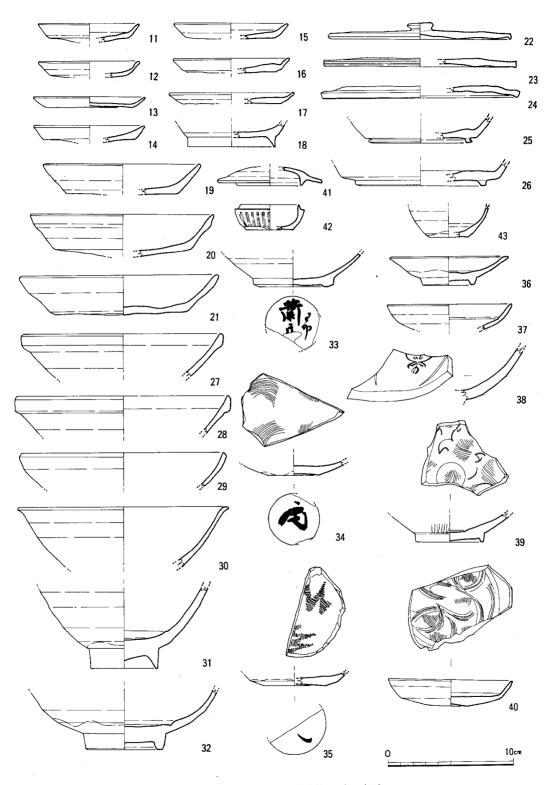
1・4・5・9は、褐釉陶器で ある。1は蓋で、内面は露胎とな る。4・5は壺である。9は口縁 内折の甕である。2・3・6・7 は、緑灰色の釉を施した陶器であ る。7は、底部をもたない。8は 無釉陶器の鉢である。茶褐色を呈 し、粗い。10は滑石製の石鍋であ る。外面にススが付着する。11~ 17は土師皿である。口径6.15~ 10.05cm, 器高0.9~1.35cmをはか る。18は高台付の土師埦である。 19~21は土師坏である。口径12.5 ~15.9cm, 器高2.55~3.45cm。**22** ~26は須恵器である。おおむね8 世紀頃の所産であろう。27~37 は、白磁碗・皿である。外底部に 墨書をもつものが3点在る。33は 右に干支の「己卯」,左に「蘭□」,



85 292号土壙出土遺物1 (1/3)

10

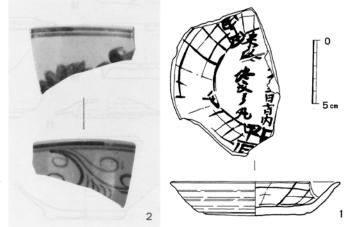
34は花押,35は漢字の一部を見ることができる。残念ながら、いずれも平安時代末頃の遺物と思われ、干支の年代とセットになる土器類の要素を確定できない。38は、青磁碗、40は青磁皿である。40は、施釉後底部を削って外底部を整える。39は青白磁碗である。41は白磁の合子蓋である。特に文様は施されていない。最大径8.4cmをはかる。42は、白磁の合子の身である。体部外面は、一面に縦位の刻線がはいる。体部下位外面・外底部は露胎である。43は、白磁の小壺である。外底部露胎、底径4.03cmをはかる。



86 292 号土壙出土遺物 2 (1/3)

Ⅱ面 D—13区で検出した土壙である。一部調査区外に出ている。長軸170cm, 深さ35~55cmをはかる。

1は土師皿である。口径 13.5㎝底形7.65㎝器高2.7 ㎝をはかる。内面一面に墨 書がある。内底部には2行 書きで文が、体部には卦線 と文字がみとめられる。内 底部の文字は、「□□二日 七日内」「来□□□之丸」と ある。体部は上から「甲申」 「甲□」「甲辰」とある。干



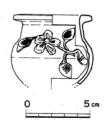
87 305号土壙出土遺物(1/3)

支では、甲のつく年は甲申、甲午、甲辰の順にめぐってくる。おそらく「甲 \square 」の欠字部分には「午」がはいるのであろう。年の配列を示す実用具と思うが、甲の年は10年に1度めぐってくるのに対し、干支の間の卦線は6分している。内底部にかかれた文字の内容が鍵となろうか。判続できないので、墨書の性格、使用方法等は知るよしもない。体部はヨコナデ、外底部は回転糸切りする。2は明代染付の小片である。

322号土壙

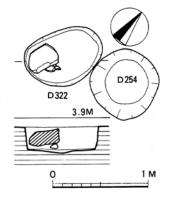
Ⅱ面 D—12区で検出した土壙である。長軸84cm, 短軸58cm の長楕円形を呈する。深さは、24cmをはかる。壙中には、平 坦な面を上に向けた礫がおかれている。

Fig.89に図示したのは、**青白磁**の小壺である。体部には、花 文が貼付けられている。器形は、底部を欠くか、ほぼ球形の体 部からやや口すぼまりの頸部が立ち上り、約90°外方に折り返 して口縁を作る。頸部内面から体部外面にかけて施釉されてい





る。復原口径 は, 6.1 cm を



88 322号土壙実測図(1/40)

はかる。火災にあったものと思われ、釉表面 は発泡して、透明度なく色合いもくすんでい る。

89 322号土壙出土遺物 (1/3)

Ⅱ面 E—07・08区で検出した土 壙である。井戸の掘りかた状を呈 するが、井筒は検出されていな い。

Fig. 90に図示した 1 は,李朝 象嵌青磁である。いわゆる刷毛三 島で,体部内外面に白色土の刷毛 びきをする。復原口径10.6cmをは かる。 2 は李朝の白磁である。内 底部及び高台畳付きに,重ね焼き の目痕がのこる。

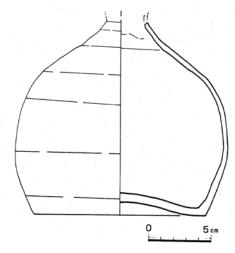
2 0 5cm

90 347号土壙出土遺物 (1/3)

348号土壙

Ⅱ面 E—05区で検出した、平面が長方形を呈する土壙である。142cm×115cm、深さ26~32cm をはかる。

図示したのは、李朝の緑褐釉陶器である。いわゆる舟徳利である。頸部から上を欠く。頸部はしまり、ゆるくひろがって下ぶくれの体部をつくる。底部は、上げ底の平底である。口縁部を欠くが、348号土壙出土舟徳利(P44. Fig. 60—14)と同様に、ラッパ状に開く口縁をつくり、口唇部は小さく肥厚させて丸くおさめる。胴部最大径16.8cm、底径13.65cmをはかる。



91 348号土壙出土遺物 (1/3)



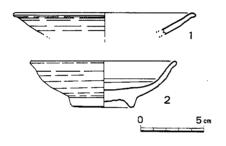
62 348号土壙

349号十塘

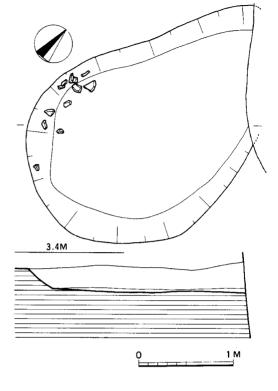
Ⅱ面 E-05・07区より検出された土壙である。不整形の土壙である。深さ20~30cmをはかる。

Fig.93、1は灰釉陶器の皿片である。体部内外面はヨコナデ調整される。復原口径14.5 cmをはかる。小片であるが,内外面とも施釉される。

2 は李朝青磁の皿である。口径11.6cm,高 台径4.5cm,器高3.66cmをはかる。



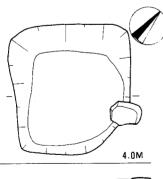
93 349号土壙出土遺物 (1/3)



94 349号土壙実測図(1/40)

350号土壙

Ⅱ面 E—05区で検出した土壙である。—隅を欠いた方形を呈する。125cm×132cm,深さ35~41cmをはかる。



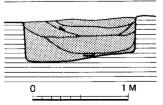
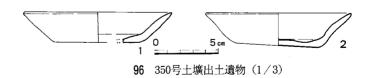
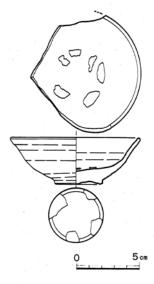


Fig.96に示したのは、土師坏である。体部は、底部から外反しつつひらく。体部内外ともヨコナデ調整、底部は回転糸切り技法で切りはなす。 1 は、口径11.8cm底径6.6cm器高2.4cm, 2 は、口径11.6cm底径6.45cm器高2.7cmをはかる。

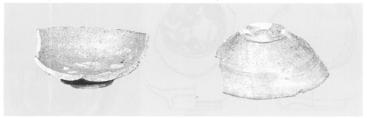


95 350号土壙実測図(1/40)



Ⅱ面 F—04区で、36号配石遺構(列石)に切られて検出された 土壙である。不整楕円形を呈し、長軸145cm、短軸115cm、深さ17 cmをはかる。

図示したのは、李朝青磁の碗である。高台は低く、高台内側の削り込みは浅い。見込みと畳付きに目痕が残る。口径10.2cm、高台径3.9cm、器高3.65cmをはかる。

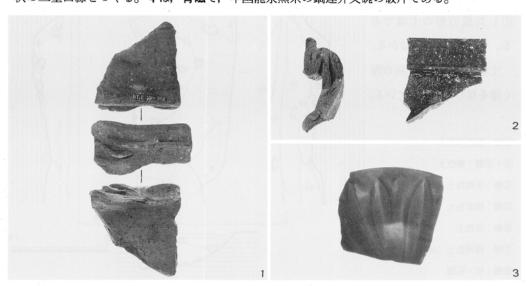


97 359号土壙出土遺物 (1/3)

362号土壙

Ⅱ面 E-08区で検出した,小判型の平面を持つ小土壙である。長軸95cm,短軸60cm,深さ11~15cmをはかる。

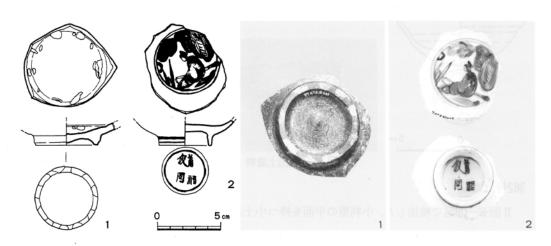
Fig. 98, 1 は、軒平瓦の瓦当である。いわゆる北方系瓦であり、中国東北地方で生産されたものである。2 は、常滑焼の甕口縁である。頸部から N 字状に粘土を折りまげて、幅のある帯状の二重口縁をつくる。4 は、青磁で、中国龍泉窯系の鎬蓮弁文碗の破片である。



98 362号土壙出土遺物 (1/3)

ⅢA面 E—10区より検出した,不整形の大型土壙である。大半は調査区域外となっており, 土壙の性格はつかめなかった。

Fig. 99, 1 は,李朝青磁である。見込みと高台畳付きに,重ね焼きの目痕がつく。畳付部を除いて,全面施釉されている。2 は,明代染付の碗である。体部上半,口縁部の破片は,見出しえない。見込みには,書見する人物像が描かれている。



99 409号土壙出土遺物 (1/3)

446号土壙

ⅢA面 E-05・07区で検出した長方形の土壙である。一辺200㎝強をはかる。 土壙底には、炭・灰が厚く層をなして堆積している。

①層:暗茶褐色土

②・③層:褐色土

④層:灰褐色土

⑤層:暗灰色土

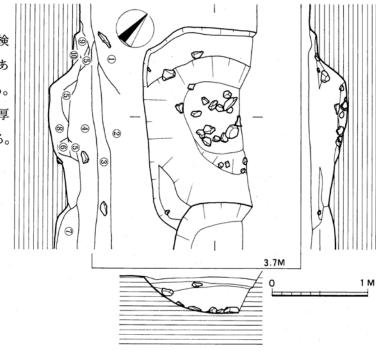
⑥層:灰色土

⑦層:暗褐色土(445号土壙)

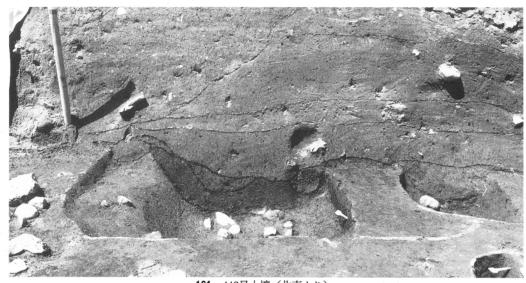
⑧層:炭•灰層

9層:暗灰色土, 炭まじり

⑩層:褐色土



100 446号土壙実測図(1/40)

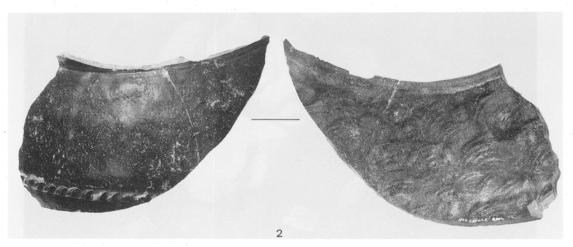


101 446号土壙(北東より)

この中には、土師器の土鍋片が多く含まれている。形態をうかがえるまでに復原できたものは ないが、口縁片から見て、5個体は下らないと思われる。

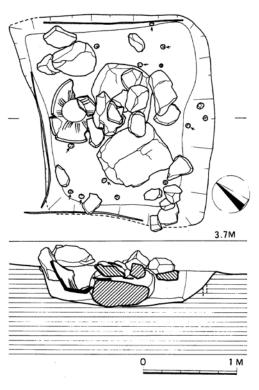


1は、青磁碗の底部片である。高台を欠く。外底部は露胎であり、墨 書がみとめられる。「余花押」と判読できる。余は姓であろうか。おそらく は、博多に居を構えた宋商の名であろう。青磁碗の年代からみると、12 世紀~13世紀頃の遺物と思われる。 2 は褐釉陶器の甕の体部片である。 外面に茶褐色の釉がかかる。内面は露胎であるが、よく焼き締まる。外 102 446号土壙遺物1 面は平滑にナデて仕上るが、内面には同心円のタタキ文が残る。中国産 の陶器であろう。



103 446号土壙出土遺物 2

ⅢA面 E-07区で検出した土壙である。平面形は、ややいびつな長方形を呈する。土壙は、



104 461号土壙実測図 (1/20)

94.5cm×108cm,深さ17~22cmをはかる。腐朽しているが、北東、北西、南西の3辺に板材がおかれている。また、壙底には不規則に細い木杭が打たれている。周囲の板材をおさえる位置にある杭は一本だけで、杭と板材とは直接関係ないといえる。

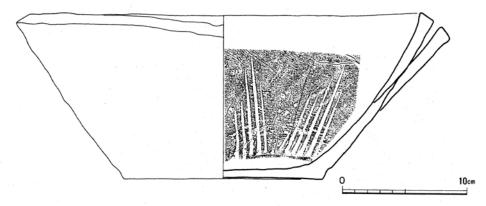
土壙中央には、52cm×35cm程度の礫をおく。 土師質土器すり鉢の出土状況からみて、中央の 礫は、当初から裾えてあったものと考えられ る。すり鉢は、土壙中央の礫と土壙壁のすき間 にあてこむ様にして出土している。すり鉢の体 部の一部は、土壙中央の礫と他の小礫とにはさ まれて、折損している。この状況から、すり鉢 は原位置をとどめており、461号土壙を廃棄し た際に投げこまれた礫で打ち割られ、そのまま 埋めこまれてしまったものと解される。

Fig.106, 1は, 土師質土器のすり鉢である。

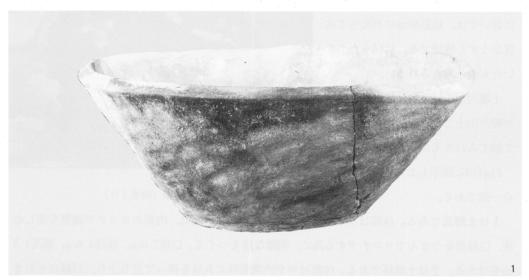


105 461号土壙(南東より)

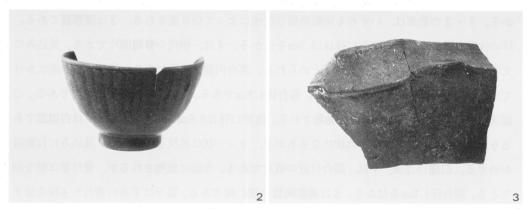
いわゆる片口のすり鉢で、口径33.15cm、底径15.6cm、器高12.9cmをはかる。内面は、右下りの ナナメハケ調整の上に、スリ目が5本単位で刻まれている。実際に使用されたと考えられ、



106 461号土壙出土遺物1 (1/3)



107 461号土壙出土遺物 2 (1/3)



108 461号土壙出土遺物3 (1/3)

磨耗している。外面は、あらいナデ調整で整形している。 2 は、明代の青磁碗である。体部外面には、剣頭文化した細蓮弁文を沈縁で描く。灰白色の磁胎に、濃緑色の濁った釉がたっぷりとかかる。 3 は、備前陶器のすり鉢片である。口縁は片口につくる。口縁部は外方に傾斜し、端部がやや張った形状を示すが、口縁下端は下方向に垂れてはいない。備前焼編年(間壁編年)IV期の後半期にあたり、室町時代後半期の特徴を示している。

487号土壙

ⅢB面 E—09区より検出した土壙である。平面形としては、ほぼ長方形を呈する。長辺152cm、短辺112cm、深さ24~35cmをはかる。北西側の辺においては、延長66cmにわたって木質がうすく確認でき、板材をたてていたものと考えられる。

土壙内からは、特に規則性はない が礫が出土した。何個かがまとまっ て捨てられたものと思われる。

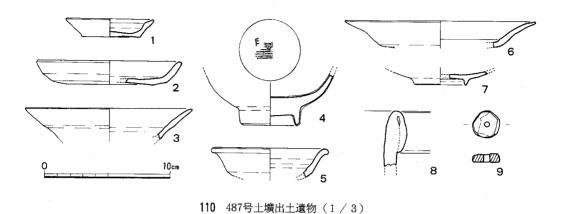
Fig110に図示したのは、出土遺物の一部である。



109 487号土壙(南東より)

1は土師皿である。体部はラッパ状に外反する。特に内面は、内部のヨコナデ調壁を施した後、口縁部をつまんでヨコナデする為に、明瞭な段をつくる。口径7.0㎝、底径4.6㎝、器高1.5㎝をはかる。2は土師坏である。体部はやや内湾気味に丸味を持って立ち上り、口縁はそのまま丸くおさめる。内外面ともにヨコナデ調整を施す。口径11.5㎝、底径6.8㎝、器高1.9㎝をはかる。1・2の底部は、いずれも回転糸切り技法によって切り離される。3は須恵器である。坏の体部と考えられる。復原口径は13.2㎝をはかる。4は、明代の青磁碗片である。見込みに文字文様と思われるスタンプ文がみとめられる。高台内側は露胎であり、畳付から内面にかけては、濃緑色の釉がたっぷりとかかる。高台径4.8㎝である。5は、緑褐釉陶器の皿である。口縁部はゆるく外反する。内外とも施釉される。復原口径は8.6㎝をはかる。6・7は白磁皿である6は口縁部で、体部は腰折れ状に立ちあがり、ラッパ状に外反してひらく。見込みには圏線がめぐる。口径15.2㎝。7は、高台付近の破片である。全面に施釉されるが、畳付部は釉を削りとる。高台径4.0㎝をはかる。8は備前陶器の甕口縁である。扁平に下方に垂れた玉縁を呈する。口縁部の断面には、明瞭に折り返しの痕跡がみとめられる。9は滑石製紡錘車である。径

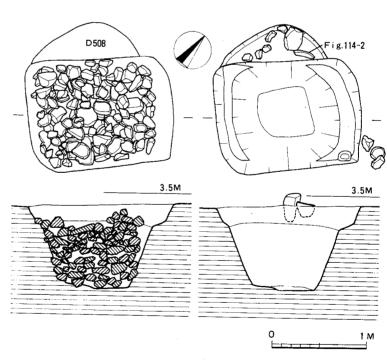
1.1cm前後,厚さ0.7cmをはかる。



504号土壙

ⅢB面F─03区より 検出した土壙である。 長辺145cm,短辺120cm の平面長方形を呈す る。ほりかたは二段掘 り状で,検出面から20 ~22cmで112cm×100cm のほぼ長方形に幅を狭 める。深さは,検出面 から約90cmをはかる。

504号土壙は、二段 掘りの下段の土壙中に びっしりと礫をつめら れていた。礫は、整然 とではないが、土壙底



111 504号土壙実測図(1/40)

部から間層を全くはさまず、一時に落しこまれている。つめられている礫の大小は様々である。 土壙中からは、細片化した土師器、白磁などの遺物がまばらに出土しただけであり、時期判 断の根拠になるものは、出土していない。北西辺で、508号土壙と切り合い関係にあり、次に





112 504号土壙((1)--南東より,(2)--北東より)

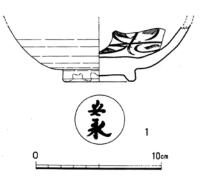
のべる508号土壙よりも新しいとみられること、Ⅱ面では検出されなかったことなどから、中世 Ⅲ期であろうと推定した。

508号土壙

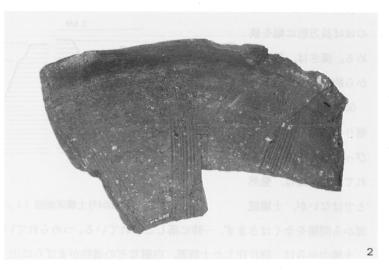
上述した様に、504号土壙に切られた状態で検出された土壙である。 $\mathbf{II}\mathbf{B}$ 面 \mathbf{F} -03区検出。ごく一部が残っているだけで、本来の形状は知るべくもない。深さは、 $12\sim14$ cmをはかる。

Fig.113に示した 1 は、墨書のある青磁碗である。底部から体部下半の破片で、口縁部を欠く。龍泉窯系青磁で、体部内面には、片切り彫と櫛目文で水波文を描く。高台畳付

きから高台内は、露胎となる。墨書はこの家書はこの家書はこの家子と、 造物に書かれ「安永」と判読できる。 2 は、 備前陶器のすり鉢を入めている。内面に10本を単れる。 人たスリ目 斜端は、 る。口縁部は、したるのが、上下に張る備前と が、上下に張る備前焼 間壁編年IV期の特徴を もつ。

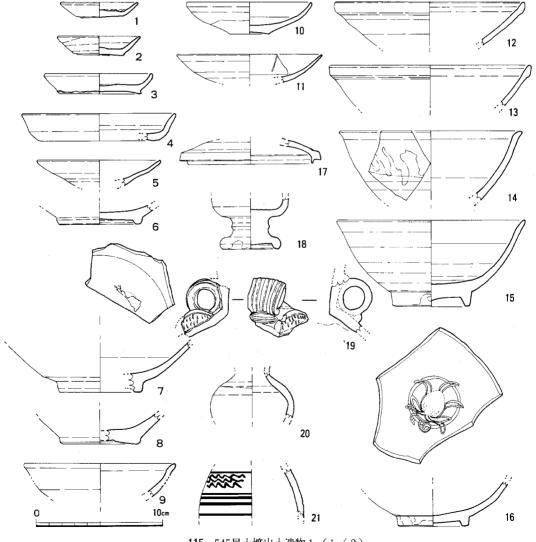


113 508号土壙出土遺物 1 (1/3)

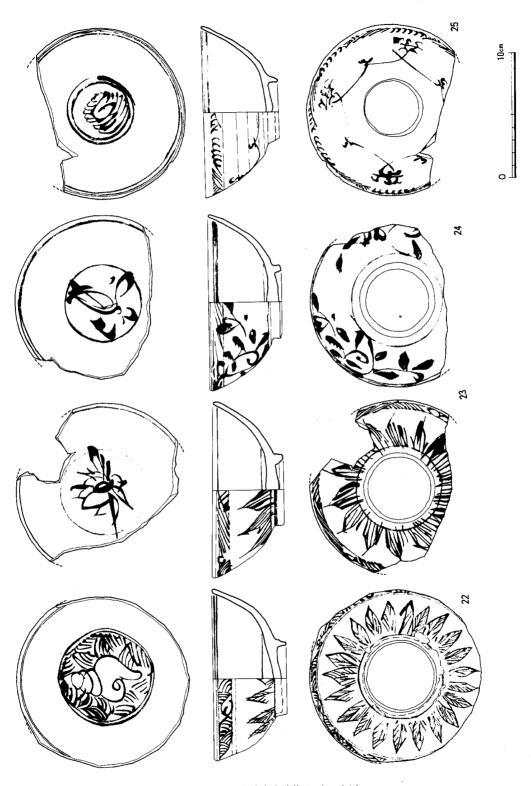


114 508号土壙出土遺物 2 (1/3)

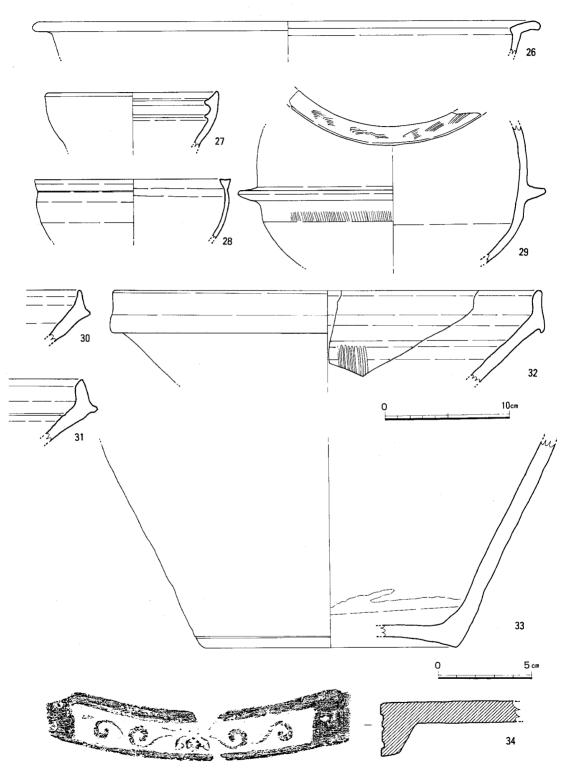
IV面 E—09区で検出された土壙である。明代の染付をはじめ、多量の遺物が出土している。 1~5 は土師皿・坏である。6 は瓦器碗片で、内底部は平滑にヘラミガキする。7・8 は、越州窯系青磁碗である。全面に施釉する。9 は天目碗で、中国産である。10~19は白磁である。19は壺片で、頸部の付け根に粘土帯を丸めて貼付し、更に魚形の貼付文を斜めにつける。20は褐釉陶器小壺である。21 は李朝象嵌青磁の壺片である。22~25 は、明代染付の碗である。いずれも白磁部分は、黄白色で光沢に乏しく、青花もうすくくすんだブルーを呈し鮮明ではない。26は黄褐釉陶器盤である。27・28は無釉の陶器鉢である。29は瓦質土器の湯釜で、鍔部上面に櫛歯状の文様が施される。30~32は備前陶器のすり鉢片である。30・31は、備前焼間壁編年の



115 545号土壙出土遺物1 (1/3)



116 545 号土壙出土遺物 2 (1/3)



117 545 号土壙出土遺物 3 (1/3,33…1/4)

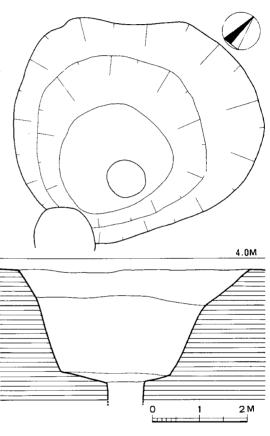
IV期, 32 は V期に属する。33は、褐釉陶器の底部である。体部上半以上を欠くが、おそらく甕の底部であろう。34は、平瓦の瓦当である。唐草文が印される。銀化はみとめられない。

② 井戸

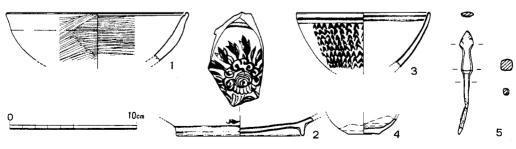
71号井戸

IV面 E─09区で検出した井戸である。 II 面で検出した320号土壙と同一の遺構である。掘りかたは,長径260cm,短径235cmの不整円形を呈する。井筒は,径38cmをはかる円形で,木桶の木筒をとどめる。

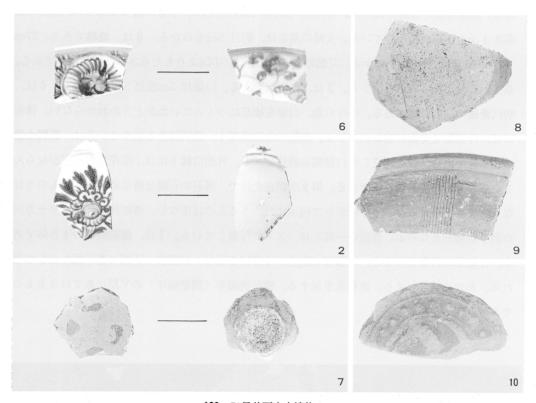
1は楠葉型瓦器境である。内外面は、密にヘラミガキを施す。口縁部内側には、沈線が一条めぐる。復原口径14.5cmをはかる。2・3・6は、明代の染付片である。2は皿で高台径10cm、見込みには花を描く。畳付は釉をふきとり、露胎となる。3は、いわゆる連子碗である。破片の為、体部はもう少し外側に傾く可能性がある。復原口径10.6cmをはかる。4は白磁の小壺片である。5は、鉄鏃である。鍛造であり、鍛えは厚い。刃部は、レンズ状の断面を呈する。尖矢である。全長8.15cm、刃幅1.1cmをはかる。7は、李朝青磁の底部片である。見込みと高台畳付に目痕が残る。9は、備



118 71号井戸実測図(1/40)



119 71号井戸出土遺物 1 (1/3)



120 71号井戸出土遺物 2

前陶器のすり鉢片である。口縁部は、備前焼間壁編年IV期の特徴を持つ。10は、軒丸瓦の瓦当 片である。左三ッ巴で、巴の尾は接続しない。

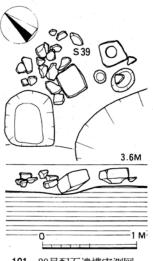
③ 配石遺構

39号配石遺構

ⅢA面 E-07区より検出した配石遺構である。ⅢA面において は,列石状を呈する。ⅢB面の調査時に,同一ケ所で五輪塔の火 輪と地輪を含む集石遺構を検出し、これも39号配石遺構とした。 おそらく、本来は別の遺構であると考えられるが、上の様な調査 ミスから, 出土遺物は混ってしまった。

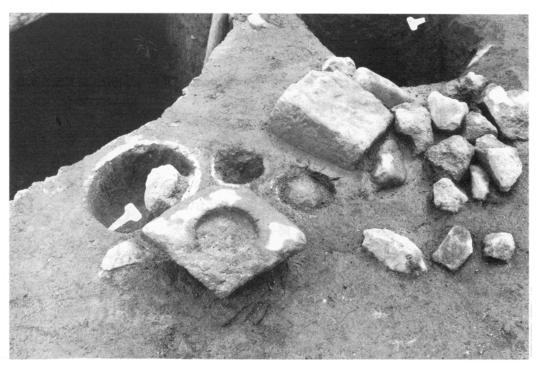
Fig. 121に示した遺構図は、ⅢB面の集石遺構の実測図である。 集石の範囲は65cm×88cmにおよび、地輪と並んで火輪が、天地逆 に転倒した状態で出土した。

Fig. 123の 1 は, 火輪の実測図である。 花崗岩を削って作って いる。一辺の長さ26.4cmをはかる正方形で,上端部は12cm四方で

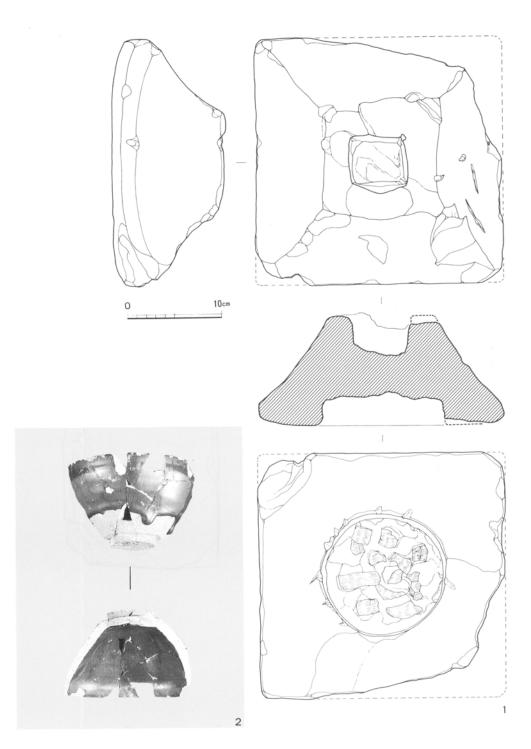


121 39号配石遺構実測図

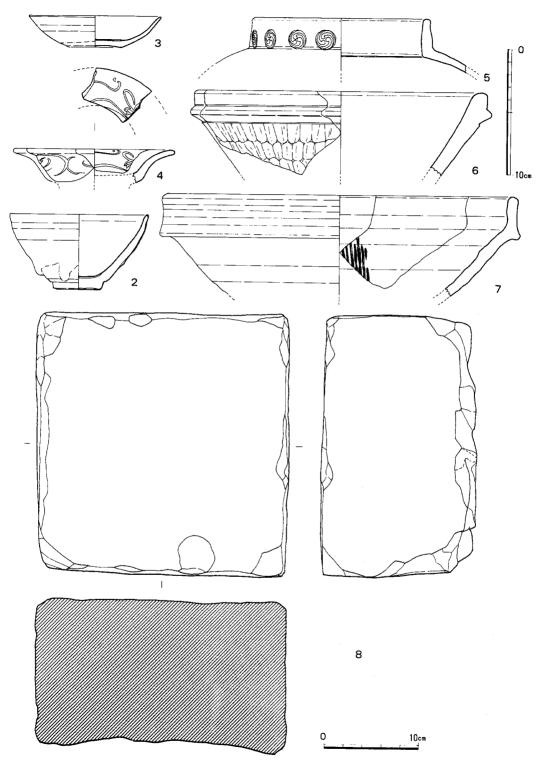
ある。風輪を受ける部分は5.2cm×5.4cm、深さ3.6cmの方形に、水輪に重なる部分は、直径13cm 深さ3cmの円形に抉られている。火輪の高さは、約11.5cmをはかる。8は、地輪である。27cm×27.5cm、高さ約17cmをはかる。花崗岩である。2は、中国よりもたらされた天目茶碗である。茶褐色の袖がたっぷりとかかる。3は、白磁皿である。口径10.5cm底径5cmをはかる。4は、明代青磁の高台付皿である。小片の為、口縁を稜花につくっていたかどうかわからない。体部には、片切彫で文様が描かれている。施釉は比較的厚く、濃灰緑色を呈する。5は、瓦質土器の羽釜片である。短く直立した口縁部の破片である。外面口縁下には、印花で右三巴がならんでいる。6は、滑石製石鍋である。第2次調査全体で、滑石の石鍋は特にめずらしいものではなく、まま出土するが、小片ばかりで図示にたえうるものは少ない。体部外面には、タテ方向の削りが整然とならぶ。外面の一部には、ススが付着している。7は、備前陶器のすり鉢である。口縁部の特徴をみると、口縁部は直立する帯状を呈し、口縁部の下端は若干張り出して垂れる。かたく焼きしまり、赤褐色を呈する。備前焼編年(間壁編年)のV期にあてはまるものである。



122 39号配石遺構(東より)



123 39 号配石遺構出土遺物 1 (1/4)

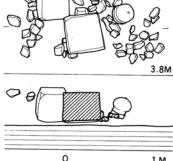


124 39 号配石遺構出土遺物 2 (1/3,8…1/4)

40号配石遺構

ⅢA面F—05区で検出した集石遺構であるが、集石の面的拡がりからみて、ⅢB面にともなう遺構であると考えられる。石(特に五輪塔)の高さのため、より上の面であるⅢA面調査時 _ にその一部を検出したものであろう。

集石は、平面的には不整形を呈し、大まかな範囲としては120 cm×120cmの中に集まっている。より仔細に見ると、集石の集中 は、西側の56cm×56cmの範囲と、東側の48cm×56cmの2ヶ所にわかれる様で、五輪塔の地輪が2基出土していることを考えあわせると、本来別個の2基の集石(五輪塔?)が並んでいた可能性もある。



125 40号配石遺構実測図

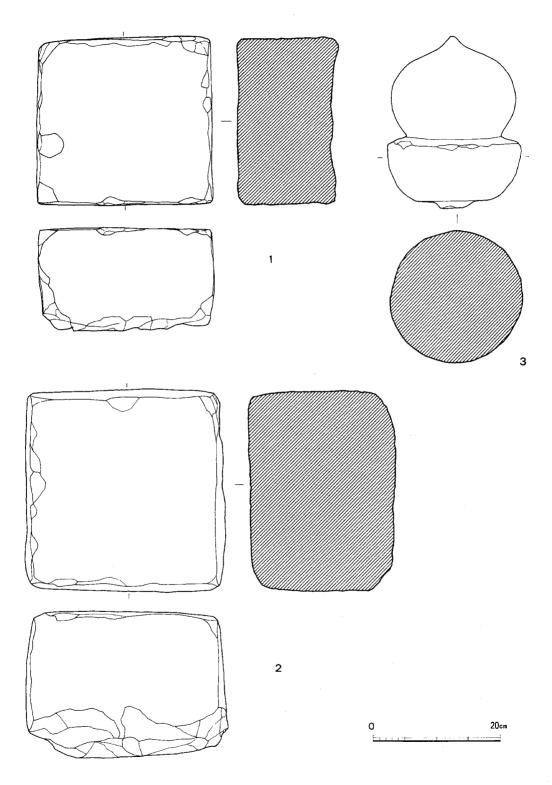




126 40号配石遺構(北より)

集中石より出土した五輪塔は、地輪2個、空輪と風輪を一石で作ったもの1個の計3個である。いずれも、その基底面はほぼ同一レベルにあるが、地輪にともなうと思われる集石を検討すると、先後関係を想定することも可能である。(「第三章、小結」)

五輪塔は、Fig. 127に図示した。 $1 \cdot 2$ は地輪、3は空—風輪である。いずれも、砂岩製である。1は、26.7cm×27.6cm、高さ16.2cm、2は、30.6cm×31.8cm、高さ23.1cmをはかる。いずれも、上面と周囲 4 面とを丁寧に平坦にととのえる。下面は削り出したままで、丸味をもっている。出土した際も、未整形面を下にしている。3は、空—風輪である。総高27.3cmをはかる。宝珠状の空輪と台盤状の風輪をひとつの石材から削り出したもので、空輪の高さ16.4cm、風輪の高さ9.8cmである。火輪に重なる部分は、径約6.5cm、高さ1.1cmの突起をなす。



127 40 号配石遺構出土遺物(1 / 6)

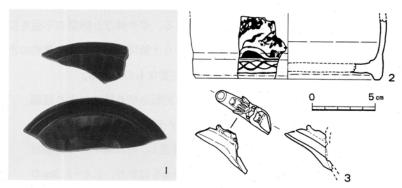
④柱穴状小土壙

柱穴状小土壙については、以下の記述に際して、ピットと仮称する。

339号ピット

II面 D-14区より検出したピットである。 長径36cm, 短径25cmの 楕円形を呈し, 深さ25 cmをはかる。

図示した1は青磁で ある。明代のもので、 小鉢になる。2は、明 のものと思われる染付



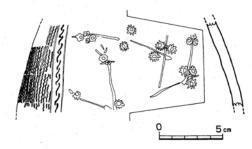
128 339号ピット出土遺物 (1/3)

である。おそらく香炉であろう。小片の為,意匠の内容まではわからない。3は白磁の注口である。小形の水注につくもので,注口の上面に獣頭を形取った貼付文を施す。胎土は白色で精良,釉は透明でガラス光沢が強い。

428号ピット

Ⅱ面下—03区で検出したピットである。径56cm前後、深さ22cm前後をはかる。

図示したのは、李朝の象嵌青磁の壺である。 小片であり全容を知りがたいが、文様は波線文 を縦に配する文様部分と、草花文を配する文様 部分とにわかれる。胎土は濃灰色で、キメはや や粗いが、緻密である。釉は、暗灰青色を呈す る。象嵌は、白土によってなされる。



129 428号ピット出土遺物 (1/3)

(4) 中世Ⅱ期の遺構

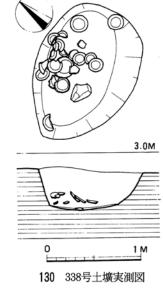
① 土壙

338号土壙

Ⅱ面 E-10区で検出した小土壙である。やや伸びた卵型の平面を呈し、長軸153cm、短軸108 cm、深さ45cmをはかる。土壙埋土中より土師坏、皿を中心に遺物の出土をみた。

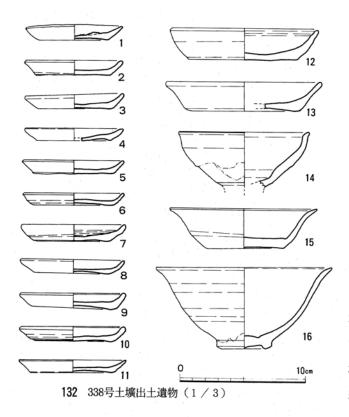
Fig.132に示したのは、それらの内主要なものである。

1~11は、土師皿である。いずれも回転糸切り技法により底部を切りはなす。体部及び内面は、ヨコナデ整形する。口径は7.6~8.5cmで、この範囲内でまんべんなく存在し、特に集中する数値はみとめられない。器高は0.95cm~1.35cmをはかり、1.1~1.3cmのものが大半である。器形の特徴としては、器高が比較的浅いことがあげられる。12・13は土師坏である。12は丸味を持って内湾する体部をもち、口径11.8cm、底径8.7cm、器高2.55cmをはかる。底部は回転糸切りであるが、板目圧痕がつく。13は外反して開く体部を持つ。口径12.5cm、底径8.2cm、器高2.35cmをはかる。底部は、回転糸切りである。12・13とも、体部外面および内面は、ヨコナデ調整によって整形される。





131 338号土壙(南東より)



14は、中国産の天目茶碗で ある。いわゆる, スッポン口 を呈する。暗灰色の胎土に黒 色の鉄釉をかける。釉には黄 褐色~茶色の禾目がまじる。 **15**は、ロハゲの**白磁**皿であ る。うすく青味をおびた透明 釉がかかる。16は、口ハゲの 白磁碗である。体部はゆるく カーブしつつ、大きく開く。 高台以下は露胎となる。15・ 16は、338号土壙の床面を再 確認する為にダメ押しで設け た小トレンチよりの出土で, 338号土壙よりも年代的には 遡る所産である。

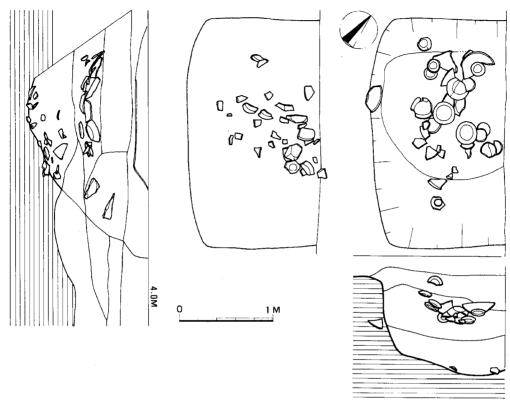
411号土壙

ⅢA面 E—10区より検出した土器溜の土壙である。ちょうど調査区の角にあたり、一部は調査できていない。土壙の埋土は、Fig. 134に示した様に、大きく3層にわかれるが、土質的には大差なく、ほぼ同時に埋ったものと考えられる。遺物は、主として中層より出土している。

Fig.135の 1 ~ 27は 国産の遺物、28~34は 中国産の遺物である。 1~18は、土師皿であ る。口径7.35~9.0cm、 器高1.05~1.35cmをは かる。器形的には、丸 味をもって内湾気味の 体部をもつもの(1~ 7,11,12)、直線的に 開く体部をもつもの

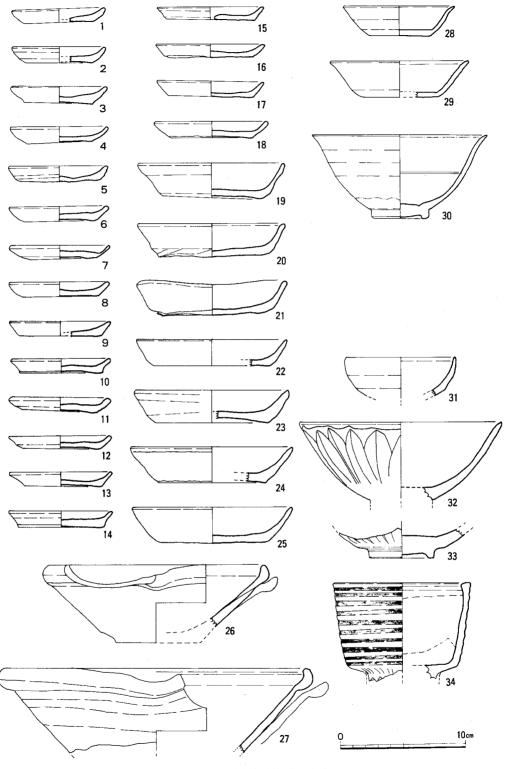


133 411号土壙(南より)

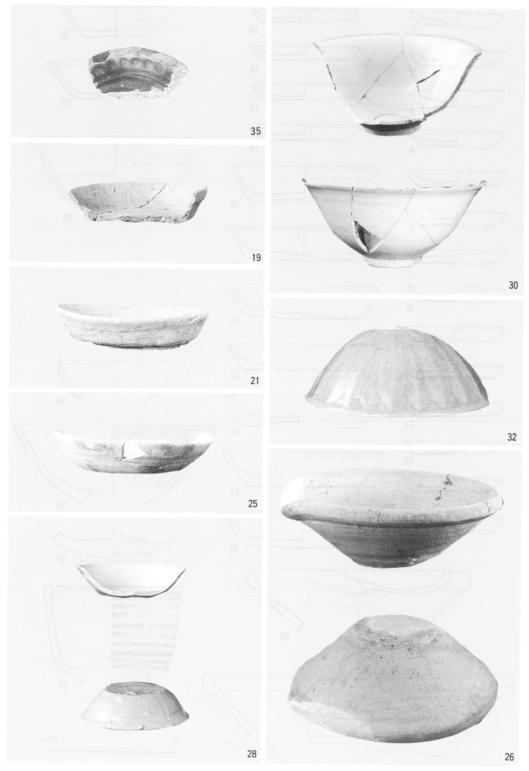


134 411号土壙実測図(1/40)

(5・17) 外反気味の体部を持つもの(10・13・14・15)などがある。おおむね前者は口径が小さく,後二者が大きいと言える。19~25は,土師坏である。口径11.7cm~12.7cm,器高2.1cm~2.85cmをはかる。皿,坏とも底部を回転糸切りする。26・27は,東播系須恵質土器の片口鉢である。灰色で,砂を含んで粗い胎土を持ち,焼成もあまり良くなく,瓦質に近い感を与える。口唇部は,外面に丸く肥厚する。魚住窯の産である。28・29は,口ハゲの白磁皿である。30は,口ハゲの白磁碗である。体部は,ゆるく内湾してからラッパ状に開く。体部中位には,圏線状の細沈線がめぐる。高台は露胎となる。31は,青磁の小碗である。口唇内面の釉は,口ハゲ状にかき取る。釉は濃深緑色の半透明釉である。復原口径8.7cmをはかる。32・33は,鎬蓮弁文の青磁碗である。32は口縁から体部の破片で,復原口径16.2cmをはかる。33は,底部片である。高台は低い削り出し高台で,畳付から内側は露胎となる。34は,青磁香炉である。体部は,わずかに開きながら直立する。体部外面には,ロクロ整形時に施された平行凹線が,ラセン状にみとめられる。高台の畳付は残っていないが,鼎状を呈していたと思われ,間を鋸歯状に削りこんでいる。釉色は,明るい空色である。



411号土壙出土遺物(1 / 3)



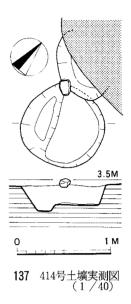
136 411 号土壙出土遺物 2

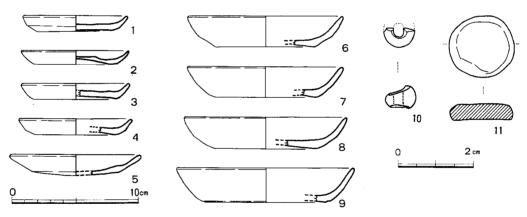
35は、**軒丸瓦**の瓦当である。小片であるが、おそらく左三ッ巴文であろう。外区の珠文は、密にうたれている。

414号土壙

ⅢA面 E—08区より検出された土壙である。径約88cm, 深さ20~23 cmの円形を呈する。土師皿・坏を中心に遺物の出土を見た。

1~5 は、土師皿である。1~4 は、底部を回転糸切りする。5 は、底部をへう切りで切り離すもので、より下層の遺物が、414号土壙をうめた当時に混りこんだものであろう。1~4 は、口径8.3~9.0cm器高1.2~1.35cmをはかる。体部、内面は、ヨコナデ調整を行なう。6~9 は、土師坏である。口径12.3~14.3cm、器高2.55~2.8cmをはかる。10 は、ガラス小玉である。緑青色を呈す。径0.8cm、高さ0.57cm。11は、ガラス円盤である。緑色で、表面は風化する。径1.25cm。





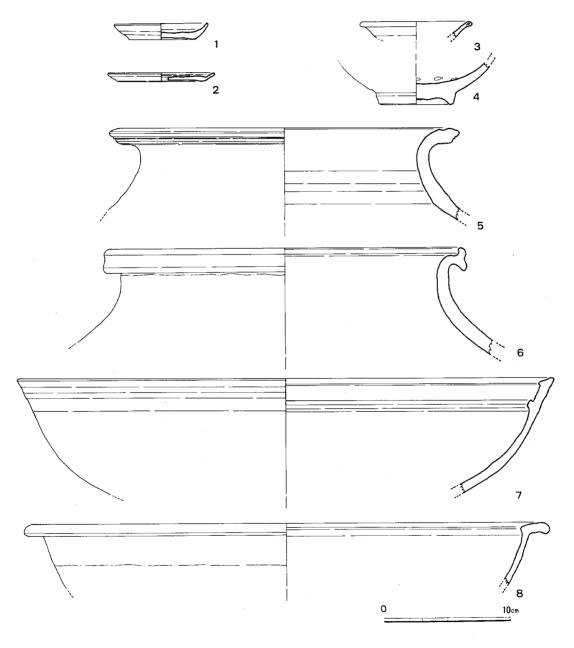
138 414号土壙出土遺物(1 / 3, 10 • 11—1 / 1)

441号土壙

ⅢA面 E-07区で検出した大型の土壙である。小判形を呈し、長軸280cm、短軸188cm、深さ35~45cmをはかる。

Fig.139の1・2は、土師皿である。いずれも、底部は回転糸切りする。体部はヨコナデ、内底部は一方向のナデ調整を施す。1は口径7.3cm、底径5.25cm、器高1.3cmである。2の外底部には、板目圧痕が残る。口径8.5cm、底径、6.5cm、器高0.75cmであり、極めて浅い。前代の遺物の混入と思われる。3は褐釉陶器の皿である。口縁部は折り返し、肥厚させる。4は、高麗青磁の碗底部である。内底部と高台畳付に、重ね焼きの目痕が残る。5は、須恵質陶器である。口唇部上面に一条の沈線が巡る。ヨコナデ調整される。暗灰色で、焼成は須恵器に近く、焼き

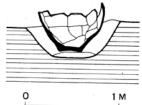
締めはなされない。6は焼き締め陶器である。常滑窯の製品か。口縁は折り返して、二重口縁につくる。口縁内側から外頸部まで、自然釉がかかる。7は無釉陶器の鉢である。赤褐色を呈し、胎土は粗いがかたく焼き締まる。8は、黄釉陶器の盤である。口縁部は、せまい鍔状を呈する。体部上半から内面までを施釉する。くすんだ黄緑色の釉で、わずかに光沢を持つ。



139 441号土壙出土遺物(1/3)

ⅢB面 F—04区で検出した土壙である。土壙は、しゃもじ形を呈し、長軸79cm、短軸50cm、深さ約20cmである。





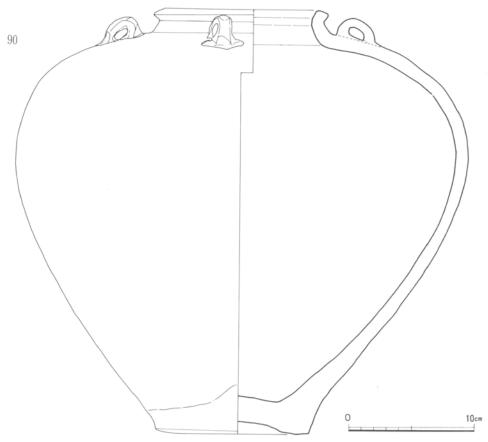
140 472号土壙実測図

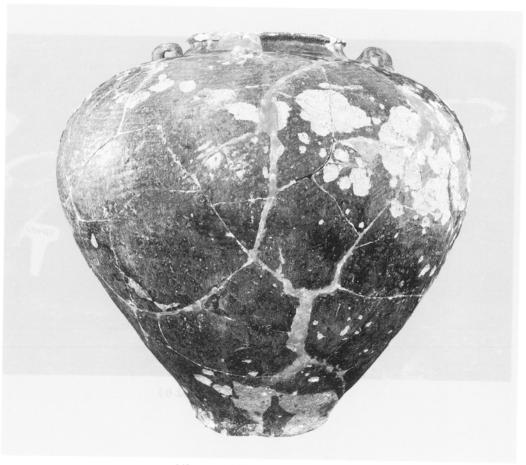
土壙内には、褐釉四耳壺を立てて埋めこんでいた。四耳壺の胴体上半以上は、内底部に落ちこんだ形で検出された。おそらく、本来の土壙はもう少し深く、四耳壺の体部下半を埋めていたと思われる。 褐釉四耳壺は、ほぼ完形品に接合できた。上げ底の底部から、外反して立ち上り、ゆるく内湾しつつひろがり、急速にすぼまって頸部にいたる。頸部は、内傾して短く立ち上り、「く」の字状に折り返して口縁をつくる。耳は、この頸部の接合部付近にタテに貼付される。 釉は濃茶褐色で、光沢が強い。口縁部内側から、胴部下位まで施釉されている。体部外面には、釉下に平行タタキ痕がうかがわれ

る。体部下位は,ナデ調整されている。胎土は,暗赤灰色を呈し粗い。口径12.1cm,底径12.3cm,器高33.7cm,胴部最大径36.2cmをは

かる。 SD472

141 472号土壙 (北東より)

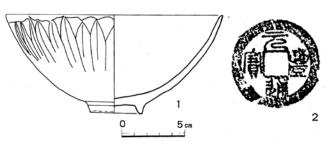


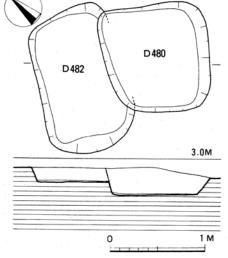


472号土壙出土遺物(1 / 3)

ⅢB面 F—04区で検出した土壌である。 ややいびつ な方形を呈し、 深さ22~30㎝をはかる。 482号土壌, 486号土壌を切る。

1は、泉窯系青磁の鎬蓮弁文碗である。畳付を露胎とする他は、全面に施釉する。釉は灰緑色を呈す。





143 480号土壙出土遺物 (1/3,1/1)

144 480号土壙実測図(1/40)

2 は、「元豊通寳」である。北宋の元豊元年(1078年)初鋳。 3 は、ロハゲの白磁皿である。 4 は、青白磁で、梅瓶の胴部片と思われる。





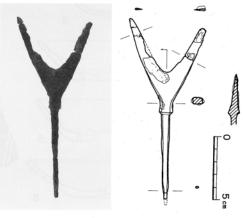


145 480号土壙出土遺物

486号土壙

ⅢB面 F-04区で、480号土壙、482号土壙に切られて検出した、略円形大型の土壙である。 半分程度は、調査区外に出るが、調査区内に200 cm分を検出し、深さは13~20cmをはかる。

遺物は、土師皿、坏、ロハゲの白磁皿、青磁 鎬蓮弁文碗、陶器類など多岐にわたるが、土壙 床面より、鉄鏃を検出している。雁又矢で、茎 部先端を欠く。鍛造である。現存長14.4cmをは かる。



146 486号土壙出土遺物 (1/3)

490号土塘

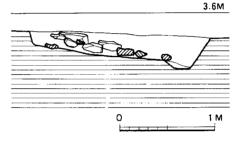
ⅢB面 F—05区で検出した土壙である。148cm×128 cm, 深さ12~20cmの方形の部分と, その一辺にそった幅48cm, 深さ21~30cmとからなる。遺物及び埋土のはいり方から, 単一の遺構と考えている。

遺物は、土師皿・坏を主として、ほとんどが細片で 出土し、土壙床面に置かれた礫をおおい隠していた。

遺物量は多いが,実測可能なものは少ない。 $1 \sim 3$ は土師皿である。口径7.95 \sim 9.45cm,器高 $0.62\sim$ 1.5cm をはかる。 $4 \sim 6$ は土師坏である。 $4 \cdot 5$ は, 口径 14.8cm,器高3.15cm(4)をはかる。体部はヨコナデ 調整する。 6は口径15.5cmで,口縁内面から体部外面をヨコナデ,体部内面をコテで平滑に仕上る。年代的には, $4 \cdot 5$ に先行するものであろう。 7は,楠葉型 瓦器碗の破片である。内外とも密にヘラミガキする。

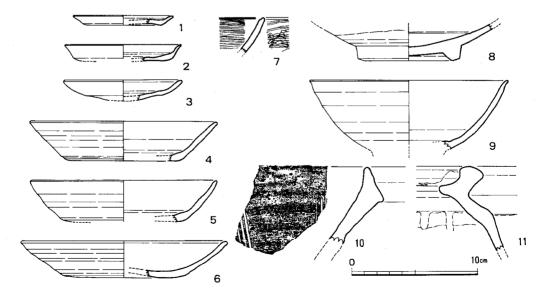
口唇内面には、浅い沈線がめぐる。8・9は白磁碗で





147 490号土壙実測図(1 / 40)

ある。見込みには圏線がめぐる。10は、**備前陶器**のすり鉢である。外傾する口縁部は、上方に伸び、下方にやや垂れる。備前焼編年(間壁編年)のIV期前半にあてはまる。11は**褐釉陶器**の大甕口縁部である。胎土は粗い。釉色はくすんだ灰褐色を呈する。中国産である。



148 490号土壙出土遺物 (1/3)

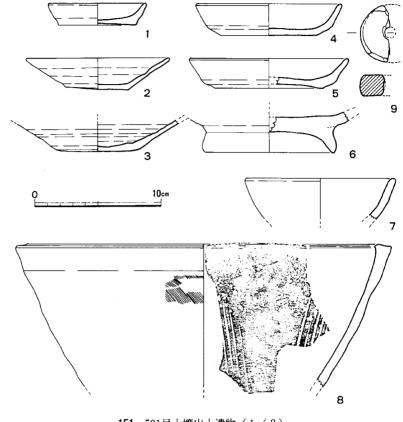


149 490号土壙(北東より)



150 490号土壙(遺物取上,北より)

ⅢB面 E-05区で 検出した方形の土壙 で、調査区外に出て いる。



151 501号土壙出土遺物 (1/3)

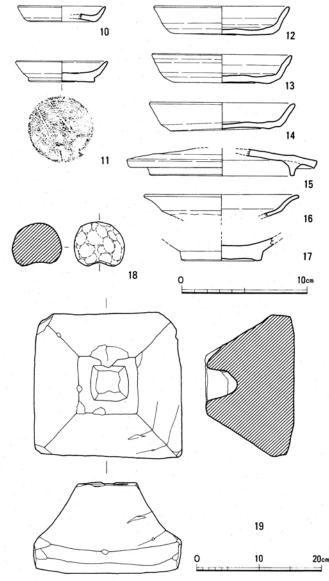
る。ヨコナデ調整痕は、かなり凹凸を持って明瞭に残る。胎土は、在地産の土師皿・坏が微細なキンウンモを含むのに対し、キンウンモを全く含まず精良で、色調も明るく、やや淡い。焼成は良好である。今のところ、どの地域の土師器にあたるのか検討中であるが、器形的には山口県の大内館跡で出土するものに類似している。 4 は、口径11.4cm、底径7.6cm、器高2.55cm、5 は、口径12.6cm、底径8.6cm、器高2.35cmをはかる。土師皿・坏類は、いずれも底部を回転糸切りする。 6 は、土師器の高台付碗の底部である。高台は分厚い三日月高台で、高台内はヨコナデ調整でなだらかにしあげる。高台径約10cmである。胎土は砂粒を含み、精良とはいえない。7 は、龍泉窯系の青磁小碗である。釉は深緑色を呈し、たっぷりとかけられる。復原口径11.9 cmをはかる。8 は、土師質土器のすり鉢である。小片の為確認できないが、おそらく片口であろう。口縁部の内外面はヨコナデ、体部内面はヨコハケの上にスリ目を入れる。体部外面は上位ではナナメハケをどめるが下半はナデ調整となる。復原口径19.8cm。9 は土製の紡垂車である。復原径4.5cm前後、厚さ1.7cmをはかる。

IV面 F-05区で検出した大型の土壌を550号土壌としていたが、整理段階でこれが501号土壌の下部にあたることがわかった。そこで、501号土壌下層として出土遺物を図示する。

 $10\sim14$ は土師器である。 $10\cdot11$ は皿で、いずれも底部は回転糸切り技法で切り離す。体部の調整はヨコナデによってなされる。口径 $7.05\sim7.35$ cm、底径5.25cm、器高 $1.2\sim1.65$ cmをはかる。11の外底部には、細沈線による記号状の刻線がみられる。 $12\sim14$ は坏である。すべて底部は回転糸切りする。体部・内面は、ヨコナデによって調整されている。口径 $10.9\sim11.7$ cm、底

はかる。15は瓦質土器の蓋である。径15.2cmをはかる。 16・17は白磁である。16は 皿,17は碗である。18は毬杖 玉であろう。黄褐色の砂岩製 の球で,径3.85~4.1cmである。19は,五輪塔の火輪である。一辺23.5cm前後,高さ14.1cmをはかる。砂岩製である。

径7.5~8.0㎝, 器高2.3㎝を

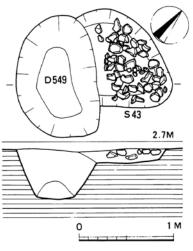




152 501号土壙下層出土遺物 (1/3)

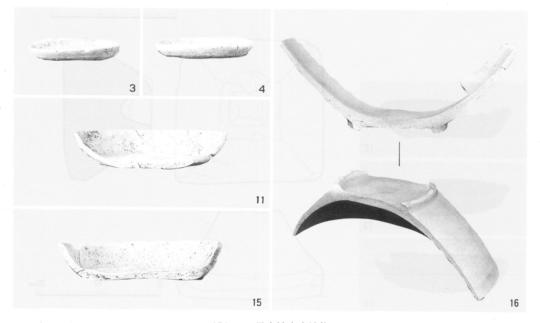
IV面 E-07区で検出した土壙である。長軸130cm, 短軸86 cm, 深さ34~52cmをはかる。

Fig. 155は、1~7は土師皿である。口径7.5~8.25cm, 器高1.05~1.35cmである。8~15は土師坏である。口径11.9~13.4cm, 器高2.4~1.0cmをはかる。土師皿・坏とも, 体部は丸味をもって内湾する。全て回転糸切りである。16・17は, 越州窯系青磁碗である。16は全面施釉で, 見込みには目痕はない。胎土は淡褐色精良で, 精製品といえる。17は, 体部外面の下半部は露胎となる。胎土は灰色でやや粗い。18・19は龍泉窯系青磁で, 18は碗, 19は鉢である。20~23は白磁である。21の小碗には, 内体部下位に, スタ

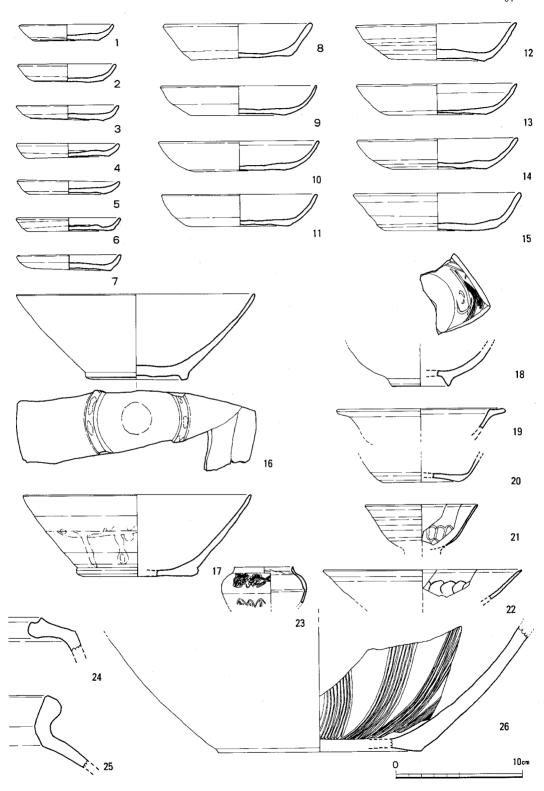


153 549号土壙実測図(1/40)

ンプで花弁が記される。22の碗は内面に沈線で弧文を描くが時期的には先行する遺物であろう。21・22は器壁がきわめて薄くひき出されており、口縁のつくりも鋭い。23は、小壺である。外面には、上半に花文、下半に芭蕉文のスタンプ文を施す。釉は、光沢が強く透明である。薄くむらなく施釉される。口唇上面から口縁部内面は露胎となる。胎土は白色で生目が細かい。24は、大甕の口縁部である。釉はくすんだ灰褐色で、粗い。25は褐釉陶器の壺である。26は、備前陶器のすり鉢である。内面に9本単位のスリ目が施される。



154 549号土壙出土遺物

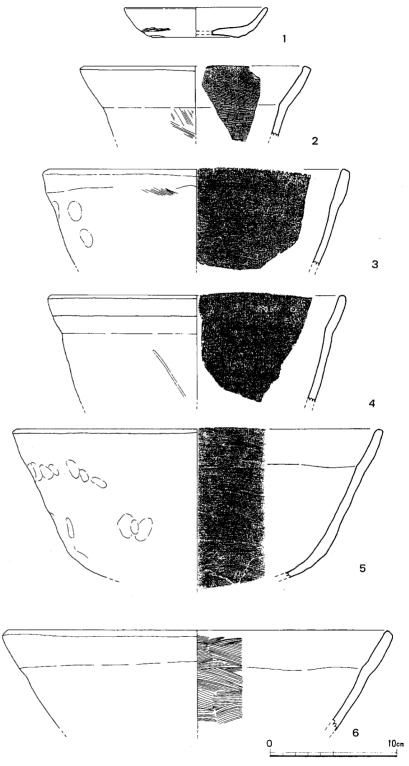


155 549号土壙出土遺物 2 (1/3)

IV面 F-04区で検出した不整形の土壙である。

出土した遺物は、 土師皿・坏類をはじめ白磁・青磁など多岐にわたるが、特筆すべきは、土鍋が数個体分出土した点である。

1 は**土師**皿であ る。口径11.4cm,底 形7.0cm, 器高2.46 cmをはかる。 2~6 は土鍋である。いず れも口縁部内面は段 (稜)をなして屈曲す る。口縁部が肥厚す るもの(3・6)と, 厚さがかわらないも の(2・4・5)が ある。口径はそれぞ れ2—17.4cm, 3— 23.2 cm, 4-23.1 cm, 5-28.3cm, 6 -29.8cmをはかる。 内面はヨコハケ調 整,外面は指頭押圧 とタテハケ(ナナメ ハケ)により整形さ れている。



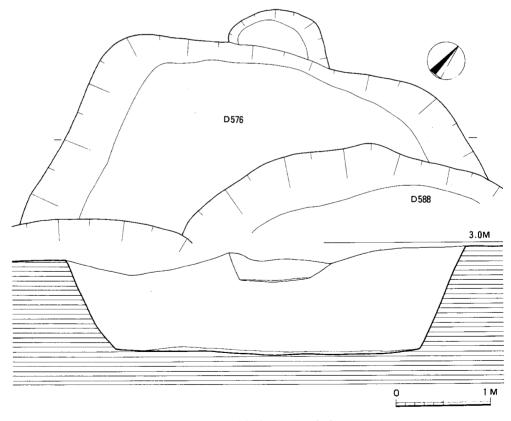
156 568号土壙出土遺物 (1/3)

V面 D—14区で検出した、 大型の土壙である。 切り合い関係のため、 一部しか残っていなかった。深さ90~120cmをはかる。

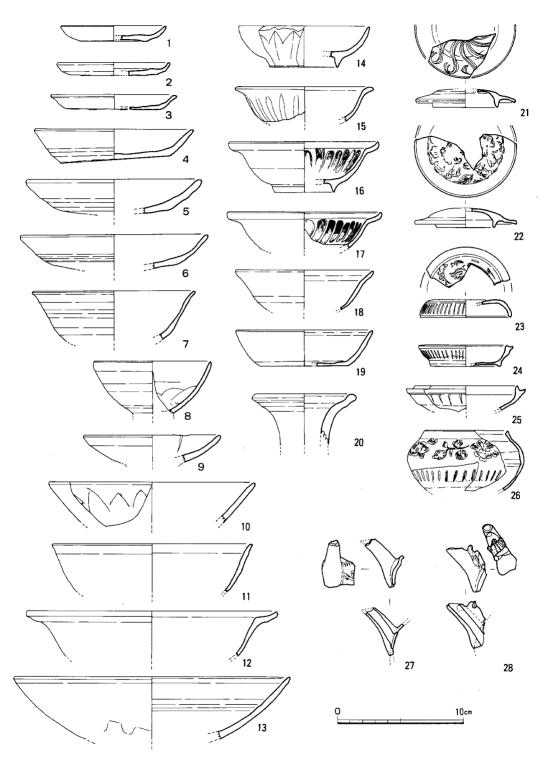
多数の遺物が出土したが、その一部を Fig. 158に示した。

 $1 \sim 3$ は土師皿である。底部は回転糸切りである。口径 $8.25 \sim 10.0$ cm, 器高 $1.05 \sim 1.26$ cm。 $4 \sim 6$ は土師坏である。 4 は底部を回転糸切りするが, $5 \cdot 6$ はへう切りである。調整も, 4 は内面をヨコナデするのに対し, $5 \cdot 6$ はコテで平滑に削っている。 $5 \cdot 6$ が年代的に先行するとみられる。 4 は口径12.6 cm, 器高2.5 cmである。 7 は土師器の碗形土器である。 9 コナデ整形される。 10 を引き、 10 を引

 $9 \sim 17$ は、青磁である。10は鎬蓮弁文の碗,14は、鎬蓮弁文の皿である。15の鉢も蓮弁を陽刻するが、丸味がつよく鎬は通らない。 $16 \cdot 17$ は、内面に菊弁を陰刻する。 $15 \sim 17$ は、口縁を外方に折り返す鉢であるが、 $16 \cdot 17$ は口縁端部が上方へはね上がるという特徴をもつ。 $8 \cdot 18 \sim 21 \cdot 26$ は白磁、 $22 \sim 25 \cdot 27 \cdot 28$ は青白磁である。8 は小碗、見込みに沈線で輪花文がある。 $18 \cdot 19$ はいわゆる口ハゲである。18は、体部から口縁にかけて、若干外方に折れる。

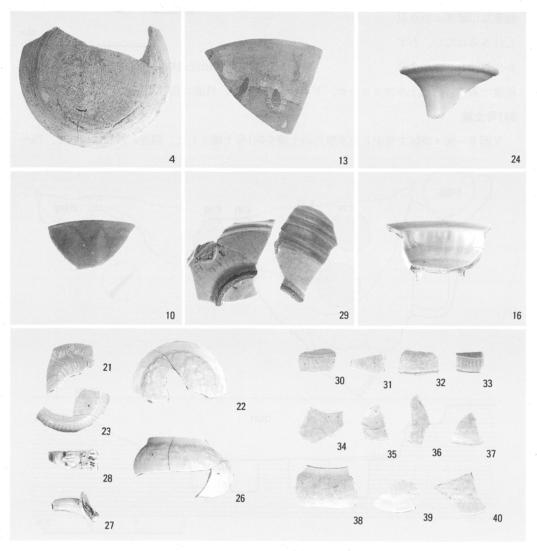


157 576号土壙実測図(1/40)



158 576号土壙出土遺物1 (1/3)

20は壺の口縁である。口径8.1cmをはかる。21・22は小壺の蓋である。21は、蛸足状の文様をスタンプで陽刻する。22は花文をスタンプする。鍔状部分まで施釉され、内面は露胎となる。23は合子の蓋、24・25は合子の身である。23の上面には、鳳凰文のスタンプが印されている。口唇外面の縁は、施釉後に削りとられている。24・25は、合子の蓋受け部分のみ露胎となる。26は小壺である。体部上半には花文がスタンプされ、下半部には縦の刻線がならぶ、口唇上面から口縁内側まで露胎となる。ただし、内面の釉は垂れ落ちたものであろう。27・28は、小型水注の注口部である。いずれも、これにつづく体部は出土していない。27の注口の付け根部分両側には、印花文と思われる陽刻がみとめられる。28の注口は、上面に獣面を貼り付ける。獣面は粘土片を貼り付けたもので、型押しではない。突出した眼球の先は、鉄斑で褐色に彩色する。

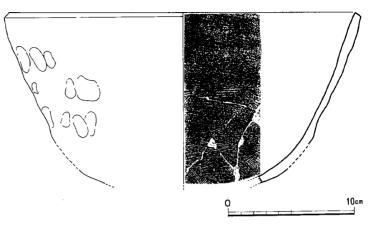


159 576号土壙出土遺物

V面 D-14区で検出した小土壙である。585号土壙に切られ、約半分程度しか残っていない。

検出しえた部分で, 土 壙幅52cm, 深さ28~34 cmをはかる。

Fig. 160 に示したのは、土鍋である。口縁部内面には、わずかに稜がみとめられるが、顕著な口縁部の折り返しはみられない。わずかに外傾し、肥厚する

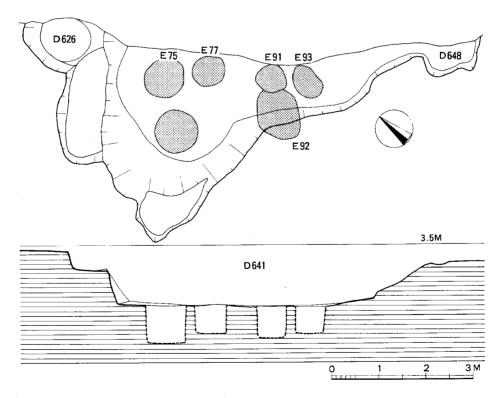


160 586 号土壙出土遺物 (1/3)

程度である。内面上半はヨコハケ、下半はナナメハケ、外面は指頭押圧とナデで整形される。

641号土壙

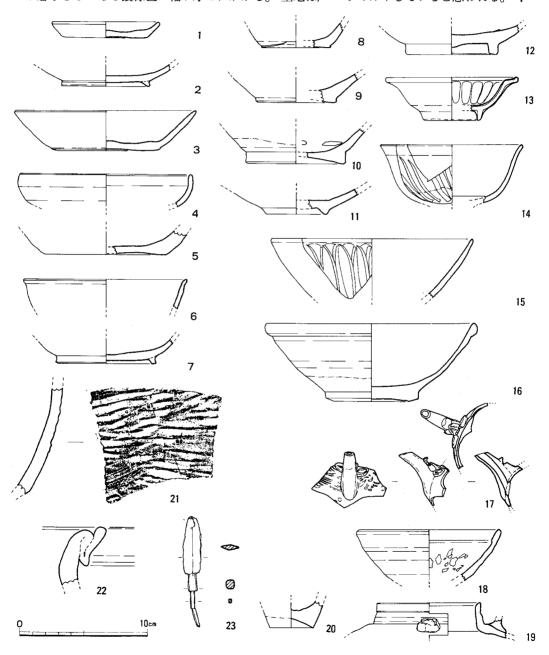
V面 E─06・08区で検出した不整形の土壙を641号土壙とした。調査が進むにつれて、75~



161 641号土壙実測図(1/80)

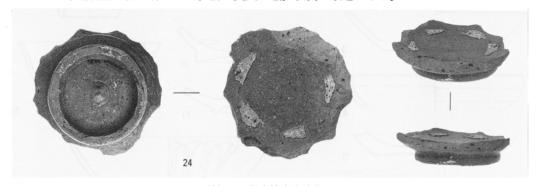
77・91~93号井戸が検出され、641号土壙はそれらすべてを包括している。

1 は土師皿である。口径8.4cm,底径6.1cm,器高1.3cm。回転糸切りである。2 は,瓦器碗である。内面をコテで仕上る。 $3\cdot 4$ は,須恵器である。5 は,東播系須恵質土器である。鉢の底部であろう。回転糸切り痕をとどめる。6 は緑釉陶器である。暗灰褐色,須恵質の硬胎にやや磨りむらのある濃緑色の釉が厚めにかかる。 生地は, ヘラミガキしていると思われる。7



162 641号土壙出土遺物1 (1/3)

は、灰釉陶器である。572号土壙出土の破片と接合している。灰色でキメのややあらい胎土に淡灰緑色の半透明釉がかけられている。体部下位以下の破片で、遺存する体部外面は、強くテリを持つが、施釉されていない。体部外面下位は、ヨコナデ調整、高台内も丁寧にヨコナデを施している。高台は断面コの字形の、付け高台である。8~11は越州窯系青磁碗である。11は全面施釉される。12は高麗青磁である。13~15は青磁である。16は玉縁の白磁碗である。17は獣面付注口。体部にもスタンプで文様を描く。18は天目碗である。暗茶褐色の釉がかかる。19は無釉陶器の耳壺である。破片の為、耳の個数は不明である。20は黄釉壺の底部。21は、須恵器甕である。外面に平行タタキ痕、内面は丁寧にナデて当て具痕を消している。22は N 字状に折り返した常滑陶器の甕口縁である。23は尖矢の鏃。鉄製で鍛造である。



163 641号土壙出土遺物 2

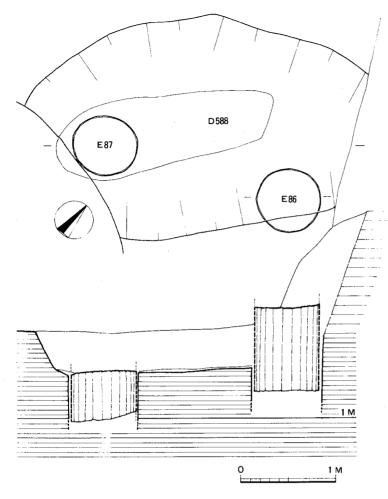
② 井戸

87号井戸(588号土壙)

V面 D─14区で検出した井戸である。同じくV面で検出した588号土壙の底から検出したもので、588号土壙の一部は、87号井戸の掘りかたであろうと思われる。

井筒は木桶で、径70cmをはかる。木質はすでに朽ちていた。井戸最下部までは、確認していない。

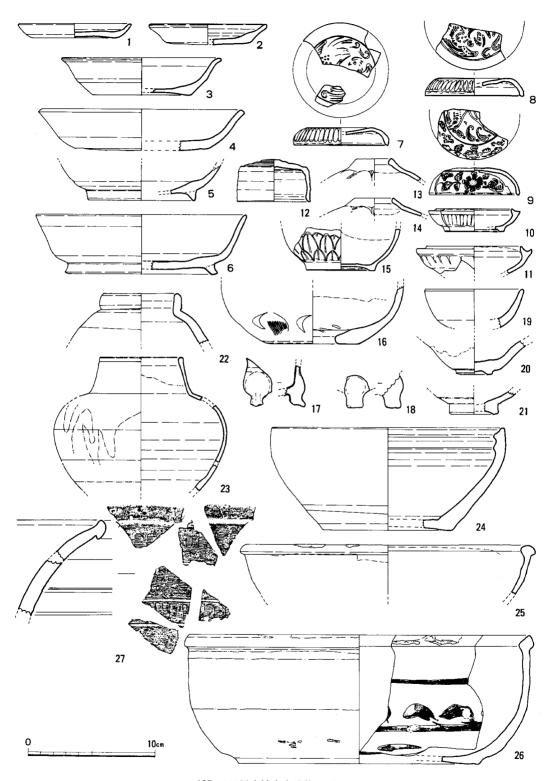
Fig.165, 1・2は土師皿である。1は口径9cm, 器高1.14cm, 2は口径9.45cm, 器高1.65cm をはかる。底部は回転糸切りする。3・4は土師坏である。3は真直に開く体部下半から稜を作って内傾し,大きく外反して口縁をつくる。復原口径12.6cm, 器高2.95cm, 回転糸切りである。4は,全体に大振りで、器肉も厚い。復原口径16.3cm, 器高3.24cm, 回転糸切りである。5は土師器の高台付碗である。6は須恵器の高台付坏である。埋土の中に紛れこんだものであろう。7・8は、青白磁の合子蓋である。頂部に鳳凰文を印す。体部内面と口唇部は露胎となるが、頂部内側には釉がおちる。9は、白磁の合子蓋である。頂部には鳳凰文を、外体部には花文を印す。釉はやや青味をおびた光沢の強い透明釉で、胎土は白色緻密で精良である。優品である。



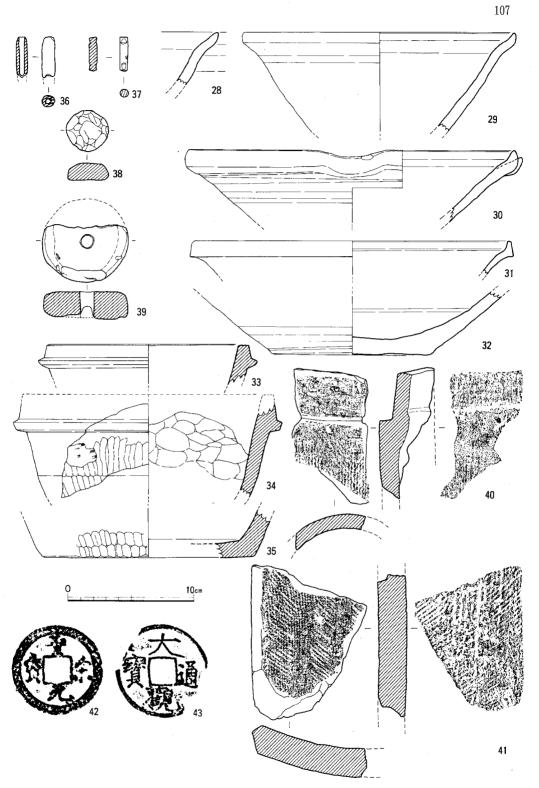
164 87号井戸実測図 (1/40)

10は青白磁, 11は白磁の 合子の身である。12は白 磁の蓋である。口唇部外 面から内面は露胎とな る。頂部は同心円の凹線 が3条めぐる。頂部内面 には、 回転ケズリ痕が、 正円をなして残る。13・ 14は白磁壺である。体部 はおそらく瓜形をなす。 15は青白磁小壺である。 体部下位から底部は、露 胎となる。16は、龍泉窯 系青磁である。底部には 孔を設け, 外底部は施釉 後削り取っている。256 号土壙出土片と接合して いる。17・18は青磁香炉 の足である。釉調が異な り、別個体であることが 知られる。19~21は、天

目碗である。22は、褐色陶器の壺である。火災にあって焼けている。23は鉄釉陶器の壺である。 黒褐色の釉がむらなくかかる。24は無釉陶器の体である。胎土には長石粒を多く含み、粗い。 赤褐色を呈する。25・26は黄釉陶器の鉢である。26は鉄絵を描く。27は須恵器系陶器の甕口縁 である。色調は濃灰色を呈し、緻密である。表面はテリがかかり光沢を持つ。外面には櫛歯に よる刺突文が3段以上みられる。28~31は、須恵質の鉢である。30・31は東播系須恵質土器で あろう。32は、無釉陶器のこね鉢の底部で、内底部は使用により磨滅している。中国産である。 33~35は、滑石製の石鍋片である。33・35には、一部にススの付着がみとめられる。36・37は 土錘である。36は管状を呈するもので、37は円柱状の両端に削り込みを入れたものである。い ずれも胎土は緻密で、焼成も良い。40は、丸瓦片・平瓦片である。42・43は銅銭である。42は 「聖宋元寳」(北宋徽宗、建中靖国元年1101年初鋳)、43は「大観通寳」(北宋徽宗、大観元年1107 年初鋳)である。



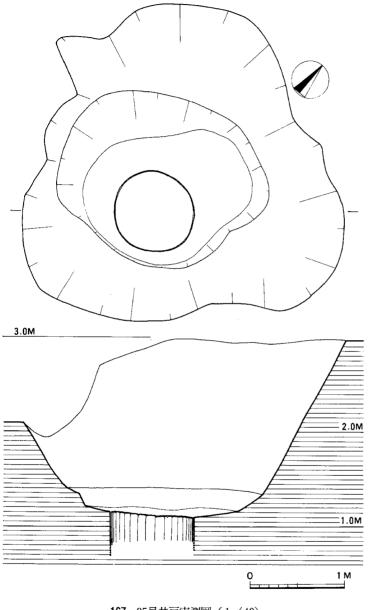
588号土壙出土遺物 1 (1/3)



166 588号土壙出土遺物 2 (1 / 3 42 • 43… 1 / 1)

95号井戸 (565号土壙)

V面 E-09・10区で検出した井戸である。整理の結果、ⅢA面の406号土壙が井筒に、410号土

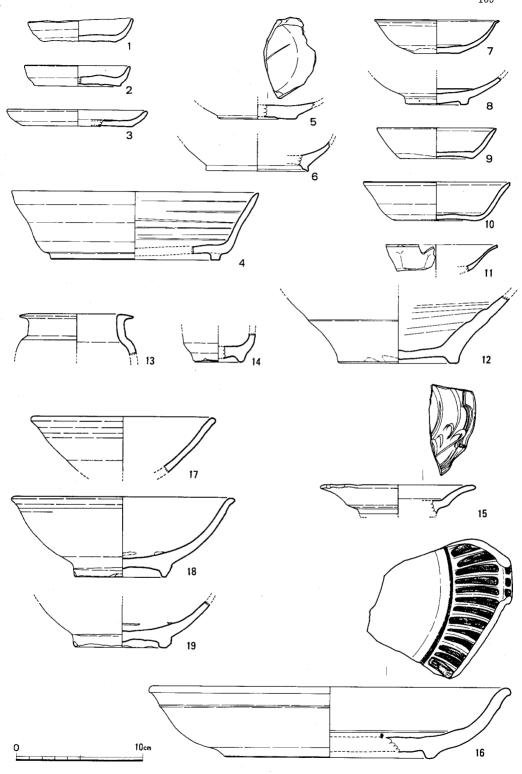


167 95号井戸実測図 (1/40)

坊はりかたの一部にあ たる可能性がある。井筒 は木桶である。木質は朽

ちて紙状になっていた。 出土遺物は多く、一部 を図示したにとどまる。 1~3は土師皿である。 1・2は口径8.4㎝、器 高1.6~1.65cmをはかる。 3 は口径11.2 cm, 器高 1.3cm。いずれも回転糸 切りである。4は須恵器 の高台坏である。5・6 は、緑釉陶器である。5 は淡灰褐色土師質の硬胎 に, 淡緑色の釉を全面施 釉する。底部は浅い蛇ノ 目高台で,回転糸切りの 後ヘラ状工具で輪状に溝 を削って蛇ノ目高台と し, 畳付中程から内側を 回転ナデ調整する。体部 下位は内外ともヨコナ デ。見込みにヘラ先によ る沈線が一本みとめられ る。6は、内側に段を有

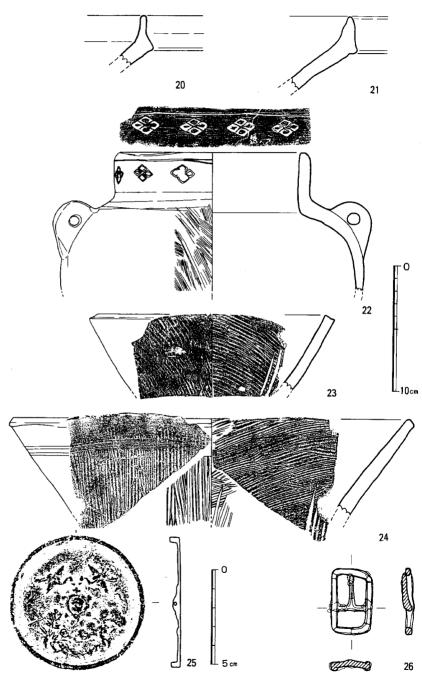
する輪高台を付けたもので、鼠色の土師質硬胎にゴマだれ状のむらのある鮮緑色の釉を施す。 高台畳付内側には、うすく釉がちるが、本来露胎であろう。体部外面の調整は、ヨコナデであ る。 $7 \sim 12$ は白磁である。7は皿である。8は碗底部で,高台畳付以外は施釉される。9・ 10はロハゲの皿である。9の体部下位から外底部は露胎となる。11は皿の体部を多角形に



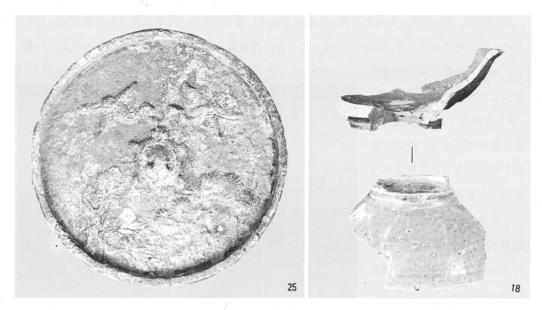
168 95号井戸出土遺物1 (1/3)

面取りする。12は壺底部である。高台畳付から内側は、露胎となる。13~16は、**龍泉窯系青磁** である。13は香炉口縁部破片である。青味をおびた灰緑色を呈する。全体に施釉する。14は、 盃形磁器である。畳付は露胎である。15は腰折れ皿である。口縁部は稜花をなし、体部内面に

は片切り彫りで 文様を描く。16 は盤である。体 部内面に, 菊花 の陰刻を施す。 畳付は露胎であ る。17~19は、 高麗青磁であ る。18・19は、 見込みと畳付き を露胎とする。 20・21は、備前陶 器のすり鉢であ る。備前焼編年 (間壁編年)IV期 前半の特徴を示 している。22~ 24は、土師質土 器である。25は, 銅鏡である。亀 鈕で鶴が二羽嘴 を合わせている。 下半には松枝が 描かれている。 鏡面はわずかに 凸面をなす。26 は鉄製の鉸具で ある。長さ5.3 cm, 幅3.3cm。



169 95号井戸出土遺物 2 (1/3, 25-1/2)



170 95号井戸出土遺物 3

③ 柱穴状小土壙

528号ピット

ⅢA面 D—14区で検出した小土壙である。径24㎝前後、深さ28㎝前後をはかる。

埋土中から、土師皿、坏の小片の他、Fig. 171に図示した遺物が出土した。1は、青磁碗である。龍泉窯系と考えられる。灰白色で緻密な胎土に、淡灰緑色の半透明釉がたっぷりと施される。高台は、半ばが露胎となる。底部は下方に尖り気味である。体部外面には、鎬蓮弁文が陽刻される。約2分の1強の破片である。復原口径9.7cm、高台径2.73cm、器高4.9cmをはかる。

2 は、青銅製の匙で ある。銹化がすすみ、 遺存状態はよくない。 匙部分は杏葉形を呈し わずかに凹む。軸部は





171 528号土壙出土遺物 (1/3)

大きく湾曲する。厚さ 1 mm弱で、非常に薄い。現存長4.2cm、匙部幅1.9cmである。

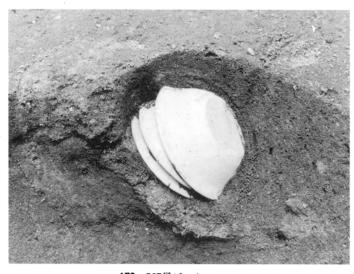
567号ピット

ⅢA面 D—13区で検出した小土壙である。 I 面検出の60号井戸に切られて、一部が検出された。 残っていた部分から、径20cm程度、深さ14cm前後の規模が推定できる。埋土は、褐色土のブロックを含む暗褐色土がつまっていた。

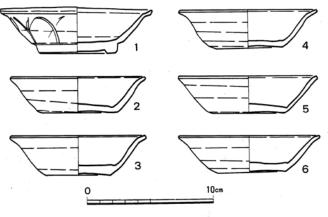
567 号ピットからは、青磁皿 1 枚、白磁皿 5 枚が、重なって出土した。出土した状況は、口を下に、底部を上に向けて、斜めに重なっていた。青磁皿を一番下(重ねた順からみれば、一番

上) とし, その上に白磁皿が 乗っていた。

Fig.170の 1 は青磁皿であ る。体部外面には、沈線で蓮 弁を描く。高台から外底部は 露胎, 内底部は施釉後, 釉を かき取る。色調は青灰色で福 建省あたりの製品か。口径 12.05cm, 高外径6.3cm, 器高 3.65cmをはかる。 $2 \sim 6$ は、 口ハゲの白磁皿である。白色 の半透明釉が厚めにかかり, 施釉後口縁部を削って角を持 たせる。口ハゲ部分以外は全 面に施釉されるが, 外底部の 釉はうすく、擦痕もみとめら れる。外底部は、露胎ではな いが、施釉する意図もない様 である。口径10.8~11.25cm, 底径5.1~5.85cm器高2.85~ 3.3cmをはかる。青磁・白磁と も完形品である。

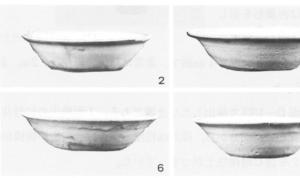


172 567号ピット



173 567号ピット出土遺物1 (1/3)





174 567号ピット出土遺物 2

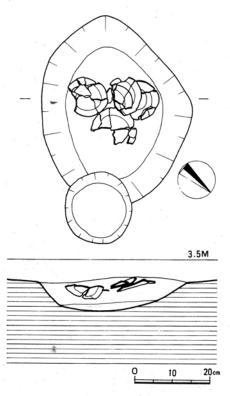
701号ピット

ⅢB面 E—10区より検出した小土壙である。 楕円 形を呈し, 長軸約50cm, 短軸約40cm, 深さ6~11cm をはかる。埋土は暗褐色土である。

701号ピットからは、土師皿のみが11枚重なって 出土した。おおむね完形品であり、小土壙の深さが 浅いことから単に柱穴とは考えがたく、何らかの祭



175 701号土壙

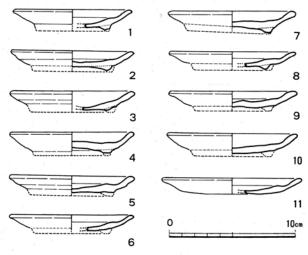


176 701号土壙実測図 (1/10)

祀行為(地鎮祭等)を考えることもできそうである。

701号ピットから出土した**土師皿**は、全て同一の型式である。器形的には、高台を持つ皿である。

高台は付け高台で、その整形は鈍く、一見すると器肉がひずんで盛り上った様な感を与える。体部の立ち上りも、明瞭な角をなさず、グラダラと立ち上り、浅い皿状をなす。整形は、内面及び体部外面はヨコナデ、外底部は高台を貼り付けた後ヨコナデを施し、底部切り離しの痕跡はナデ消される。口径9.54~11.25cm、高台径5.55~6.6cm、器高1.65~1.86cmをはかる。



177 701号土壙出土遺物 (1/3)

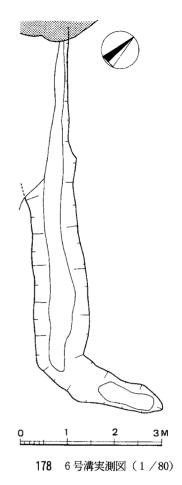
(5) 中世 I 期の遺構

① 溝状遺構

6号溝

V面 $E-05 \cdot 07$ 区にまたがって検出した溝である。延長7.3 m分を検出している。端部は 110° の角度で折れ曲り,2 mほどのびる。埋土は同質であったが,別の溝の可能性もある。深さは, $40\sim60$ cmで,溝底は北西から南東に向って傾斜する。折れ曲った部分の深さは $35\sim66$ cmで東に傾く。

1は土師皿である。底部へラ切り。口径9.4cm,器高1.1~1.4cmをはかる。2~5は土師坏である。全て底部は回転糸切りによる。2の底部には、板目圧痕が残る。口径12~14cm,器高2.2~2.7cm。6・7は須恵器の坏蓋である。6号溝からは、須恵器も多く出土し、周囲に奈良時代の遺構があったことを窺わせる。8は土師器甑の把手である。9は、褐釉陶器蓋である。双孔が穿たれるが、一ケ所だけである。釉は灰褐色の緻密な胎土に、茶褐色の釉が施される。10・11は白磁で、10は皿、11は碗である。これらの他に、同安窯系・龍泉窯系の青磁、褐釉陶器(四耳壺他)、無釉陶器、備前陶器、石鍋等出土している。



1 6 6 7 7 3 3 8 8 10 10 11 11

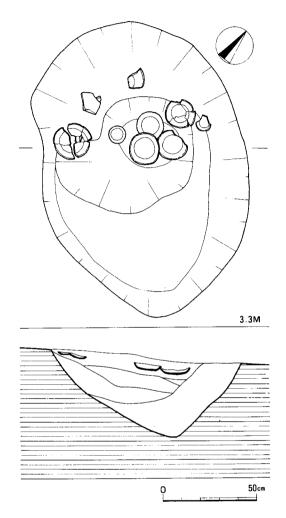
179 6号溝出土遺物 (1/3)

②土壙

548号土壙

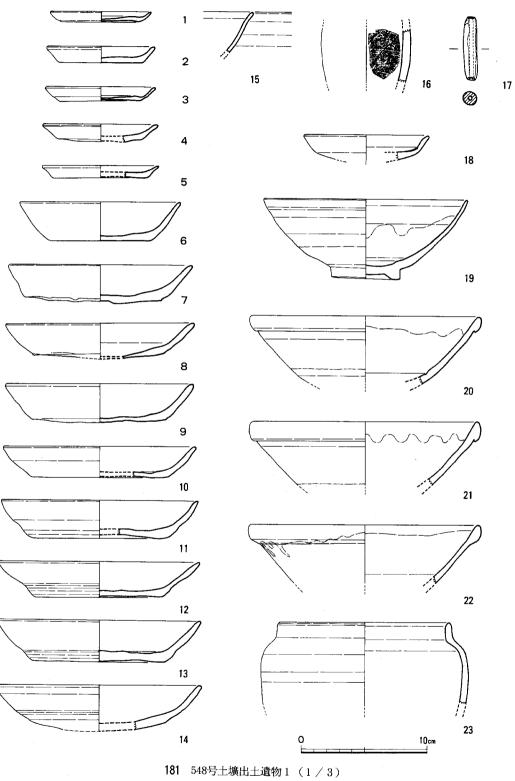
IV面 E-08区で検出した土壙である。長軸 147cm, 短軸111cmをはかる。壙底は一部2段 掘り状を呈し, 最深部で深さ46cmである。土師皿, 坏を主に, 多数の遺物が出土した。

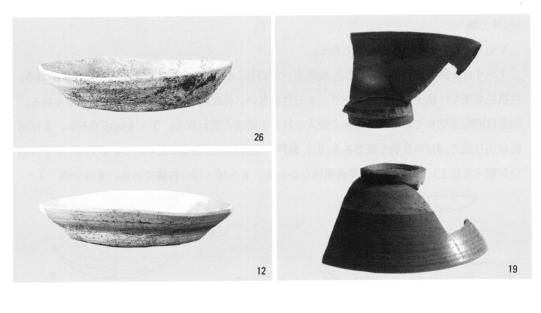
1~5は土師坏である。底部は回転糸切り で、2~4には板目圧痕がつく。口径は8.0~ 9.3cm, 器高0.85~1.4cmである。 1 は, 淡茶 色を呈し、器肉内部は黒灰色である。胎土は, 若干の砂粒を含むものの、キンウンモは全く 交えず精良である。焼成も極めて良く、他の 十師皿との差は一目である。器形的には大差 はないが、他地域からの搬入品の可能性が考 えられる。6~14は、土師坏である。14のみ ヘラ切りで, 他は回転糸切り, 全て板目圧痕 をとどめる。6は他に比して口径に対し器高 が高い。口径12.8cm, 器高3.1cm。 7~13はほ ぼ同一形態で、口径14.6~16.2cm, 器高2.5~ 3.4cmをはかる。**15**は**灰釉陶器**片である。 灰白 色の胎土に、斑らに緑をおびた半透明釉がか かる。生地は、内外面ともヨコナデ調整を施 す。16は、土師質の焼塩壺である。外面は指 ナデ、内面には絹目が残る。17は、土錘であ

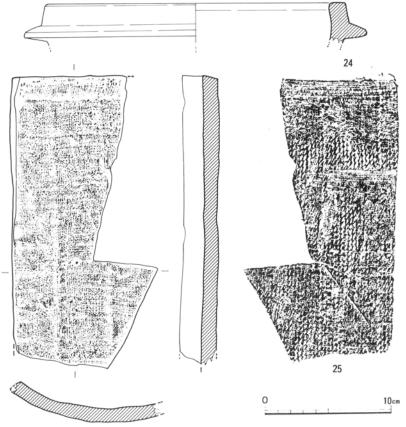


180 548号土壙実測図(1/20)

る。18は青磁皿である。龍泉窯系。19~23は白磁である。19は、見込みが体部から段をなしてくぼむ。口縁は直行したまま、おさめる。20~22は、いわゆる玉縁口縁の碗である。23は、広口壺である。白色でキメのやや粗い胎土に、わずかに濁った透明釉が施される。口唇部は、施釉後に削って形を整える。したがって、口唇部は露胎となり、この破片で見る限りは、全面に施釉される。24は、滑石製の石鍋である。外面には、一面にススが付着している。25は、平瓦である。内面(作成時、内型に接する面)には布目、外面には縄目がつく。内型は桶に布をまいたものと思われるが、桶の木の継ぎ目と布をしめた紐の痕跡が、はっきりとうかがわれる。外面は、縄をまいた幅3.3cm程の板で叩き締めた後、ヨコナデを施している。



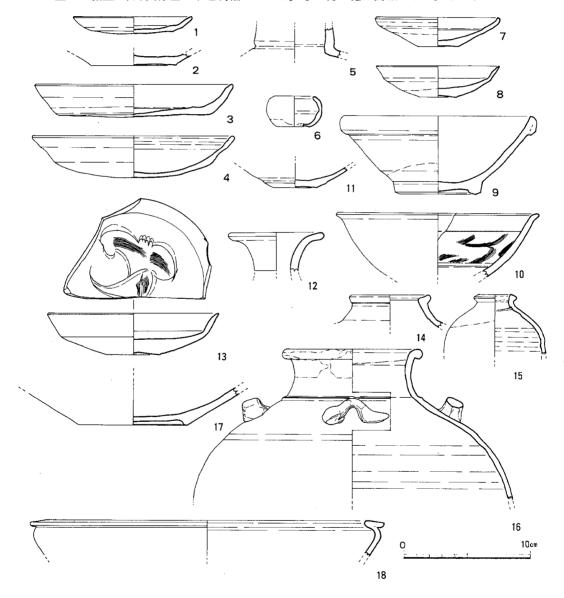




548号土壙出土遺物 3 (1/3)

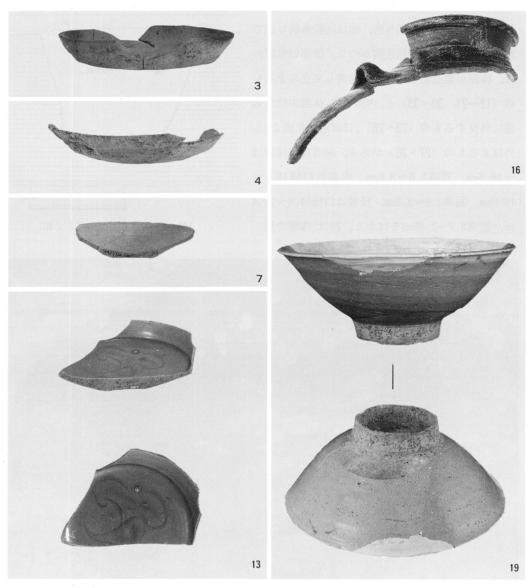
V面 E-07区で検出した土壙である。

 $1 \sim 4$ は土師器である。1 は皿で、底部をヘラ切りし板目がつく。2 は皿の底部と考えられる。 白肌色を呈し、胎土は精良でキンウンモを含まない。体部外面には、ヌタ痕がみとめられる。 底部は回転糸切りである。おそらく搬入された土師皿と思われる。 $3 \cdot 4$ は坏である。3 は回 転糸切り底で、4はヘラ切り底である。5は、瀬戸・美濃窯の灰釉壺と思われる。灰色の、粒子は粗 いが整った胎土に、鮮灰緑色の半透明釉がかかる。 $6 \sim 10 \cdot 12$ は白磁である。6 は小壺、7 ・



184 620号土壙出土遺物1 (1/3)

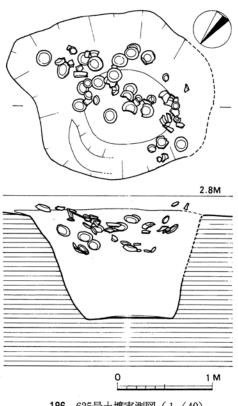
8 は平底皿, 9・10は碗, 12は壺(花瓶?)口縁である。11は青白磁の皿である。底部は, 施釉後釉を削り取り露胎となる。13・14は青磁である。13は見込みに片切彫と櫛目で花文を描く平底皿で, 龍泉窯系と考えられる。14は壺の口縁部である。灰茶色の生目がそろった胎土に, 灰緑色の釉がうすくかかる。15・16は褐釉陶器の壺である。灰色で径0.1㎜程度の砂粒を多く含む磁器質の胎土に, 濃茶褐色の釉がかかる。16は四耳壺である。白肌色で, 少砂粒を多く含む粗い胎土に, 明黄茶褐色の釉がかかる。施釉は頸部以下になされるが, 口縁部は化粧掛け状にテリを持つ。17・18は, 緑褐釉陶器の鉢である。接合できないが, 同一個体の可能性も考えられる。



185 620号土壙出土遺物 2

V面 E-05区より検出した土壌である。一部調査区外に出る。径140cmの不整円形を呈し、深さは114~116cmをはかる。埋土の中程より上から、土師皿・坏を中心に、多量の遺物が出土した。

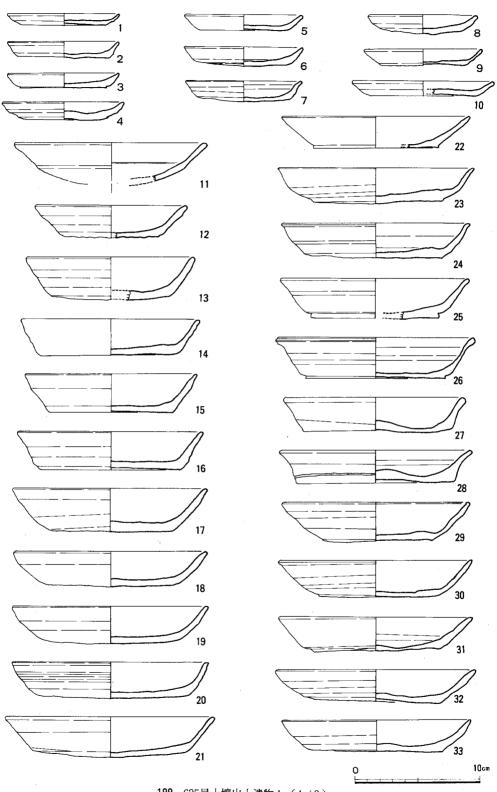
1~33は土師器である。1~10は皿で、4以外は回転糸切り底で、すべてに板目圧痕が残る。口径8.9~11.4cm, 器高0.95~1.7cmをはかる。11~33は坏で、11はヘラ切り底、他は回転糸切り底である。17を除いて板目圧痕がつく。体部の形状から、体部が真直あるいはやや内湾して立ち上るもの(12~21、30~33)と、内湾して、体部中位から逆に外反するもの(23~26)、ほぼ直上に直立し、外反するもの(27・28)がある。前者は口径12.2~16.6cm, 器高2.6~3.6cm, 中者は口径15.1~16.0cm, 器高2.8~3.3cm, 後者は口径14.6~15.4cm, 器高2.7~2.85cmをはかる。29は,体部の形



186 635号土壙実測図(1 / 40)



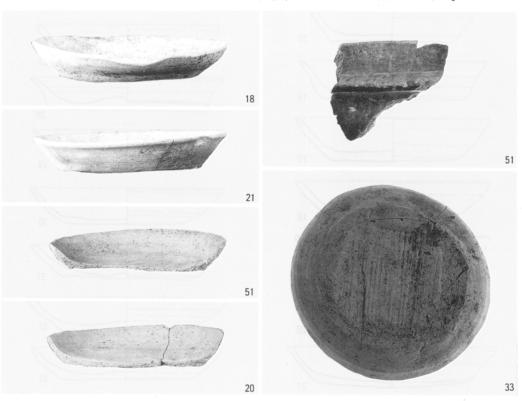
187 635号土壙(東より)



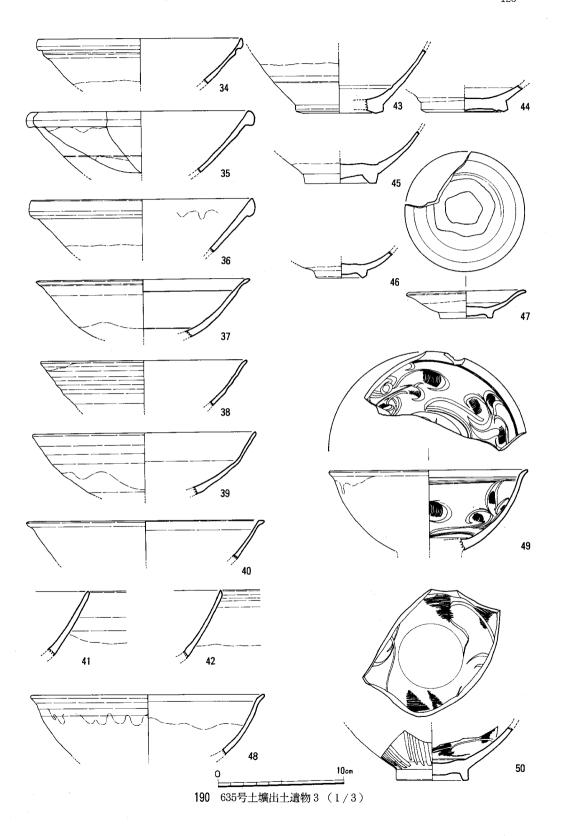
188 635号土壙出土遺物1 (1/3)

状、淡く赤味をおびた淡白茶色を呈しキンウンモを含まない胎土からみて、搬入土器の可能性がある。34~47は白磁である。34~45は碗である。34は、口縁直下を横に強くナデて凹ませ、口縁を玉縁状に作る。43・44の高台は、おそらく、玉縁口縁の碗の底部であろう。46・47は、皿である。いずれも、見込みの釉を輪状にかき取る。外面は体部中位まで施釉される。48~50は、青磁碗である。48は、濃灰緑色の透明釉を、暗灰色の胎土に施す。釉のガラス質の内部には、細かい気泡がみとめられる。釉の真下の胎土は白色を呈すが、化粧土ではなかろう。49は、見込みに片切彫りと櫛目で花文を描く。釉は、やや濁った暗灰緑色の半透明釉で、細かい氷裂がみられる。現存する部分では、全面に施釉されている。胎土は灰色で、やや粗い。底部を欠く。50は、同安窯系の青磁碗である。灰白色の胎土に、うすく灰緑色をおびた透明釉がかけられている。体部内面に、片切彫りと櫛描文で花文と思われる意匠を描いている。体部外面には、片切彫りで猫搔き手と呼ばれる、放射状の縦線を刻む。高台以下は露胎となる。外面高台内には、ケズリ痕が明瞭に残る。51は滑石製石鍋の口縁部の破片である。鍔から下には、ススが付着する。

この他, 瓦片が多数出土している。内面(上面)に布目を残すものと, 布目をナデ消すものとがある。外面(下面)は, 縄目叩きのものと, 板状のものでナデるものとがある。

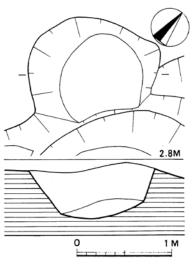


189 635号土壙出土遺物 2



V面 E-04区より検出した土壌である。平面的には、ほぼ円形を呈する。径約140cm、深さ35~51cmをはかる。663号土壌に切られる。

埋土中より、多様な遺物が出土した。 1~3は、土師器である。1は皿で、底部はヘラ切りで切り離され、板目圧痕もついている。体部はヨコナデ、内底部はナデ調整する。口径8.7cm、底径6.45cm、器高1.75cmをはかる。2・3は坏である。底部は、回転糸切り痕をとどめる。内面は、コテで平滑に整えたと思われるが、底部はやや丸味をもって下るので、底部切り離し後になされたものであう。口縁部から体部外面は、ヨコナデを施す。口径14.2~14.6cm、底径

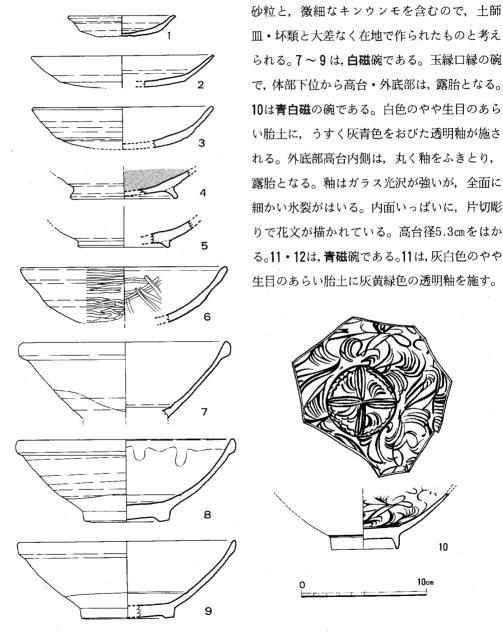


9.6~10.1cm, 器高2.6~3.4cmである。**4** は**, 内黒土器**の高 **191** 649号土壙実測図(1 / 40) 台付埦である。内面は,密にヘラミガキを施し,炭素吸着のため漆黒色を呈する。外底部はナ デ,高台をヨコナデ調整で付ける。高台は高く,外方に 踏 ん 張 る。高 台 径 は 8.6cm と 推 定

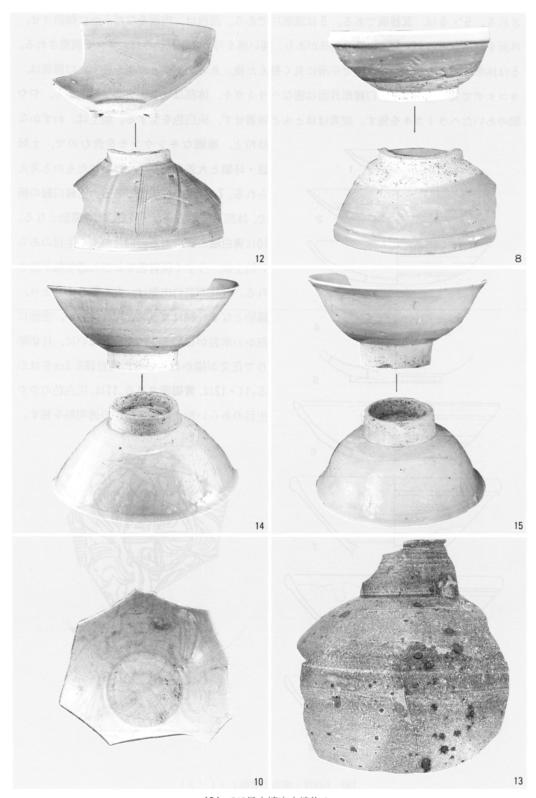


192 649号土壙(南東より)

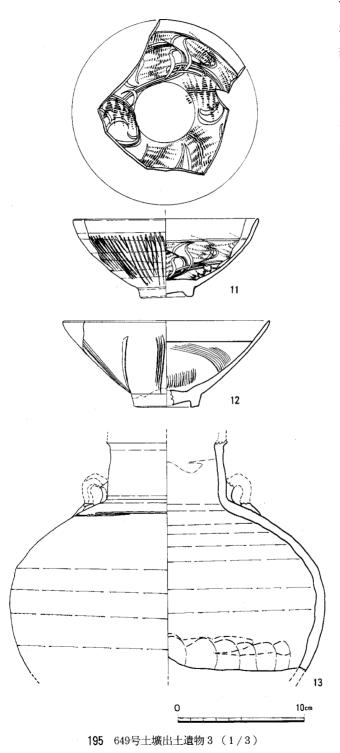
される。5・6は、瓦器碗である。5は底部片である。高台は、内面をなだらかに傾斜させ、外面を直に立てるが、全体に低く丸味があり、鈍い感を与える。見込みは、コテで調整される。6は体部片である。内面はコテで平滑に丸く整えた後、あらいヘラミガキを施す。口唇部は、ヨコナデで丸く仕上げる。口縁部外面は密なヘラミガキ、体部はヨコナデ調整の上から、やや間のあいたヘラミガキを施す。炭素はほとんど吸着せず、灰白色を呈する。胎土は、わずかな



193 649号土壙出土遺物1 (1/3)



194 649号土壙出土遺物 2



釉はガラス質で光沢強い。高 台畳付から内側は露胎となる が, 高台内には, 窯道具の一 部が付着している。体部内面 には、片切彫りで花文を描き すき間を櫛目文でうめる。体 部外面は、9本単位の櫛歯で 縦線を描く。同安窯系青磁で ある。口径14.8cm, 高台径4.2 cm、 器高6.3cmをはかる。 12 は、灰色でややあらい胎土 に、緑黄色をおびた透明釉を 施す。釉は光沢が強く、ガラ ス質の内部に気泡がみられ、 細かい氷裂が全面に入る。高 台外側から外底部は, 露胎と なる。体部内面には櫛描文 が、外面には4本単位の櫛描 縦線と片切彫りの縦線が交互 に施される。口径16.4cm, 高 台径4cm, 器高6.9cmと復原 される。13は、褐釉陶器の壺 である。明灰色砂質の胎土 に,淡黄緑灰色の釉がうすく 施される。頸部の継ぎ目付近 に、縦に耳がつく。全周の1/3 弱片であり, 双耳と判断され る。また、注口部あるいは把 手の痕跡はないので、水注と は考えられない。双耳壺と考 えてよかろう。胴部最大径 25.0cmをはかる。

V面 F─03区において、検出した木棺墓である。V面調査時には、調査区西側の壁から、わずかに40cm程度がのぞいていた。この段階で、青磁碗・皿・土師皿が完形で出土したので、V面調査・壁面土層実測後、重機で壁を掘り取り、プランを確認・調査した。

木棺墓は、長さ276cm前後、幅90cm前後、深さ45cm前後の長方形の土壙に、長辺192cm、短辺40~48cm、高さ約33cmの木棺を置いたものである。棺材は朽ちて全く残っていなかったが、鉄

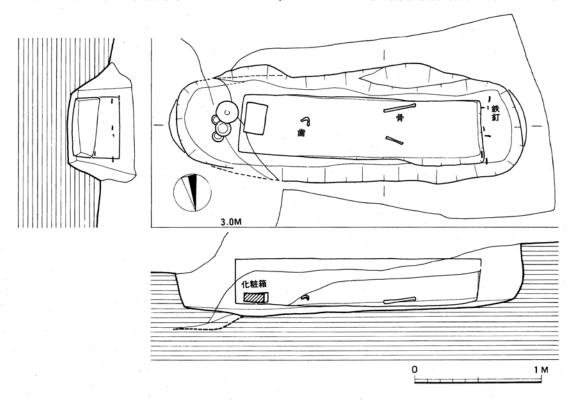
釘が原位置を留めており、その規模及び構造が確認できた。構造は、底板の上に側板、小口板を立てたもので、小口板を側板がはさんで、上下2ヶ所を釘でとめていた。

棺内には、下顎骨(ほとんど歯のみ)と大腿骨がわずかに残っていた。

副葬品は、棺内の被葬者の頭と小口板との間に 漆塗りの化粧箱、棺外のほりかた内に、青磁碗1、 青磁皿4、土師皿6、土師坏1がおかれていた。



196 683号土壙検出状況(北東より)



197 683号土壙実測図(1/30)



198 683号土壙(東より)



199 683号土壙(北東より)

棺内に副葬されていた化粧箱は、木地に黒漆を塗ったものである。土圧で若干変形していたが、長辺約23.5cm、短辺約16.5cm、深さ(ただし、蓋の高さは不明)約6.0cmの長方形である。蓋、四周に金で葉を銀で花を描いた桜花文を散らす。蓋は土圧で箱内に垂れて、変形していた。蓋と身の合わせ方は、確認できなかった。金属性の置口を用いていないことは間違いない。内部は、懸子によって二段に仕切られていた。

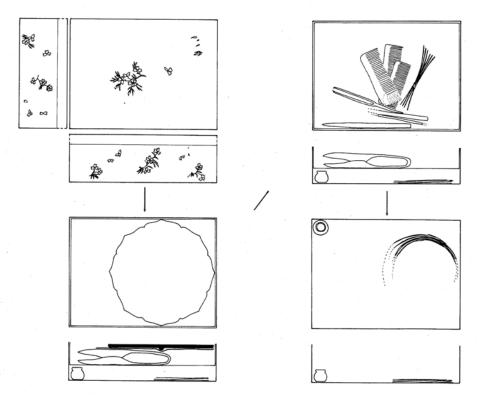
木棺墓の埋土は砂質土で、特に湿気を含んだ土ではない。したがって、遺存状態は決してよくなく、箱の内部を確認する為、箱を分解しながら遺物の確認、取り上げを行なった。



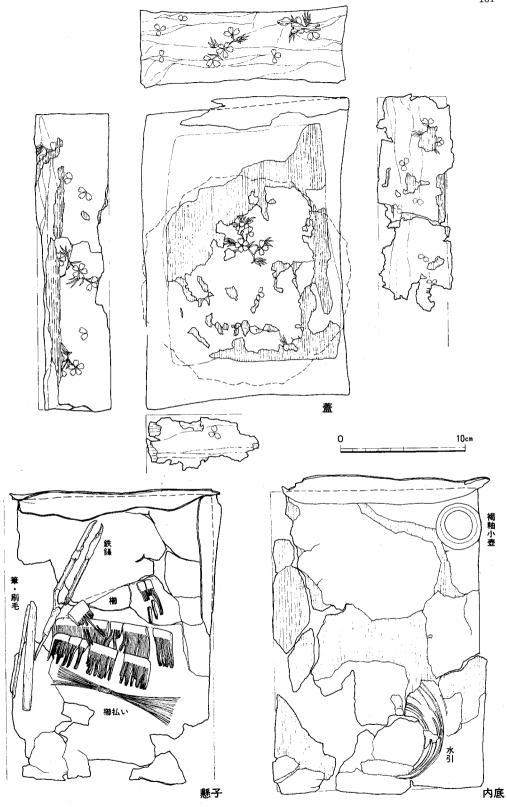
200 化粧箱

蓋は、すぐ内側の銅鏡に付着していた。鏡(4)は 湖州八稜鏡で、径17.2cmをはかる。鈕を下に、鏡 面を上に向けておかれていた。素文鏡である。鏡 背側(下側)には紙をしいており、鏡背に銹着し ていた。

懸子には、鏡の下に櫛・鋏・鑷・櫛払い・刷毛がおかれている。櫛は、とき櫛1枚、すき櫛2枚で、懸子の中央にとき櫛を一番上にして重なって

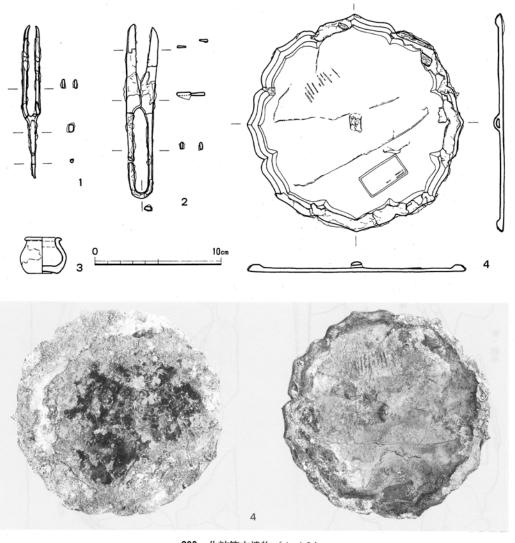


201 化粧箱内遺物配置模式図(約1/6)



202 683号土壙出土 化粧箱実測図 (1/3)

いた。とき櫛は長さ7.2cm以上,幅3.3cm,すき櫛は,長さ9.3cm,幅3cmのものと長さ8.1cm,幅2.55cmのものである。鉄鋏(2)は握り鋏である。懸子の横に立てかけられていた。長さ13.8cm,刃部長6.6cmをはかる。鉄鎌(1)は,長さ12cmをはかる。櫛払いは,長さ10.8cmの繊維を束にして中央をくくったもので,完全に朽ちて,痕跡しか残っていなかった。刷毛は2本で,遺存部分長8.7cm,幅0.6cmのものと長さ7.5cm,幅0.18cmのものである。いずれも骨製である。懸子をはずすと,褐釉小壺と,水引が納められていた。褐釉小壺(3)は,口径2.9cm,底径2.3cm,器高2.88 cmをはかる。褐色の胎土に,濃褐色の釉がうすくかかる。口縁部内縁には赤色顔料の付着があり,内底には黒色顔料が溜っている。お歯黒壺であろう。赤色顔料は,指についた紅をぬぐったものか。水引は,径9cm程の輪にしてある。朽ちて痕跡のみであった。



203 化粧箱内遺物 (1/3)

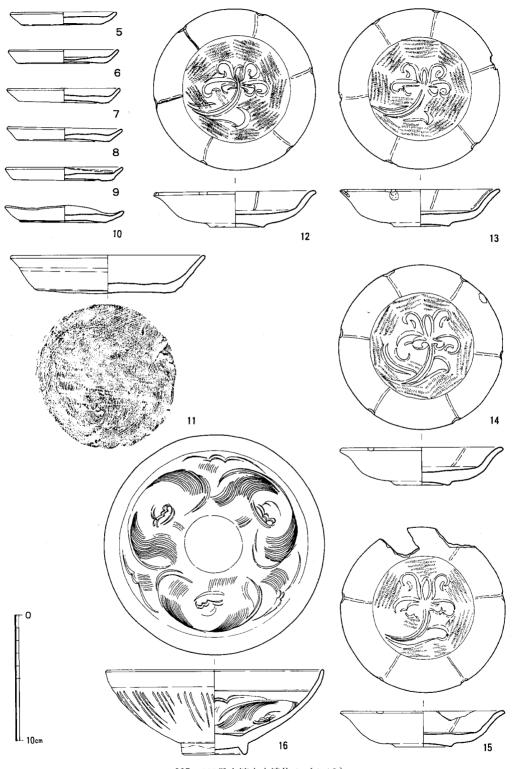
棺外副葬品は、V面調査時にすでに取り上げていた。Fig. 204は、木棺墓調査時に模擬的に 遺物を配して撮影したものである。

土師皿(5~9)はすべて回転糸切り底に板目圧痕がついている。内底部はナデ、体部内外はヨコナデ調整する。口径は8.5~9.5cm、底径6.1~8.0cm、器高1.05~1.2cmをはかる。坏(11)は、回転糸切りで底部を切り離した後、一部を静止糸切りしている。板目圧痕も残っている。内底部はナデ、体部はヨコナデ調整する。口径15.4cm、底径10.8cm、器高3.0cmをはかる。青磁皿(12~15)は、すべて同一型式である。底部は平底でやや突出し、上げ底となる。体部は、水平方向に開いてから内湾気味に立ち上り、ゆるやかに外反して口縁部を作る。口縁部は六輪花を呈す。見込みには、片切彫りで花文を描き、すき間を櫛目文でうめる。灰白色で緻密な胎土に、くすんだ灰緑色の半透明釉をかける。外底部は露胎となる。口径12.8~13.1cm、底径4.15~4.5 cm、器高2.85~3.0cmをはかる。龍泉窯系であろう。青磁碗(16)は、見込みに櫛目で水波文をいれる。体部外面には、片切彫りの沈線を4本ずつ手描きで全面に配する。いわゆる猫搔き手である。灰白色で、やや生目の粗い胎土に、くすんだ淡灰緑色の半透明釉がかけられる。高台から外底部は露胎である。口径17.4cm、高台径4.75cm、器高6.8cmをはかる。龍泉窯系。

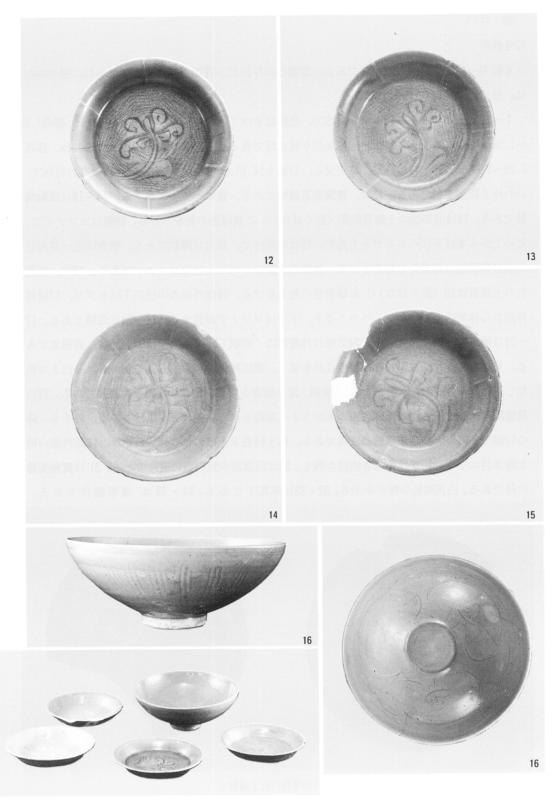
以上の外に、土壙埋土内(木棺内埋土を含む)から、白磁碗片、青磁壺片、越州窯青磁碗片・ 土錘などが出土している。一括資料ではないので、今回はふれなかった。



204 683号土壙棺外副葬遺物模擬配置



205 683号土壙出土遺物1 (1/3)



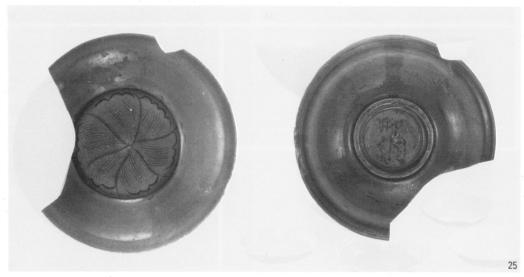
206 683号土壙出土遺物 2

③ 井戸

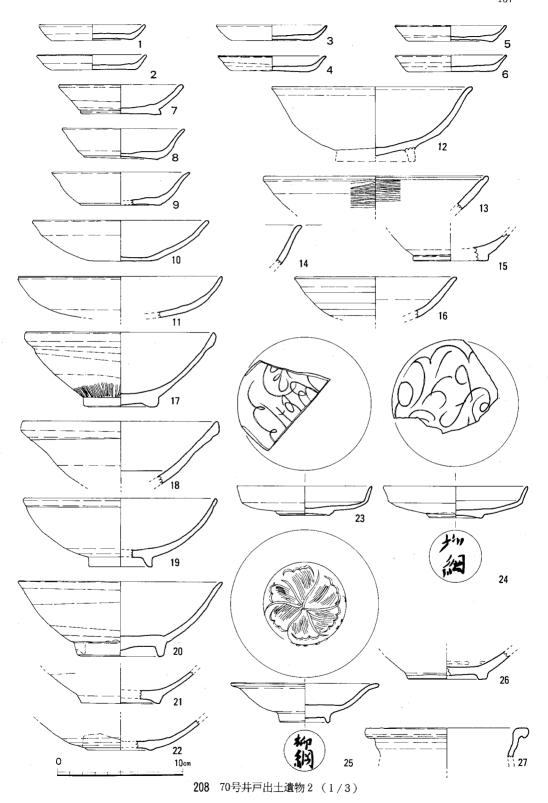
70号井戸

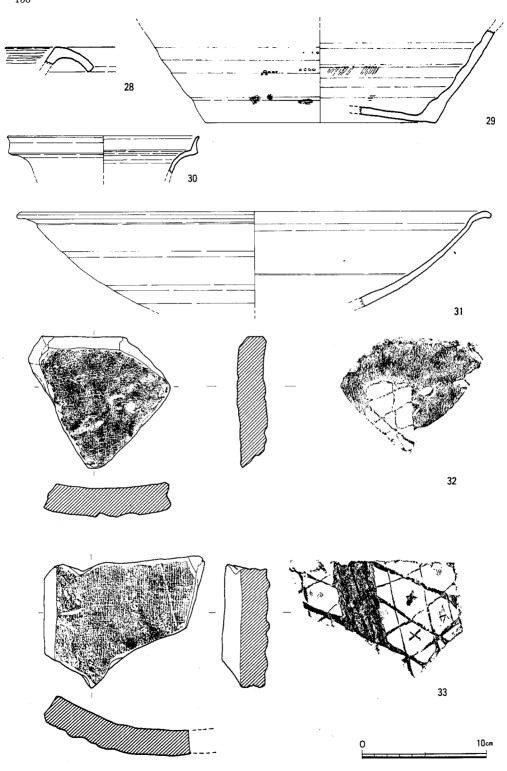
Ⅲ面 D—11区で検出した井戸である。素掘りの井戸で、井筒等確認できなかった。掘りかたは、径125cmをはかる円形である。

1~11は土師器である。1~6は皿で、底部はすべて回転糸切り。口径8.4~9 cm, 器高1.2 ~1.26cmをはかる。7~11は,回転糸切り底の坏である。7~9は口径10.05~11.01cm,器高 2.28~2.64cm。10·11は丸底気味を呈し、口径も14.01cm、16.2cmと大きい。11は高台付埦で、 いわゆる研磨土器である。13は,楠葉型瓦器埦である。密にヘラミガキする。14~16は緑釉陶 器である。14は淡茶色の土師質軟胎(脆くはない)に黄緑色の釉をかける。調整はヨコナデで、 その上からまばらにヘラミガキを施す。15は平高台で,高台は露胎である。暗青灰色~茶褐色 の須恵質硬胎に緑黄色の釉をかける。体部高台際はケズリ、他はヨコナデである。16は、淡褐 色の土師質軟胎(脆くはない)に緑黄色の釉をかける。体部外面の中位以下はケズリ,口縁部 外面から体部内面上半まで、ヘラミガキ、下半はヨコナデ調整する。 $17\sim24$ は白磁である。 $17\sim24$ は白磁である。 ~21は碗, 22~24は皿である。24の皿は外底部に「쪧綱」銘の墨書を持つ。25は、青磁皿であ る。見込みに,片切り彫りと櫛目で花弁を描く。濃灰緑色の釉がむらなくかかる。高台まで施 釉し,高台内の底部を露胎とする。「柳綱」銘の墨書を持つ。26は越州窯系青磁碗である。27は 褐釉陶器の壺である。淡灰緑黄色の釉がうすく施釉される。28は瓦質土器である。おそらく鉢 の口縁であろう。29は須恵器の底部である。粘土紐巻き上げにより作られるが、体部外面の粘 土継ぎ目に小さい格子目の叩き痕跡が残る。30は須恵器の盤口壺の破片である。31 は黄釉陶器 の鉢である。白黄褐色の釉がかかる。 $32\sim33$ は平瓦片である。 $34\cdot35$ は、須恵器片である。



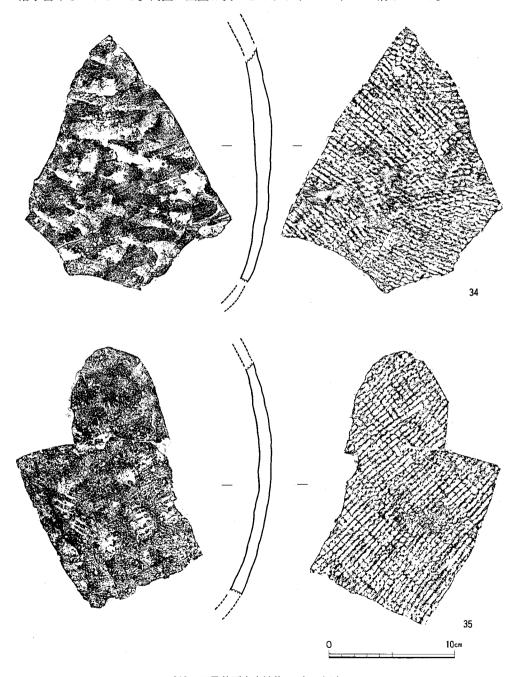
207 70号井戸出土遺物 1





209 70号井戸出土遺物 3 (1/3)

いずれも、大甕の胴部片で、同一個体になる可能性もあるが、接合はできない。**34**は、外面を目の細かい格子目叩き、内面はあて具を使わず指でおさえていた様で、全面に指頭大の凹みがみとめられる。内面はその後で、かなり強くナデて、凸凹をつぶしている。**35**も、外面に細かい格子目叩きがみられる。内面の凹凸は**34**ほどはげしくないが、ナデ消している。



210 70号井戸出土遺物 4 (1/3)

④ 配石遺構

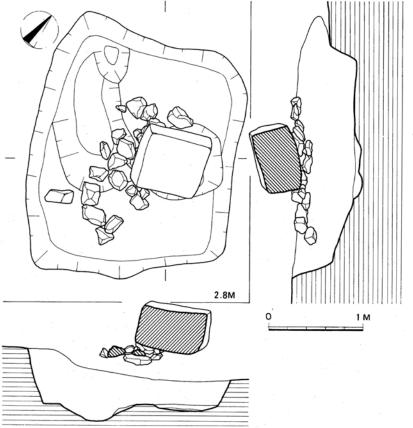
44号配石遺構

V面 E-05区で検出した五輪供養 塔である。地輪のみが出土したが, 出土状況から,ほぼ原位置を保って いると思われる。推定すると,まず 長辺126cm,短辺105cm,深さ30cm程 度の土壙を掘る。それを埋め,長さ 70cm,幅40cmの範囲に礫をしく。そ の上に地輪を裾えたものであろう。

地輪は第2次調査出土五輪塔の内で最大のものであった。33cm×31



211 44号配石遺構(西より)



cm,高さ21cmをはかる。花崗岩である。上面と四囲とは平滑に整えるが、下面は荒割りのままで凸レンズ状を呈する。

集石部分及び, 下の土壙の埋土中 から骨粉等の出土 はなかった。とは 言え、構造的に は、墓標の可能性 も考えられる。

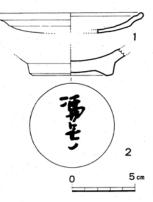
出土遺物は細片 が多く図示するに いたらなかった。

212 44号配石遺構実測図 (1/20)

- (6) 古代Ⅱ期の遺構 (一部中世Ⅰ期に下りうる遺構を含む)
- ① 土壙

Ⅱ面 D—11・13区より検出した土壙である。ややいびつな円形を呈し、さしわたし90~95cm、深さ30~35cmをはかる。 Ⅱ面上においての検出という点で、古代 Ⅱ期の遺構と考えるには疑問が残るが、出土遺物には中世以降の要素はなく、土師皿・坏もすべてへう切り底であった。よって、一応古代 Ⅱ期の土壙として記述する。

1は、土師皿である。口縁で部を、一旦外に折りまげて更に上方に折り返す、いわゆる「て」の字状口縁皿と呼ばれるものである。色調は淡褐色を呈し、比較的精良な胎土でキンウンモを含まない。搬入土器と考えられる。「て」の字状口縁の土師皿は、京都を中





213 313号土壙出土遺物(1/3)

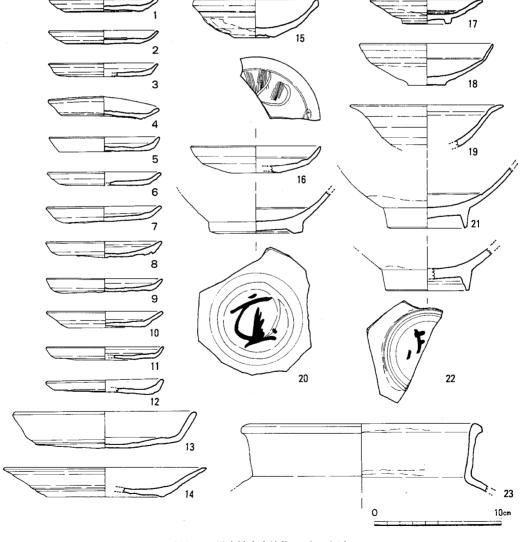
心とした地域に見られるものである。口径が11.3cmとやや大きめのきらいはあるが、小片からの推定復原なので割り引いて考えると、畿内から持ちこまれた可能性もあろう。2は、白磁碗の底部である。乳灰褐色のあらい胎土に、同様の不透明釉を施したもので、釉表面は気泡を持ってあれており、火災にあったものと考えられる。底部付近のみの破片のため、外面はすべて露胎である。外底部に「馮号」の墨書銘を持つ。高台径は、6.6cmをはかる。

434号土壙

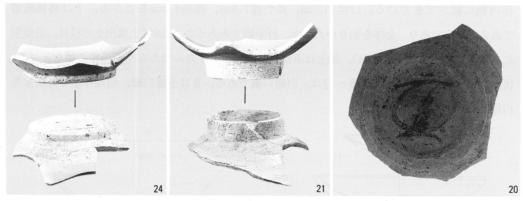
Ⅲ面 D—13区において検出した土壙である。不整形の土壙で,さしわたし80~96cm,深さ19~32cmをはかる。

1~14は土師器である。1~12は皿で、すべて回底糸切り底で、板目圧痕を持つ。10のみが、直線的に開く体部を持ち、形態的に異なるが、他はすべて同一型式と言える。12は、口縁の一部にススが付着し、灯明皿として使われていたことを示している。また、底部は糸切りを施した際に切りそこなって体部のみ輪状になってしまった為、糸切りした粘土板をあらためて貼付けた様子がみとめられる。口径8.6~9.0㎝、底径6.0~8.0㎝、器高1.05~1.35㎝をはかる。13・14は坏である。13は、やや下り気味の回転糸切り底から直線的に立上る体部をもつ。口径14.6㎝、底径11.3㎝、器高2.9㎝。14 は、上げ底気味の回転糸切り底から、外反気味に大きく開く

体部をもつ。色調は、部分的に赤味を持つ白肌色を呈し、胎土は比較的精良で徴細なキンウンモをわずかに含む。焼成は良好である。在地産でない可能性が高い。口径16.1cm、底径9.2cm、器高2.4cmである。15は褐釉陶器の皿である。濃い暗褐色の胎土に、暗茶褐色の釉がうすくかかる。16~22は白磁である。16は平底の皿で、灰白色の胎土に鼠色をおびた透明釉がたっぷりとかかる。ガラス光沢が強く、氷裂がみとめられる。見込みには、片切彫りと櫛描文で、おそらくは花文が描かれている。17は高台付の皿で、見込みの釉を輪状にかきとる。20~22は、碗の底部片である。20は、おそらく玉縁口縁碗の底部であろう。遺存している部分で、外面はすべて露胎となる。高台内に墨書がみとめられる。 花押であると思われる。 22の高台内にも墨書が見られる。 かなりすれて薄くなっており、 漢字の一部と考えられるが、 判続はできない。



214 434号土壙出土遺物1 (1/3)



215 434号土壙出土遺物

23は、黄緑釉陶器である。灰色で砂粒を含んで粗い胎土に、黄緑色の釉が施される。釉は不透明で、光沢もない。壺口縁と思われ、口径17.9cmに復原できる。

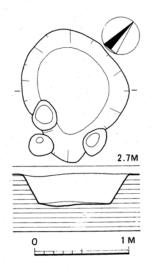
434号土壙出土遺物は、土師皿・坏がすべて糸切りである点において中世 I 期的であるが、青磁片を 1 片も含んでいないことから、古代 II 期として述べた。この遺構及び出土遺物の時代観については、中世 I 期に下る要素もあることを一言断っておく。

515号土壙

IV面 D—14区より検出した。卵形の土壙である。長軸144cm,短軸114cm,深さ36cmをはかる。 出土した土師器は、すべて粘土紐巻き上げで、糸切りのものは一片も含まれていない。

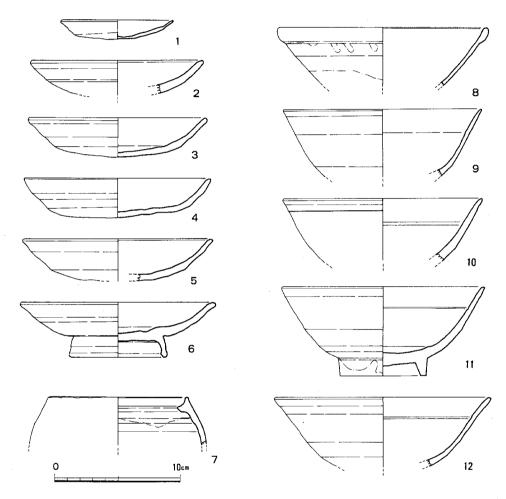
 $1\sim6$ は、土師器である。1 は皿で、底部には板目圧痕を持つ。内底部はナデ、口縁内面から体部外面はヨコナデ調整を行なう。完形品であるが、若干ひずみがあり、口径 $9.0\sim9.5$ cm、底径 $6.2\sim6.8$ cm、器高1.6cmをはかる。 $2\sim5$ は、坏である。いずれも、粘土紐巻き上げで形を

作ったあと、内面はヨコナデし、コテをあてて平滑に仕上げる。底部外面はナデて仕上げる。5の底部外面には、板目圧痕が残っている。体部外面は、ヨコナデを行なう。口径13.8~15.2cm、底径10~11cm、器高3.2~3.5cmである。6は、高台付皿である。円盤に体部をはりつけ、内面側からこの部分に粘土をはってナデ付ける。高台は付け高台で、最後に付けられたものであろう。内底部はナデ、体部内面と外面はヨコナデを行なう。高台はヨコナデ整形する。高台内側は、ロクロ回転でヨコナデを施したものと思われ、ヨコナデ痕跡が円を描いている。高台内側面のヨコナデ調整は、このロクロナデの後に行なわれ、ロクロナデの周辺部は高台整形時のヨコナデにナデ消されている。高台内側面のヨコナデはかなり強く行なわれ、高台端



216 515号土壙実測図

部内側に稜ができている。口径15.6cm,高台径7.9cm,器高4.4cmをはかる。 7 は褐釉陶器である。小片であり,全体を知りがたいが,行平鍋であろうか。626号土壙出土の様な,急須型になる可能性もある(P. 184)。胎土は茶褐色で砂粒を多く含んであらく,褐色の釉をかける。復原口径は,11cmをはかる。 $8\sim12$ は,白磁の碗である。8 は玉縁口縁,他はゆるく外反する口縁を持つ。



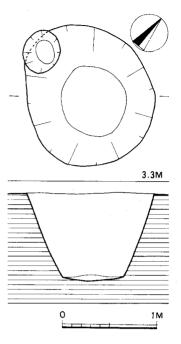
217 515号出土遺物 (1/3)

519号土壙

IV面 D—13区で検出した土壙である。平面的には,ほぼ円形を呈する。径132㎝前後,深さ84~87㎝をはかる。

高麗青磁をはじめ,多彩な遺物が出土している。 $1 \sim 3$ は,土師器である。 $1 \cdot 2$ は回底糸切り底の皿で,体部をヨコナデ,内底部をナデ調整する。口径 $9.0 \sim 9.3$ cm,底径 $6.9 \sim 7.0$ cm,器高1.1cmである。3 は,底部回転糸切りの坏である。内底部はナデ,体部はヨコナデ調整する。

復原口径14.8cm,底径10.6cm,器高2.8cm。4・5は須恵器の蓋である。519号土壙からは,須恵器も多数出土しており,周辺に奈良時代頃の遺構が存在したことを示している。6は楠葉型瓦器境である。内外面とも,若干のすき間をとったヘラミガキが全面に施される。内底部には,連続輪状文の暗文がみとめられる。12世紀中頃,それも後半に近い時期のものとの御教示を,高槻市教育委員会の橋本久和氏より頂いている。7は青白磁の碗片である。内面に片切彫りで花文(?)を描く。8~17は白磁である。8・11~16は碗。8は,白色で緻密,精良な胎土に淡青白色の透明釉をかけたもので,高台内中央のみ釉を削って露胎とする。内面には幅の狭い片切彫りで花文を描き,すき間を櫛目文でうめている。高台径5.6cmをはかる。11は,浅碗である。内面に沈線と櫛描文を施す。14~16は玉縁口縁である。16は口縁部を欠くが,遺残する端部の形状から玉縁と考えたもので,高台は平底の中央を浅く



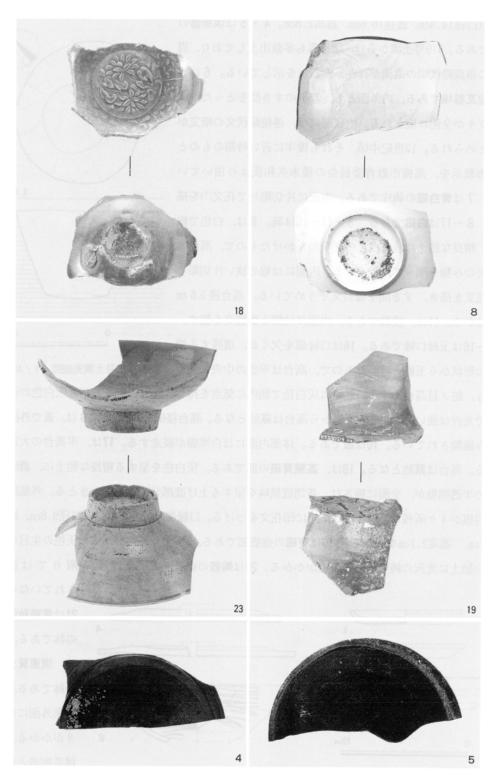
218 519号土壙実測図(1/40)

削り、蛇ノ目高台とする。胎土は灰白色で胎内に気泡を持つ。釉は緑色をおびた灰白色の透明釉で光沢は強い。体部外面下半から高台は露胎となる。高台径6.6cmである。9は、蓋で外面にのみ施釉されている。10は皿である。体部内面には白堆線が縦走する。17は、平高台の大皿である。高台は露胎となる。18は、高麗青磁の皿である。灰白色を呈する精良な胎土に、濃灰緑色の半透明釉が、全面に施され、碁笥底気味を呈する上げ底部分のみ釉をふきとる。外底部には目痕が4ヶ所残る。内面には全面に印花文をつける。口縁部は輪花となる。口径9.8cm、底径3.2cm、器高2.1cmをはかる。19は青磁の壺底部である。うすく茶色がかった灰色の生目の細かい胎土に光沢の鈍い灰緑色の釉がかかる。20は陶器の壺底部で、遺存する限りでは施釉

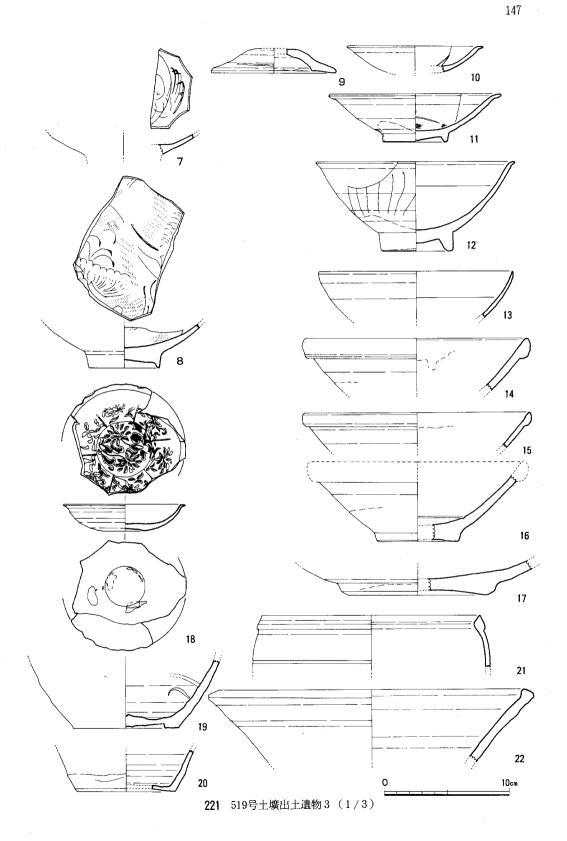
219 519号土壙出土遺物1 (1/3)

21は黄褐釉陶器 の鉢である。22 は、須恵質土器 の鉢である。口 縁部外面にはテ リがかかる。東 播系陶器と思われる。

されていない。

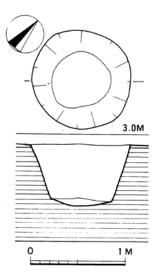


220 519号土壙出土遺物 2



IV面 E-10区より検出した土壙である。平面形は、ほぼ円形を呈する。径105cm前後、深さ56~62cmをはかる。

1~3は土師器である。1・2は皿で、粘土紐巻き上げである。 底部には板目圧痕がつく。体部はヨコナデ、内底部はナデ調整する。口径は9.4~9.6cm、底径7.05~7.35cm、器高1.45~1.55cmをはかる。3は坏である。粘土紐巻き上げ整形により、内面はコテをあてて平滑に仕上げる。口唇部から体部外面はヨコナデ、外底部はナデ調整する。口径15.5cm、器高3.8cm。4は黒色土器の境である。内外面とも炭素が吸着し、黒褐色~黒色を呈する。内底部にはコテの痕跡がみられる。体部内面は密なヘラミガキ、口縁部外面はヨコナデ、体部は指頭押圧ののちョコナデ、底部は高台を



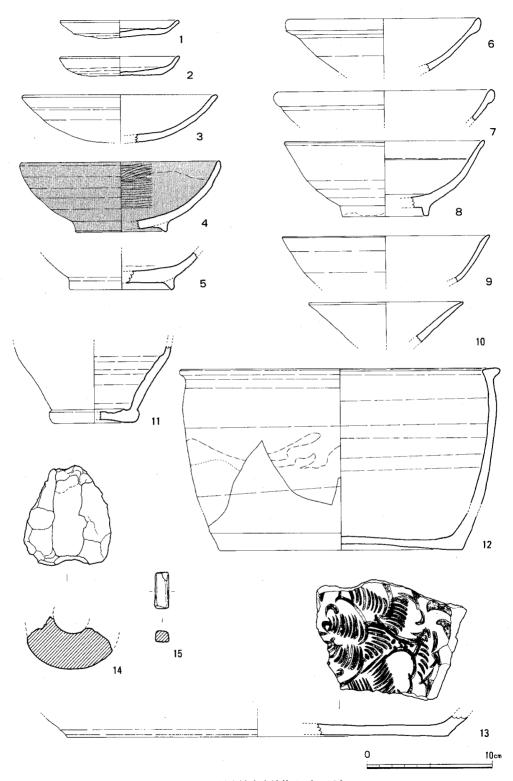
ョコナデでナデ付ける。口径15.5cm、高台径7.15cm、器高5.55cm。222 523号土壙実測図(1/40) 5 は、山茶坑である。高台は断面三角形を呈し、肥厚して底部の外周につけられる。底部は回転糸切りで、高台接合時のョコナデで半ばナデ消されるが中央付近には残っている。内面は内底部を丸く残して自然釉がかかる。重ね焼きによると思われる。胎土は灰白色で粗い。高台径8.1cmをはかる。6~9 は白磁である。7の玉縁口縁は、その破断面に口縁部折り返しに際する孔が、はっきりとみとめられる。10は天目茶碗である。暗褐色のザラついてやや粗めの胎土に内面で黒褐色、外面では茶褐色を呈する釉がかかる。口径は12.3cmと復原される。11は無釉陶器である。茶色~紫褐色を呈し、胎土は砂を含んで粗い。12は黄褐釉陶器の盤である。体部上半から内面に施釉する。13は黄釉鉄絵盤である。14は鞴の羽口片である。土師質で、スサを混える。実測図上側にはうすく鉄分が付着し、下側は熱を受けて赤化している。15は滑石の石棒である。長さ2.9cm幅0.9~1.05cmの直方体に面取りする。これらの他に、銅銭が一枚出土している。「皇宋通寳」で、北宋の仁宗の寳元二年(1039年)に初めて鋳られたものである。







223 523号土壙出土遺物



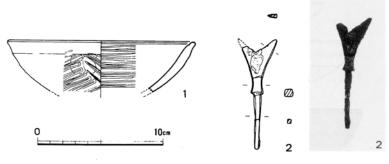
224 523号土壙出土遺物 2 (1/3)

IV面 F-04区で検出 した不整形の土壙であ る。

出土した土師坏・皿 には、底部を糸切りす るものは一片もない。

1 は**楠葉型瓦器**であ

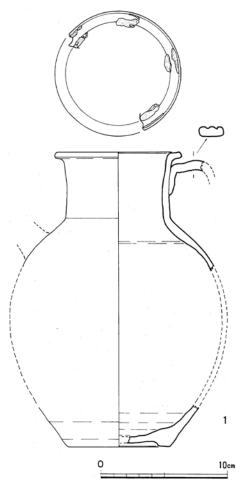
る。 2 は雁又式の**鉄鏃**



225 537号土壙出土遺物 (1/3)

である。完形品で、長さ8.73cmをはかる。

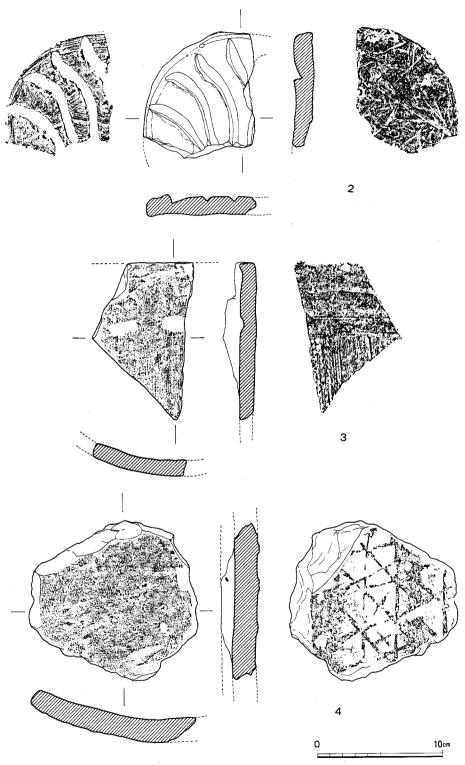
540号土壙



226 540号土壙出土遺物 (1/3)

IV面 F-01区・03区で検出した楕円形の土壙 である。79号井戸に切られる。長軸約75cm,深 さ22~35cmをはかる。

出土した土師皿・坏は、回転糸切り底のもの である。1は、青磁水注である。口縁部から、 肩部にかけてと,底部の破片のみで胴部片を欠 く。灰褐色で緻密な胎土に、緑灰色の半透明釉 をうすくかけている。口径9.7cm, 底部8.1cmを はかる。越州窯系と考えられる。2~4は瓦で ある。2はおそらく鬼瓦の様な道具瓦であろ う。太い沈線で放射状の孤線が描かれる。3は 平瓦である。内面(上面)は布目をとどめる。 外面は,縄目タタキで仕上げた後,板状工具で 後にナデてタタキ痕を消し、端部は横方向にも ナデ消しをする。4も平瓦である。内面(上面) は布目をとどめる。上面(下側)には、大きな 方形の格子目タタキ痕が残る。古代(奈良時代 ~平安時代)の瓦である可能性は高いと思われ る。540号土壙出土の陶磁器は白磁がそのほと んどを占めているが、1点だけ同安窯系青磁碗 の小片がまじっていた。

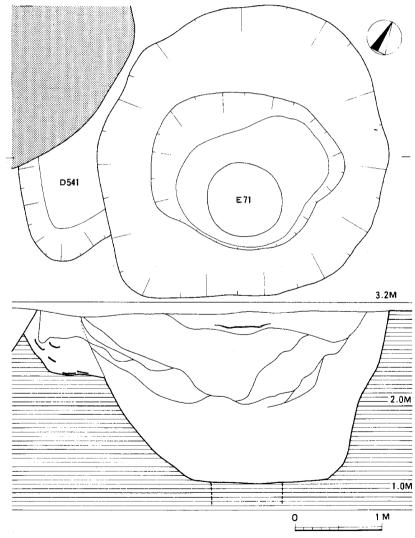


227 540号土壙出土遺物 2 (1/3)

IV面 E─09区より、9号井戸、71号井戸に切られて検出された土壙で、一部が残っていたにすぎない。炭・灰を含む黒褐色土層から、大量の遺物を出土している。

1~63は土師器である。1~36は皿で、5~8、18、36は回転糸切り底、2はへう切り底で、他は粘土紐巻き上げ技法によっている。5~8は口径8.6~8.7cm、底径6.3~7.0cm、器高1.1~1.45cmである。他は口径8.0~9.9cm、器高1.05~1.7cmをはかる。15は外底部・内底部に墨書を持つ。外底部の墨書は、中央に「璽」と大書する。その左上と内底部にも墨痕が認められるが、判読できない。(Fig. 233上)。37~62は坏である。44・58のみが底部糸切りで、その他は、粘土紐巻き上げ整形で作られる。44・48は、口径15.1~15.8cm、底径8.2~10.1cm、器高3.1~3.75

cm, 37~43 · 49~ 62は、口径14.0~ 16.6cm, 器高3.0 ~4.0cmをはかる。 63は研磨土器の境 である。64は緑釉 陶器である。灰色 の土師質軟胎に, 淡緑色の釉が全面 施釉される。内底 部・体部はヘラミ ガキ、高台はヨコ ナデを施す。高台 の畳付き部は、若 干内傾し、わずか に凹みを持つ。高 台径6.2cm。65~ 75は、白磁で67・ 68は体部外面に, 放射状の縦線文を 配している。

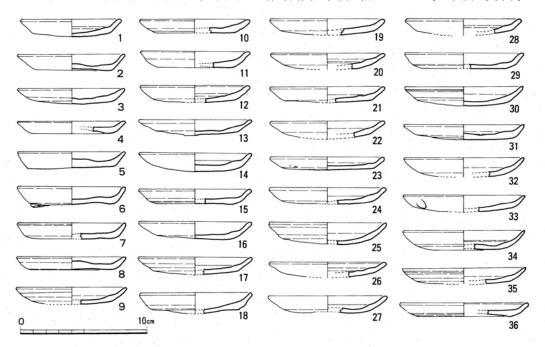


228 541号土壙実測図(1/40)

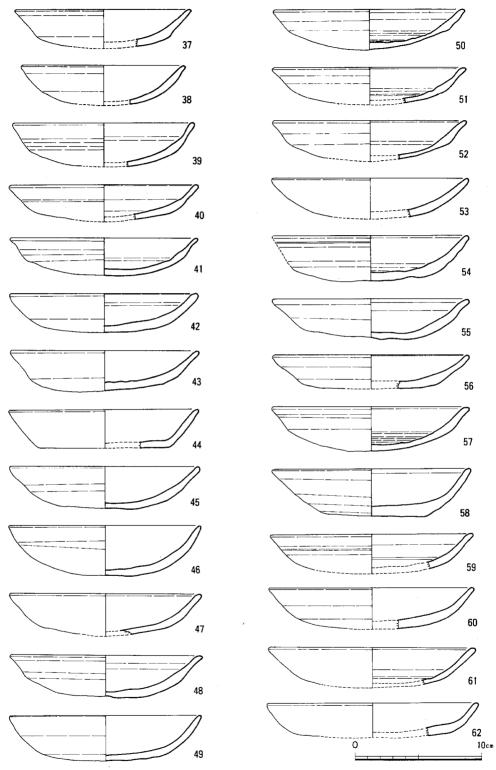


229 541号土壙土層断面(南東より)

76は,黄釉鉄絵の盤である。541号土壙の壙底に,破片が重なり合って出土した。割れたものを 集めてすてた状況を示している。釉色は,黄灰色を呈する。ガラス光沢は乏しく,透明感もない。 体部上半から内面全体に施釉する。 見込みと体部内面に鉄絵が描かれている。 鉄絵は黄茶褐

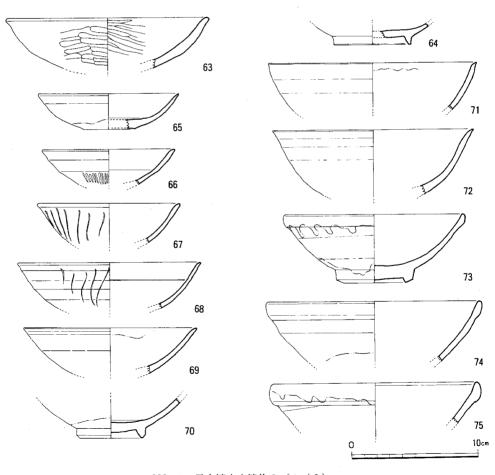


230 541号土壙出土遺物1 (1/3)

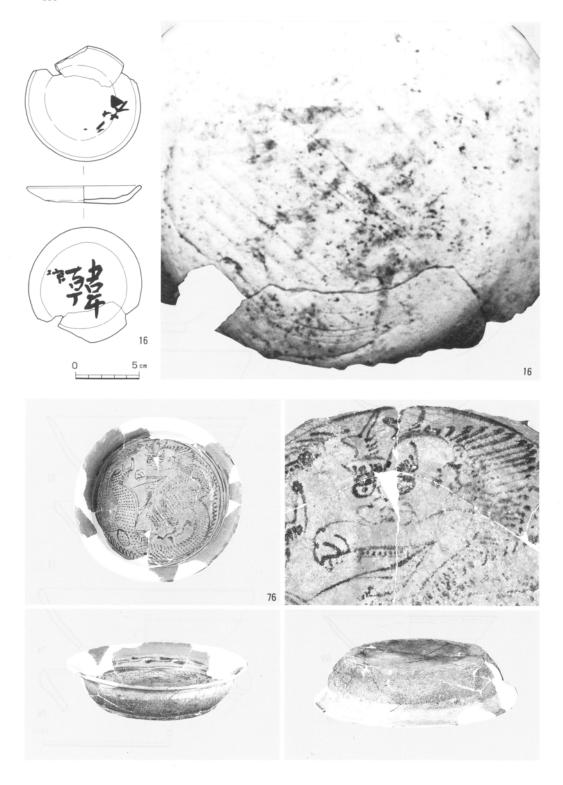


231 541号土壙出土遺物 2 (1/3)

色を呈し、にじみが出てシャープさにかける。見込みには、龍が描かれている。龍は、右回りに体を大きくうねらせ、顔は左を向き、大きく口をあけて舌を見せている。表情はユーモラスで、見込みを一杯に使って描かれている。体部内面には、雲文があしらわれている。天空を飛翔する龍の姿を象徴しているのであろう。胎土は黄茶灰色で、特に目立つ程砂粒を含んではいないが、全体的に粗い。体部外面の露胎部は、テリを持ち赤褐色を呈す。底部はほぼ完存、口縁部は全体の約2分の1を欠いている。口径42.8cm,底径30.2cm,器高9.8cmをはかる。



232 541号土壙出土遺物 3 (1/3)



541号土壙出土遺物 3 (左上···1/3)

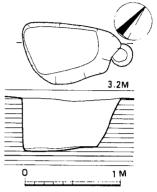


234 541号土壙出土遺物 4 (1/3)

542号土塘

IV面 E-07区で検出した不整形の土壙である。長軸102cm, 短軸64 cm, 深さ51~56cmをはかる。

1~3は土師器である。1・2は皿で底部糸切り。1の体部は直線的に開き、2の体部は内湾する。口径9.5~10.0cm、底径6.3~8.1cm、器高1.4~1.55cmである。3は坏である。底部は回転糸切りする。内底部はナデ調整し、体部をヨコナデする。口径14.4cm、底径10.7cm、器高2.55cmをはかる。4~15は白磁である。4は皿である。底部を欠くが、おそらくは平底皿になろう。小片の為、数はわからないが、口縁に刻みを入れて輪花につくる。5も平底皿である。底



235 542号土壙実測図

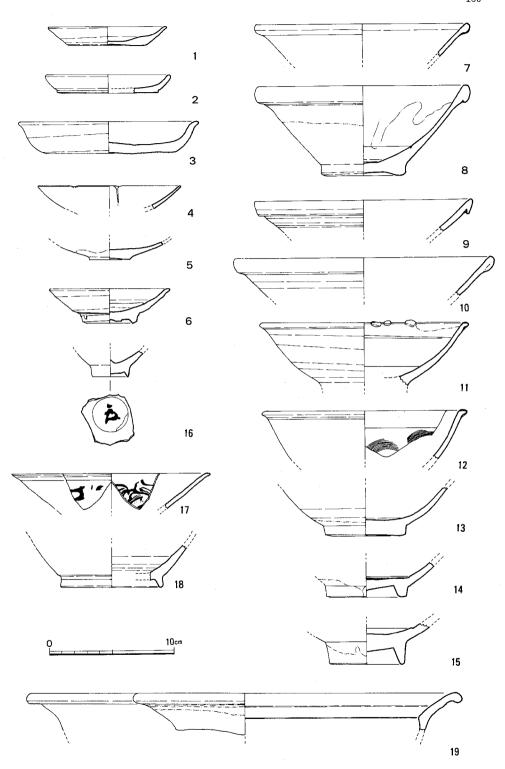
部外面は露胎となる。6 は、高台付皿である。高台脇まで施釉される。見込みは、輪状に釉をかきとっている。7~15は碗である。7~10は玉縁口縁を持つ。10の玉縁断面には、口縁部を折り返して、肥厚させ、玉縁に作った痕跡が、明瞭にみとめられる。11・12は、小さく外方にはね出た口縁を持つ。12の内面には櫛描文が施されている。13~15は底部片である。13は平高台である。高台内は、回転ケズリによってわずかに凹む。下部下位、高台脇近くまで施釉し、高台は露胎である。16は青白磁である。白色で精良な胎土に、淡青灰色の透明釉をかける。外底部には、花押と思われる墨書がかかれている。17・18は青磁である。17は、うすく引き出された体部が直線的に大きく開いて、やや外方に張った尖り気味の口縁部をつくる。体部には、彫りの深い印花文を施す。灰白色の胎土に、濃灰緑色の半透明釉がかかる。耀州窯系のものであろう。18は、壺の底部である。淡黄灰白色の精良な胎土に、淡暗緑灰色の半透明釉がかけられる。越州窯系と思われる。19は、陶器の盤である。釉は淡暗緑灰色を呈し、釉表面には氷裂がみとめられる。胎土は淡褐灰色で、砂粒を含んで粗い。復原口径34.8㎝をはかる。

出土した土師器は、すべて回転糸切り底である。これは、前節 (P. 18) の定義から言えば、中世 I 期の要素であるが、青磁が龍泉窯系の小片 I 片のみである点から古代 I 期とした。

543号土壙

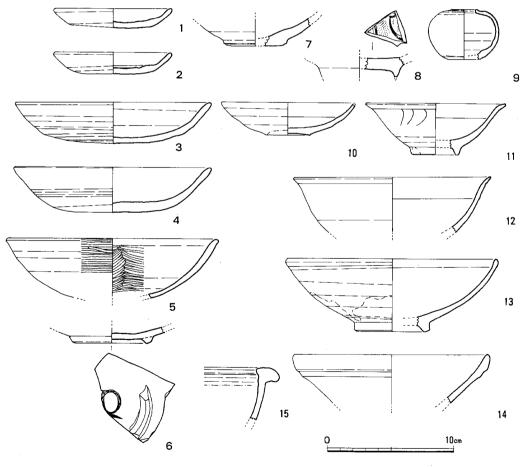
IV面 E-08区より検出した土壙である。平面形はややいびつな楕円形を呈し,長軸136cm,短軸96cm,深さ36 \sim 47cmをはかる。

 $1 \sim 4$ は土師器である。 $1 \cdot 2$ は、粘土紐巻き上げ整形による皿である。内底部・外底部はナデ調整、体部はヨコナデ調整を施す。口径9.4cm、底径 $6.6 \sim 6.95$ cm、器高 $1.6 \sim 1.75$ cmをはかる。 $3 \cdot 4$ は、粘土紐巻き上げ整形による坏である。外底部はナデ調整、体部外面から口唇部内面はヨコナデ調整、内底部から体部内面には、コテをあてて平滑に整える。3 の外底部には、板目圧痕が残る。口径 $15.5 \sim 15.6$ cm、底径 $9.4 \sim 10.9$ cm、器高 $3.25 \sim 3.6$ cmである。 $5 \cdot 6$ は瓦器で



236 542号土壙出土遺物(1/3)

ある。5は、体部の約4分の1片である。内面は密にヘラミガキを施し、口唇部のみョコナデで丸味をつける。外面は、口唇部から体部上半を密にヘラミガキ、体部下半をナデ調整し、高台脇をョコナデする。暗灰色を呈し、体部上半から口縁にかけては、銀化する。復原口径16.9 cm。6は、断面が丸味をおびた台形の低い高台を持つ。外底部に墨書が残る。花押であろう。7は、須恵質土器の平底境である。底部は、糸切り痕を残す。体部はョコナデする。胎土には砂粒をまじえ粗く、明灰色を呈する。復原底径5.0cm。8は、青白磁の碗底部である。白色で精良な胎土に、青味をおびた透明釉がかかる。外底部の中央付近は、丸く釉をかきとり、露胎となる。見込みには、片切彫りと櫛目文がみられる。9~14は、白磁である。9は小壺である。灰白色で、微細な黒い粒子を混じえる粗い胎土に、白濁した透明釉を施す。内面および外底部は、露胎である。口径1.9cm、底径2.6cm、器高4.0cmをはかる。15は、褐釉陶器の鉢である。体部外面および口縁部に、淡茶褐色の釉がかかる。胎土には、径1 mm大以下の砂粒が多くまじり、暗灰白色を呈する。小片である。

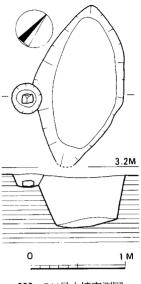


237 543号土壙出土遺物 (1/3)

544号土塘

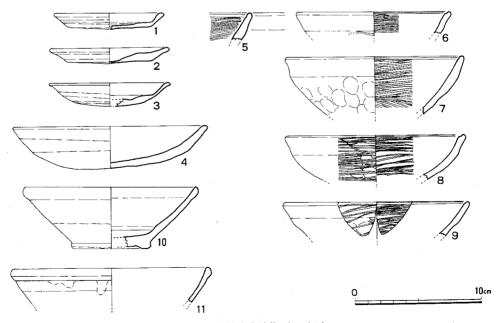
IV面 E-07区より検出した土壙である。長軸172cm, 短軸98cm, 深さ37~50cmをはかる。

1~4は土師器である。544号土壙出土の土師器には、底部を糸切りするものは一片も含まれていなかった。1~3は皿で、口径8.7~9.6cm、底径5.6~6.8cm、器高1.2~1.9cmである。4は坏で、口径15.4cm、器高3.4cmをはかる。 $5\sim 9$ は、瓦器である。いずれも楠葉型瓦器の境である。5は小片。内面を密にヘラミガキ、外面は口縁部をヨコナデ、体部はナデ調整する。6も同様な調整を行なうが、外体部にもまばらなヘラミガキがみとめられる。復原口径12cm。7も同様な調整であるが体部外面は指頭でおさえる。復原口径14.3 cm。8は、内外面ともにやや間のあいたヘラミガキを施す。高槻市教育委員会の橋本久和氏には、11世紀中頃との御教示を頂いてい

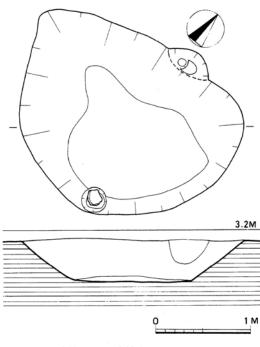


238 544号土壙実測図

る。復原口径14.6cm。9も8と同様の調整を行なうが,8と比べると,体部外面のヘラミガキは更にまばらになっている。復原口径14.5cmをはかる。壁表は,いずれも黒灰褐色を呈している。 $10 \cdot 11$ は白磁の碗である。10は口径13.9cm,高台径5.9cm,器高4.9cm,11は復原口径15.8cmをはかる。また,この遺構からは一片の青磁も出土していない。



239 544号土壙出土遺物(1/3)



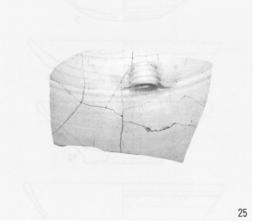
240 562号土壙実測図(1/40)

IV面 E-03・05区で検出した不整形の大型 土壙である。長軸256cm, 短軸204cm, 深さ36 ~47cmをはかる。

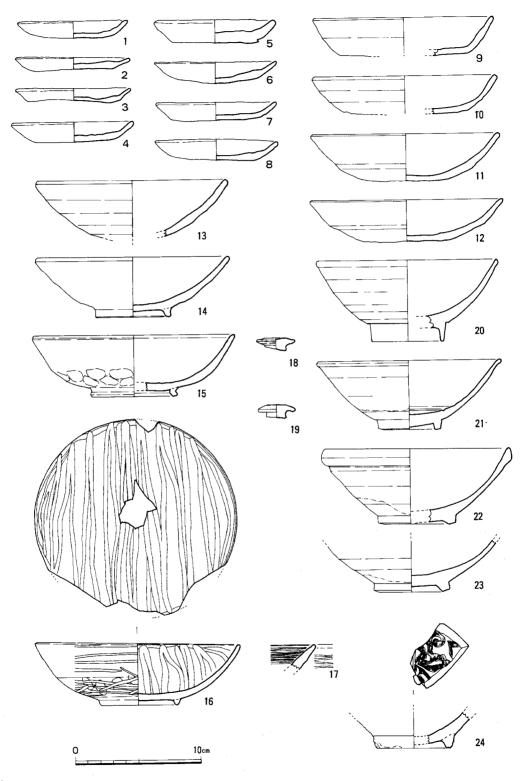
1~14は、土師器である。1~8は皿で、5は回転糸切り底である。口径8.7~9.8cm、器高1.2~1.65cmをはかる。9~12は坏である。10は、底部回転糸切り。口径15.45~17.4cm、器高3.15~3.9cmである。13・14は研磨土器の境である。13は高台を欠くが、本来は付け高台を持つものと推定できる。口径15.3~15.5cmである。15~17は瓦器である。15は内面をヘラミガキ(単位が明瞭につかめない)、口唇部を横にヘラミガキ、体部外面上半はヨコナデ、下半は指頭でおさえ、高台をヨコナデする。16の内面のヘラミガキは、一方向のジグザグの暗文状を呈する。体部外面も横位

に比較的密なヘラミガキを施す。17は楠葉型瓦器境の小片である。18~23・25・26は,白磁である。18・19は小壺の蓋で,径3.0~3.1㎝をはかる。鍔部から下は露胎となり,下面は静止糸切り痕をとどめている。20~23は碗である。25は四耳壺である。胴部径20.1㎝をはかる。把手のつく肩部の上下には,それぞれ一条の沈線がめぐる。26は,壺(?)の底部である。外底部は,



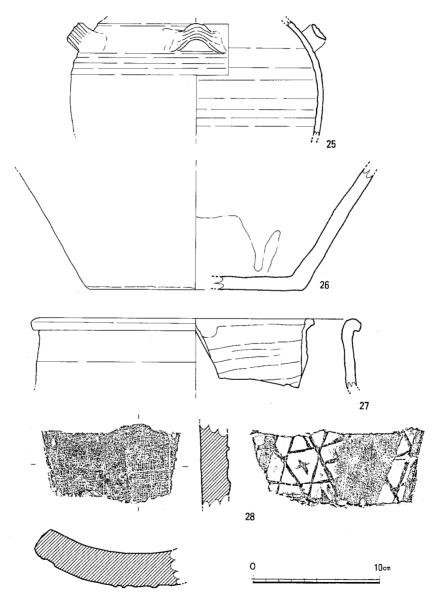


241 562号土壙出土遺物 (1/3)



242 562号土壙出土遺物 2 (1/3)

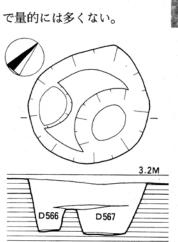
露胎である。底径16.8㎝をはかる。24は,青磁である。灰色の胎土に黄緑色の半透明の釉が施される。内面には,印花文がみとめられる。全面施釉し,畳付だけをふき取って,露胎としている。高麗青磁か。27は,黄褐釉陶器の壺(?)の口縁である。復原口径39.6㎝をはかる。28は瓦片である。内面(上面)とは布目痕がつく。外面には,大きめの格子目叩きがなされる。ヘラで面取りした小口をとどめている。大きめの格子目叩きを持つ瓦片は,概して古代の前半の頃に属すると考えられる。



243 562号土壙出土遺物 3 (1/3)

IV面 F-02区の561土壙の底部から検出された2つの土壙をそれぞれ566号土壙,567号土壙とした。566号土壙は径約40cmをはかる。柱穴状のものである。

出土遺物は、土師坏・皿・楠 葉型瓦器小片、白磁片、銅銭等 で量的には多くない。



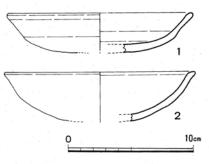
245 566号土壙実測図



244 566号土壙(東より)

1・2 は土師器の坏である。口径14.85~15.3cm, 器高3.15~4.05cmをはかる。銅銭は,「開元通寳」1(621年初鋳)「祥符

元寶」1 (1008年初 鋳),「天聖元寶」1 (1023年初鋳)「治平 元寶」1 (1064年初 鋳),「凞寧元寶」3 (1068年初鋳),「元 祐通寶」3 (1086年) 「紹聖元寶」4 (10



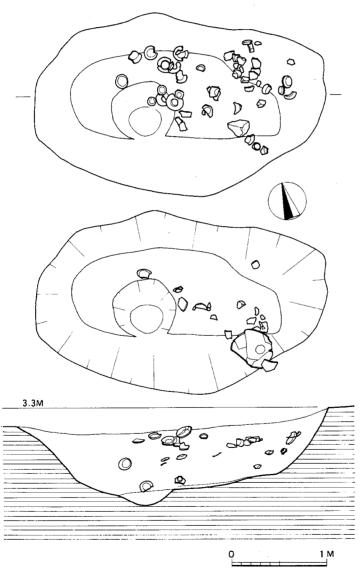
246 566号土壙出土遺物 (1/3)

247 566号土壙出土遺物 (1/1)

94年初鋳),「元符通寶」1 (1098年初鋳),「聖宋元寶」1 (1101年初鋳),「政和通寶」1 (1111年初鋳),解読不能2の 20枚が出土した。この内,「政 和通寶」1,「紹聖元寶」3,「元 祐通寶」1,「凞寧元寶」1, 「元祐通寶」1,「元符通寶」 1,「開元通寶」1の9枚が, 差し銭の状態で出土してい る。

IV面 E-05・07区で検出した遺構である。長楕円形の平面を呈し、長軸310cm、短軸188cm、深さ64~80cmをはかる。

遺物は、土師坏を主に多量に出土しており、一部を図示するにとどまった。 $1 \sim 6$ は土師器 の坏である。底部を糸切りするものは、一片もまじっていない。 $1 \cdot 3 \sim 5$ の底部には、粘土 紐を巻きあげた痕跡が明瞭にみとめられる。いずれも、内面はコテで整形、口唇部から体部外面までをヨコナデする。 4 の口縁部内面には、コテによる沈線状のキズが、外面にはヘラ状工



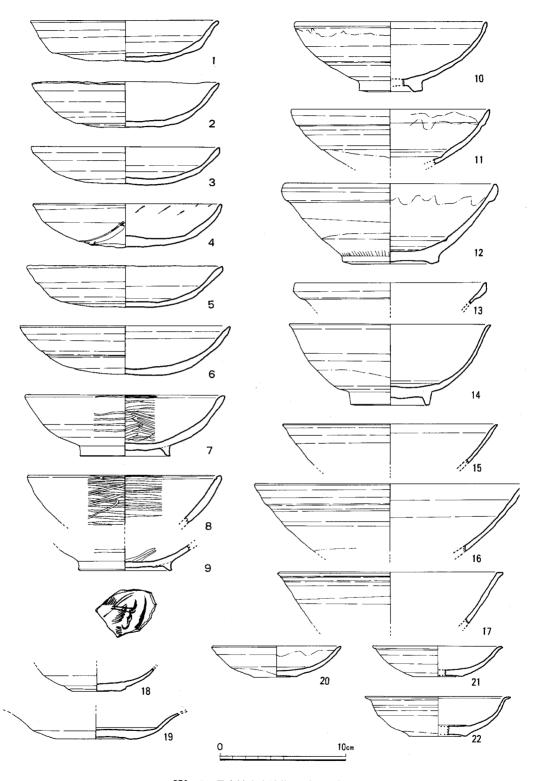
248 569号土壙実測図(1/40)

具によるキズ(沈線?)がみ られる。口径15.0~15.9 cm, 器高3.0~3.8cmをはか る。 $7 \sim 9$ は、瓦器である。 7は内面に密なヘラミガキ を施し、外面はヨコナデの 上にまばらにヘラミガキを 行なう。外底部はヨコナデ の上に板目圧痕、付高台の 端部にも板目圧痕がつく。 口唇部内面から体部外面, 高台外面まで、炭素の吸着 が良く銀化する。在地産で ある。口径16.0cm, 高台径 7.2cm, 器高4.9cm。 8は, 楠葉型瓦器である。内面を 密にヘラミガキ, 外面はや やあらいが比較的密なヘラ ミガキを行なう。色調は黒 灰色を呈する。口径15.5 cm。高槻市教育委員会の橋 本久和氏より11世紀中頃の ものとの御教示をいただい ている。9は在地産であ る。10~22・24~26は白磁 である。10~17は碗であ



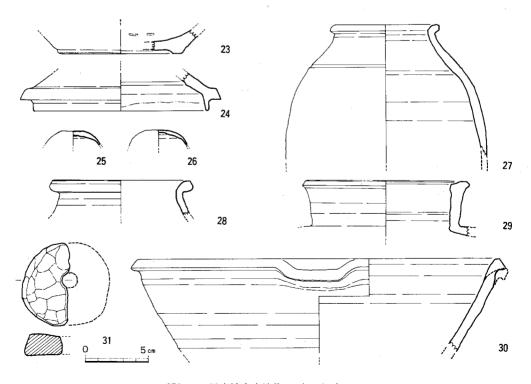
249 569号土壙(西より)

る。10~13は, 玉縁状口縁をつくるもので, 10は小さい玉縁, 11はうすく引きのばした口 縁を折り返して薄い玉縁状口縁としたものである。14は丸味を持った腰部から、ゆるく外反 して口縁をつくるもの。15・16はゆるく弧を描いて広がったままうすくのばして口縁をつ くるものである。17の口縁部は、直線的に開く体部の端部を、小さく外方に折って口縁とする。 18~22は皿である。18は外底部を肥厚させて(削り出しによる)平高台状にみせたもので、内 面には片切彫りと櫛描文がみられる。19は大振りの皿で、底部は、径約6.0㎝をはかる。20は平 底からゆるく内湾する体部を持ち、 そのまま丸く口縁をおさめる。 21・22は、 内湾して立ち 上った体部から、小さく外方にひねって口縁を作るものである。24は蓋である。白色の胎土に うすく緑灰色をおびた透明釉を施す。身とかみ合う部分は、露胎となる。小片であるが、径15.9 cmと推定される。25・26も蓋であろう。外面は施釉され、内面には全く釉がみられない。頂部 はやや平らもしくは凹み気味であるが、全体に丸味がありなめらかで、稜などはつかない。白 色精良な胎土に透明釉がかかっている。23は,越州窯系青磁の碗である。見込みに,重ね焼き の目痕がみられる。27は、青磁の壺である。胎土は灰色でキメにむらがなくととのう。釉は青 灰色であるが光沢にかける。 破片としてはあまり十分でなく, 耳の有無等までは判断できない。 肩部に一条の沈線がはいる。復原口径8.75cmをはかる。28は緑褐釉陶器である。口縁は折り返 して玉縁状に丸くつくる。29は、褐釉陶器である。釉は緑黄褐色を呈す。頸部は肩部との継ぎ

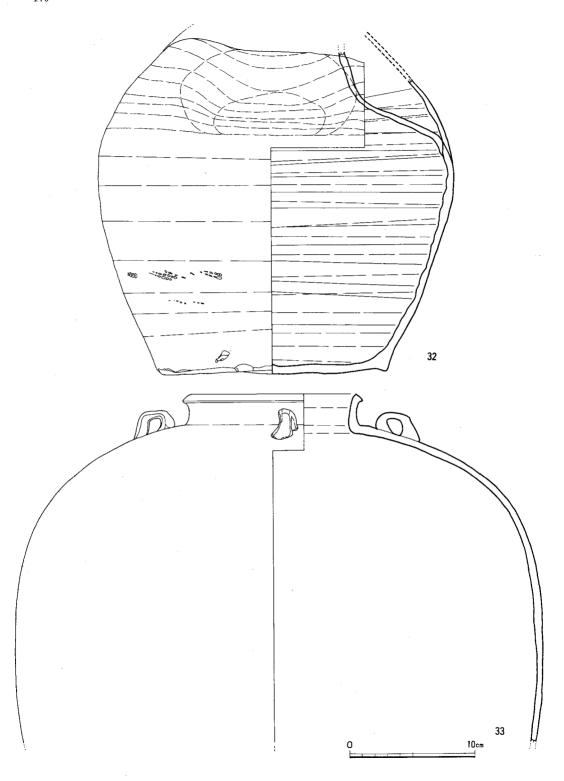


569号土壙出土遺物 1 (1/3)

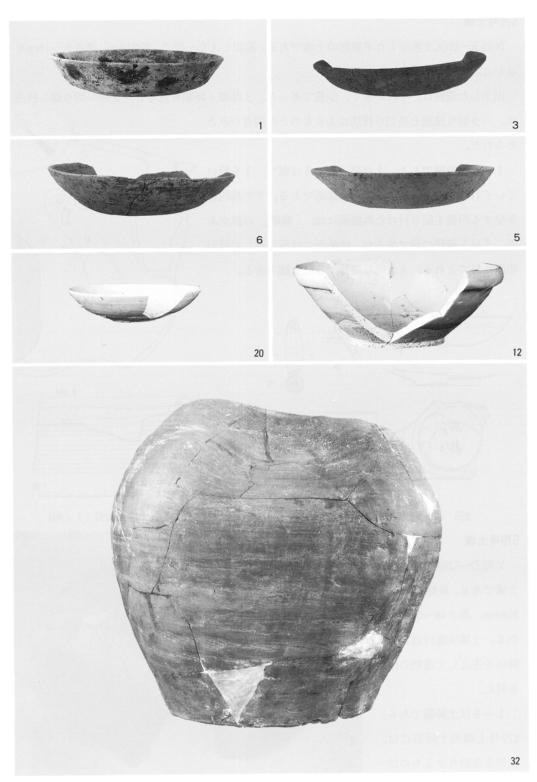
目から直線的に上に立ち上る。30は須恵質土器の鉢である。胎土は暗灰色を呈し、胎土中には大きめの砂粒はみられず、比較的精良で、焼成も良くかたく焼き上っている。いわゆる東播系ではない。あるいは在地産か。31は滑石製の紡錘車である。半折していて、2分の1弱しか残っていない。推定復原径7.0㎝前後と思われる。32は須恵器である。胎土は黒斑を含むが精良な土で、暗灰色を呈す。焼成も良好で、かたく焼けている。調整は、ヨコナデ調整が目立つが、体部外面には、かすかに目の細かい格子目叩き痕跡が、ナデ消されずに残っている。内面には、叩きの痕跡は全くみあたらない。肩部のやや上が、幅13.8㎝にわたって大きく凹むが、焼成時のひずみと解しておく。底径18.4㎝、胴部最大径28.4㎝、現存器高26.7㎝である。33は無釉陶器の四耳壺である。胎土は灰色で黒斑を多く含み、器表は外面で淡茶白色から明灰色、内面は淡黄褐色に灰色がまじる。焼成は焼好である。口縁部は、端部を外傾させて、下端をやや垂らす。頸部は短く直行する。頸部の継ぎ目から肩部までは、大きく拡がる。耳は、頸部の継ぎ目近くに、縦に4ケ所つけられている。復原口径14.4㎝、胴部最大径約42㎝をはかる。569号土壙の埋土には、上面から掘りこまれた遺構の掘り残しが若干あったと思われ、わずかに新しい遺物がまじっていた。しかしそれは、絶体年代的な時間の開き(200~300年の開き有)から容易に摘出できる。したがって、図示した中には、時代の下る資料は含めてはいない。



251 569号土壙出土遺物 2 (1/3)



252 569号土壙出土遺物 3 (1/3)



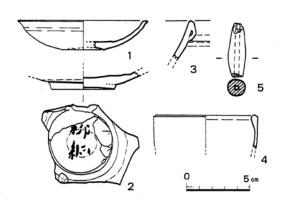
253 569号土壙出土遺物 4

IV面 E-09区で検出した不整形の土壙である。確認しえた一辺で、約210cm、深さ $8\sim18$ cmをはかる。

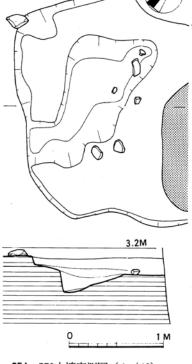
出土した遺物は、小片が多く、少量であった。土師皿・坏類を見ると、底部の切り離し技法

は, ヘラ切り技法と糸切り技法によるものとの両者がみと められた。

 $1 \sim 3$ は白磁である。1は皿, $2 \cdot 3$ は碗で,1を除いていずれも小片である。2は碗の底部である。やや楕円形を呈する円盤を貼り付けた外底部には,「柳綱」の銘がある。3は玉縁状口縁であるが,破断面には折り返しの痕が明瞭に見てとれる。4は褐釉陶器,5は土錘である。



255 570号土壙出土遺物 (1/3)



254 570土壙実測図 (1/40)

579号土壙

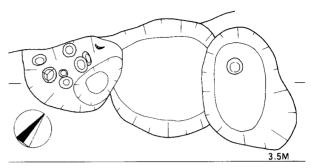
V面 D-13区で検出した 土壙である。長軸108cm, 短 軸84cm, 深さ48~52cmをは かる。土壙床面付近より土 師坏を主として遺物の出土 を見た。

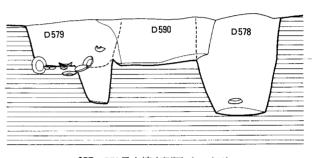
1~9は土師器である。 579号土壙の土師器には, 底部を糸切りするものは一 片もみられなかった。また,



256 579号土壙(東より)

すべて外底部には、板目圧痕が残っている。1・2は皿である。口径9.2 cm,器高1.35cmである。3~9は坏である。14.4~15.4cm,器高3.0~ 3.5cmをはかる。10は瓦器である。楠葉型瓦器境で、内面は密にヘラミガキ、外面は、上半をヨコナデ、下半を指頭で押圧する。色調は、外面黒灰褐色、内面灰褐色を呈する。復原口径は14.1cmをはかる。11は須恵器の坏である。底部をヘラケズリ、体部および内底部はヨコナデする。12~15は白磁の硫である。14は、幅広のうすい玉緑状口縁を呈する。

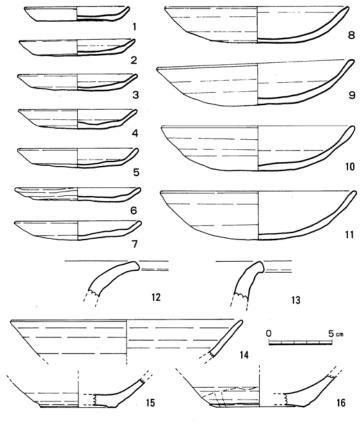




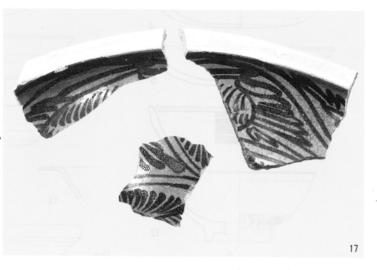
V面 D—13区で検出した 円形の土壙である。径195 ~215cm, 深さ99~134cmを はかる。井戸になる可能性 も考えられるが, 井筒は確 認しておらず, 土壙として 報告するものである。

遺物は、土壙の大きさに 比べると、比較的少ない。 1~11は, 土師器である。 582号土壙から出土した土 師器は、大半がヘラ切り底 (便宜的に粘土紐巻き上げ によるものを含む)で、糸 切り底はわずかに含まれる にすぎない。実測可能なも のでは、1が回転糸切り底 である。 口径8.4cm, 底径 6.2cm, 器高1.1cmである。 2~7は口径9.2~10.0cm, 底径6.6~7.4cm, 器高1.2 ~1.5cm, 8~10は, 口径 14.6~15.8cm, 器高2.9~ 3.9cmをはかる。12・13は 灰釉陶器と思われるもので, 灰白色のととのった胎土 に、うすく灰緑色をおびた テリ状の釉がのる。あるい は自然釉か。14~16は越州 窯系青磁碗である。17は黄

釉褐彩陶器の盤である。



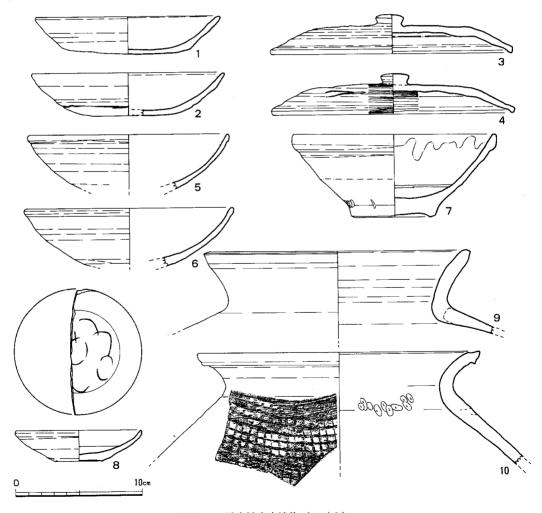
259 582号土壙出土遺物1 (1/3)



260 582号土壙出土遺物 2

V面 D-13・14区で検出した略円形の土壙で、径110cm前後、深さ35~55cmをはかる。

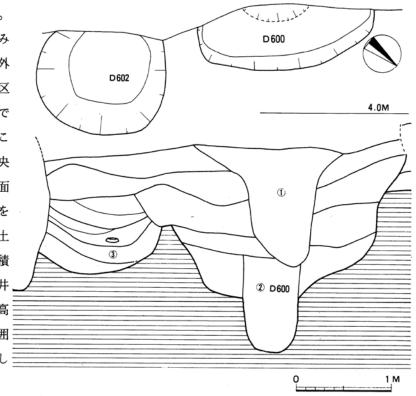
1・2は土師器の坏である。いずれも底部を回転糸切りする。 1の底部には、板目圧痕もみとめられる。口径14.7~15.3cm,器高3.0~3.35cm。この他,小片の為図化していないが,底部をへう切りするもの,粘土紐を巻き上げるものなどがある。 $3\cdot 4$ は,土師器の蓋である。明茶褐色を呈し胎土は精良で,内外面には横位のヘラミガキを施す。年代的には8~9世紀まで遡りうる遺物で,埋土に混入したものであろう。 $5\sim 8$ は,白磁である。 $9\cdot 10$ は須恵器である。9は外傾した頸部の端をヨコナデで平坦にととのえて口縁をつくるもので,体部内面には同心円文叩きをナデ消した痕がみとめられる。10は,口縁上面を凹線状にくぼませる。体部外面は格子目叩き,内面は同心円叩きをナデ消す。頸部内面にはヘラによる押しナデ痕跡が残る。



261 587号土壙出土遺物(1/3)

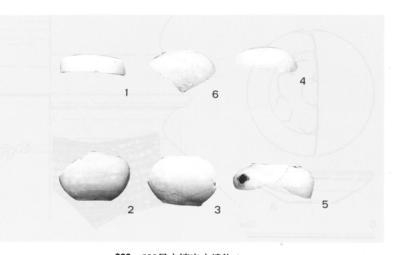
V面 D-11区で検 出した土壙である。 一部を確認したのみ で、大半は調査区外 に出ている。調査区 西壁の土層観察で は、井筒状のおちこ みが600号土壙中央 にみとめられ(壁面 は45°の安全勾配を とっているので、土 層断面も斜めに堆積 を切っている), 井. 戸である可能性が高 いが、調査した範囲 では井筒等は確認し えていない。

600号土壙からは 土師器(ヘラ切・糸 切り), 白磁等が出 土したが、注目され るのは, 白磁の小壺 等である。図示した 1~6は,白磁であ る。1は、蓋である。 うすく土色をおびた 白色の胎土に、乳色 をおびた透明釉を施 す。口唇から内面は 露胎である。径5.5 cmをはかる。 $2\sim6$



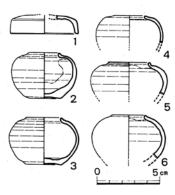
- ① 302 号土壙(中世Ⅱ期) ② 600号土壙(古代Ⅱ期)
- ③ 602号土壙(古代Ⅱ期)

262 600号土壙実測図 (1/40)



263 600号土壙出土遺物 1

は小壺である。 2 は白色のやや粗い胎土にうすく白濁した透明釉をかける。口径2.4cm,底径2.45cm,器高3.65cm。 3 は,白色精良な胎土に,うすく緑色がかった透明釉を施す。口径2.85cm,底径2.8cm,器高3.7cm。 4 は,灰白色のややあらい胎土に,うすく灰緑色をおびた透明釉をかける。 5 は白色で黒斑を持つやや粗い胎土に,うすく緑色かかった透明釉を施す。体部に褐色の鉄斑がとぶ。 6 は,灰色でやや粗い胎土に,うすく灰緑色をおびた透明釉をかける。



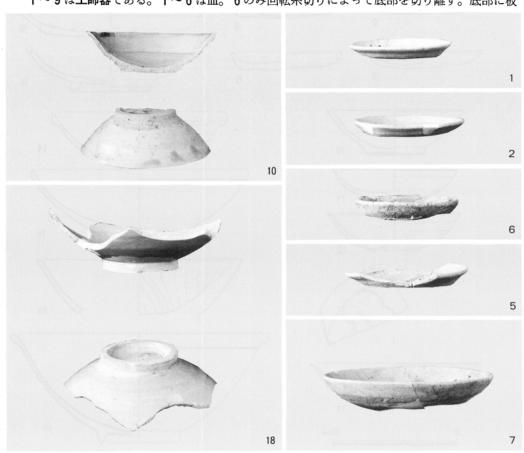
606号土壙

264 600号土壙出土遺物 (1/3)

V面 D─11区で検出した不整形の土壙である。

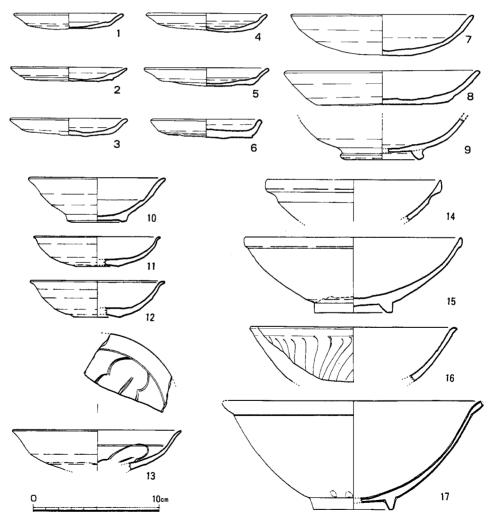
出土した土師皿・坏には、ヘラ切り底を持つもの(便宜的に粘土紐巻き上げのものも含む) と糸切り底のものとが混在している。

 $1 \sim 9$ は土師器である。 $1 \sim 6$ は皿。 6 のみ回転糸切りによって底部を切り離す。底部に板



265 606号土壙出土遺物 1

目圧痕を持つ。口径8.9cm,底径7.1cm,器高1.5cmをはかる。 1~5 は口径8.7~10.0cm,底径6.4~7.5cm,器高1.15~2.0cmである。 5 は底部にナデ調整を施すが,2~4 は板目圧痕がみられる。 7・8 は坏で,8 は底部を回転糸切りする。 7 は口径14.6cm,器高3.3cm,8 は口径15.2cm,底径10.4cm,器高2.75cmである。 9 は研磨土器で,内面・体部外面をヘラミガキ,体部下位から底部はヨコナデする。10~16は白磁である。10は小碗で,口径10.9cm,高台径4.0cm,器高3.6cmをはかる。11~13は皿である。13の見込みには,沈線で花弁が描かれている。14~16は碗である。17は青磁の碗である。紫灰色の胎土に,灰緑色の半透明釉が施される。釉はガラス光沢強く,気泡,氷裂がみられる。釉下の胎土は,化粧土状に白色を呈する。釉は全面に施され,畳付だけ釉を削り取る。いわゆる北方青磁である。耀州窯系か。

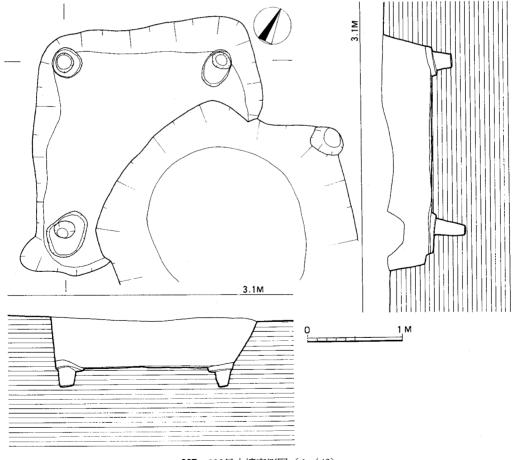


266 606号土壙出土遺物 (1/3)

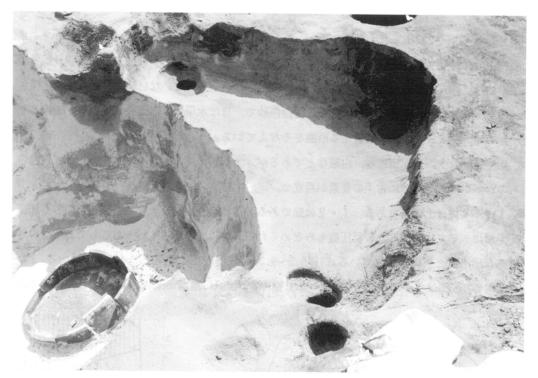
V面 E-10区で検出した土壙である。長辺240cm前後,短辺220cm,深さ52cm前後をはかる。II面検出の337号土壙(井戸)に切られている為,約4分の1を失なう。土壙床面の4隅(東隅は欠)には,柱穴がほられている。柱穴は,柱根部分(材は残っていない)で径16~18cm,深さ20~36cmをはかる。床面は,地山である黄白色砂で,ほぼ水平にそろえられている。規模こそ小さいが,竪穴式住居址とも言える形態をそなえている。

出土遺物は土師器, 須恵器, 白磁などであるが, 土師器の坏にヘラミガキを施した赤茶色の ものが多いなど, 全体に古手の要素が目立つ。

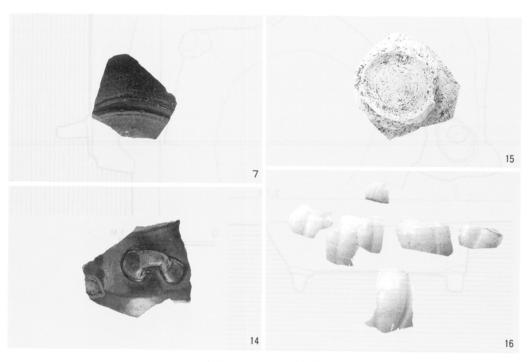
 $1 \sim 4 \cdot 13$ は土師器である。 $1 \cdot 2$ は皿である。 1 は粘土紐巻き上げで整形したのち外底部を平滑にナデて仕上げる。板目圧痕もみとめられる。 2 は,おそらくへラおこしであろう。外底部は平滑にナデ調整されている。口径 $8.5 \sim 9.5$ cm,底径7.8 cm,器高 $1.1 \sim 1.3$ cm をはかる。 3 は坏である。底部はヘラ切りで,内面はコテで整える。復原口径15.8 cm,4 は,おそらく地であろ



267 622号土壙実測図 (1/40)

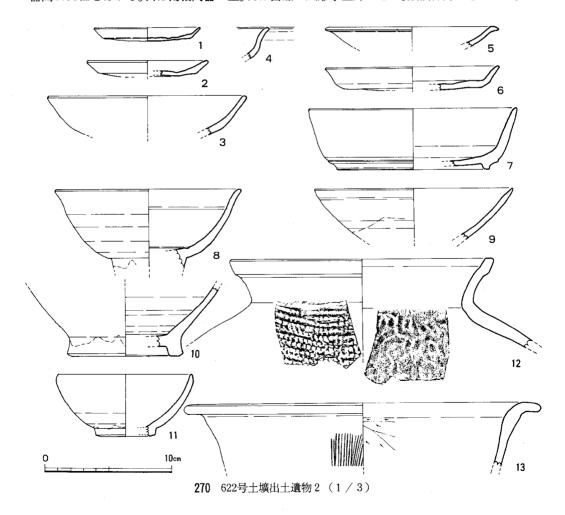


268 622号土壙(北より)



269 622号土壙出土遺物

う。口唇内側に一条の沈線をめぐらす。内外面ともョコナデ。胎土は微砂質ながら粒子がよく整い,茶色を呈する。焼成も良好。胎土,形態をみると在地産とは思われない。搬入品か。13は,鉢である。体部内面はケズリ・口縁部はョコナデ,体部外面はタテハケを行なう。5は緑釉陶器の皿である。灰白色で精良な土師質の軟胎に,光沢の強い淡黄緑色の釉を施す。内外面とも横位のヘラミガキを行なう。復原口径13.3cm。6・7・12は,須恵器である。6は皿,7は高台付坏,12は甕である。12は,体部外面を格子目叩き,内面を同心円叩き,頸部をョコナデし,口縁部をョコナデによって四角くおさめる。胎土は全体的に粗く,暗灰色を呈する。8~10は白磁である。8は碗で,灰白色を呈する気泡の多い粗い胎土に,透明釉をかける。高台は露胎となる。9は碗で,灰白色の粗い胎土に白色の透明釉をかける。口縁部を輪花につくるが,全体の数はわからない。10は壺で,灰白色の粗い胎土に乳白色の釉を施す。11は天目の小碗である。灰白色の胎土に,黒色の釉がかかる。高台のみ露胎となる。口径10.5cm,高台径4.7cm,器高4.95cmをはかる。14は褐釉陶器の壺。16は白磁の瓜形小壺片である。数個体分と思われる。

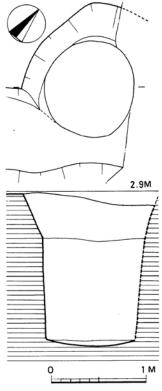


V面 E—08区で検出された土壌である。V面で遺構検出を行なった頭初は不整形の平面を呈していたが、ほり下げるに従がって円筒形の深い土壌となった。その形状から考えて、井戸であった可能性も考えられる。しかし、土壌の最下部の標高は、1.25mで、他の井戸が0.5~0.8mまで掘り下げていることを考えると、浅すぎると言える。少なくとも現段階では、標高1m前後で湧水はない。井戸として確認されている遺構が全て0.8~0.5m以下まで掘削している点を考えると、標高1mでは井戸として機能しなかったと思われる。

V面で検出した不整形土壙の部分では、半ば近くが調査区東に出てしまっており、その規模を知ることができない。円形土壙部分は、径96~100cm、深さ108~112cmをはかる。

出土した遺物の総量は多くはないが、完形品に近い様々の遺物が出土している。

 $1 \sim 3$ は、土師器である。626号土壙出土の土師皿・坏類には、底部を糸切りするものは1片も含まれていなかった。1は

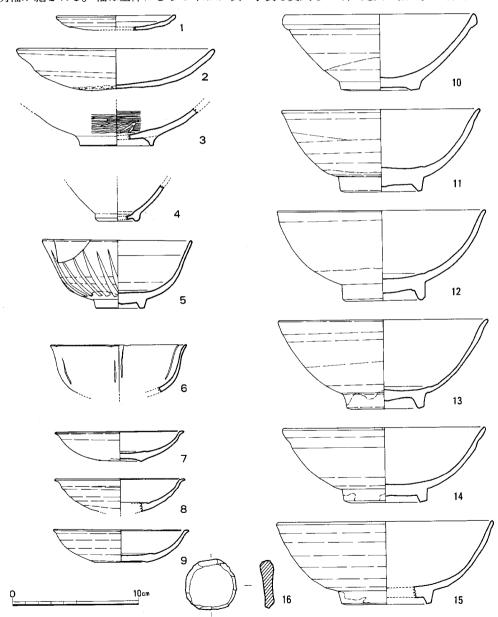


皿である。底部に板目圧痕が残る。口径9.6cm, 器高1.2cmを 271 626号土壙実測図 (1/40) はかる。 2 は坏である。粘土紐巻き上げで作られており、外底部に指頭圧痕がならぶ。外底部はナデて平滑に仕上げ、体部外面から口唇部はヨコナデする。内面はコテで削って、平滑にととのえる。ほぼ完形品であるが、ひずみが著しく楕円形を呈する。口径14.8~15.6cm, 器高3.35 cmである。 3 は高台付埦で、いわゆる研磨土器である。胎土は微砂質で精良、白褐色を呈する。



272 626号土壙(南から)

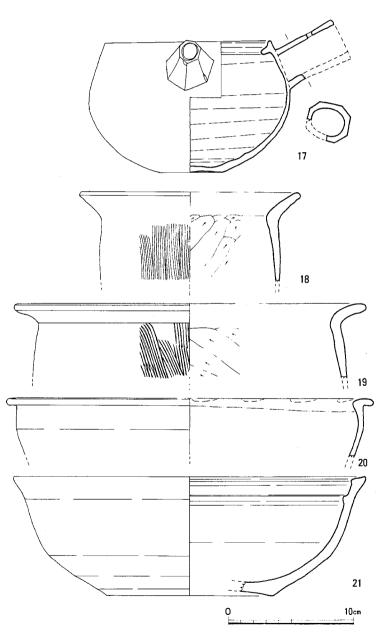
内面及び体部外面にヘラミガキ,高 台付近にョコナデ,外底部にナデ調 整を施す。内面のヘラミガキは,密 できわめて平滑に施され、単位すら みとめにくい。外面のヘラミガキも っとめにくい。外面のヘラミガキも を施されるが、単位ははっきりみ とめられる。なお,外面のヘラミガ キは、高台脇のヨコナデを切ってお り、高台貼付後にヘラミガキを行な ったことがうかがわれる。4は 高麗青磁である。くすんだ明灰色を呈するやや砂っぽい胎土に、淡く青緑色をおびた暗灰色の半透明釉が、比較的厚めに全面に施される。釉には、全面に氷裂がみとめられる。高台径3.6cm。 5 は、青磁の碗である。明灰色できめの細かい胎土に、明緑灰色の半透明釉が施される。体部下位から高台は、露胎となる。体部外面には、片切彫りで縦線が刻まれる。口径12.0cm、高台径3.9cm、器高5.5cm。 6 は青白磁の碗である。白色で精良な胎土に、うすく青白色をおびた透明釉が施される。釉は全体にむらなくかかり、氷裂も貫入もなく、光沢は強い。口縁部には、



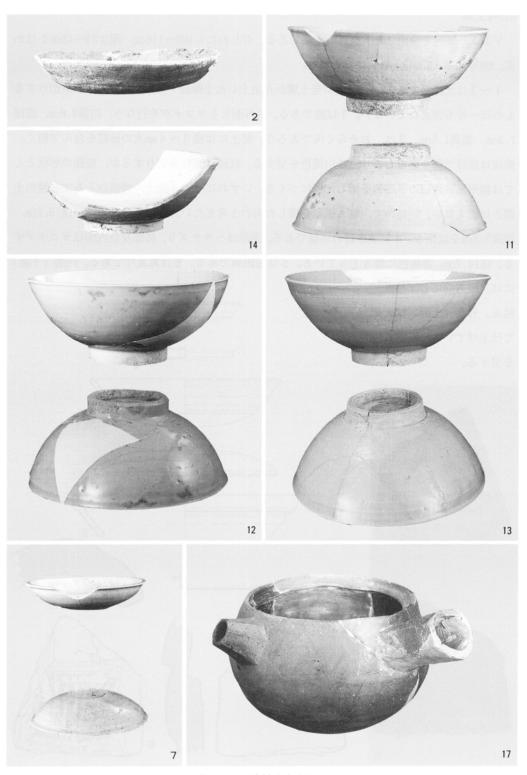
272 626号土壙出土遺物1 (1/3)

全周で6ヶ所の刻みをつけ輪花につくり、輪花の下の体部は外面から強く縦線を入れて凹ませる。復原口径10.9㎝をはかる。 $7 \sim 15$ は白磁である。 $7 \sim 9$ は皿、 $10 \sim 15$ は碗である。16は窯道具のハマである。胎土は砂まじりであらく、淡澄褐色を呈する。磁器質である。径4.0㎝前後、厚さ $0.8 \sim 1.1$ ءのをはかる。17は、陶器の急須である。ほぼ完形品。胎土は、微細な砂粒を含むものの比較的精良で、淡茶褐色を呈する。施釉は体部内面および注口部先端に施される。釉は

黒茶褐色を呈する。把 手部の上面には、目釘 穴風の径4㎜程の孔が 穿たれている。口径 13.3cm, 底径5.4cm, 器 高10.6㎝。18・19は土 師器の甕である。体部 内面はケズリ, 口縁部 はナデ、体部外面には タテハケが施される。 20は黄釉陶器の盤であ る。体部内面に黄褐色 の釉がかかる。胎土は 暗灰色で粗く、露胎部 ではテリがついて茶色 を呈する。口縁部上面 には、目痕がならぶ。 復原口径29.2cmをはか る。21は、無釉陶器の 鉢である。胎土は灰色 で, 径1 m程度の白色 砂粒を含み粗い。焼成 は良好で, 茶色を呈す る。内底部は磨滅し, 平滑になる。復原口径 28.0cm, 底径13.2cm, 器高9.5cm。



274 626号土壙出土遺物 2 (1/3)



275 626号土壙出土遺物 3

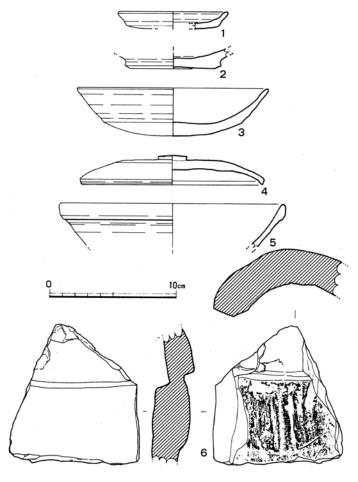
V面 E-06区で検出した不整形の土壙である。さしわたし108~116cm, 深さ24~43cmをはかる。68号井戸(353号土壙)に切られる。

 $1 \sim 3$ は土師器である。なお,637号土壙から出土した土師皿・坏類には,底部を糸切りするものは一片も含まれていない。1は皿である。内外面ともョコナデを行なう,口径8.8cm,底径7.3cm,器高1.5cm。2は,おそらく境であろう。胎土には径 $3 \sim 4$ mm大の砂粒を含んで粗く,焼成は良好で軽く焼きしまり,淡白褐色を呈する。底径は回転糸切りするが,底部の形状としては越州窯系青磁の平底碗を模した形につくる。いずれにせよ,胎土,焼成からみて在地の土器とは思えない。何処かで,輸入磁器を模したものと考えたい。3は坏である。口径15.2cm,器高5.8cmをはかる。4は3度器の坏蓋である。頂部はヘラケズリ,体部及び内面はョコナデする。径14.7cm。赤褐色に焼き上っている。5は白磁碗である。6は30 は31 に下面)

残る。外面(上面)はナデ て仕上げている。暗青灰色 を呈する。

には、縦方向にしぼり痕が



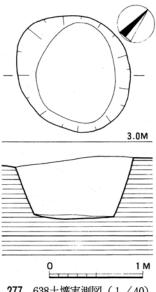


276 637号土壙出土遺物 (1/3)

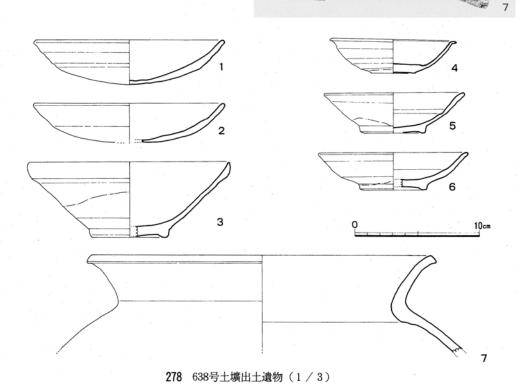
V面 E─08区で検出した円形の土壙である。径120~123cm, 深さ50~64cmをはかる。

1・2は土師器である。638号土壙出土の土師皿・坏は,底部 をヘラ切りするもの(粘土紐巻き上げを含む)と糸切りするも のとが混在している。糸切りのものは小片の為、図化できな かった。1・2の底部は、おそらくは布で、丁寧にナデて整形 痕を消して平滑に整えている。口径15.3cm, 器高3.1~3.55cmで ある。 $3 \sim 6$ は白磁である。3 は口縁部を折り返して幅の広い 玉縁につくった碗である。 $4 \sim 6$ は皿である。4 は平底、5・ 6 は高台を削り出すものである。7は須恵器の甕である。胎土 は灰色で、比較的良好、外面には緑灰色の自然釉がかかる。頸

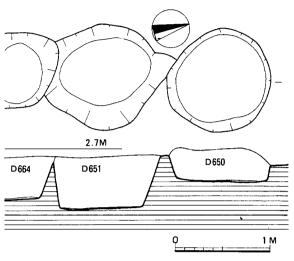
部から口縁部はヨコナデ, 体部外面は格子 目タタキ,体部内面は同心円文タタキが 残っている。復原口径28cmをはかる。



277 638土壙実測図(1/40)

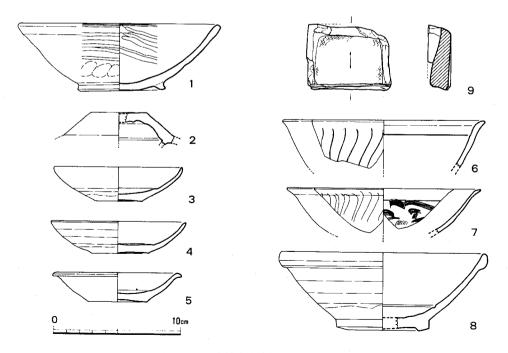


V面 E-06区より検出した円形の土壙で、径112~128cm、深さ56cm前後である。遺物の出土量は少ない。1は瓦器境である。内面はコテで整えた後へラミガキ、外面は体部上半をヘラミガキ、下半は指頭押圧のままで、高台付近はヨコナデする。ヘラミガキは幅広く、単位がつかみにくい。高台を残して内外とも炭素が吸着し、銀化する。在地産である。口径16cm、高台径7.4cm、器高5.35cm。2~8は白磁である。2は蓋で、灰白色のや



279 651号十塲実測図(1/40)

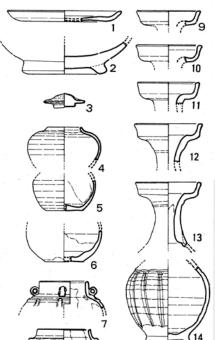
や粒子の粗い胎土に,灰緑色をおびた透明釉が施される。内面は露胎である。頂部径 $4.4 \, \mathrm{cm}$ 。 $3 \sim 5$ は皿である。 5 は,全面施釉後に底部の釉を削り取っている。 $6 \sim 8$ は碗である。 6 は体部外面に沈線による縦線文をもつ。 7 は,体部外面には縦線文を,内面には,櫛描文をあしらう。 9 は,石硯である。縁部は一部しか残っていない。陸の部分には,細い擦痕が多く入り,海の部分には墨が部分的に付着している。 表裏から磨り目を入れて, 折り取った痕跡が残る。



280 651号土壙出土遺物 (1/3)

V面 E─06区より検出した土壙である。長軸144cm, 短軸 108cm, 深さ24cm前後をはかる。

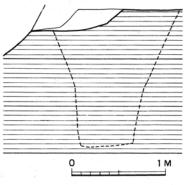
1・2は土師器である。1は皿で、底部は回転糸切りで切り離す。板目圧痕もみられる。口径9.1cm、底径6.6cm、器高0.9cm。小片の為図化していないが、他にヘラ切り、粘土紐巻き上げ等による土師皿・坏も出土している。2は境の底部であろう。幅のある高台を貼りつける。胎土は微砂質で、径2mm台の砂粒をところどころにまじえる。白褐色を呈する。底部は回転糸切りで、高台をナデ付けるとき、高台脇については糸切り痕をナデ消している。高台は実見すると、玉縁の白磁碗の高台にみられる外底のくりの浅いものに酷似する。おそらくは、白磁碗を摸倣したものと思われる。なお、内面はヘラミガキで平滑に仕上る。3・7は青白磁、4~6・8~14は白磁である。3は小壺の蓋である。



鍔部の下面(内 面)は露胎とな

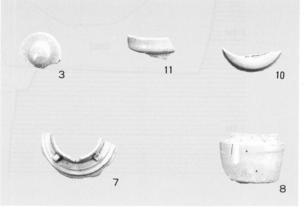
る。4~6は,

E66
D662
2.7M



281 662号土壙実測図 (1/40)

小壺である。内面と外底部は露胎である。 7 も小壺である。 頸部は短く立ち,頸の継ぎ目部に全周で 4 ケ所環をつける。 肩部には 2 段の段をつける。 体部は,縦走する沈線で, 瓜形に分割される。 8 は合子で

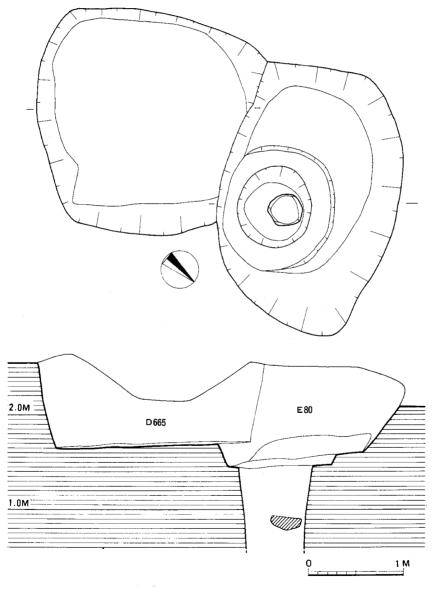


282 662号土壙出土遺物 (1/3)

ある。口唇部は,凹線状をなす。 $9 \sim 13$ は,盤口壺の口縁部および頸部である。口径 $5.0 \sim 5.4$ cmをはかる。14は,瓜形の小壺である。602号土壙片と接合することができた。体部を縦線で分割し,瓜形につくる。高台径3.0 cm,胴部最大径6.75 cm,現存高6.9 cmをはかる。

665号土壙

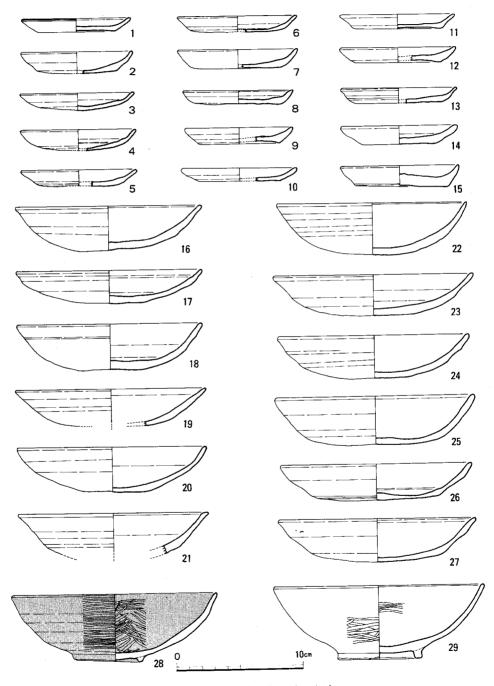
V面 E-03区より検出した大型の土壌である。平面形としては、いびつな方形状を呈す。220 cm \times 200 cm, 深さ88 \sim 100 cmをはかる。80号井戸に切られる。622号土壌の様な柱穴は存在しないが、壌底の標高は、157 \sim 168 cm と、ほぼ平坦にそろっている。何らかの生活的な機能を考えて



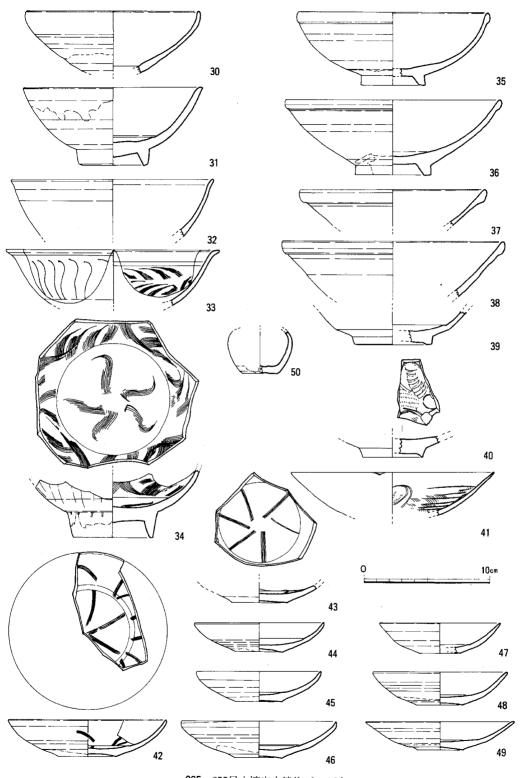
283 665号土壙実測図 (1/40)

もよかろうと思う。

 $1 \sim 27$ は土師器である。 $1 \sim 15$ は皿で, $8 \sim 15$ は底部を回転糸切りする。皿における回転糸切りとへラ切り(粘土紐巻上げを含む)の比率は,ほぼ半々である。 $1 \sim 6 \cdot 8 \cdot 10 \sim 13$ には,



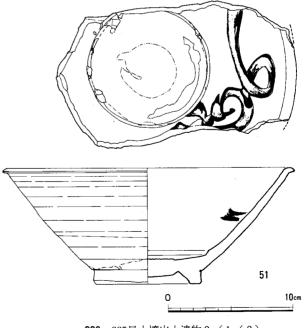
284 665号土壙出土遺物1 (1/3)



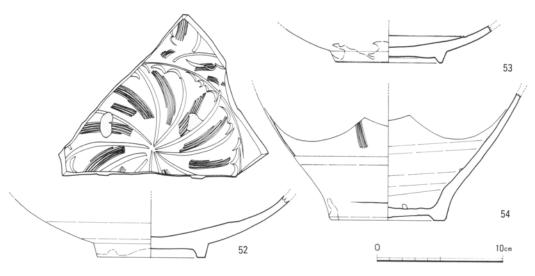
285 655号土壙出土遺物(1/3)

板目圧痕がみとめられる。1~7は、口径8.8~9.6cm、底径5.55~7.5cm、器高1.1~1.7cmをは かる。8~15は、口径8.8~9.6cm、底径5.8~6.9cm、器高1.05~1.5cmで、口径から見れば、糸 切り底とヘラ切り底との間に法量的な差はない。16~27は坏である。25・27は底部を回転糸切 りする。坏においては、糸切り底は全体の20%程度にとどまる。16~20·23~25には、板目圧 痕がみられる。16~24・26は、口径14.8~16.0cm、器高2.65~4.2cmをはかる。25・27は、口径 15,8~16.0cm, 底径9.55~10.5cm, 器高3.5~3.9cmである。28は黒色土器の埦である。内面の ヘラミガキは、やや乱雑に施される。口縁部内面はヨコナデして丸味をもたせている。外面は **構位のヘラミガキを密に施し、低平な高台を貼り付け、ヨコナデする。胎土は淡褐色を呈し、** 精良で、器壁は黒色~黒褐色である。596号土壙出土片と接合できている。口径16.35㎝、高台 径5.55cm, 器高5.5cm。29は瓦器 地である。体部内面は全面をヘラミガキするが、平滑で単位が つかめない。口縁部内面はヨコナデする。体部外面上位から口縁部にかけてはヨコナデ体部外面 中位はヘラミガキ、体部下位から高台はヨコナデし、外底部はケズリを施す。胎土は精良で灰 白色を呈す。内面には炭素が吸着し銀化して光沢を持つ。口径16.9cm, 高台径6.8cm, 器高5.9 cm。30~40・42~54は白磁, 41は青白磁である。30~41は碗である。33・34は, 体部外面に沈 線による縦線文を、内面には櫛描文を施す。39は、腰折れの碗である。白色で緻密な胎土に透 明の釉を施す。高台は畳付から内側を削り、露胎となる。高台径6.1cm。40は、見込みに片切彫 りと櫛目文で意匠をあしらうが、小片の為図柄はわからない。高台の畳付から内側は露胎とな

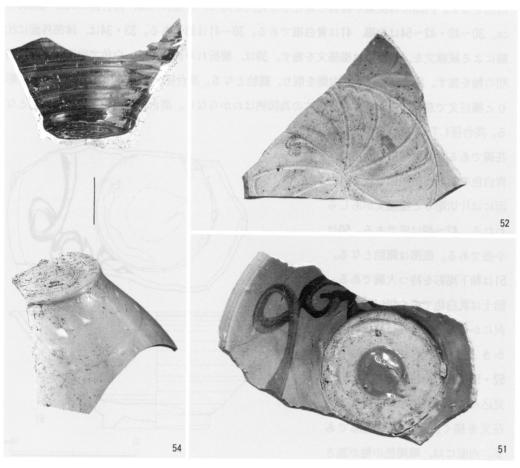
る。高台径4.7cm。41は青白磁の輪 花碗である。白色精良な胎土に, 青白色をおびた透明釉を施す。内 面には片切彫りと櫛描文があしら われる。42~49は皿である。50は 小壺である。底部は露胎となる。 51は釉下褐彩を持つ大碗である。 胎土は乳白色でやや粗い。釉は光 沢にかける。見込みは輪状に釉を かきとり,高台は露胎となる。 52・53は大形の浅鉢である。52の 見込みには,片切彫りと櫛描文で 花文を描く。54は壺の底部であ る。内面には,暗褐色の釉が施さ れている。



286 665号土壙出土遺物3 (1/3)



287 655号土壙出土遺物 4 (1/3)



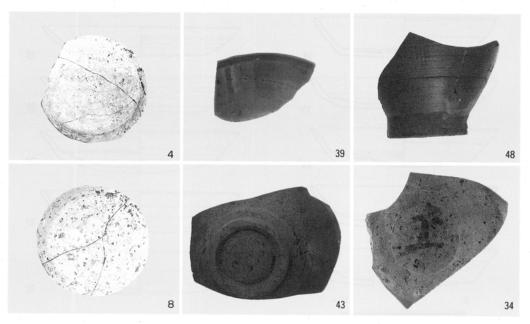
288 655号土壙出土遺物 5

② 井戸

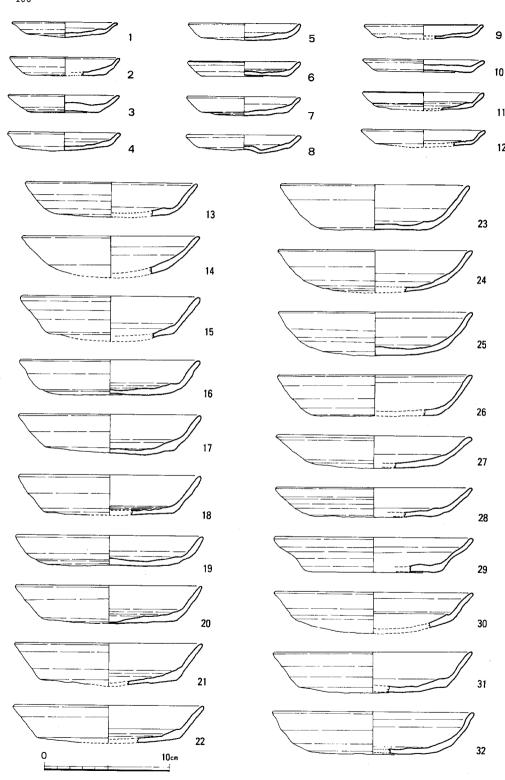
74号井戸

V面 E─09区より検出した井戸である。大半が調査区外に出るので、規模は確認できなかった。

1~32は土師器である。土師皿・坏はヘラ切り底がほとんどで、糸切り底はわずかにまじるにすぎない。1~12は皿である。5・10の底部は回転糸切りで4・5・8・10の底には板目圧痕がみられる。口径8.5~10.0cm、底形5.8~7.9cm、器高1.0~1.5cm。13~32は坏である。26・29・30は底部を回転糸切りする。口径13.8~16.1cm、底径9.0~12.6cm、器高2.4~3.5cmをはかる。33~48は白磁である。33は、小壺の蓋である。鍔部から下面は露胎となる。34~38は、皿である。34は、全面施釉の後、底部を削り取って露胎とする。この露胎部分に「上」の墨書がなされている。39~45は碗である。44の見込みは、体部から段をなくして一段低く作られている。46~48は、壺である。49は、越州窯系青磁の碗である。見込みには、重ね焼きの目痕が残る。全面施釉。50は高麗青磁の碗である。胎土は淡灰色で細かい砂を含む。釉は、青味をおびた暗灰色である。外面の釉は、熱を受けて発泡している。火災にあったものと考えられる。復原口径14.0cm。51・52は、天目茶碗である。器形的法量的には類似するが、細部で異なり、別個体と考えられる。51の胎土は、灰色で砂っぱく、やや粗めの感がある。粒度はととのう。52の胎土は、淡灰褐色を呈する他は、51と似る。釉はいずれも、光沢の強い黒茶色である。51は復原口径12.7cm、951号ピット出土片と接合できている。52は、復原口径12.1cmをはかる。53は、

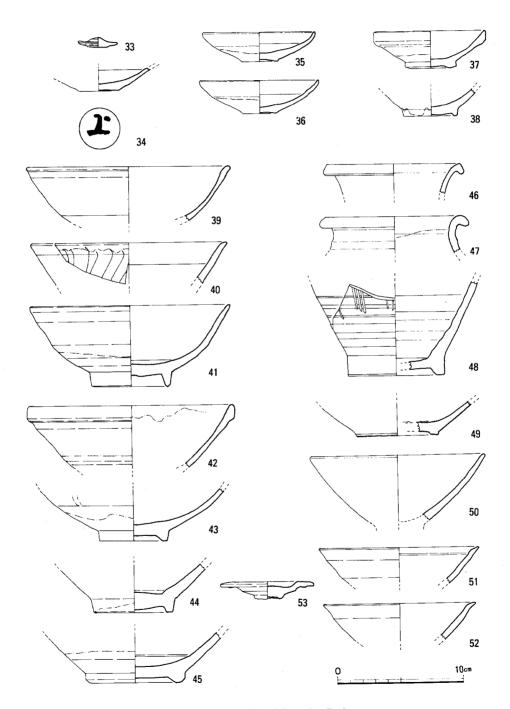


289 74号井戸出土遺物 1



290 74号井戸出土遺物 2 (1/3)

褐釉陶器の蓋である。灰白色で、白色・黒色の微砂を含む胎土に、暗褐色の釉を施す。鍔部に 穿孔があるが、破片のため、その数はわからない。鍔部の下面は露胎となる。

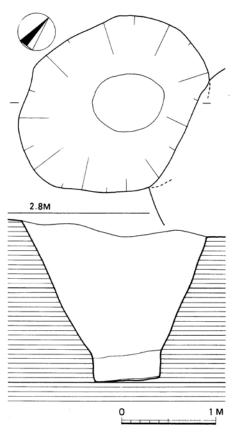


291 74号井戸出土遺物 3 (1/3)

78号井戸

V面 F—03区より検出した井戸である。掘りかた は長径212cm, 短径180cmの楕円形, 井筒部分は長径 72cm, 短径60cmをはかり, 深さは検出面から164cmま で確認している。

1~5 は土師器である。1・2 は皿で、粘土紐巻 き上げで整形している。外底部に板目圧痕がつく。 内底部はナデ、体部はヨコナデする。口径9.1~9.8 cm,底径6.5~6.85cm,器高1.1~1.45cm。3・4 は坏である。3 は粘土紐巻き上げで、外底部には指頭圧痕がならび、その上をナデて平滑に整える。内面はコテで削る。口縁部内面から体部外面上半は、ヨコナデ。口径15.2cm,器高3.25cmをはかる。4 の底部は回転糸切りで、板目圧痕がのこる。内底部はナデ、体部は内外面ともヨコナデする。口径15.5cm,底径9.8cm,器高3.35cm。5 は高台付境であろう。高く、外方に踏ん張って高台をナデ付ける。高台径8.6cm。6~19は白磁である。6~8 は皿である。8 の見込みには、沈線による線描文がみられる。9~18は碗である。9の体部外面には、縦線文がひかれる。18



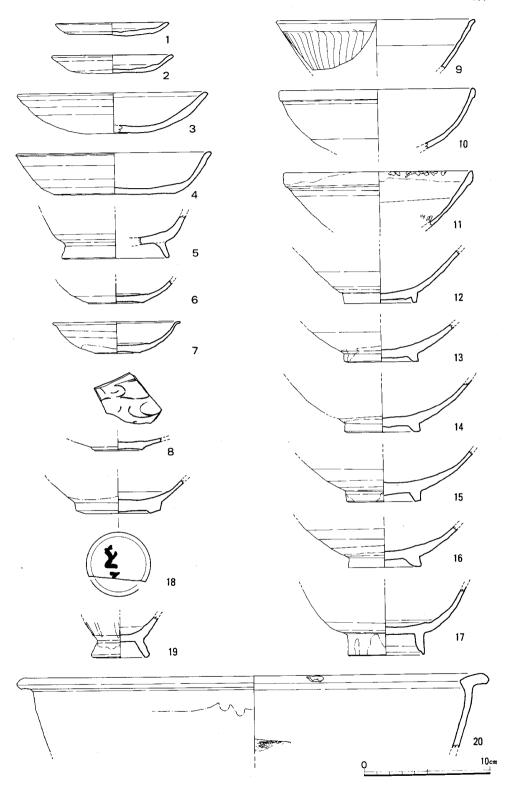
292 78号井戸実測図(1/40)

の高台内には、墨書がみとめられる。下方を欠くので墨書の全文はうかがえないが、字配りからみて、仮名文字 2 文字と思われ、「を□」と解読できる。 碗の器形としては、おそらく幅の太い玉縁口縁を持つタイプであろう。 19は、 瓜形小壺の底部片である。 白色の細かい胎土に、 うす



293 78号井戸出土遺物 1

く緑をおびた透明釉を施す。高台外面下半から 内側は露胎となる。高台内面と高台円底部は回 転ケズリされる。高台径4.6cm。20は黄釉陶器の 盤である。胎土は灰色で砂粒を多く含み粗い。 釉は淡黄緑灰色で,全体に氷裂がはいる。体部 外面の上位から内面まで施釉される。露胎部は 赤褐色を呈する。口縁部上面には,重ね焼きの 痕跡と思われる付着がある。復原口径37.6cmで ある。



294 78号井戸出土遺物 2 (1/3)

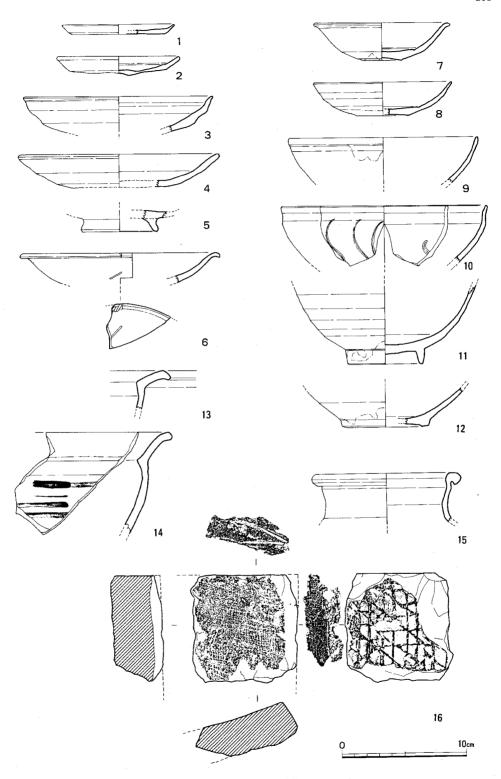
82号井戸

V面 F—02区より検出した井戸で、81号井戸を切り、83号井戸に切られている。ほりかたで径160cm前後、井筒で径50cm前後をはかり、深さは220cm前後である。

1~5は土師器である。1・2は皿で、いずれも底部をヘラ切りする。2の外底部には板目 圧痕もみられる。口径9.0~9.8cm、底径7.4~7.6cm、器高0.8~1.6cmをはかる。3・4は坏で ある。いずれも、底部はヘラ切りする。口径15.0~16.0cm、器高2.8cm程度(4)である。この他、 底部を回転糸切りする皿・坏も出土している。5は高台部分のみの破片である。6は緑釉陶器 の皿である。暗灰色を呈する須恵質の硬胎に、鮮緑色の釉が厚めにかかる。口唇部外面に細沈 線による刻み文様があり、輪花の可能性もある。また、体部外面に沈線が一本みとられるが、 意識的につけれているのかどうかは不明である。体部は、釉のためはっきりとはわからないが、 ョコナデを施していると思われる。復原口径15.9cm、7~12は白磁である。7・8は皿、9~ 12は碗である。13~15は陶器である。13は盤で、淡白色の粗い胎土に、淡緑灰色の釉を施す。 内外面とも氷裂がみとめられ、光沢は純い。14も盤で、黄味を帯びた灰白色の胎土に淡緑灰色 の釉を施す。褐彩は淡黄褐色を呈する。15は壺の口縁である。灰色の、比較的キメ細かい胎土 に暗緑灰色の施釉をする。16は平瓦片である。内面(上面)は布目、外面(下面)は格子目タ タキである。



295 82号井戸 (左…81号井戸, 南東より)



296 82号井戸出土遺物1 (1/3)

(7) 古代 I 期の遺構

① 溝状遺構

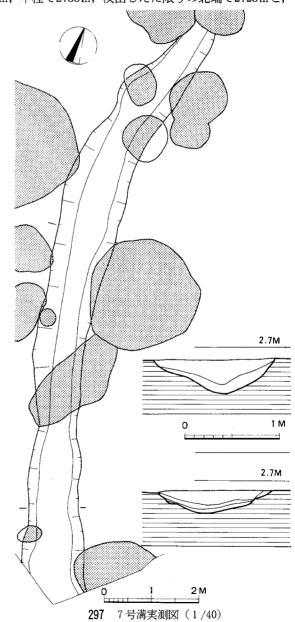
7号溝

V面 $F-01 \cdot 03 \cdot 04$ 区において検出した溝である。延長にして、13.5m分を検出した。南から北に、ゆるく孤を描きながらのびていく。溝幅は、最大で134cm、最小で68cm、深さは $12\sim32$ cmをはかる。溝底の標高は、南端で2.43m、中程で2.33m、検出しえた限りの北端で2.23mと、

南から北へゆるく傾斜して下っていく。溝の断面は、おおむね浅い U字形を呈する。

溝の埋土は、大きく上・下の2層にわかれる。上層は、暗褐色砂質土層、下層は暗褐色砂質土に白色砂のまじった層である。堆積状況は、この溝が自然に埋っていったことを示している。

出土遺物は少量かつ小片ばかり で、図示できたのはわずか3点にと どまった。1は須恵器の坏である。 胎土は精良で堅緻に焼き上り、暗赤 褐色を呈する。体部外面の高台脇は ヘラケズリ,他はヨコナデ整形す る。口径18.1cm、高台径10.6cm、器 高4.8㎝をはかる。 2 は灰釉陶器の 瓶の底部である。灰白のやや粒度の あらい胎土に、淡灰色の釉がうすく かかる。内底部に落ちて溜った釉 は、緑灰色を呈する。体部外面はへ ラケズリ,外底部には板台状の圧痕 がつく(土師器などに見られる、い わゆる板目圧痕とは異なる)。内 面はヨコナデを行なう。復原底径





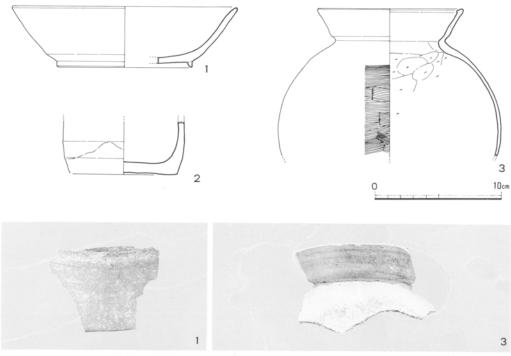
298 17号溝(南西より)



299 7号溝(南より)

8.6cmをはかる。 3 は土師器 の甕である。体部外面はヨコ ハケ,体部内面はケズリ,肩 部から口縁部内外面をヨコナ デする。復原口径11.7cm。

7号溝の年代は、出土遺物が少ない点から判断しがたい。 上述の1は、下っても9世紀前半代であろう。2は、11世紀前半頃であろうか。3は、古墳時代にまで遡る。7号溝が、検出した範囲内で全ての遺構に切られている点を考えると、少なくとも11世紀後半まで下すことは無理である。11世紀前半以前と考えたい。



300 7号溝出土遺物 (1/3)



301 88号井戸(南東より)

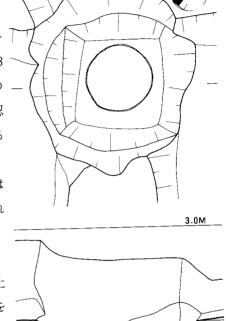
② 井戸

88号井戸

る。

V面 E—09区より検出した井戸である。掘りかたは方形を呈する。井筒は、細長い板材を丸く立てならべたもので、タガ等は検出されず、桶とは考えられない。ただし、板材は朽ちて遺存状態は悪く、十分な検討はできなかった。掘りかたは、一辺140~160cmをはかり、井筒の木質を検出したレベルでは、88 cm四方の略正方形をなす。井筒は、径約70cm、木質の長さは、42cmまで確認できた。遺構検出面から、確認しえた限りで、深さ216cm、最下部の標高は0.7mであ

1~7は土師器である。1・2は皿である。底部は へラ切りする。1の底部には、板目圧痕もみとめられ る。口径8.7~9.0cm、底径6.8cm、器高1.1~1.55cm。 3は坏である。ヘラ切り底で、体部外面はヨコナデ、 内面はコテで平滑に仕上げる。4は大皿である。胎土 には小砂粒を含むものの精良で、焼成も良く赤茶色を 呈する。外底部及び体部外面は横位のヘラミガキを密 に施す。口縁部外面はヨコナデ、内面には放射状の暗 文が入る。年代的には遡る資料である。5は坏であろ うか。砂粒をほとんど含まない胎土で、白褐色を呈す る。口縁部をヨコナデ、他をナデ調整する。白色系土 師器で、搬入品であろう。6・7は研磨土器である。 内外面とも密にヘラミガキを施すが、その単位ははっ きりしない。8は黒色土器の境である。内外面とも密 にヘラミガキし、つやを持つ。9は、越州窯系青磁の



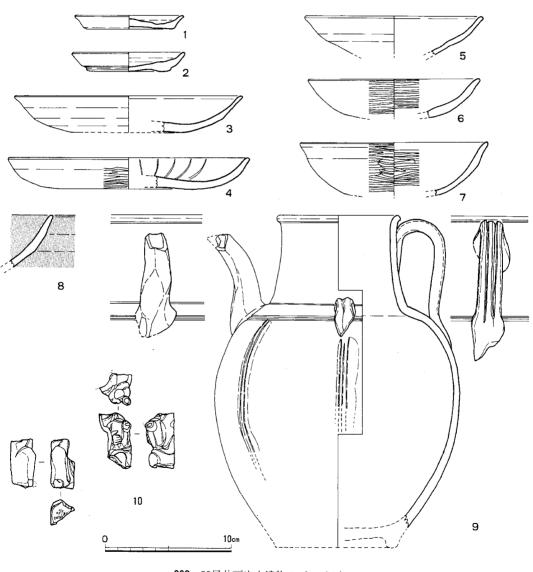
302 88号井戸実測図(1/40)

1 M

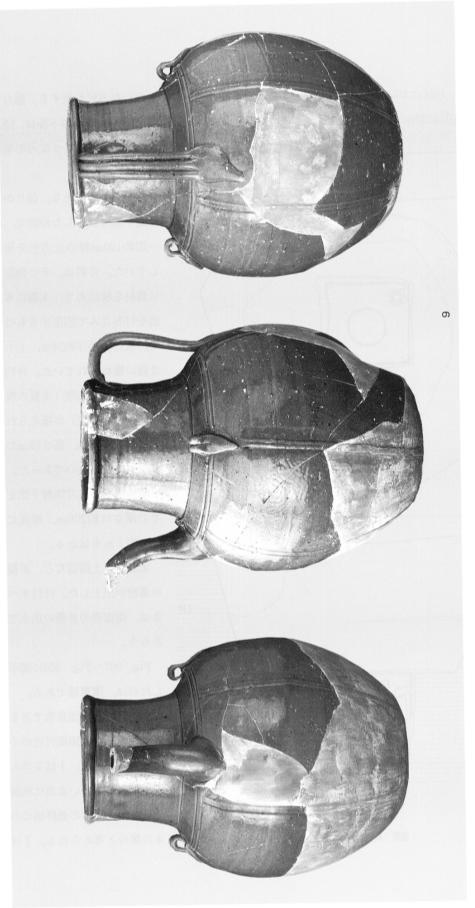
水注である。88号井戸埋土の上半と下位とから、バラバラに分れて出土した。残念ながら、底部を欠いている。胎土は、青灰色もしくは灰褐色を呈し粒子は密で、精良である。釉は全面に施され、外面は緑褐色、内面は黄緑褐色で、わずかに貫入がみとめられる。体部には片切彫で縦線を垂下させ、全周を六区に分つ。瓜形水注の流れを汲んだ分割であろう。胴部最大径は、体部中位よりやや上にある。体部と頸部とは一条の沈線を介してつながる。頸部はゆるく外反しつつ内傾して立ちあがり、端部は丸味を持たせておさめ、口縁とする。把手の外面には、2

条の沈線がはいる。口径9.4cm,胴部最大径19.35cm,遺存高24.75cmである。10・11は白磁の水滴である。同一個体と思われるが,接合はできない。白色のキメの細かい精良な胎土に,ガラス光沢の強い透明釉をまんべんなくかける。11の底面は露胎となるが,ここには目の細かい布目がみとめられる。意匠としては人物が右膝を立ててすわり,両手で左脇に水注をかかえている像であると思われる。10が,水注を抱えて左脇付近から左膝,11が立てた右脚にあたる。潮州筆架山の出土資料の中に類品がある(『潮州筆架山宋代窯址発掘報告』 文物出版社 1981年)。

88号井戸の年代については,11世紀中頃(後半代でも早い時期)を考えたい。

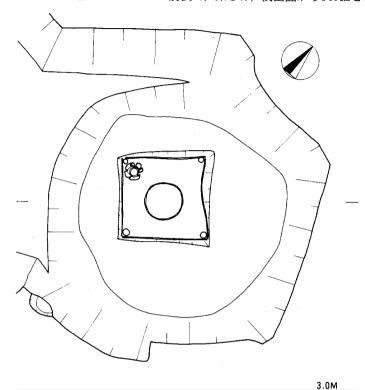


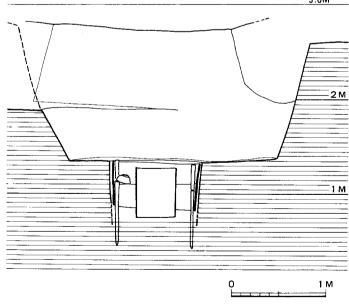
303 88号井戸出土遺物 1 (1/3)



89号井戸

V面 E─10区において検出した井戸である。掘りかたは、ややいびつな方形を呈する。掘りかたの一辺は205cm×250cm前後で、深さは、検出面から140cmをはかる。掘りかたの下面は、径





305 89号井戸実測図 (1/40)

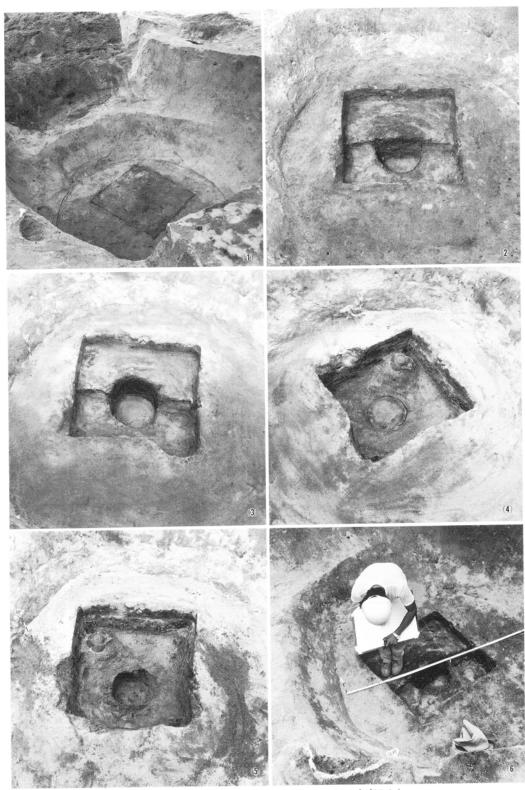
215cm前後のいびつな円形を 呈する。

井筒は方形である。掘りかた最下面で検出した段階で,一辺約100㎝程の正方形を呈していた。井筒は,その側に板材を横にあて,4隅に木杭を打ちこんで固定するもので,板材の幅は約24㎝,上下2段に重ねられていた。井筒中央部には,曲物(木質の痕跡のみから推定)が裾えられていた。径42㎝,高さ52㎝の曲物で,底は抜いてあった。V面検出面から井筒最下部までの深さは約200㎝,標高にして約1mをはかる。

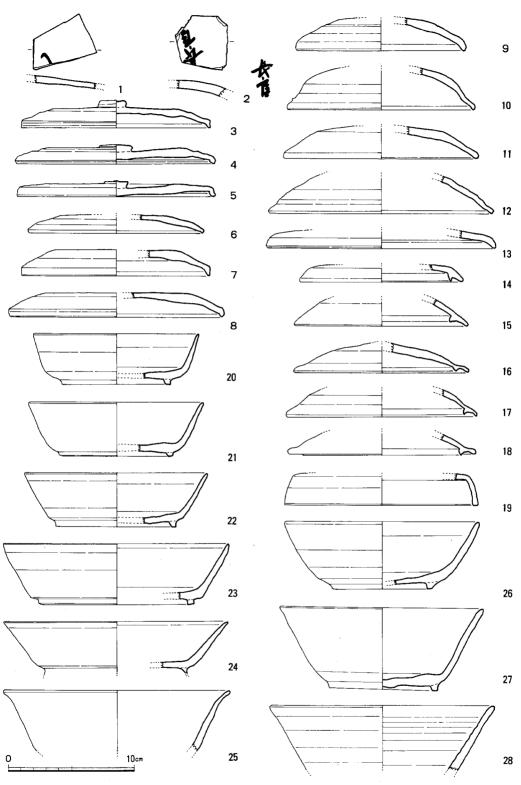
須恵器・土師器など、多量 の遺物が出土した。注目すべ きは、焼塩壺の多量の出土で あろう。

Fig. 307~Fig. 308に図示 したのは**, 須恵器**である。

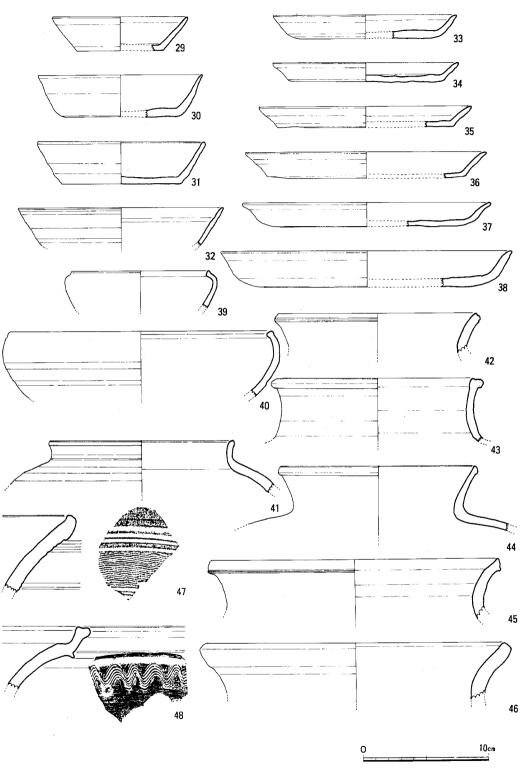
1・2は、墨書須恵器である。 いずれも坏蓋の頂部付近の小 片と考えられる。1は文字の 大半を失なっている為に判読 できない。漢字の最終画のハ ネの部分と考えられる。2は



306 89号井戸((1)・(4)-東より,(2)・(3)・(5)は南東より)

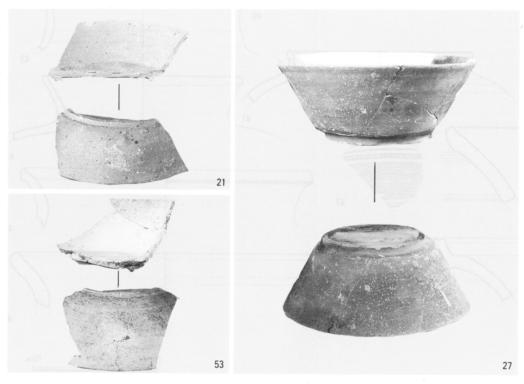


307 89号井戸出土遺物 1 (1/3)

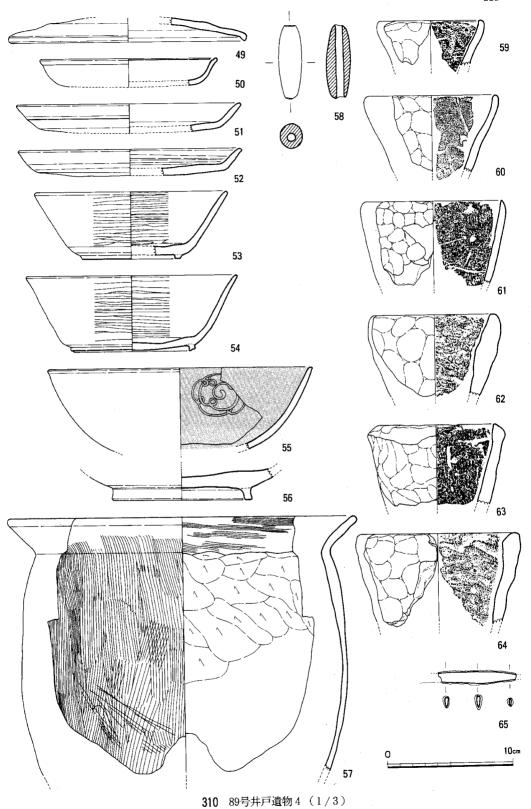


308 89号井戸出土遺物 2 (1/3)

「長官」と墨書されている。前後を欠くので、何の「長官」なのか、またはこの後に言葉が続くのかは、不明である。 $3 \sim 19$ は、蓋である。 $3 \sim 8$ は、蓋の端部を明らかに下方に折りまげるもの、 $9 \sim 13$ は、端部がゆるくカーブして下方を覆うもの、 $14 \sim 18$ は、端部の内側に、小さなかえりのつくものである。 19は、壺の蓋であろう。 $20 \sim 28$ は、高台付坏である。高台は、体部が立ちあがる部分から、やや底部側に入った位置につけられる。高台はいずれも低平なものであるが、 24の高台は、極めてうすくのびている。 27は、井筒の木枠に接して、土圧でつぶれた形で出土したものである。 調整は全面にわたってョコナデによってなされる。 口径16.2cm、高台径8.65cm、器高6.7cmをはかる。 8世紀後半から 9世紀初頭にかかろうという時期幅の中におさまる遺物である。 $29 \sim 32$ は、坏である。 $33 \sim 38$ は、皿である。形態的には鋭く外反する体部を持つもの($34 \cdot 35 \cdot 36$)と、ゆるく内湾し、口縁部のみ外反するもの($33 \cdot 37 \cdot 38$)とがある。 $39 \cdot 40$ は鉢である。 41は短頸壺である。 頸部は体部との間に鋭い稜はつくらず、ゆるく外反気味に折り返して、ほぼ垂直に立ち上る。 $42 \sim 46$ も壺の口縁である。 $47 \cdot 48$ は、大甕の口縁部である。いずれも口径が大きすぎて、出土した破片からでは口径復原は不可能であった。 47は口縁部復合口縁がた呈する。その口縁直下に櫛描波状文を配する。 48の口縁部は復合口縁状を呈する。その口縁直下に櫛描波状文を配する。



309 89号井戸出土遺物 3



 $49\sim64$ は土師器である。49は坏蓋である。 $50\sim52$ は皿で、内外面とも密にヘラミガキを施さ れる。赤褐色を呈する。53・54は高台付坏である。胎土はキメが細かく均質で、赤褐色を呈す る。内外面とも密に横位のヘラミガキを施し、高台脇はヨコナデする。55は、内黒土器である。 胎土には細かい砂粒を含み(わずかに径1㎜大の砂粒もまじる),微細なキンウンモも含む。淡 茶褐色である。内外面とも密にヘラミガキを施すが,その単位は,はっきりとつかめない。体 部内面には、ヘラで花文様の暗文を描く。内面は炭素吸着の為、黒灰色を呈する。56は土師器 の高台である。57は、甕である。27の須恵器高台付坏と重なって、坏の下から出土した。体部 外面にはススが付着し、煮沸に用いられたことが知られる。胎土は、径1~2㎜の砂粒を多く 含み粗い。体部内面は,下から上ヘケズリ,口縁部内面はヨコハケの上からヨコナデ.口縁部・ 外面はヨコナデ,体部外面はタテハケによって整形する。復原口径は,17.8㎝をはかる。58は 土錘である。長さ5.9cm, 最大径1.95cmである。59~64は, 焼塩壺である。焼塩壺片は, きわめ て多量に出土している。比較的破片の大きいもののみを実測したが、その中から更に、口径の 推定できる口縁部片のみを取り上げた。いずれも体部外面には指頭圧痕を,内面には絹目をと どめている。焼成の具合によって、茶色の土師質のものから灰色を呈して須恵質に近くなるも のまで、様々である。図示したものは、口径8.6~11.0cmをはかる。

65は、鉄器である。刀子片と思われる。研ぎ減りの為か、区などははっきりしない。

89号井戸の作られた年代を示すのは、井筒脇におかれていた、27の須恵器坏である。それに よると、8世紀後半~9世紀初頭を考えられる。他の須恵器の特徴もこれを支持している。ま た,上述の様な焼塩壺は,8世紀代に出現し9世紀中頃には姿を消すとされている(森田勉「焼 塩壺考」『大宰府古文化論叢』下巻 吉川弘文館 1983年)。55に示した内黒土器が,要素とし ては時期の下る可能性があるが、総体として見た場合、89号井戸が設けられたのは奈良時代末 から平安時代初めにかかる時期と考えてよかろう。

③ 柱穴状小土壙

1022号ピット

V面 D─12区で検出したピットである。径52cm、深さ10~20cm をはかる。

311 1022号ピット出土遺物

緑釉陶器が出土した。胎土は暗灰褐色の硬胎で、微砂をところ どころに含み、全体にきめが細かいとは言えない。釉は濃緑色で むらをもって施釉される。整形は、ヨコナデによる。高台径6.2cm。大手前女子大学の前川要氏 の御教示によれば、美濃東濃地方の製品で、10世紀後半のものとのことである。

1054号ピット

V面 E-10区で検出したピットである。径42cm, 深さ56cm をはかる。

緑釉陶器が出土した。胎土は黄灰褐色を呈する土師質の硬 胎で、緑黄色の釉がうすくかかる。畳付から外底部は露胎と なる。整形はヨコナデによってなされる。高台は削り出し高

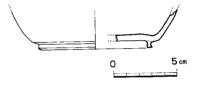
312 1054号ピット出土遺物

台で, 畳付は内面に向って傾斜する。口径12.75cm, 高台径5.7cm, 器高4.5cmである。

1107号ピット

V面 E-10区で検出したピットである。検出後、雨に あって砂が崩れ、消滅してしまった。

須恵器の高台付坏が出土している。内底部中央付近をナ デ、体部から外面をヨコナデ調整する。高台は付け高台で ある。高台径12.0cmをはかる。

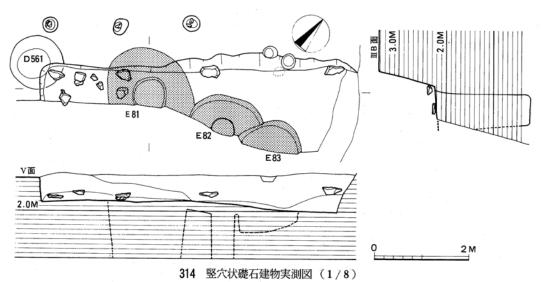


313 1107号ピット出土遺物

(8) その他の遺構

① 竪穴状礎石建物

V面 F-02区で検出した建物址である。竪穴住居址状に方形の竪穴をほりくぼめている。床面には、礫を平坦面を上に向けて並べている。方形のほりかたの一隅を検出しただけで、その規模等については全くわからないが、-辺660cm以上であると考えられる。ほりかたの深さは80 cm前後をはかるが、 \mathbf{II} B 面調査時にこの掘りかたの位置で方向を同じくして土層の変化を把えており、 \mathbf{II} B 面からの掘りかたとすると深さ125cm前後となる。また、 \mathbf{II} B 面で、建物礎石とほぼ対応する位置に柱穴を検出しており、庇をかけていた可能性が考えられる。14世紀頃か。



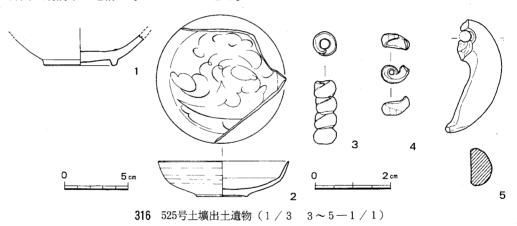
315 竪穴状礎石建物(南東から)

② 525土壙

4面 E─08区で検出した土壙である。古代Ⅱ期に含まれる土壙であるが、ガラス玉類の未製品が複数点出土しており、ガラス鋳造にかかわる土壙と思われるので、特別に取り上げた。

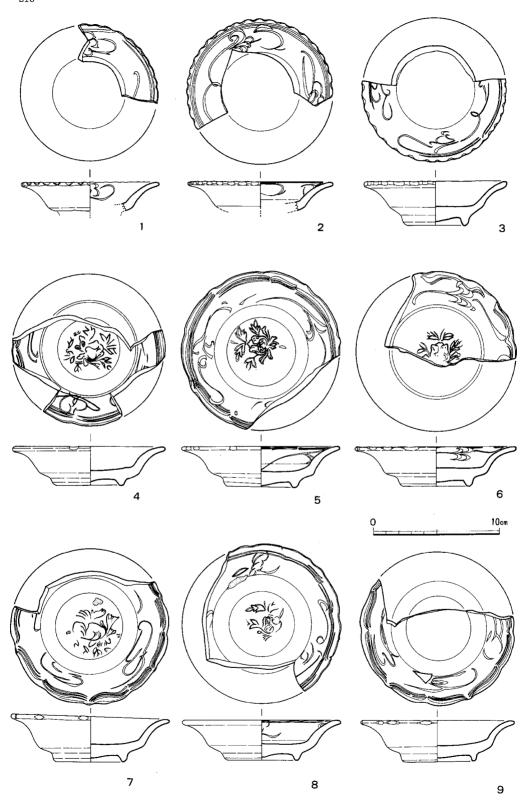
出土遺物は小片が多く,図示できたものは非常にわずかである。 1 は越州窯系青磁の碗である。褐色がかった緻密な胎土に,灰黄緑色の不透明釉が施される。高台畳付のみ露胎となる。見込みには全周で 6 ケ所の目痕がみとめられる。 2 は白磁の皿である。見込みに沈線文がみられる。 $3 \sim 5$ は,ガラス製品の未製品である。 $3 \cdot 4$ は小玉で, 3 は 4 つ連ったまま, 4 は型がくずれたものと思われる。 5 は勾玉である。頭部の約 2 分の 1 を欠く。端部はなお伸びる様相を示し,これが鋳型の湯口につながるものと思われる。 3 は明緑色, $4 \cdot 5$ は明青緑色を呈し,透明である。 5 は内部に気泡が多くみられる。

これらと共に出土した土師器片には、糸切り底のものはみあたらなかった。また、525号土壙を切っている526号土壙には、糸切り底の土師器が数点まじっており、これらの点を総合すると古代Ⅱ期前半の遺構と考えることができる。

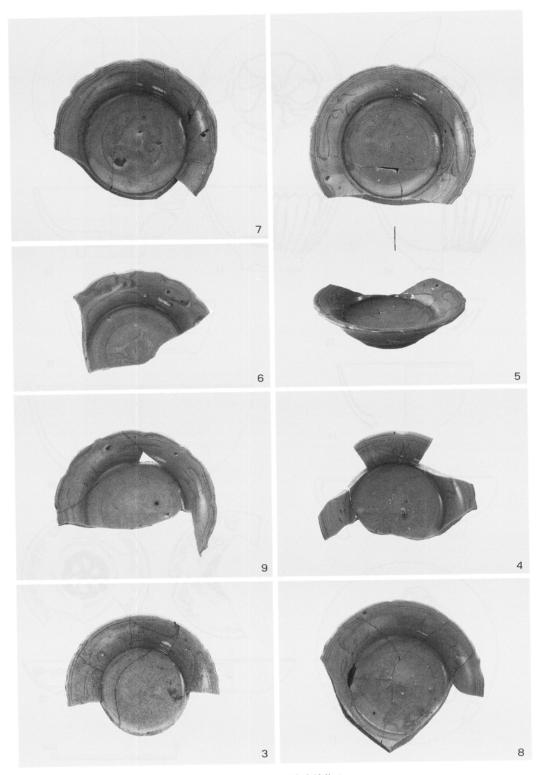


③ E-08区 I 面下出土遺物

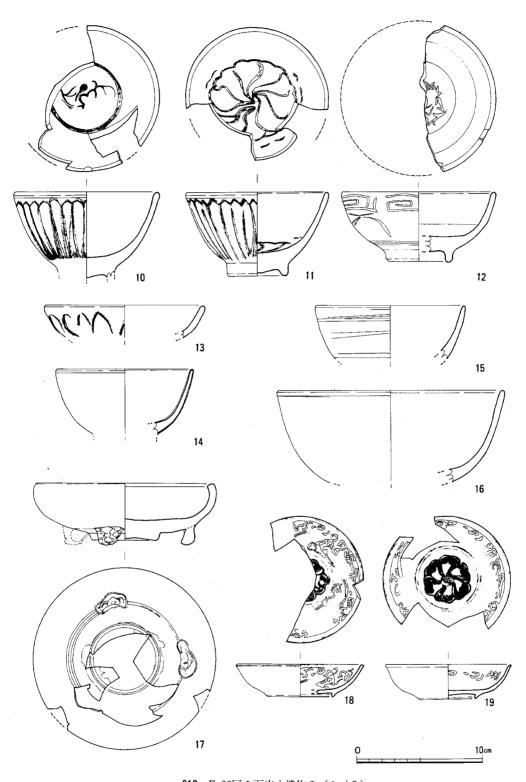
本章「(3)II 面の調査」でふれた様に、ほとんど一括出土と言える状況で出土した中国製磁器の一群である。 1~17・20は青磁で龍泉窯系である。例外なく灰色~灰白色の胎土に濃緑色の半透明釉をたっぷりと施している。ガラス光沢は強い。 1~9 は高台付皿である。高台畳付から外底部が露胎となる。10~16 は碗である。10・11 はヘラ描き沈線で蓮弁を描くものである。12 は、口縁部外面に雷文帯を、体部下半に沈線で半円状に蓮弁を描くものである。13 は片切彫で蓮弁を描くが、鎬は立たない。17 は獣面脚の香炉である。脚の中央にある外底部は露胎で、接地しない。20 は算木文の香炉である。獣足脚がつくが、脚は接地せず外底部で立つ。18・19 は、染付である。青花は見込み中央になされ、体部には印花文で草花様の文様をつけるが、光にかざさないと見極められない程うすい。胎土は純白に近く、釉の透明度が高く光沢も強い。



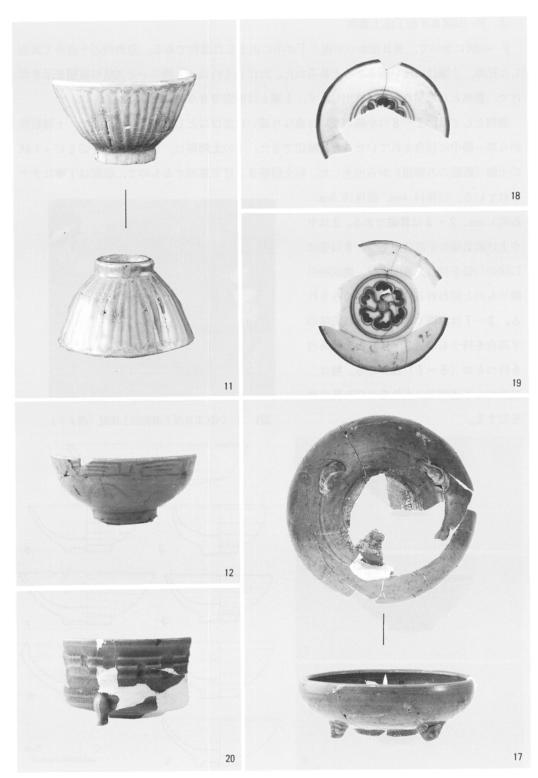
317 E-08区 I 面下出土遺物 1 (1/3)



318 E-08区 I 面出土遺物 2



319 E-08区 I 面出土遺物 3 (1/3)



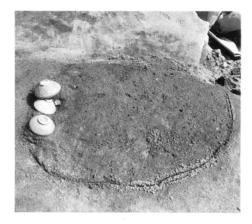
320 E-08区 I 面出土遺物 4

④ F-04区ⅢB面下出土遺物

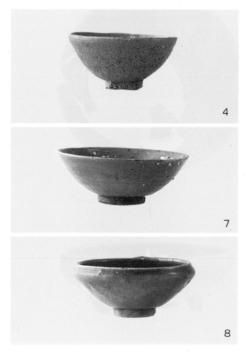
F-04区において、ⅢB面からの掘り下げ中に出土した遺物である。 急拠周辺を含めて調査 した結果、土壙状の浅い落ちがみとめられた。ただしそれは、土層のレンズ状の堆積を示すだ けで、整然とした掘りかたは検出しえず、土壙とは断定できない。

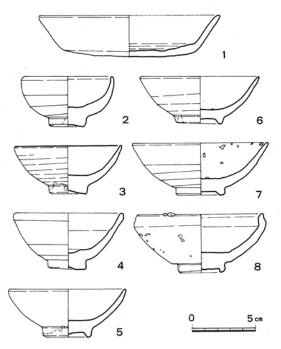
遺物としては、 $2\sim8$ の小碗が或いは重なり或いは並びなどして出土したもので、土層観察から単一層中に包含されていたことは確認できた。1 の土師坏は、この包含層を切るピット状の土層(断面のみ確認)から出土した。粘土紐巻き上げで整形するもので、底部は丁寧にナデ

られている。口径14.4cm,底径10.3cm,器高3.3cm。 $2 \cdot 8$ は青磁である。2はやや上げ底気味の平高台をもつ。8は受け口状の口縁を持つ。表面には,焼成時の降りものと思われる付着物が多くみられる。 $3 \sim 7$ は白磁である。上げ底気味の平高台を持つもの($3 \cdot 4$)と,輪高台を持つもの($5 \sim 7$)とがある。釉は,光沢なく不透明で,土色をおびた乳白色を呈する。



321 F-04区ⅢB面下遺物出土状況(西より)



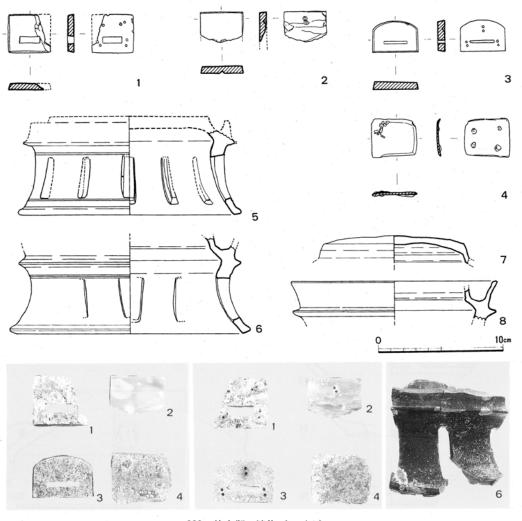


322 F-04区ⅢB面下出土遺物 (1/3)

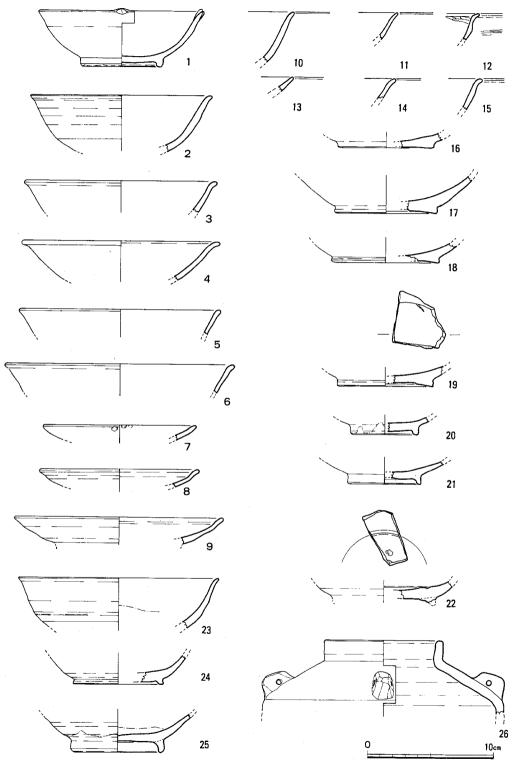
⑤ その他の出土遺物

律令期の遺物

1~4 は、 5 帯である。 1 は雑石製石帯の巡方である。ⅢB面下 E—01・03区よりの出土。縦3.1cm,横3.3cm,厚0.55cm,2 も雑石の巡方である。上半のみ出土した。 4 面下 F—03区出土。横3.4cm,厚0.6cm。 3 は雑石製石帯の丸鞆である。通側の丸鞆と違い,下隅の角が落ちていない。巡方の再生品と思われる。Ⅲ面下E—10区出土。縦2.52cm,横3.6cm,厚0.6cm。 4 は銅製品で蛇尾である。裏面には釘足がみられる。 V面 D—12区出土。縦3.15cm,横3.65cm。 5~8 は,須恵器の円面硯である。ⅢB面下 D—13区出土。暗灰色を呈し,胎土は小砂粒を含むが精良。焼成は堅緻である。接合できず,また器厚,細部の傾き・形状・細かい調整の施しかたを見ると,同一個体とするには無理がある様にも思う。一応別個体として考えたい。



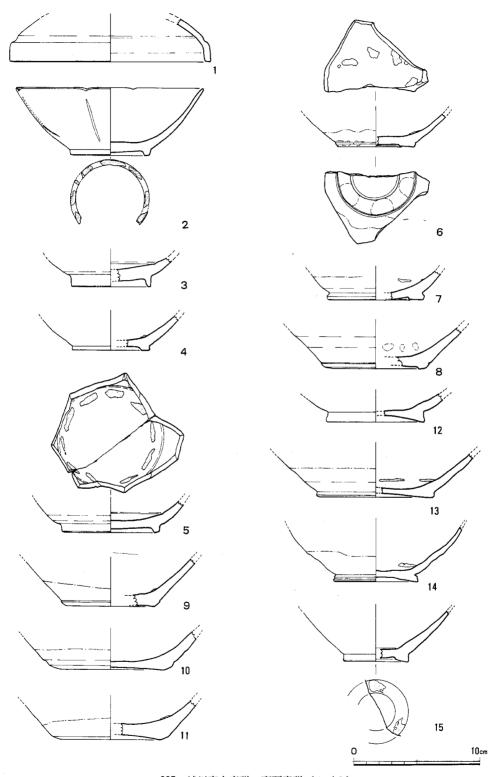
323 律令期の遺物(1/3)



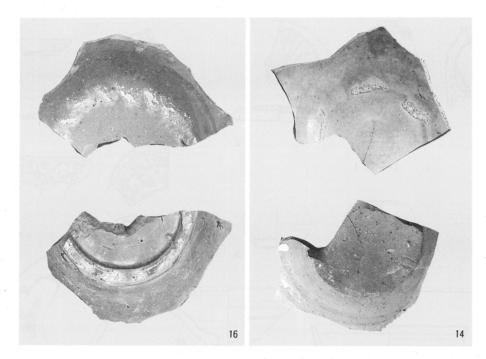
324 緑釉陶器・灰釉陶器(1/3)

緑釉陶器 • 灰釉陶器

Fig. 324に示したのは、国産の緑釉陶器・灰釉陶器である。1~22は、緑釉陶器である。1 は、灰褐色を呈する土師質の硬胎に、黄緑色の釉をうすくかける。内外面ともヘラミガキ。口 縁は輪花につくる。ⅢB面下・Ⅳ面下 D-13区出土。2 は,淡褐色の土師質軟胎に,黄緑色釉を 施す。体部は粗いヘラミガキ。II面 D-14区出土。3は白褐色土師質軟胎にうすめの緑色釉を かける。内面へラミガキ,外面ヨコナデ。ⅢB面下 D—11区。4は,灰褐色土師質軟胎に淡鮮緑 色釉をかける。内外面ヘラミガキ。Ⅱ面337号土壙。5は,青灰色須恵質硬胎に緑色釉をうすく 施す。体部はヨコナデ。ⅢB面下 E—08区。6 は,暗青灰色須恵質硬胎にやや茶色がかった緑色 釉を施す。体部ヨコナデ。V面下 F─03区。7は、暗灰色須恵質硬胎に濃緑色釉があつくかか る。輪花につくる。Ⅲ面下 E—10区。8は、灰褐色土師質硬胎に黄味をおびた緑色釉がかかる。 体部へラミガキ。IV面下 D―14区出土。 9 は,灰色須恵質硬胎に光沢の強い緑色釉を施す。内 面~口縁部外面へラミガキ。体部外面ヨコナデ。 I 面下 D—16区。10は,淡灰褐色土師質硬胎 に淡緑色釉がうすくかかる。内面はヨコナデの上にあらいヘラミガキ。口縁部はヨコナデで口 唇をヘラミガキ,体部外面は横位のヘラケズリである。ⅢB面下,E—08区。11は,灰色の土師 質軟胎に淡緑色の釉をうすく施す。ⅢB面下 D—13区。12は,緑釉陶器の生地かと思われる小 片である。明褐色の土師質硬胎で内面と体部外面は丁寧なヘラミガキ、口縁部はヨコナデされ る。Ⅲ面410号土壙出土。13は、暗灰色の須恵質硬胎に濃緑色釉を施す。ⅢB面下 E-08区。14 は,淡褐色土師質軟胎に黄緑色の釉をかける。内外面へラミガキ。Ⅲ面 D—13区。15は,淡褐 色土師質軟胎に白黄緑色釉をかける。内外面へラミガキ。Ⅲ面421号土壙。16は,平高台である。 淡褐色土師質軟胎に鮮緑色釉を施す。もろくて剝離気味。内外ともヘラミガキ。 I 面下 D—13 区。17は、蛇の目高台。白鼠色土師質軟胎に淡緑色釉をうすく施す。内外面へラミガキ。Ⅱ面 337号土壙。18は平高台。白色土師質軟胎に,淡緑色釉をうすく施す。器壁は剝落気味。Ⅳ面下 E-08区。19は蛇の目高台である。淡褐色土師質硬胎に、淡黄緑色釉を施す。畳付から内は露 胎。内面はヘラミガキし,見込みに重ね焼きの目痕がつく。V面 F-03区。20は,青灰色須恵質 硬胎にくすんだ深緑色の釉をかける。内面はヘラミガキ。畳付から内は露胎。付高台。ⅢB面下 F—04区。21は,灰色須恵質硬胎に灰褐緑色釉を施す。畳付内は露胎。Ⅲ面475号ピット。22は, やや褐色がかった灰色の土師質硬胎に、磨りむらのある濃緑色釉を施す。畳付内は露胎。内外 面ともヨコナデする。見込みに重ね焼きの目痕がある。IV面下 E-06区。23~26は,灰釉陶器で ある。23は,白灰色のキメ細かい胎土に斑らに緑をおびた灰色の釉がかかる。胎土は,白味強 くなめらかで,美濃産のものと思われる。体部内面はコテをあてて丸味をつくる。口縁部内面 から、体部外面上半までは、ヨコナデする。体部外面中位は、ヘラケズリ後、ヨコナデする。 体部外面下半は、ヘラケズリを行なったままである。IV面829号ピット出土。**24**は、灰色でザラ



325 越州窯糸青磁・高麗青磁(1/3)

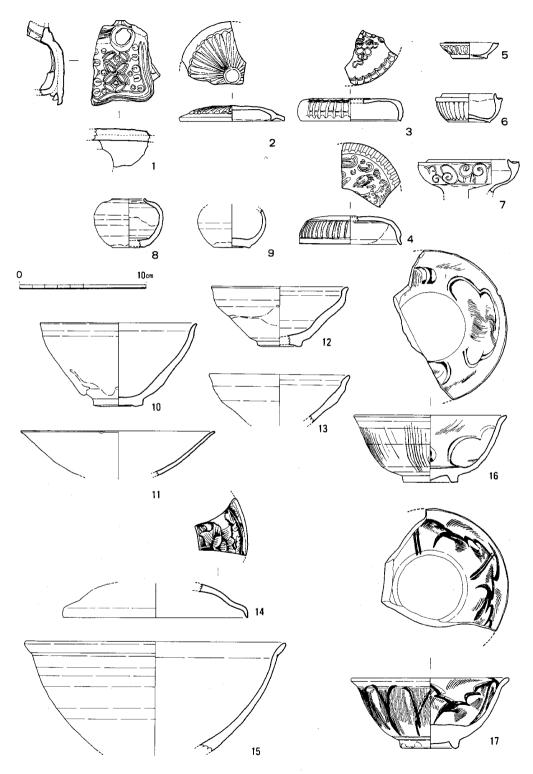


326 越州窯系青磁

ついた胎土に、むらのある緑灰色の釉が、内面全体にかかる。体部外面は、ヨコナデによって整えられる。IV面下 E $-02 \cdot 04$ 区。25は、うすく茶褐色がかった灰色の胎土に、淡緑灰色の釉を漬けがけする。内面は体部をコテ、内底部をナデた後、ヨコナデする。体部外面は中位でナデ、下半はヘラケズリ、高台はヨコナデし、高台内外底部はケズリをとどめる。IIIB面下 D-11区出土。26は壺である。肩部につけられた耳は2個が見つかっているが、全体で何個付けられていたかは不明である。灰白色のやや粗めだが粒の整った胎土に、くすんだ緑色の釉をうすく施す。全体はヨコナデされる。V面580号土壙出土。

越州窯系青磁・高麗青磁

Fig. 325に示したのは、越州窯系青磁である。第2次調査で出土した越州窯系青磁の数は、220片を上回り、実測したのは遺構出土分を中心としたごく一部である。1 は合子の蓋である。越州窯系青磁片はほとんどが碗であり、時代が下ると思われる壺、水注を除くと、碗以外の器形の出土は珍しい。 IIIB 面469号土壙からの出土である。469号土壙からは、3 の碗も出土している。 $2 \sim 5$ は、輪高台をもつ。全面施釉の精製品で、畳付は露胎となる。2 は、口縁及び体部を輪花につくる。畳付には重ね焼きの目痕がならぶ。 IIIB 面下 $D-11 \cdot 13$ 区、F-04区出土。3 は、高台内に目痕がみられる。 IIIB 面469号土壙より出土。4 は、畳付と見込みに目痕がついている。I 面下 E-06区。E を E で、粗製品とは見倣しがたい。E はE はE はE の狭い蛇の目高台につくる。胎土は緻密精良で、粗製品とは見倣しがたい。E はE はE ので、E はE のを、E はE の後しがたい。E はE の後に目痕がつく。 E の後に目痕がつく。 E のを E のと E のを E の



327 その他の輸入陶磁器1 (1/3)

土。 8 は平底の内側を削り、輪高台状に浅く凹める。全面施釉。 畳付は釉をかき取る。 畳付・見込みに目痕。 953号ピット。 9~11は平底。体部下位は露胎。 畳付・見込みに目痕有。 9 はIV面560号土壙出土。 10は II 面下 E—08区出土。 11は II 面下 F—03区出土。 12~14は,平高台につくるものである。体部下半は露胎となる。見込みに目痕がつく。 12は II 面下出土。13は IV面832号ピット出土。14は IV面下 D—14区出土。 15は,高麗青磁である。全面施釉。 畳付に目痕がつく。 IV面 D—12区出土。

その他の輸入陶磁器

Fig. 327の1は青白磁の容器片である。頸部のつけ根から,胴部の一部で,何を形象しているのか不明。胎土,釉調とも優れている。右上の紐状部分は貼付,他はスタンプ文である。2は白磁の蓋である。頂部に印花文をつける。



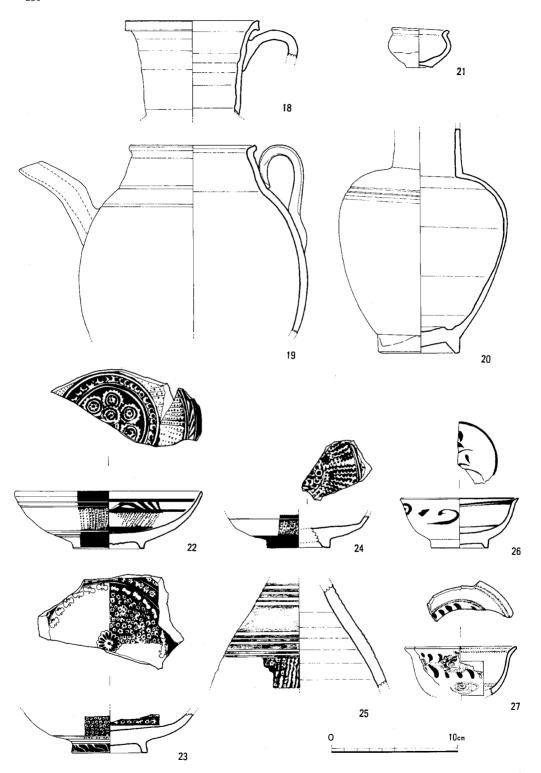
328 その他の輸入陶磁器

 $3 \cdot 4$ は青白磁の合子蓋である。3 は花文、4 は鳳凰文を印する。 $5 \cdot 7$ は青白磁、6 は白磁の合子身である。7 は唐草文を印す。 $8 \cdot 9$ は白磁小壺である。 $10 \sim 13$ は天目茶碗である。10 は、黒褐色に白砂のまじった緻密な胎土に、黒色の鉄釉をかける。釉は口縁部では赤褐色を呈し、体部は青色・淡褐色等の禾目が盛んにかかる。光沢は強く優品である。11 は、灰色の緻密な胎





329 その他の輸入陶磁器



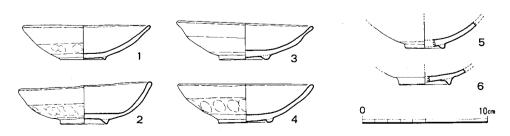
330 その他の輸入陶磁器4 (1/3)

土に明褐色の釉を施す、いわゆる柿釉天目である。体部はうすく引き出され、口縁は輪花とするが、破片の為、その数はわからない。14は青磁の蓋である。耀州窯系で、印花文を施す。15は、北方青磁の碗である。釉下は化粧土状に白変する。16は、同安窯系青磁碗である。17は龍泉窯系青磁碗で、V面659号土壙より出土。18は青磁水注である。皿面545号ピット、641号ピット、IV面532号土壙、V面644号土壙よりバラバラに出土した。19は越州窯系の青磁水注である。注口は接合できず、推定位置で実測している。熱をうけており、釉はあれる。20は白磁壺である。21は褐釉小壺である。釉は乳褐色でうすくかかる。22~25は李朝の象篏青磁である。26は中国南方系の白磁鉄絵小碗である。鉄絵は筆描される。胎土は白色でややキメがあらく、釉はうすく黄味をおびて濁った透明釉で、氷裂がみられる。鉄絵は濃茶褐色。皿B面下 E—08区出土。27は、ベトナム陶器と思われる白磁鉄絵小碗である。鉄絵は半ば剝落しているが、筆描でないことは確認できる。胎土は白色緻密で白濁した半透明釉がかかる。鉄絵は茶褐色を呈する。I面12号配石遺構、ⅢB面499号土壙より出土。

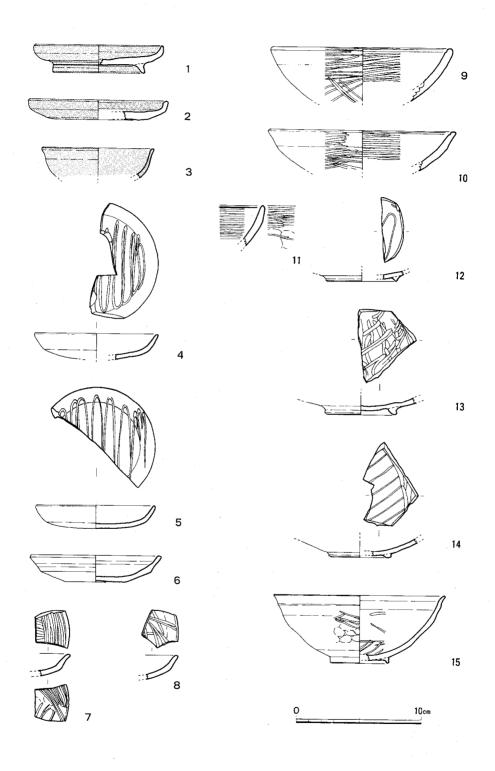
その他の国産土器・陶器

Fig. 331に示したのは、岡山県の瀬戸内沿岸を中心とした地方で生産された、いわゆる早島 式土器である。内面は平滑に仕上げ、見込みには重ね焼きの痕跡がみられる。高台は粘土紐を 粗雑に貼り付け、正円を呈さない。14世紀後半に編年されるものである。

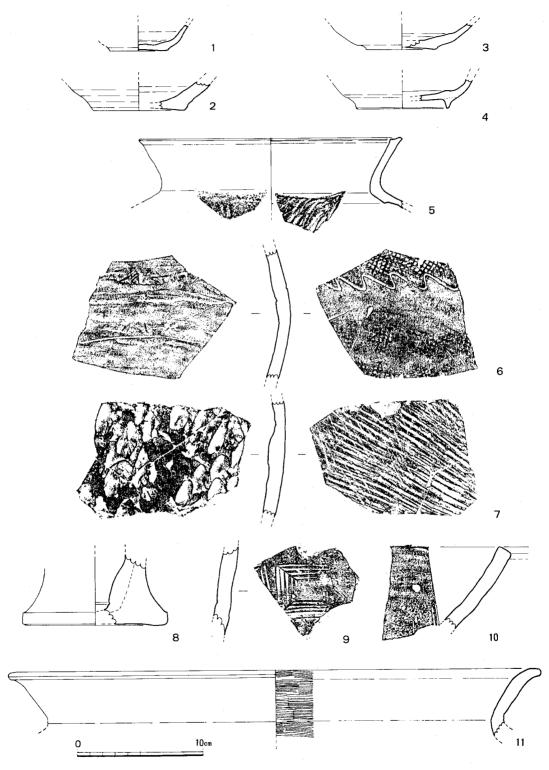
Fig. 332は,黒色土器・瓦器である。 $1 \sim 3$ は黒色土器である。丁寧なヘラミガキを行なって平滑に仕上げている。 $4 \sim 8$ は瓦器皿である。 $4 \cdot 5$ は搬入瓦器 (楠葉型カ),6 は底部をヘラおこしし内面をコテで整えるもので在地産である。 $7 \cdot 8$ は小片であるが搬入瓦器と思われる。 $9 \sim 14$ は楠葉型瓦器境である。15 は搬入瓦器境で,体部内面のヘラミガキは単位を把えがたい。Fig. 333、 $1 \sim 7$ は須恵質土器である。 $1 \cdot 3$ は坏,2 は鉢で,糸切り底である。5 は甕口縁で灰緑色の自然釉がかかる。 $6 \cdot 7$ は胴部片である。6 は内面ナデ,7 は内面を指で強くおさえる。8 は古瀬戸の瓶子である。9 は常滑の甕片である。 $10 \cdot 11$ は備前で,未だ焼き締め陶器の赤褐色を呈さず,須恵質の灰色を呈している。



331 その他の国産土器,陶器1(1/3)



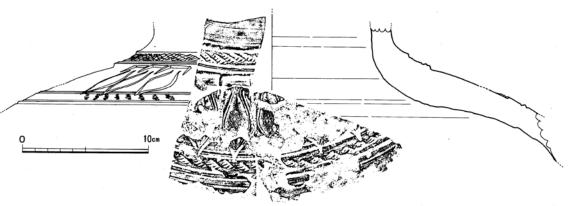
332 その他の国産土器・陶器 2 (1/3)



333 その他の国産土器・陶器3 (1/3)

Fig. 334は,須恵質土器の大型甕片である。肩部は,上下を櫛歯刺突文帯で画し,その間にスタンプの蓮弁を打つ。櫛歯文帯は,上下を沈線で縁取る。蓮弁は,長方形の版に一弁づつ型取ったものを,横に連続してならべて押す。器壁の調整は,内外ともヨコナデである。胎土は砂まじりでや粗い。V面 D—13区他。

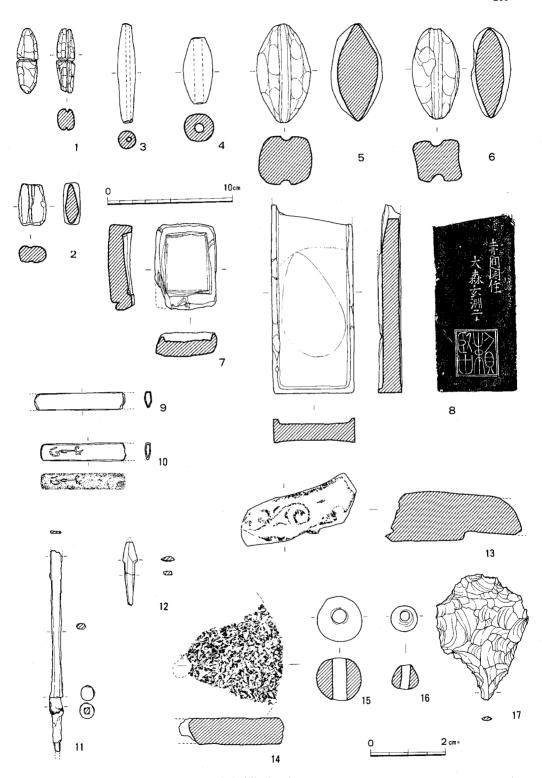




334 その他の国産土器・陶器 4 (1/3)

その他の遺物

Fig. 335、 $1 \cdot 2$ は滑石製石錘、 $3 \sim 6$ は土錘である。7 は滑石製石硯で、陸と海は明確にはわかれていない。8 は赤間石の硯である。陸部の中央は、磨滅して凹む。背面には「赤間関住大森玄淵子」の刻銘がある。 $9 \cdot 10$ は、小柄である。刀子部分は欠くが、茎が折れて小柄内に残っている。銅製である。10は仮名で「ひもしや」と判読できる陽鋳を持つ。 $11 \cdot 12$ は、鉄製の鏃である。11は、矢柄の一部をとどめ、木質(竹?)の上を糸巻きしている。12は、頸部を持たず、刃部から区をなしてそのまま茎となる。刃部も小振りである。13は、鴻臚館式軒平瓦の瓦当である。14は、中央に孔を穿つ円盤状の土製品の一部である。胎土内に籾穀を多く含む。 $15 \cdot 16$ はガラス小玉である。15は深緑色 $\cdot 16$ は明るいブルーグリーンを呈する。17は黒曜石の石錐である。表面は磨滅していない。



335 その他の出土遺物(1 / 3. 15~17…1 / 1)

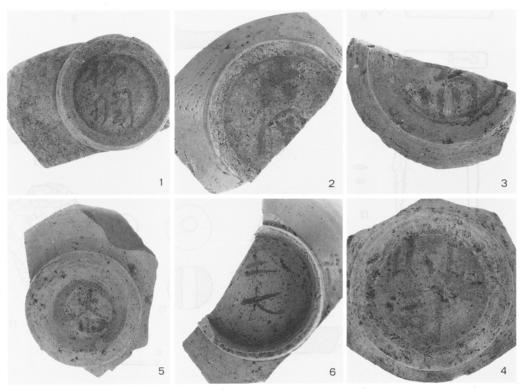
墨書土器

出土した墨書土器の大半をしめるのは、輸入陶磁器の底に文字を書いたもので、その他には 土師器・須恵器・瓦器に小数例みられる。以下、墨書の内容に従って略述する。

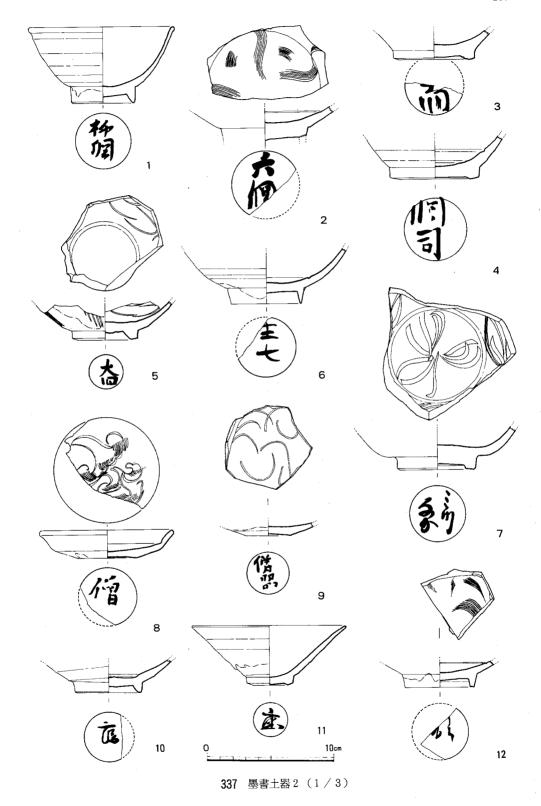
1 — 「柳綱」,2 — 「六綱」,3・30 — 「□綱」,4・29 — 「綱司」,5 — 「大綱」または「大四」,6 — 「王七」,7 — 「みつなか」,31 — 「林」,8 — 「僧」,9 — 「僧器」,10・11・24~28 — 花押,12 — 仮名文字,13 — 「市」,14 — 「四四」,15 — 「十」,23 — 「二」,16 — 「しわし」(意味不明)。以上は,輸入陶器である。1~6・9・10・12~15・23~28は白磁,16は青白磁である。7・8・30は龍泉窯系青磁,29・31は同安窯系青磁である。11は天目茶碗である。

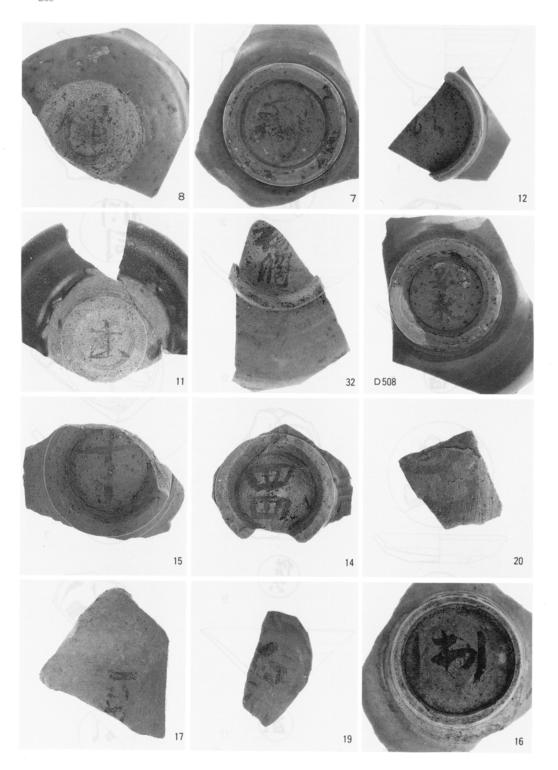
17—「山口一」,18—朱書,意味不明,19—人面墨書か,20—人面墨書,21—習字。17は土師器で,坏蓋であろう。上面は丁寧にヘラミガキする。18は須恵器の坏蓋で,上面はナデ,下面はヨコナデする。19は,土師器である。楕円形の土板の端部をひねり上げたものと思われ,墨書のある面の縁にそって指の圧痕がならび,その裏面は粘土がひび割れている。表裏面とも全面に掌文がつく。縁辺(口唇)は,ナデて平らにならす。 $20 \cdot 21$ は土師器の坏である。底部は回転糸切りする。

22は、扁平な石の両面に文字を書き連ねている。一部しか判読できないが、経文であろう。

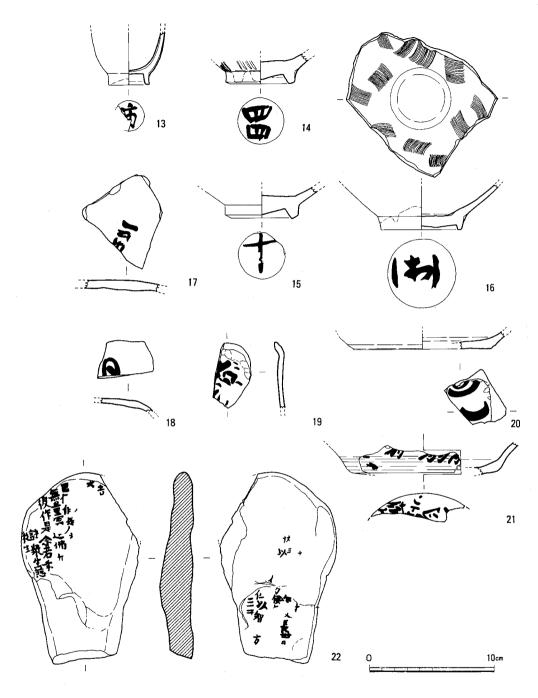


336 墨書土器 1



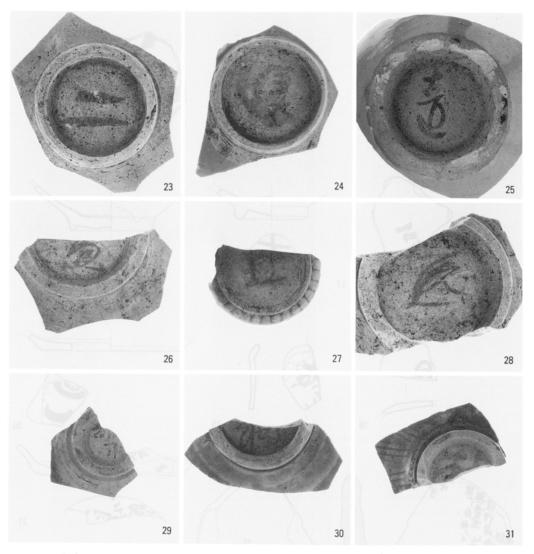


338 墨書土器 3



339 墨書土器4 (1/3)

上にあげた以外にも、輸入陶磁器底に墨書されたものは少なくない。判読できるものでは、「柳」 1、「柳綱」 2、「綱司」 1、「十」 2 で、その他は墨痕は認められるものの、内容が解読できないもの及び花押かと思われるもので、前者が多数を占めている。

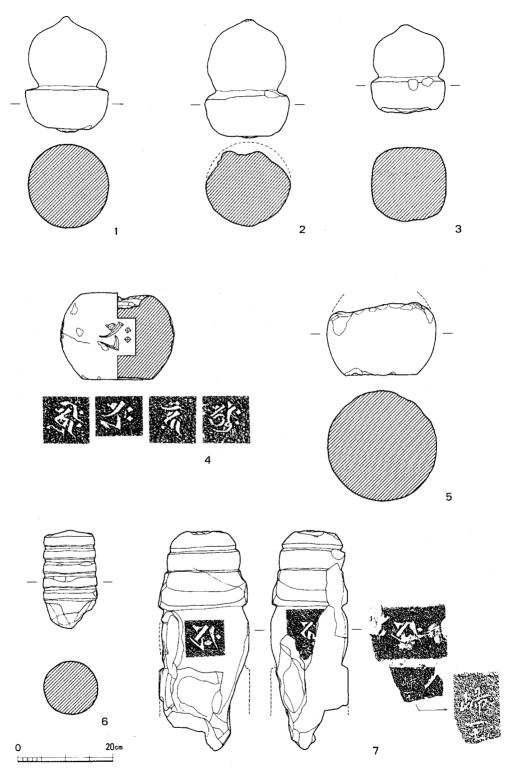


340 墨書土器 5

石塔

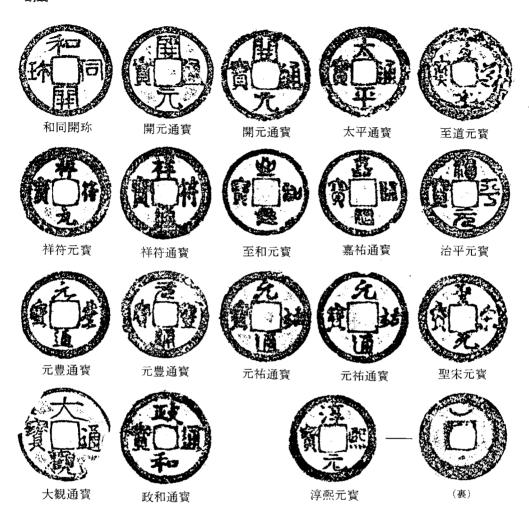
前項でも触れた様に、**ⅢA**面、**ⅢB**面を主として、五輪塔の石塔が出土している。いずれもバラバラに出土しており、現位置をとどめているとは考えがたい。

これらの内, $3 \ge 5$ は,IIIA 面 F—01区から約1 mの間隔をおいて出土しており,同一レベルでの出土である点を考えると,対になる可能性は高い。6 はIV面 E—09 で出土したもので,宝篋印塔の九輪の一部と考えられる。五輪塔以外の出土例は,この一例のみである。花崗岩製。7 は,一石で彫り出した五輪塔である。砂岩で,剝落が著しい。全体に四角張った扁平な造りである。水輪の部分に梵字,地輪の左側面にに銘を刻む。 銘は一部しか残っていないが,「帰王」あるいは「帰一土」と読める。



341 石塔(1/8)

銅銭



342 出土銅銭 (1/1)

Tab. 1 出土銅銭一覧

貨 銭 名	時代	初	鋳	数
開元通寶	唐	武徳4年	621年	4
和同開珎	奈良	和同元年	708年	2
太平通寶	北宋	太平興国元年	976年	2
淳化元寶	北宋	淳化元年	990年	1
至通元寶	北宋	至道元年	995年	1
景徳元寳	北宋	景徳元年	1004年	1
				1

貨 銭 名	時代	初	鋳	数
祥符元寶	北宋	大中祥符元年	1008年	4
祥符通寳	北宋	大中祥符元年	1008年	2
天禧通寶	北宋	天禧年間 101	7~21年	1
天聖元寶	北宋	天聖元年	1023年	6
皇宋通寳	北宋	寳元二年	1039年	3
至和元寶	北宋	至和元年	1054年	2
				l

貨 銭 名	時代	初	鋳	数
		1/3		
嘉祐通寳	北宋	嘉祐元年	1056年	1
治平元寶	北宋	治平元年	1064年	3
治平元寳	北宋	治平元年	1064年	1
熈寧元寶	北宋	熈寧元年	1068年	4
元豊通寶	北宋	元豊元年	1078年	10
元祐通寶	北宋	元祐元年	1086年	10
紹聖元寶	北宋	紹聖元年	1094年	6
元符通寳	北宋	元符元年	1098年	1
聖宋元寶	北宋	建中靖国元年	1101年	4
1	1			

貨 銭 名	時代	初	鋳	数
大観通寶	北宋	大観元年	1107年	2
政和通寶	北宋	政和元年	1111年	2
淳熈元寳	南宋	淳凞元年	1174年	2
紹熈元寶	南宋	紹熈元年	1190年	1
洪武通寶	明	洪武元年	1368年	3
永楽通寶	明	永楽6年	1406年	2
寛永通寳	江戸	寛永13年	1636年	1
竜二十銭銀貨	明治	明治25年	1892年	1
解読不能				80

Tab. 2 銅銭出土遺構一覧

検出面	出土遺構	銭貨名数	検出面	出土遺構	銭貨名数	検出面	出土遺構	銭貨名数
I面	202号土壙	洪武通寳Ⅰ	面面	363号土壙	解読不能1		566号土壙	元祐通寳3
	224号土壙	解読不能1		366号土壙	開元通寶1			治平元寶1
	254号土壙	元豊通寳1			解読不能1			天聖元寶1
	256号土壙	天禧通寶1		443号ピット	太平通寶1			政和通寶1
		紹聖元寶1		68号井戸	元豊通寳1			凞寧元寶3
		解読不能 2		71号井戸	解読不能1			元符通寳1
	258号ピット	永楽通寶1		31号配石遺構	至和元寶1			開元通寳1
	10号配石遺構	元豊通寳1	IIIA面	401号土壙	元豊通寶1			解読不能3
	12号配石遺構	解読不能1	шв面	462号土壙	解読不能1	V面	881号ピット	聖宋元寶1
	17号配石遺構	解読不能1		480号土壙	元豊通寳1		575号土壙	解読不能1
	56号井戸	解読不能1		488号土壙	解読不能1		577号土壙	解読不能1
	59号井戸	二十銭 1	IV面	520号土壙	解読不能1		588号土壙	聖宋元寶1
	66号井戸	解読不能1		523号土壙	皇宋通寶1			大観通寳1
Ⅱ面	284号土壙	解読不能1		532号土壙	紹熙元寶1			解読不能3
	292号土壙	大観通寶1		565号土壙	治平元寶1		641号土壙	解読不能1
	•	解読不能1	<u> </u>		元祐通寳1		86号井戸	元祐通寳1
	320号土壙	解読不能 2		566号土壙	祥符元寶1			景徳元寳1
	324号土壙	解読不能1			紹聖元寶4			
	353号土壙	解読不能			聖宋元寶1			

第四章 小 結

以上、粗略ながら築港線関係第2次調査の概要についてふれてきた。築港線関係の調査報告書は、この後続いて第3次調査から第5次調査まで刊行される予定である。したがって、ここでは第2次調査地点について気付いた点、看過できないと思われる点を指摘して、本報告書のしめくくりとしたい。

律令期の遺構・遺物について 博多遺跡群における従来の調査によって、終帯・石帯・鴻臚館式瓦・緑釉陶器など、律令官人の存在を窺わせる資料が出土していた。今回の調査では、これらに加えて、円面硯、風字二面硯、「長官」銘墨書須恵器、「和同開珎」を得ることができた。円面硯は8世紀中頃に、風字二面硯は9世紀後半にあてることができる。「長官」銘須恵器は少片であるが、89号井戸から出土した他の遺物から、8世紀後半におくことができよう。なお、「長官」のつく官名は令の規定にはなく、勘解由使、鋳銭司、斎院司、造寺使にこの文字が使われる。大宰府・国・郡などの地方官にも使われない文字である。ただし、「長官」の上の部分を欠く為、どの様な官名になるのかは判断できず、ここでは単に律令官人の官職名と考えるにとどめる。緑釉陶器は、平高台・蛇の目高台を削り出す山城産のものから、10世紀前半美濃産ののまで、諸時期・諸地方のものが出土している。灰釉陶器では、黒笹14号窯式にあたると考えられるものから折戸53号窯式のものまで、少数ではあるが出土を見た。越州窯系青磁碗をみると、総数で224点を数えており、私見した限りでは、これ以上の接合及び同一個体の抽出は不可能であった。これは、博多遺跡群の他地点と比べても、決して少ないものではない。「和同開珎」は2枚出土しており、福岡市内では初の出土例である。

これら、律令官人の存在を示す遺物、とりわけ硯・墨書須恵器が出土した点は重要で、本調査地点周辺に何らかの施設(公的か私的かは問わず)が比較的長期(8世紀代から10世紀代の範囲内)にわたって存在したことを示唆していると考えたい。なお、未報告であるが、築港線関係第3次調査(本調査地点の北隣)及び博多遺跡群第35次調査(本調査地点の東隣)において、8世紀後半頃の地鎮と思われる遺構が検出されており、本調査地点周辺が8世紀代には何らかの生活領域として取り込まれていたことを示している。

683号土壙(木棺墓)出土の化粧箱について V面683号土壙から出土した漆塗りの化粧箱は、内部の遺物を取り上げた後、保存処理のため福岡県立九州歴史資料館横田義章氏のもとに預けられている。この間、九州歴史資料館を訪ねられた東京国立文化財研究所中里壽克氏より数々の御教示を頂いているので、ここで触れておきたい。

化粧箱の意匠は、研出蒔絵の技法によって表現されている。研出蒔絵は金銀の蒔絵が多く、 平安時代には金銀が対等に用いられるが、鎌倉時代には銀が減る傾向にある。また、意匠は鎌 倉時代がより写実的となる。 683号土壙の化粧箱は、 花を銀、葉を金で使いわけて描き、意匠は写実的で、12世紀的な特徴を示している。また、漆塗りの下地は、土の粉を焼いたものを漆とまぜあわせる漆地粉で、これは13世紀まで行なわれた手法である。(室町時代以降は地粉のかわりに 砥粉を用いる)とのことであった。

683号土壙については、副葬されていた土師皿・坏がすべて回転糸切り底であるという点以外には、年代比定の決



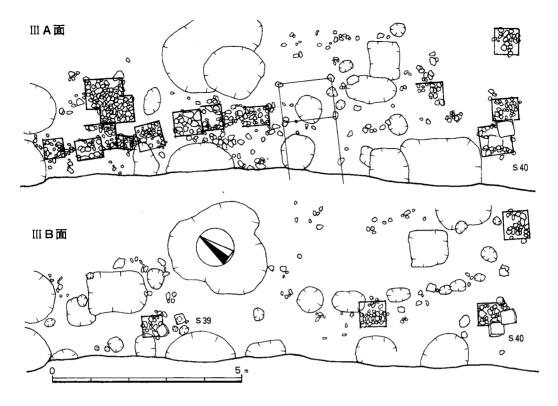
343 683号土壙化粧箱桜花文様

め手を欠く。博多遺跡群における土師器の編年はいまだ確立していないが、大宰府における編年研究から、ヘラ切り底から糸切り底への転換は、12世紀の初めから中頃にかけてなされるとされており、それを援用すれば、683号土壙は12世紀前半には遡りえないことになる。一方、共伴した青磁碗・皿をみると、12世紀中葉から後半代におかれている蓮花折技文や雲文を配する龍泉窯系青磁よりも古い様相を示している。(緊水滩工程考古队浙江组「山头窑与大白岸」『浙江省文物考古所学刊』1981年)。ここでは、683号土壙の年代については12世紀中頃にしばって考えておきたい。

集石遺構について 配石遺構の内の集石遺構について、若干気付いた点を述べておきたい。

前章で40号集石遺構についてふれた際、五輪塔の地輪をすえる 2 区画の集石が想定できるとのべた。そこで、他の集石についても同様な集石のブロックを捜してみると、 \blacksquare A 面と \blacksquare B 面の E— $07 \cdot 09$ 区において、いくつかの小区画をみとめることができる(Fig. 344)。それは、長方形または方形に礫を敷きつめるか、大きめの礫を配してすきまに小礫をおくもので、 \blacksquare A 面で13 区画以上、 \blacksquare B 面で 4 区画が考えられる。再び40 号集石遺構を例にとると、40 号集石遺構からは 2 基の地輪が出土しているが、Fig. 343の向って左下の地輪は \blacksquare A 面においては 2 つの小区画の一方の下にもぐりこんでおり、これに先行することは間違いない。したがって、左下の地輪に対応するのは \blacksquare B 面の小区画であり、その後 \blacksquare A 面における小区画が作られ右上の地輪を裾えたと考えられる。五輪塔と小区画との対応は、 \blacksquare B 面において地輪と火輪を伴なったもう 1 基の小区画(39 号配石遺構として前章でふれたもの)でもみとめられる。これらの例から、集石の小区画は本来五輪塔を伴なっていたものと考えることもできよう。

一方,遺構全体図(付図3・4)をみると、ⅢA面・ⅢB面のF—07・09区は、柱穴状小土壙のきわめて稀薄な部分でもある。これらを総合すると、ⅢA面・ⅢB面が比定される14世紀前半頃、F—07・09区には、小さな空地に五輪塔だけが数基ならんでいた光景がうかんでくる。五輪塔が単に供養塔であったのか墓標であったのかは、確認できていない。14世紀前半といえ



344 小区画集石配置図 (1/100)

ば、鎮西探題滅亡にはじまって、多々良浜の合戦、南北朝の戦乱と、博多が兵火にかかった時期である。五輪塔が供養塔であったとしても、その裏に血なま臭い時代を感じるのは、あながち無理ではなかろう。

一方, これが墓標であったとすると, 博多においては14世紀前半に至るまで, 都市域内に 点々と墓地を営んでいたことになる。683号土壙で見られる様に,平安時代末~鎌倉時代の土壙 墓・木棺墓は特に集中せず, 単独であちこちに埋葬されていたことが,従来の博多遺跡群の調 査から知られている。他方で,15世紀代以降の墓は,寺院址を別にすれば,見つかっていない。 今回の小区画集石遺構は,この間を結ぶ資料であり,12・13世紀頃単独で家の近くなどに営ま れていた墓が,14世紀前半頃から市街地内のいくつかの場所に集まる様になり,やがて生活領 域から出されていくという流れが想定できるのである。

時期比定について 本報告書では、記述にあたって古代 I 期から近世までの 6 期に便宜的に区分した。出土遺物の内容による時期区分という点で、有効な方法であると思われた。ところが、特に古代 II 期と中世 I 期のふり分けにおいて混乱をきたしてしまった。それは、ひとえに筆者が全ての遺物を十分に把握することが出来なかったことによる。この点を今回の反省とすると共に、本書を利用される方々へのお詫びを申し上げたい。

解体移築された旧飯尾家住宅について

九州大学工学部 山 本 輝 雄

はじめに

福岡市博多区上呉服町1番28号にあった旧飯尾家住宅は、江戸時代における数少ない博多の町家として、福岡市西区徳永にある「福岡歴史の町」(教育開発社、村上義三社長)に移築保存された建物である。

この建物の解体移築にあたり、教育開発社のご協力のもとに、旧敷地にあった際、調査する機会を得たので、この調査結果を公表して、後世の資に供するものである。

経過

今回の解体時の調査は、昭和61年(1986)5月7日から9日まで行われた。調査に加わったのは、筆者の他、九州大学工学部建築学科第九講座の次の方々である。

教授 前川道郎氏 助手 川上秀人氏

大学院生 松岡高弘氏 上野潤氏 五島朋子氏 吉田勲氏

この他, 移築後の設計にあたられたヤナセ協同建築事務所の香月経久・高田秀徳両氏には, 一方ならぬお世話になった。記して, 深く謝意を表す。



1 博多の街並み (大博通り上空より北東部を見る)

ここで明確に示しておかねばならぬことがある。それは、当建物の価値がこのように正当に 認められて今回の保存に至ったのは、従来から長年博多の街割りと町家を研究し続けてこられ た九州大学助教授土田充義先生(現鹿児島大学教授)のご尽力のたまものである。が、今回の 当家の解体時、同先生にはちょうど海外出張中であったため、止むを得ず、筆者が引き受けて 調査の任にあたった。

ために、調査を行った責任上、筆者が報告を行うに至った次第である。

なお、当報告中使用の次の実測図の製図者は、松岡高弘氏である。

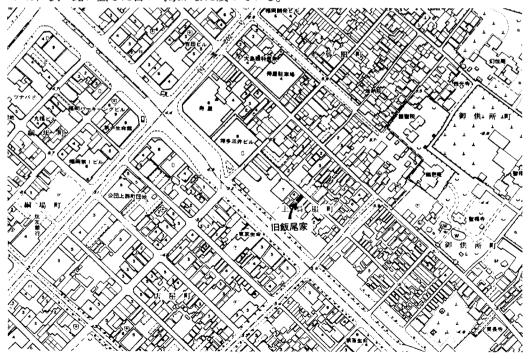
平面実測図(Fig. 9) 正面実測図(Fig. 5) 断面実測図(Fig. 8)

さらに,復元計画図は,ヤナセ協同建築事務所で作成されたものを使用させて頂いた。記して,謝意を表す。

写真は、Fig. 1・4・27・40を福岡市教育委員会力武卓治氏が撮影し、他は筆者が行った。 3枚の古図は、飯尾寿一氏蔵のものである。

現状

博多の町並みも、近年の都市開発によって、急速にその姿を変貌させている。例えば、博多駅前から呉服町交叉点に向かう貫線道路沿いは道路幅の拡幅によって、街の姿は一変してしまいつつある。が、この貫線道路から一歩街区の中へ足を踏み入れると、特に、御供所町あたりには、狭い路に面した古い町家がまだ残っている。



2 旧飯尾家位置図(1/5,000)

当飯尾家も、そうした道幅の狭い桶屋町の通りに面している。前面の道幅は3,640mmしかなく、敷地の間口も6.0mとかなり狭いが、奥行は深くて25.3mもある。ただし敷地割りが、狭い道路に対して直交していない。これは、道路で囲まれる街区自身が平行四辺形を呈しているからであろうか。あるいは、各敷地の割り付けが一つ一つ複雑となっているからであろうか。この点については、街区全体を実測していないので不明である。

次に建物自身の現状について述べる。 主屋部分では、正面5,916mm, 奥行 11,774mm, 切妻造,正面庇付,桟瓦葺 の部分が古い。が、今日、背面には縁 側より新設された階段より上る3階ま で増築された部分が付設されていた。

平面では、道に面した前面の部屋の み非常に広く、正面幅2.5間、奥行3.5



3 桶屋町通りの旧状①



4 桶屋町通りの旧状②

間の一室であるが、床は前方 8 帖分は板敷、後方 6 帖分のみ畳が敷かれている。この 〝ミセ、 (以下、この室をミセと呼ぶ)と考えられる一室の北西側壁に接して、 奥行0.5間の押入が付設 される。この奥入の中には梯子が置かれ、建物幅全幅にわたり奥行2.920mmだけ 2 階が板敷としてつくられている。1 階には、ミセの奥にもう1 室 8 帖畳敷きの 〝ザシキ、(以下、この室をザシキと呼ぶ)があり、このザシキには縁側に接して平書院が付され、北西側壁に接しては天袋があり、置床が備えつけられる。

2階としては、縁側からの階段を上ると、すぐ左手に3帖畳敷きの部屋がある。

正面向かって左手の引違いのガラス戸から入ると、奥行約1.5間までは2階があるため低い根太天井であるが、その先2.0間分は小屋組と垂木まで見える吹きぬけの化粧屋根裏となっている。(一階平面実測図中の一点鎖線で囲まれる部分)。

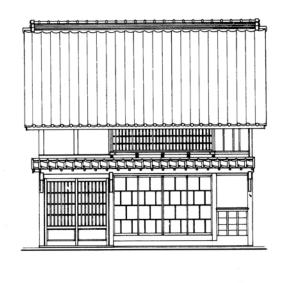
正面と背面における建具は、今日全てガラス戸となっている。なお、建具では、正面2階の 出窓のあり方、ミセでの北西側押入の舞良戸、平書院上部の透かし彫彫刻入り欄間が古いもの であろう。

天井も, ミセ・ザシキとも旧状を残 していると考えられる。

和小屋の小屋組も、ほとんどが変わっていない。ただ、背面部分において、2・3階を増築した際、垂木より上を取り除いてあったが、それも全てではなく、ザシキの天井裏にはまだ古い垂木が残存していた。

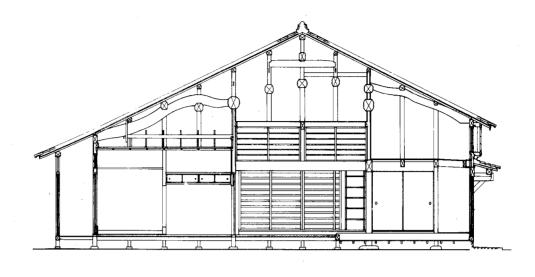
屋根葺材料としては、近年主屋前面 のみ古い桟瓦から新しい桟瓦に取り替 えられていた。

屋根下地の現状は、かなり曲がった 材も含んだ扁平な垂木を母屋に打ち付





6 解体工事前の正面





8 断面実測図(松岡高弘氏製図)

け、その垂木の上に篠竹2本づつ小舞として角釘打ちないしは葛で編み付けているし、約3尺 間隔には板材を釘打ちしてあり、これらの上に長さ約3尺の桧皮を敷き込んでいる。この構法 が桟瓦葺にとって妥当なのかどうか速断できない。類例の収集をまって、再検討したい。

さらに、現在使用の瓦であるが、前面庇の瓦は確かに古いが、この瓦でも明治時代まで遡り 得るかどうかというぐらいのものである。

なお,正面の庇が後世になって1段高く改変されていることは,軒桁の持送りの腕木が2本 重ねて使用されていること等によっても分かる。

神棚は古いものである。

建設年代について

建設年代については、これを確定する資料を、現段階では見い出し得ない。飯尾家のご当主 壽一氏は、同家蔵の家系図等を参考にすると、8代目となっており、初代油屋小兵エは宝永7 年(1701)卒とある。当家に再建や焼失の伝えは、まったく残っていない。

年代判定の比較的しやすい彫刻の文様、例えば、正面の古い柱に付けられた2階の出窓下の 持送りにおける若葉彫刻の形態からは、19世紀中頃をとても遡り得ない。

次に飯尾壽一氏蔵の慶応元年(1865)の年紀のある家相図の平面と、建物の痕跡調査からの 復元平面とは一致するので、この古図の年代は慶応よりも遡るものと考えられる。

しかも、同じ頃、当家は記録にあらわれ、次のような記述が見い出される。

「……・町きっての豪家は油、辛子油製造の油屋次平で、慶応二年には一六○匁の運上銀を

納めている。……」(『福岡町名散歩』中の桶屋町の項、井上精三著、1983年1月 章書房) と紹介されているからである。

ただし、この家相図の慶応元年(1865)よりもずっと古い建設年代を示す様相も、今回の解体工事にあたり出現している。即ち、この家相図中では隣接する棟があるため相接している壁位置において、まったく必要のない古い窓が土壁の中から発見された。また、柱脚に筆で書か

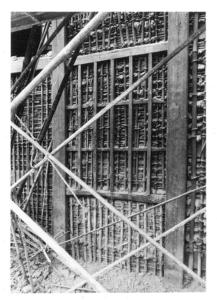
れた古い番付があること、小屋組において主要な構造部 材が意外と細く、垂木にも曲がった材があり、これらは、 少なくとも慶応頃豪家であったという博多の町家の実態 であろうかとの疑問も残るのである。

しかし、以上の疑問を解明する類例資料の学問的蓄積 がない今日、出窓の持送りの細部形態より、19世紀中頃 と推定しておくのが妥当と考える。

古図について

この建物が描かれる家相図には、飯尾壽一氏が所蔵される2枚がある。ともに、年紀記載があり、この建物の研究にとって、大変貴重なものである。

古い方の1枚は,横778×縦521mmの大きさであり,「慶応元歳丑六月日」の年紀があるものである。



10 新たに発見された旧窓

当図では、通り(図の左)に面して4軒の建物が平行して描かれているが、今回の調査対象の建物は、通りから建物へ向かって左から3軒目(図の上から3軒目)の建物である。

通りから向かって最も左側の棟は、「板場」と書き込まれ、大きなカマドが図示される。次の一軒は通りに面して「粉部屋」があり、背後に2室がある。以上2棟の背後には、巨大な「倉庫」があった。

通りから向かって左側から3棟目が当建物であるが、通りニワ(図中の「土間」)の背後に今はなくなっている炊事場が付設している。この建物に関しての書き込みの文字は、次の通りである。

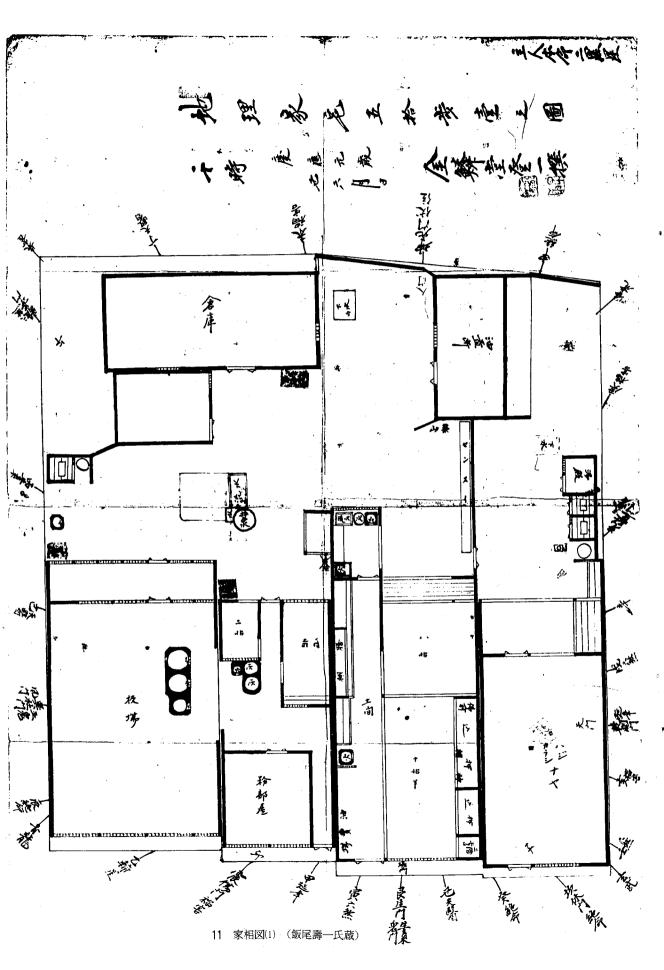
十帖半 二階上り口 押込 押込 神棚 仏前 八帖 トコ 土間 油売場 火 膳棚 火 水流 水 火

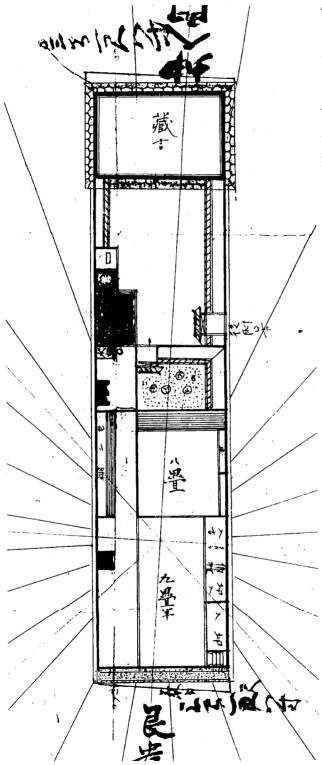
さらに、背後の縁側から眺められるところに、次の文字がある。

築山 センスイ

さらに、後方に別棟の「油置所」が描かれる。

通りから向かって最も右側の棟は、「ハジ・カラシナヤ」とあり、背後に「湯殿」と便所が





12 家相図(2)部分 (飯尾壽一氏蔵)

付設されている。

当図は、この建物を復原するにあ たっても、大変貴重な図である。

もう一枚の家相図は、横665×縦490mmの大きさであり、年紀は「明治三十七年九月吉日」とあり、今回調査の建物のある敷地部分のみが描かれている。主屋の他には、敷地のもっとも奥に「蔵」がある(Fig. 12は家相図の一部)。

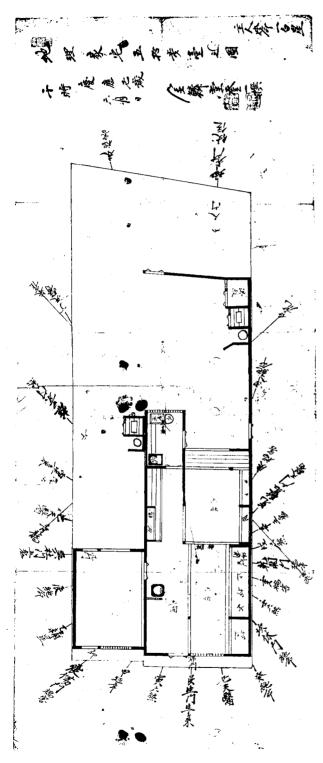
主屋における建物に関しての書き 込みは、次のとおりである。

九畳半 押入 押入 仏壇 タカラ入 八畳 セニ棚 水棚 後門

「八畳」の縁側に面しては、方形に 囲いの塀を巡らして、中庭を作成し ている。

当古図もまた、この建物の変遷を 知るために、貴重なものである。

その他も、飯尾壽一氏の所には 2 枚の古図があって、この 2 枚はとも に博多にあった分家のものと伝えら れている。古い方の「慶応丑歳六月 日」の年紀のある 1 枚のみ掲げる (Fig. 13) が、当建物と極めてよく 似た平面構成をとっておるので、今 回調査をしたこの建物が江戸時代末 期における博多の町家の典型例の 1 つとしてよいことを示しているよう に思われる。



13 家相図(3) (飯尾壽一氏蔵)

復元について

まず、計画寸法については、次の ように考えられる。

際上の部分,即ち,ミセとザシキにおいては,6.3×3.15尺の大きさの畳が敷き詰められるよう,内法寸法が定められている。現状では,ミセ部分には畳が敷き詰められていないが,実測寸法から考えると,当初は慶応元年の記載がある家相図に記述されているように,「十畳半」の畳が敷き詰められていた,と思われる。

次に、通りニワの「土間」は、復元すると家相図の通り、幅1.0間のニワとなるが、この1.0間は柱真々間距離が6.5尺で納めてある、と考えられる。

平面については、古い部材に残る 痕跡をたよりに復元すると、一階に ついては、慶応元年銘の家相図とほ ば同じとなる。ただし、この家相図 にある背面の炊事場部分は既に無く なっており、この部分については、 家相図をたよりに想像復元するより 他、致し方なかった。

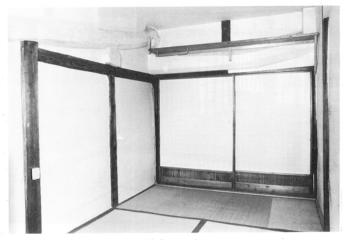
大きな変更は、ミセ部分の改造である。通りニワが幅1.0間分前面から背面までずっと続いていた復元になっている。これはザシキの床高より一段低い上り框の取り付く痕跡が、出入口脇の古い柱およびザシキ・ミ



14 ミセ(1) (道路側)



15 前方にある二階



16 後方の二階

セ境の大黒柱に明確に残ってい たことによる。

出入口の幅についても, 現状のように, 通りニワ全幅ではなくて, 正面向かって左側には小さな脇壁を設けて柱が建っていた痕跡が残存していた。古図の通りである。

ミセから2階へ上る梯子(階段)の位置は最も前面である道路側にあったことが、かつてこの部分の2階の床板が無かったことを示す痕跡と梯子あたりの痕跡によって、判明した。

ザシキの縁側より2・3階へ上る階段は、この位置に土壁のあった痕跡をザシキ南隅の柱に見い出したので、かつては無かったことになる。

さて、2階であるが、道路に面した奥行1.5間の部分は、床板も古いし、旧状を保っていたので、その存在は確実である。

が、通りニワの後方にある 2 階については、注意深く痕跡を 探した結果、4 帖の畳敷きの部 屋が存在したことが知られた。 この室の南東側壁には解体時、 新たな格子窓の存在が判明した。 しかし、この部屋に上る階段が 無いことが疑問として残った。 この点については、当部屋の床 位置にある出入口部側にある胴差しの上面角が向かって左側のみ大きくすり減っておることから、この位置を出入に使用したことが考えられる。この位置ならば、博多における聞き取り調査でも箱階段で上るものがかつて見られたということであるので、復元計画図のような箱階段が納まることになろう。

こうして、当室の存在が知られたが、かつても主屋であったこの建物にとっては、部屋数が 少ないだけに、当室の確認は大きい。

断面においては、縁側の屋根が大屋根から一段落ちて旧状と異なっていたことが、縁側の柱と束に残る切り欠き痕跡とピタリと合う垂木掛の部材が発見されたので、これによって復元したものである。

なお,屋根葺材が当初から現状のような桟瓦であったかどうか,現研究段階では判断できない。

建具については、外に面しているところではすべてガラス戸に変更されていたので、旧状に 復元するようにつとめた。ザシキの縁側については、恐らく雨戸仕立てであったろうことは、 古図より推測される。

建具の復元で注目されるのは、前面における揚げ戸方式の復元である。博多においては、既 に失われた江戸時代の揚げ戸の復元では、柱や2階床等に残存している痕跡をたよりに復元す



17 ミセ(2)



18 揚げ戸痕跡



19 揚げ戸方式の入口部痕跡

ると、次のようなものと考えられる。ミセの前面におけるものは、上下3枚の格子戸(ないしは板戸)を左右2列に並べたものであり、柱間中央には、この格子戸(ないしは板戸)が上り下りするための縦溝をもった取りはずし可能な柱を配す。なお、上へ押し上げた戸は、柱にある縦溝が切り開かれた上方において手前の方へ引き込んでしまう。こうすると、上中下3段の格子戸は、2列とも1階天井に取り付けられた箱内に納まってしまう。

次に、出入口部においても、柱にのこる縦溝と2階床板に開かれた方形穴の存在から、揚げ戸方式が推定された。しかし、この部分では内法高すべてが1枚戸とすると、上方へ押し上げた際、上方へつかえてしまい、内法高すべてが開口しないことになる。そこで、上下2段に分離した建具を考えることによって、上段の背の低い戸は押し上げて上方の縦溝の切り開かれた部分より取りはずし可能となり、下段の恐らく潜り戸の付いた板戸はこれを押し上げてみると、今度は内法高すべてが開口する結果となって、満足すべき建具となった。

なお、神棚は古いものだが、膳棚はなくなっていた。膳棚は類例を博多においては探し得ず、聞き取り調査によって推 定復元したものである。

以上の復元に関する考察をもとに,復 元計画図を作成し,古材はできるだけ使 用して、土田充義先生のご指導のもとに、「福岡歴史の町」への移築が無事完了したと聞いている。

おわりに

とであろう。

このように、貴重な文化財としての建造物が保存されて今日公開され、多くの人々によって 暖かく迎えられているのを見るにつけても、この旧飯尾家住宅の保存に力を尽くされた多くの 人々への感謝の念を深くする次第である。

江戸時代末期におけるこの博多の豪家は、慶応元年(1865)の家相図に見える通り、確かに間口を4棟分も構えて広大な敷地を占めてはいるが、この建物以外は作業場とか納屋であり、この建物こそが住居の中心であることは明白である。

住居, しかも豪家の住居が博多においては, 復元して判明したような, わずかな部屋数しか有していないことは, 今後, 江戸時代の博多の町家を考える上で, 重要な資料となってくるこ

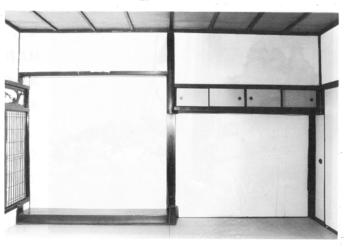
ただし、この狭い空間であってこそ、そこには緊密性をもち機能性の高い、極めて合理性の高い住居が建設されている。例えば、8帖のザシキでは突出した座敷飾りはとれなかったものの、置床とし、吊り下げた天袋をもち、平書院も設けているのである。

しかも、経済性のみ追求した ものではないことは、ザシキに おいては、面皮柱を用いてお り、平書院の欄間には梅の木の 透かし彫り彫刻を入れるなど、 数寄屋造をも目ざしている。

この旧飯尾家住宅の,江戸時代におけるこのあり方が,正しく後世に伝わり,今後の人達の文化創造の糧となることを祈念して終わりとしたい。

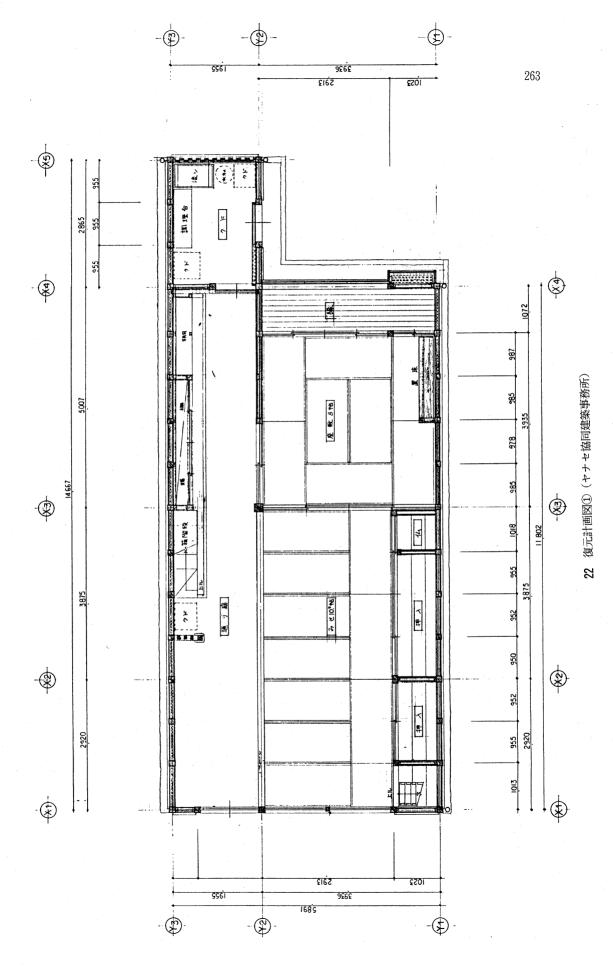


20 ザシキ(1)

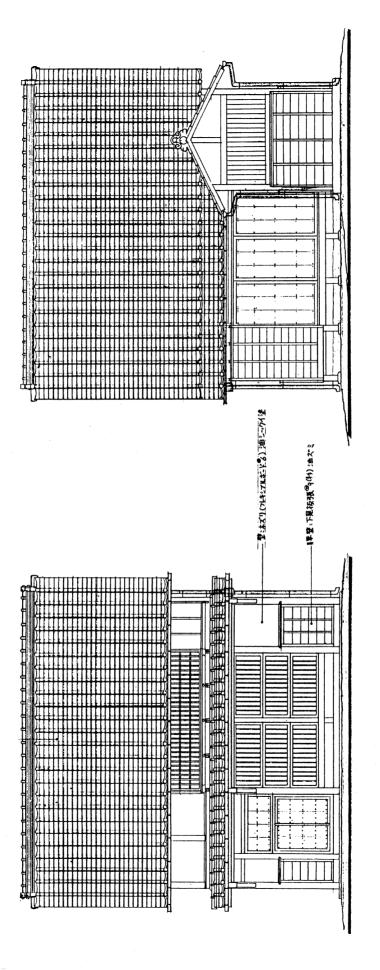


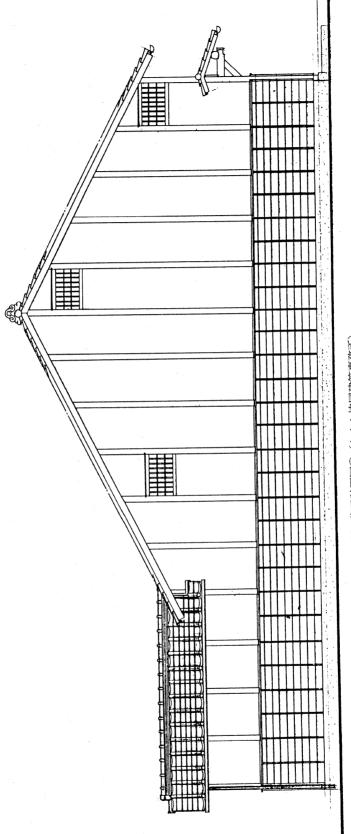
21 ザシキ(2)

(昭和62年7月4日了)



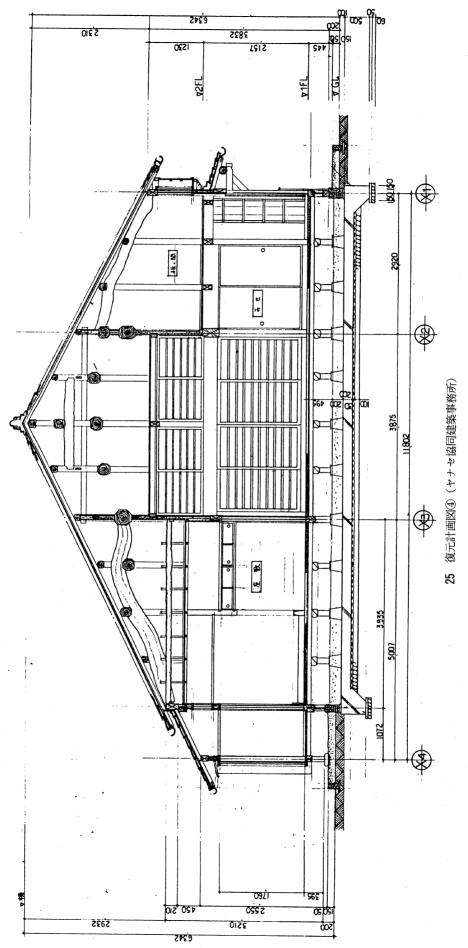


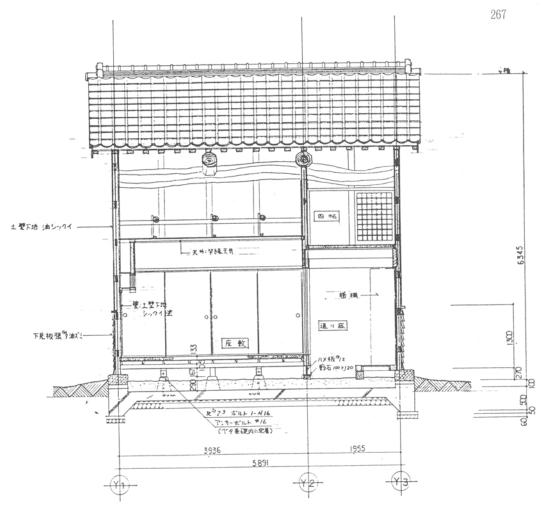




24 復元計画図③ (ヤナセ協同建築事務所)

į.





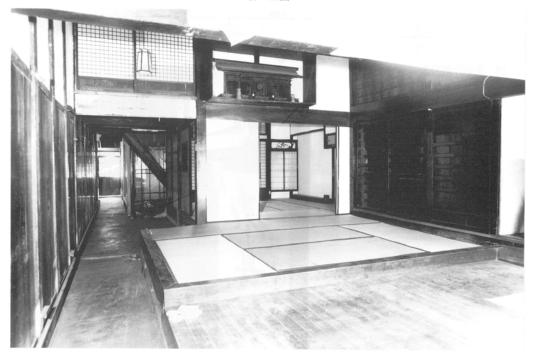
26 復原計画図⑤ (ヤナセ協同建築事務所)



27 玄関 (移築前)



28 正面



29 ミセ(3)



30 ミセ(4)



31 ミセ(5)

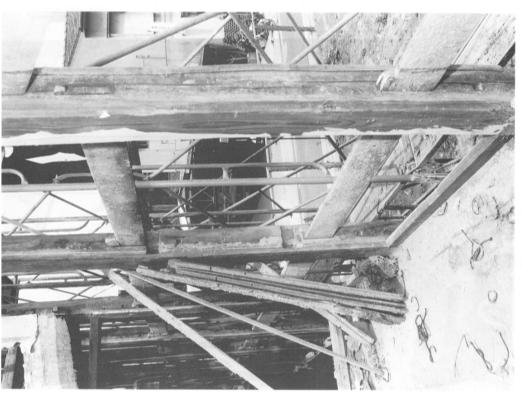


32 ミセ(6) 吹きぬけ部見上げ



33 正面底





35 後方2階の旧窓の痕跡



37 小屋組



38 残っていた旧垂木等



39 屋根下地



40 移築された旧飯尾家

都市計画道路博多駅築港線関係 埋蔵文化財調査報告(II)



福岡市埋蔵文化財調査報告書第184集

1988年(昭和63年) 3 月31日

発 行 福岡市教育委員会

印刷 株式会社 川島弘文社

